



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ヨシヤの改革：「エサルハドン王位継承誓約文書」と「申命記」
Author(s)	高橋, 優子
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第13833号
Issue Date	2020-03-25
DOI	https://doi.org/10.14943/doctoral.k13833
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/96725
Type	doctoral thesis
File Information	Yuko_Takahashi.pdf



2019 年度
博士学位論文

ヨシヤの改革：
「エサルハドン王位継承誓約文書」と「申命記」

北海道大学大学院文学研究科
博士後期課程 3 年
思想文化学専攻
学生番号：05175003
高橋優子
(指導教授：佐々木啓教授)

「ヨシヤの改革：『エサルハドン王位継承誓約文書』と『申命記』」（要旨）

高橋優子

本論文の目的は、「ヨシヤの改革」あるいは「申命記改革」と呼ばれている出来事（紀元前 7 世紀後半のユダ王国でヨシヤ王が行ったとされている改革）が「エサルハドン王位継承誓約文書」の影響下に起草された申命記によって遂行されたということを示すことである。そのために研究史整理（第 1 章）と「エサルハドン王位継承誓約文書」（ESOD と略記する）と申命記（およびレビ記）の比較検討（第 3 章）・申命記 6 章 4－5 節の解釈（第 4 章）・古代イスラエルにおける王権観の変遷を辿ること（第 5 章）が必要とされる。さらに消極的な証拠ではあるが学問的手続き上扱う必要のある考古資料についての検討は研究史に関連するので第 2 章に、詩篇 72・80 篇の分析は王権観の変遷に関連するので第 6 章に、それぞれ組み込むことにする。

「ヨシヤの改革」は、ヴェルハウゼン以来旧約聖書研究の定点をなす出来事であるが、近年旧約聖書研究の方法論自体が揺らいでいる。歴史的批判的方法は主として聖書本文の文献学と聖書考古学に依拠するものであるが、両方の資料が不十分であるという現実があり一種の閉塞感が漂っているのである。そのため文芸学的アプローチなどが行われるようになったが、それは聖書学の方法を補完するというよりむしろ拡散させるものであり、ますます聖書学の学的基础が掘り崩されている。残された有効な方法としては、楔形文書資料と聖書本文を比較・検討することがあるが、十分に展開されてきたとは言いがたい。

本論文は、このような状況を打開すべく、近年タイナト版が発見されることで新発見が得られ、重要性が再認識されつつある ESOD が、申命記法とそれに基づいて行われたと考えられる「ヨシヤの改革」に与えた影響について扱っている。申命記に対する ESOD の直接的文学的影響（ESOD のみによる排他的影響ではないであろうが）は、「交差的引用」という現象によって認識できる。そのような関係はレビ記 26 章の「呪いのリスト」と申命記 28 章の「呪いのリスト」にもみられ、ひとつの傍証となるであろう。ユダの書記が用いていたこの独特の引用法が、何のためのものだったかについては明白ではないが、おそらく修辭的な目的のためであったと思われる。前 7 世紀にユダのエリート層が志した改革への努力が、現在まで残るヤハウエと民との誓約関係の基になったことは思想史上の奇蹟のひとつである。

略語表

<i>ABR</i>	<i>Australian Biblical Review</i>
<i>ActAnt</i>	<i>Acta Antiqua / Academiae Scientiarum Hungaricae</i>
<i>AJBI</i>	<i>Annual of the Japanese Biblical Institute</i>
<i>AO</i>	<i>Antiquo Oriente</i>
<i>AOAT</i>	<i>Alter Orient und Altes Testament</i>
<i>AR</i>	<i>Archiv für Religionswissenschaft</i>
<i>ArOr</i>	<i>Archiv Orientalni</i>
<i>ASJ</i>	<i>Acta Sumerologica Japan</i>
<i>BA</i>	<i>Biblical Archaeologist</i>
<i>BaM</i>	<i>Baghdader Mitteilungen</i>
<i>BAR</i>	<i>Biblical Archaeology Review</i>
<i>BASOR</i>	<i>Bulletin of the American Schools of Oriental Research</i>
<i>BBB</i>	<i>Bonner Biblische Beiträge</i>
<i>BBR</i>	<i>Bulletin for Biblical Research</i>
<i>BHS</i>	<i>Biblia Hebraica Stuttgartensia</i>
<i>Bib.</i>	<i>Biblica</i>
<i>BibInt</i>	<i>Biblical Interpretation</i>
<i>BN</i>	<i>Biblische Notizen</i>
<i>BZ</i>	<i>Biblische Zeitschrift</i>
<i>BZABR</i>	Beiheft zur Zeitschrift für Altorientalische und Biblische Rechtsgeschichte
<i>BZAW</i>	Beihefte zur Zeitschrift für die alttestamentliche Wissenschaft
<i>BZ. NF</i>	<i>Biblische Zeitschrift. Neue Folge</i>
<i>CBQ</i>	<i>Catholic Biblical Quarterly</i>
<i>CSMS</i>	<i>Canadian Society for Mesopotamian Studies Journal</i>
<i>EvT</i>	<i>Evangelische Theologie</i>
<i>ETL</i>	<i>Ephemerides Theologicae Lovanienses</i>
<i>HAR</i>	<i>Hebrew Annual Review</i>

<i>HBAI</i>	<i>Hebrew Bible and Ancient Israel</i>
<i>Herm</i>	<i>Hermanthema</i>
<i>HTR</i>	<i>Harvard Theological Review</i>
<i>HUCA</i>	<i>Hebrew Union College Annual</i>
<i>IBS</i>	<i>Irish Biblical Studies</i>
<i>IEJ</i>	<i>Israel Exploration Journal</i>
<i>Int</i>	<i>Interpretation</i>
<i>JAJ</i>	<i>Journal of Ancient Judaism</i>
<i>JANESCU</i>	<i>Journal of the Ancient Near Eastern Society of Columbia University</i>
<i>JANES</i>	<i>Journal of the Ancient Near Eastern Society</i>
<i>JAOS</i>	<i>Journal of the American Oriental Society</i>
<i>JARCE</i>	<i>Journal of the American Research Center in Egypt</i>
<i>JBL</i>	<i>Journal of Biblical Literature</i>
<i>JBQ</i>	<i>Jewish Bible Quarterly</i>
<i>JCS</i>	<i>Journal of Cuneiform Studies</i>
<i>JESHO</i>	<i>Journal of the Economic and Social History of the Orient</i>
<i>JETS</i>	<i>Journal of the Evangelical Theological Society</i>
<i>JNES</i>	<i>Journal of Near Eastern Studies</i>
<i>JQR</i>	<i>Jewish Quarterly Review</i>
<i>JSOT</i>	<i>Journal for the Study of the Old Testament</i>
<i>JSOT Sup.</i>	<i>Journal for the Study of the Old Testament Supplement Series</i>
<i>JSS</i>	<i>Journal of Semitic Studies</i>
<i>JTS</i>	<i>Journal of Theological Studies</i>
<i>LHBOT</i>	<i>Library of Hebrew Bible / Old Testament Studies</i>
<i>MWS</i>	<i>Max Weber Studies</i>
<i>NEA</i>	<i>Near Eastern Archaeology</i>
<i>NEAEHL</i>	<i>The New Encyclopedia of Archaeological Excavations in the Holy Land</i>
<i>NEAFB</i>	<i>Near Eastern Archaeology Foundation Bulletin</i>
<i>OBO</i>	<i>Orbis Biblicus et Orientalis</i>

<i>OJA</i>	<i>Oxford Journal of Archaeology</i>
<i>OLP</i>	<i>Orientalia Lovaniensia Periodica</i>
<i>ORA</i>	<i>Orientalische Religionen in der Antike</i>
<i>OtSt</i>	<i>Oudtestamentliche Studien</i>
<i>PEFQS</i>	<i>Palestine Exploration Fund Quarterly Statement</i>
<i>PEQ</i>	<i>Palestine Exploration Quarterly</i>
<i>PT</i>	<i>Political Theology</i>
<i>RA</i>	<i>Revue d'Assyriologie</i>
<i>RB</i>	<i>Revue Biblique</i>
<i>RelSRev</i>	<i>Religious Studies Review</i>
<i>RGG</i>	<i>Religion in Geschichte und Gegenwart</i>
<i>RHR</i>	<i>Revue de l'Histoire des Religions</i>
<i>SAAB</i>	<i>State Archives of Assyria Bulletin</i>
<i>SBS</i>	<i>Stuttgarter Bibelstudien</i>
<i>SJOT</i>	<i>Scandinavian Journal of the Old Testament</i>
<i>SJT</i>	<i>Scottish Journal of Theology</i>
<i>Sup. JAOS</i>	<i>Supplement to the Journal of the American Oriental Society</i>
<i>TA</i>	<i>Tel Aviv</i>
<i>TGUOS</i>	<i>Transactions of the Glasgow University Oriental Society</i>
<i>ThS</i>	<i>Theological Studies</i>
<i>TJ</i>	<i>Trinity Journal</i>
<i>TRu</i>	<i>Theologische Rundschau</i>
<i>TS</i>	<i>Theological Studies</i>
<i>TynBul</i>	<i>Tyndale Bulletin</i>
<i>TZ</i>	<i>Theologische Zeitschrift</i>
<i>UF</i>	<i>Ugarit-Forschungen</i>
<i>VF</i>	<i>Verkündigung und Forschung</i>
<i>VT</i>	<i>Vetus Testamentum</i>
<i>VT Sup.</i>	<i>Vetus Testamentum Supplements Series</i>
<i>ZAH</i>	<i>Zeitschrift für Althebräistik</i>

<i>ZAR</i>	<i>Zeitschrift für Altorientalische und Biblische Rechtsgeschichte</i>
<i>ZAW</i>	<i>Zeitschrift für die alttestamentliche Wissenschaft</i>
<i>ZDPV</i>	<i>Zeitschrift des Deutschen Palästina-Vereins</i>
<i>ZTK</i>	<i>Zeitschrift für Theologie und Kirche</i>

目次

序論 1

1. 研究史 3

1.1. 資料と方法 3

1.1.1. 方法 3

1.1.2. 旧約聖書研究の問題点 4

1.1.3. 列王記と歴代誌 5

1.1.4. 列王記重視の研究 7

1.1.5. 歴代誌重視の研究 7

1.2. 申命記と改革の関係 9

1.2.1. 「発見された書物」とは何か 9

1.2.2. 改革と申命記家・申命記史家の関係 10

1.3. 預言者を援用できるか 11

1.4. 改革の歴史性 13

1.4.1. 歴史性否定説 13

1.4.2. デイヴィスとアルバーツの論争 15

1.5. 日本における申命記およびヨシヤ改革研究史 16

1.5.1. 関根正雄の研究 16

1.5.1.1. ウェーバー説への依拠 17

1.5.1.2. 「レビ人」役人登用説 20

1.5.2. 鈴木佳秀の研究 21

1.5.3. 評価と問題点 22

1.6. ヨシヤ改革の「規模」についての新しい見解 23

1.6.1. 「権力の空白」不在説 24

1.6.2. エジプト学の援用 25

1.7. 楔形文書資料と申命記の関係 26

1.7.1. ヒッタイトの文書か新アッシリアの文書か 26

1.7.2. タイナト版の発見 27

1.7.3.	レヴィンソン（+スタッカー）とバーマンの論争	28
1.7.4.	クラウチの「タイナト後」の反対説	29
1.7.5.	マークルの「タイナト後」の見解	31
1.8.	本論の方法	32
2.	ヨシヤの改革に関する聖書考古学の知見	33
2.1.	「ヨシヤの改革」とメツアド・ハシャブヤフ	33
2.1.1.	物質文化の検討	34
2.1.2.	ヘブライ語オストラコン（「収穫者の書簡」）検討	37
2.1.2.1.	テキスト	37
2.1.2.2.	試訳	38
2.1.2.3.	検討	39
2.1.2.4.	文学類型	43
2.1.3.	小括	45
2.2.	「ヨシヤの改革」とアラド	45
2.2.1.	アハロニ説	46
2.2.1.1.	関係する層位の年代づけとその解釈	46
2.2.1.2.	神殿	47
2.2.1.3.	捧げ物用の皿（碑文 102 と 103）	48
2.2.1.4.	オストラコン（碑文 18）	48
2.2.2.	アハロニ批判説	49
2.2.2.1.	層位の年代と解釈	49
2.2.2.2.	神殿	50
2.2.2.3.	捧げ物用の皿（碑文 102 と 103）	50
2.2.2.4.	オストラコン（碑文 18）	51
2.2.2.5.	他の要素について	51
2.2.2.5.1.	「キッティーム」	51
2.2.2.5.2.	エジプト的要素	51
2.2.3.	小括	52
2.3.	「ヨシヤの改革」とラキシユ	52

- 2.3.1. ラキシユの層位（王国時代に関係する部分） 53
- 2.3.2. セナケリブによるラキシユ攻略（前 701 年）直前の状況（破壊層直下） 53
- 2.3.3. ラキシユ攻略（前 701 年）時の状況（破壊層） 56
- 2.3.4. ネブカドネツアルによるラキシユ破壊（前 586/87 年）直前の状況（破壊層直下）

57

- 2.3.5. 小括 59

- 2.4. 小括 60

- 3. 「エサルハドン王位継承誓約文書（ESOD）」と「申命記（Dt.）」の比較 61

- 3.1. ESOD と Dt. を比較する目的 61

- 3.2. ESOD 研究への渡辺和子の貢献 62

- 3.3. 交差的引用あるいは転位 65

- 3.4. ESOD と Dt. の対応関係 66

- 3.4.1. ESOD§18 と Dt. 6:4-5 66

- 3.4.2. ESOD§§63 - 64 と Dt. 28:23-24 67

- 3.4.3. ESOD§65 と Dt. 28:25 69

- 3.4.4. ESOD§41 と Dt. 28:26 70

- 3.4.5. ESOD§§38A-40 と Dt. 28:27-28 71

- 3.4.6. ESOD§42 と Dt. 28:30-33 73

- 3.4.7. ESOD§47 と Dt. 28:53-57 75

- 3.4.8. ESOD§4c と Dt. 13:1 78

- 3.4.9. ESOD§§10-18 と Dt. 13:2-11 79

- 3.5. 申命記の「呪いのリスト」とレビ記の「呪いのリスト」の比較 84

- 3.5.1. レビ記 26:14-39 試訳（「神聖法典」の呪いのリスト） 84

- 3.5.2. 申命記の「呪いのリスト」とレビ記の「呪いのリスト」の比較検討 86

- 3.6 小括 88

- 4. 申命記 6:4-5 の解釈と年代決定：「一神教」の変遷過程への位置づけ 90

- 4.1. Dt. 6:4-5 90

- 4.2. Dt. 6:4-5 直訳 90

4.3.	問題の所在	90
4.4.	解決策	91
4.5.	解釈	92
4.6.	古代イスラエルにおける「一神教」への諸段階	93
4.7.	申命記の編集過程	94
4.8.	Dt. 6:5 の文学的背景	95
4.9.	申命記に対する ESOD の影響関係についての批判	97
4.10.	新アッシリアの「条約」とヒッタイトの「条約」の相違点	98
4.11.	新アッシリアとユダの深いつながり	99
4.12.	小括	100
5.	古代イスラエルにおける王権観の変遷：申命記と申命記史家を中心として	101
5.1.	古代イスラエルにおける王権	101
5.2.	申命記による ESOD の受容	102
5.3.	王の法 (Dt. 17:14-20) 試訳	103
5.4.	申命記の編集過程と王権観の推移	104
5.5.	王として即位するヤハウエ (詩編 47・93・96・97・98・99 など)	105
5.6.	小括	107
6.	「ヨシヤの改革」と詩篇 72・80 篇	108
6.1.	詩篇 72 篇	108
6.1.1.	詩篇 72 篇試訳	108
6.1.2.	詩篇 72 篇構成	110
6.1.3.	詩篇 72 篇検討	111
6.2.	詩篇 80 篇	113
6.2.1.	詩篇 80 篇試訳	113
6.2.2.	詩篇 80 篇構成	115
6.2.3.	詩篇 80 篇検討	115
6.3.	小括	118

第 6 章のための参考資料：「アッシェルバニパルの即位式の賛美」 119

結論 121

文献表

序論

ヨシヤ改革を理解するために重要なエサルハドン王位継承誓約文書の申命記に対する影響

旧約聖書の列王記下 22－23 章および歴代誌下 34－35 章に記録されている「ヨシヤの改革」あるいは「申命記改革」と呼ばれる出来事は、旧約聖書学の要として機能している。年代決定のために唯一確からしいと認められているのがヨシヤ改革の時代であるからである。それは、ユダ王ヨシヤの時代に行われたという改革で、前 7 世紀後半の出来事であった。列王記によると申命記によって改革が始まり、歴代誌によると既にはじまっていた改革に申命記が拍車をかけたという。当該改革で最も有名なのはヤハウエ崇拜をエルサレム神殿に限定する「祭儀集中」および異教の神々に関わるものを廃棄するという「祭儀浄化」である。これはいわゆる「一神教」のひとつのはじまりを画する出来事であると考えてもよい。

この思想史上の大変化は、どのようにして生じたのであろうか。本論文の提案は、ヨシヤ時代にエルサレムのエリート層（宮廷役人およびエルサレム神殿祭司）が、前 672 年にアッシリア王エサルハドン（在位前 681-669 年）によって発行され、当時のアッシリア支配下にあったすべての領域に配布された「エサルハドン王位継承誓約文書」に刺激を受けて法典（原申命記）を編纂し、それを綱領として生き残りをかけた政治的宗教的改革を行ったということである。旧約聖書中のアッシリアは残虐な侵略者として描かれているために、旧約聖書へのアッシリアの影響という考え方を受け入れられない聖書学者も存在する。しかし、そのような態度は短絡的に過ぎる。2009 年にトルコのテル・タイナトでも「エサルハドン王位継承誓約文書」が発見されたことは（出版は 2012 年）、エルサレムにも同じものが存在した蓋然性を非常に高めたといえる。

ヨシヤ改革に対する当該文書の最大の貢献は、誓約が永遠性を持ちうることを示したことにある。後述するように、この文書が発行されるまで（あるいは発行された後でもほとんどの場合）少なくとも古代西アジアにおいては、誓約当事者の死とともに誓約は無効になると考えられていたようだ。そのため、誓約を継続する場合には、新しい当事者が新たな誓約を行う必要があったのである。エサルハドン王位継承誓約文書はこの伝統を超えて効力を持続させることを意図していた。当初はエサルハドンと他の多くの属王・属領の役

人たちが当事者であったが、内容はエサルハドン死後のことである。「大皇太子アッシュルバニパル」が確実に王位につき、統治できるように、属王その他の人々に彼への忠誠を誓わせるものであった。さらに、アッシュルバニパル死後もその子孫にしたがうようにと要請している。もちろんその場合、誓約者たちも代がわりしているはずである。タイナト版「エサルハドン王位継承誓約文書」の名宛人として個人名は書かれておらず、代わりに職名である代官とその下に位置づけられる職名が列挙されている。それは、特定の個人との誓約ではなく、永遠に継続すべき誓約であった。もちろん歴史が示すようにアッシュルバニパルとその子孫への永遠の忠誠の誓約は実現しなかった。

しかし奇抜な方法で当該文書の斬新かつ革命的な発想を取り入れたのが原申命記の記者であった。「イスラエルの民がヤハウェに対する永遠の忠誠を誓う」ことを要請する法文書を作り出したのである。当然のことながら、これは当時のエリートたちが、自分たちの理想を実現するために用意した形式である。ヤハウェの命令である法典の内容に従え、ということによって、イスラエルが激動の古代西アジア世界で生き残ることが目的であった。

本論文は、申命記が「エサルハドン王位継承誓約文書」(ESOD)のテキストから直接的影響を受けている具体的指標として、「交差的引用」に焦点を当てる。さらに傍証として、申命記とレビ記の「呪いのリスト」にも「交差的引用」が存在することを示す。これは申命記が「エサルハドン王位継承誓約文書」から排他的に (ESODのみから)影響を受けたことを証明することにはならないし、当該文書に含まれる個々の要素すべてがアッシリアに起源を持つことを意味するわけでもない。そうではなく、申命記という書物が成立するにあたって、「エサルハドン王位継承誓約文書」が最も重要な役割を果たしたということ、あるいはそれなしでは申命記とそれに基づく思想が現在まで継続することはなかったということを示すのが目的である。「エサルハドン王位継承誓約文書」が申命記を申命記たらしめたということを認識させてくれるのが、当時の書記の不思議な習慣なのである。

1. 研究史¹

1.1 資料と方法

1.1.1. 方法

聖書²に記述されている歴史的出来事の研究方法としては、聖書本文を分析する文献学や考古資料を検討する考古学、文学的機能に焦点を当てる文芸批評、そして社会科学の視点から解釈を試みる社会科学批評などがある。ヨシヤ改革研究でもそれぞれの方法による研究が行われている。近代以降はほとんどの研究において歴史的批判的方法が採用されるため文献学と考古学が重要であるが、聖書考古学の成果は充分とはいえない。そのため類型論によって空隙を埋める社会科学的手法が援用されることもある³。さらに近年「間テキスト性」に注目する文芸学的手法への関心が高まり、ヨシヤ改革研究においても、研究書が出版されている⁴。このような拡散状態にある聖書研究の方法において、思想史的関心を持つ筆者にとって、まだ可能性が残っていると思われるのは、楔形文書資料を援用して聖書に記録された出来事を解釈することである。これまでも、この手法の重要性は認識されてきたのだが、古代西アジアの並行資料を扱うためには多くの訓練と知識が必要であるため、両方の研究成果を統合するには、研究者間の協力が不可欠となる。

¹ 本章は拙論『『ヨシヤの改革』研究史—タイナト版『エサルハドン王位継承誓約文書』発見を受けて—』『宗教研究』第91巻1号、2017年、1–23頁〔査読有り〕を改訂したものである。

² 旧約聖書からの和訳はすべて筆者によるBHSからの試訳を用いる。BHSのアパルトゥスについては、テキスト理解に影響するものに限って言及する（以下同様）。さらに脚注における欧文文献の書誌については文献表同様 *The SBL Handbook of Style*, 2nd ed. に準拠する。

³ Thomas Römer は Max Weber の影響下に理論を形成した Armin Steil, *Krisen-Semantik : Wissenssoziologische Untersuchungen* (Opladen: Leske and Budrich, 1993) の提案を適用して申命記史家らについて説明を試みている (Thomas Römer, *The So-called Deuteronomistic History: A Sociological, Historical and Literary Introduction* (T & T Clark, 2005)) が、類型化自体は説得的であるものの、それ以上の学問的展開を想定することが困難である。

⁴ Uriah Y. Kim, *Decolonizing Josiah: Toward a Postcolonial Reading of the Deuteronomistic History* (Sheffield: Sheffield Phoenix Press, 2005). 間テキスト性は興味深いが、個人的経験に依存するという点では汎用性に限界があるかもしれない。

1.1.2. 旧約聖書研究の問題点

資料仮説

ユリウス・ヴェルハウゼン (J. Wellhausen) は近代旧約学の父と呼ばれる。それは彼が聖書を特別扱いせず他の文学作品に適用されるような方法 (歴史的批判的方法) で研究したからである。もちろん先駆者たちはいたが、近代旧約聖書学の (キリスト教の言葉である「旧約聖書」は近年、より普遍的な意味合いをこめて「ヘブライ語聖書」と呼ばれることもある⁵。しかし日本語としてまだ熟していないので、本論文では「旧約聖書」という語を使用する) 研究史は、ヴェルハウゼンから記述するのが大方の習慣となっている⁶。

ヴェルハウゼンの旧約聖書研究への貢献で一番重要なのは、いわゆる「四資料仮説⁷」である。ユダヤ教徒が「トーラー」と呼んで重視する旧約聖書最初の五書の研究において、資料を分離することを試みたのである。たとえば創世記のはじめの数章には、異なる創造の記事が並べられている。顕著なのは、神が「ヤハウェ」と呼ばれる部分と「エロヒーム」と呼ばれる部分の違いである。神を「ヤハウェ」とするものを J 資料 (ヤハウィスト資料)、「エロヒーム」とするものを E 資料 (エロヒスト資料) と彼は名づけた。そして申命記の特徴を持つものを D 資料 (「申命記」Deuteronomium から)、祭司の特徴を持つものを P 資料 (「祭司」Priester から) とした。ヴェルハウゼンは時間的順序を古い方から JEDP と考えたが、もっとも確からしい基準点は前 7 世紀後半のヨシヤの改革 (前 622-09 年) であった。つまり、D 資料の時期を固定して基準点とし、他の資料を並べたのである。この資料仮説は長い間公理のように扱われ、この考え方の上により複雑な資料仮説がさまざまに提出されるようになった。たしかに P 資料の時期が D 資料より遅いのは首肯できる。王政期の刻印を持つ D 資料より、ユダ王国が滅びた後に力を持った祭司層らしい神学的に洗練された抽象的な内容が明白に見られるからである。語彙や語法も特徴的である。しかし、J と E については、確たる年代づけの理由はない。内容的に昔のことを扱っているなどの事

⁵ ユダヤ教徒はヘブライ語聖書をトーラー (律法)・ネビイーム (預言者)・ケトウビーム (諸書) の頭文字をとって「タナハ」あるいは「タナク」と呼んでいる。キリスト教徒は新約聖書との対応でまったく同じ正典 (順序は一部違う) を「旧約聖書」と呼んでいる。

⁶ たとえば R. E. クレメンツ著 村岡崇光訳『近代旧約聖書研究史：ヴェルハウゼンから現代まで』教文館、1978 年参照。原著は Ronald E. Clements, *A Century of Old Testament Study* (London: Lutterworth Press, 1976) である。

⁷ Cf. Julius Wellhausen, *Prolegomena zur Geschichte Israels*, 6th ed., (Berlin: Georg Reimer, 1905). この著作は 1878 年に *Geschichte Israels I* として出版されたが、1883 年の第 2 版から *Prolegomena zur Geschichte Israels* というタイトルになった。

情で D 資料や P 資料より早いと考えられただけかもしれない。このような疑問から、ヤハウィストなどいないという立場があらわれた。現在この立場を代表するのはレントルフ (R. Rendtorff⁸) やブルム (E. Blum⁹) である。レントルフ説はヤハウィスト資料を否定するだけでなく、それとの関連で理解されるエロヒスト資料の根拠も掘り崩すことになる。彼はさらに祭司資料も独立したものとは考えにくいとした。そうだとすれば独立した資料として考えられるのは申命記的資料だけだということになる。とにかく、ヴェルハウゼンの用語自体は今も使われているのだが、資料仮説が不動の地位を持っていた時代はかなり前に終わっており、資料についてもその年代づけについても非常に流動的な学問状況が続いている。唯一いまも定点として機能している D についても、その重要性は広く認識されているものの研究者の見解が一致しているわけではない。そしてその見解の相違は、申命記改革とも呼ばれるヨシヤ改革理解と密接に関連するのである。

1.1.3. 列王記と歴代誌

紀元前 7 世紀後半にユダ王国のヨシヤ王が祭儀集中と祭儀浄化を伴うなんらかの改革を行なったという記事は旧約聖書の列王記下 22 章 1 節から 23 章 30 節と歴代誌下 34 章 1 節から 35 章 27 節に見られる。ふたつの記事のどちらをより重視するかという点で、「ヨシヤの改革」研究の方向性が違ってくる。もちろんこのふたつの記事は並行記事であるから、両方分析して比較すべきなのであるが、ほとんどの場合、研究者は研究をはじめる前の段

⁸ R. レントルフ著 山我哲雄訳『モーセ五書の伝承史的問題』教文館、1987 年。原著は Rolf Rendtorff, *Das überlieferungsgeschichtliche Problem des Pentateuch* (Berlin: de Gruyter, 1976) である。レントルフは、ヤハウィスト資料と考えられている箇所から、なんら一貫した神学も思想も取り出せないことから、「私見によればこのような事態は、族長物語とそれに後続するいくつかの伝承複合体の双方を形態化し伝承した人物としての『ヤハウィスト』が、そもそも存在しなかったとしか解釈のしようがないのである」と結論づけている。そして以下のように続けている。「以上のような確認は、さきに詳しく述べた今日の『ヤハウィスト』理解における不確かさと矛盾とを最もよく補ってくれる。なぜなら今や、個別的に何をヤハウィストに帰すか、ヤハウィストの著作の範囲をどのように限定するのか、この著作の作業方法と意図とをどのように規定するのかについて、見解の一致を見ることが困難であり、ほとんど不可能でさえあることが示されたばかりでなく、五書全体を包括する一続きの物語著作としての、文書仮説で言われる意味におけるヤハウィストの著作が、そもそも存在したという想定を否定する。重大な—私見によれば強制的な—根拠が示されたからである。」(206-08 頁)。五書の「資料批判」と「資料批判」批判についての概説的な説明としては池田裕・大島力・樋口進・山我哲雄監修『新版総説旧約聖書』日本キリスト教団出版局、2007 年所収の大住雄一による第 1 章「モーセ五書」(93-173 頁)を参照。

⁹ Erhard Blum, *Studien zur Komposition des Pentateuch* (Berlin: de Gruyter, 1990).

階でどちらに依拠するかを決定している。多数の研究者が列王記をより信頼できる聖書資料とみなしている（ホフマン¹⁰・シュピーカーマン¹¹・ピーチ¹²ら）。それは、列王記が申命記史書と呼ばれる一連の文書（旧約聖書の申命記から列王記下まで）に含まれ、捕囚期までに成立したと考えられる（ノート¹³・スメント¹⁴・クロス¹⁵ら）のに対して、歴代誌はそれより遅くペルシア時代に成立しており、成立時期だけから考えても一般的資料価値が劣るのは明白であるからである。それに加えて歴代誌には「一代内での応報」という神学的立場を貫徹させるため、史実を神学に妥協させる傾向があり、それゆえ資料価値が低くなると考えざるをえない。たとえばマナセ王は、列王記では長期の王権を維持し経済的發展を達成したにもかかわらず、宗教的にヤハウェ主義に集中していなかった一事をもって「悪い王」と判断されている。しかし歴代誌は宗教的な悪人が成功裡に長寿をまっとうすることを受け入れられないので、実はマナセは人生の終わりの方で己の罪を悔い改めたので祝福されたという神学的に一貫性のある説明をつける。さらにヨシヤ王は、列王記では異教的要素を国内から取り除くなどヤハウェ主義的観点から見て紛うかたなき「善い王」であるが、若くして謎の死を遂げたことが淡々と記されている。宗教的な善人が早死にするなどということを許せない歴代誌記者は、ヨシヤは長い間善王であったが、人生の終わりにおいては、エジプトのファラオ・ネコ2世の口を通して伝えられたヤハウェの命令を無視して「出陣」し殺されたと神学的なつじつまがあうように書かれている。この例だけを見ても、列王記の記述と歴代誌の記述のどちらがより信頼できるかは明らかであると思われる。

¹⁰ Hans Detlef Hoffman, *Reform und Reformen: Untersuchungen zu einem Grundthema der deuteronomistischen Geschichtsschreibung* (Zürich: Theologischer Verlag, 1980).

¹¹ Hermann Spieckermann, *Juda unter Assur in der Sargonidenzeit* (Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1982).

¹² Michael Pietsch, *Die Kultreform Josias: Studien zur Religionsgeschichte Israels in der späten Königszeit* (Tübingen: Mohr Siebeck, 2013).

¹³ Martin Noth, *Überlieferungsgeschichtliche Studien I*, 2nd ed. (Tübingen: Max Niemeyer, 1957).

¹⁴ Rudolf Smend, "Das Gesetz und die Völker," in *Probleme biblischer Theologie: Festschrift für G. von Rad zum 70. Geburtstag*, ed. H. W. Wolff (München: Chr. Kaiser, 1971), 494-509.

¹⁵ Frank Moore Cross, "The Theme of the Book of Kings and the Structure of the Deuteronomistic History," in *Canaanite Myth and Hebrew Epic: Essays in the History of the Religion of Israel*, ed. Frank Moore Cross (Cambridge: Harvard University Press, 1973), 274-89.

1.1.4. 列王記重視の研究

イスラエルの聖書歴史学者ナアマン (N. Na'aman) は、「王下 22-23 章は、ヨシヤ時代に書かれ非常に信頼できる¹⁶⁾」とする反面、「我々はヨシヤ支配の描写に関する基礎として歴代誌の素材を使用すべきでない¹⁷⁾」と判断している。その理由は、歴代誌が指示するヨシヤ時代のユダ王国の領域が考古学的に確認できる範囲と比べてあまりに広すぎるということである¹⁸⁾。つまり歴代誌は、列王記と比較して、神学的イスラエル像の構築に力点を置きすぎているということであろう。

マナセとヨシヤの時代を扱ったアンソロジー *Good Kings and Bad Kings*¹⁹⁾ の編者であるグレイビー (L. L. Grabbe) もまた、「列王記下はしばしば良いデータとみなされるが、歴代誌、ダニエル書などは信用できない²⁰⁾」と断言している。

1.1.5. 歴代誌重視の研究

エストライヒャー (T. Oestreicher²¹⁾) は歴代誌の研究から、ヨシヤ改革の記述を「書物発見報告」と「改革報告」に分けて考えた。この流れをくむバリック (W. B. Barrick) は、

¹⁶⁾ Lester L. Grabbe, ed., *Good Kings and Bad Kings* (New York: T & T Clark, 2005), 348-49. “Reflections” という見出しのもと Grabbe のまとめの最後に、各著者の短いコメントが含まれている。

¹⁷⁾ Nadav Na'aman, “Josiah and the Kingdom of Judah,” in *Good Kings and Bad Kings*, ed. Lester L. Grabbe, 189-247, 219.

¹⁸⁾ ヨシヤの帝国の「拡張」についてのアルト説 (Albrecht Alt, “Judas Gaue unter Josia,” *Palästina-jahrbuch des Deutschen Evangelischen Instituts für Altertumswissenschaft des Heiligen Landes zu Jerusalem* 21 (1925): 100-17.) についてナアマンは「ユダとベニヤミンの『町の表』は、王国の通常の行政に従っている領域を反映している (Na'aman, “Josiah and the Kingdom of Judah,” 217) が、「これらの仮説のうちどれも確固たるテキスト上の根拠を持っておらず、大胆な再構成以上のものではない」 (Na'aman, “Josiah and the Kingdom of Judah,” 219) と判断している。アルトはヨシュア記 19 章にあるガリラヤの「町の表」の基礎の上に、ヨシヤが北イスラエルの領域を併合したと想定したのだが、ナアマンの言うとおり「この想定はアルト自身の学生によってさえ支持されず、何ら現実的有効性がない」 (Na'aman, “Josiah and the Kingdom of Judah,” 218) のである。

¹⁹⁾ Grabbe ed., *Good Kings and Bad Kings*. 本書のタイトルが『善王と悪王』であることは意味深い。当然マナセが悪王の代表であり、ヨシヤが善王の代表である、というのが旧約聖書の評価なのである。

²⁰⁾ Grabbe ed., *Good Kings and Bad Kings*, 348.

²¹⁾ Theodor Oestreicher, *Das Deuteronomische Grundgesetz* (Gütersloh: C. Bertelmann, 1923).

歴代誌の方をより重視する姿勢を打ちだしている²²。バリックの見解によれば、列王記の報告は「文章の統一性および歴史的信頼性が非常に疑わしい²³」。王下 22 章 1 節から 23 章 30 節には交差構造が認められ、歴史的現実を反映していない人工的な文学的構成であるということ、また不自然な文法構造（ワウ継続法）を持っているというのが理由である²⁴。交差構造が存在したりワウ継続法が存在したりするとなぜ歴史的現実を反映していない証左になるのか不明²⁵だが、要するに歴代誌の方が新しいとしても、それが単に列王記の記事を下敷きにして書き換えられたテキストであるというのではなく、別のテキスト（Kings' History「諸王の歴史」として言及されるもの）を元としている可能性があり、一般に想定されるよりもっと複雑なテキスト間の影響関係があったということを主張しているのだ。彼によると歴代誌は「イスラエルの過去...についての概念に『適合』しなかった列王記の素材は、単に削除されたか、何かまったく違うものに変形させられた²⁶」というように誤って評価されてきたというのである（傍線筆者）。歴代誌家によって使用された列王記の版は、マソラ本文に保存されている版ではなかったか、いわゆる「抑圧された素材」が最初から歴代誌家の使用した底本には存在しなかったということが「非常にありそうなこと」であるという²⁷。

さらにバリックは返す刀で申命記的な書物がヨシヤ改革に関わっている可能性も否定してみせる。彼の立場は最近モンロー（L. A. Monroe²⁸）に受け継がれ、申命記史という概念からできる限り距離を取りつつ当該改革を説明する試みがおこなわれているが、両者とも申命記的要素・申命記史家的要素なしで議論を進めることに成功しているとは言い難い。列王記が申命記史家の筆になり、歴代誌が歴代誌家の筆になるとすれば、歴代誌重視が自

²² W. Boyd Barrick, *The King and the Cemeteries: Toward a New Understanding of Josiah's Reform* (Leiden: Brill, 2002).

²³ Barrick, *The King and the Cemeteries*, 1.

²⁴ Barrick, *The King and the Cemeteries*, 2.

²⁵ 文脈から見て想像できる「理由」としては、列王記が技巧をこらさず素直に歴史的事実を反映した記述だという見解があるということのようだが、誰がそのような主張をしているのか定かではない。少なくとも管見によるとそのような主張は存在しない。技巧をこらさない「純粋な」あるいは「客観的な」歴史記述など存在しない。すべての歴史記述は、特定の観点から読者を説得する目的をもって書かれている。

²⁶ Barrick, *The King and the Cemeteries*, 14.

²⁷ Barrick, *The King and the Cemeteries*, 15.

²⁸ Lauren A. Monroe, *Josiah's Reform and the Dynamics of Defilement: Israelite Rites of Violence and the Making of a Biblical Text* (Oxford: Oxford University Press, 2011). この研究書の主要な目的は、神聖法典（神聖法典とはレビ記 17–26 章を指す）的 “substratum” がヨシヤ時代に、既に存在していたということを示すことである。

動的に申命記軽視につながるようにも思われる。ただし、歴代誌の記述を列王記より重視するということが、必ずしも申命記を考慮に入れないことと結び付くわけではない。後で扱うことになるが、たとえば日本には、ドイツの旧約学者フォン・ラート²⁹にならって、比較的歴代誌を重視しかつ申命記研究を重視する研究の伝統がある。

1.2. 申命記と改革の関係

1.2.1. 「発見された書物」とは何か

列王記の物語において改革の契機となる³⁰のが、神殿修復の際に発見されたという「律法の書」（「契約の書」「モーセの律法」）である。この書物は 1805 年にデ・ヴェッテ（W. M. L. de Wette³¹）によって申命記と同定され、後にヴェルハウゼンに受け継がれることによって、ほとんどの研究者の間で一致をみる数少ない事項のひとつとなった。先に見たとおり、ヴェルハウゼンの四資料仮説の年代づけも、D 資料が前 7 世紀であるということに基礎を置いていた。そして J 資料や E 資料の存在さえ疑われている現在でも、多くの研究者によって申命記の年代はヨシヤ時代の前 7 世紀であるということが受け入れられている。もちろんヴェルハウゼンは「発見された書物」である「原申命記」の範囲を 12-26 章としており、現在の形の申命記がそのままヨシヤ時代の「律法の書」であるとは考えていない。アルバーツ(R. Alberty)もまたこの線に沿って議論している。

²⁹ ゲルハルト・フォン・ラート著 鈴木佳秀訳『申命記：私訳と註解』ATD・NTD 聖書註解刊行会、2003 年、32 頁参照。「他方で、ヨシヤ王は、改革事業を行うすべての推進力を、申命記から得ているというわけでもない。世界帝国アッシリアが急速に衰微したことが、ヨシヤ王を勇気付け、彼がアッシリアとの宗主権条約に基づく関係を廃棄し、それと共に、アッシリアの国家守護神と祭儀をも廃絶するに至ったことは、間違いないだろう。こうした方向で実施されたあらゆる措置が申命記によって引き起こされたというのは、まずあり得ない。」（傍線筆者）原著は Gerhard von Rad, *Das fünfte Buch Moses Deuteronomium: Übersetzt und erklärt*, 4th ed., (Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1983).

³⁰ 歴代誌の物語において「発見された書物」は既にはじまっていた改革に拍車をかける役割を果たしている。

³¹ Wilhelm Martin Leber de Wette, *Dissertatio critico-exegetica, qua Deuteronomium a propriis Pentateuchi libris diversum, alius cuiusdam recentioris auctoris opus esse monstratur* (Diss., University of Jena, 1805).

1.2.2. 改革と申命記家・申命記史家の関係

ノート (M. Noth) は 1943 年の有名な著書³²で、捕囚期のひとりの申命記史家を想定した。ノートの悲観的な申命記史家理解には、当時ノートが置かれていた事情が投影されているかもしれない。レーマー (T. Römer) は「ノートの申命記史家が、すくなくともある程度は、ノート自身の社会的状況を反映するのではないか、ということが問われてよからう。すなわち、自分の国民の歴史が終わってしまうかもしれないという可能性に直面していた、孤立した一人の知識人、という状況である³³。」と述べている。

その後ドイツ語圏では「捕囚期」の申命記史家を細かく分けていく研究が続いた。スメント (R. Smend) は律法への関心を強く見せる「後代の」編集層を分離して「法規主義的申命記史家」(略号 Dtr N) と呼び、もともとあったと考えられる部分を「歴史主義的申命記史家」(略号 Dtr H) と呼んだ。さらにスメントの弟子ディートリヒ (W. Dietrich³⁴) は、もうひとつの申命記主義的編集層を分離した。それは預言に強い関心を示すため、彼はそれを「預言者的申命記史家」(略号 Dtr P) と呼んだ。時間的順序は Dtr H→Dtr P→Dtr N となる。シュピーカーマン³⁵はヨシヤ改革を論じる際、基本的にスメント学派に依拠しており、とくに新しい展開を見せていない。これだけでも充分多くの編集層とその編(著)者が区別されるわけであるが、ドイツ語圏ではさらにそれぞれを細かく分けようとする研究が行われ、「申命記史家のインフレーション」が起こり、一貫した編集方針に基づく一連の申命記史書という概念自体が挑戦されるようになって現在にいたっている。この反動でノートが提唱した「ひとりの申命記史家」を再評価しようという「ネオ・ノート説」という立場もみられる。ただし、ひとりの申命記史家だけでは説明しきれないことや矛盾が多すぎるという問題が残る。ホフマンは基本的にネオ・ノート説に依拠しているようだが、この理由で一貫した説明ができていない。

これに対して英語圏ではクロスがスメントより早くヨシヤ時代に第一の申命記史家(略号 Dtr¹)によってヨシヤに救いがあるというプロパガンダを広めるための主たる編集が行

³² Noth, *Überlieferungsgeschichtliche Studien I.*

³³ トーマス・C・レーマー著 山我哲雄訳『申命記史書：旧約聖書の歴史書の成立』日本キリスト教団出版局、2008年、54頁。Cf. Thomas Römer, *The So-Called Deuteronomistic History: A Sociological, Historical, and Literary Introduction* (New York: T & T Clark, 2005), 25.

³⁴ W. Dietrich, *Prophezie und Geschichte: Eine redaktionsgeschichtliche Untersuchung zum deuteronomistischen Geschichtswerk* (Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1972).

³⁵ Spieckermann, *Juda unter Assur in der Sargonidenzeit.*

われ、捕囚期に第二の申命記史家（略号 Dtr²）によってノートが想定するような悲観的な従たる編集が行われたという説を提出し、多くの支持者を集めてきた³⁶。スメント学派に比べればクロス学派の方が現実的であろう。アメリカ・イギリスだけでなく、大陸の研究者（ローフィंकやレーマー）なども、クロスとまったく同じではないにしても実質的にはこの立場をとっていると評価できる。

ヨシヤの改革理解に関連して、申命記史家理解にもさまざまな違いが出てくることになる。たとえばアイニケル（E. Eynikel³⁷）は、列王記下 23 章の編集層を RI（ヨシヤ時代）、RII（ヨシヤの死後捕囚前まで）、RIII（捕囚期）に分けている。RI がクロス学派の Dtr¹ に、RIII がクロス学派の Dtr² に対応する。バリック³⁸は「諸王の歴史」（KH）を 4 つの段階に分けている。KH1（ヒゼキヤ時代）、KH2（ヨシヤ時代）、KH3（ヨシヤ後捕囚期まで）、KH4（捕囚後の時代）である。KH2 がクロス学派の Dtr¹ に、KH3 が Dtr² に概ね対応するといえる。筆者が適切と考えるヨシヤ改革についてのテキスト編集に関する時代区分は 1) ヨシヤ時代前期（即位後改革前） 2) ヨシヤ時代後期（改革期） 3) 捕囚期 4) 捕囚後であり、その場合カテゴリーとしてはクロス学派の Dtr¹ をふたつに分け、Dtr² はそのまま使うが、もうひとつの段階を付け加えるということになる。バリックの場合を見れば明白であるが、申命記史家という術語を避ける場合であっても実質的には同じものを扱わざるを得ないのであり、あえて別の術語を作るなどすると議論が混乱する原因となってしまう。クロス学派にもスメント学派にも属していないということをアピールするあまり、かえって主張がわかりにくくなる傾向は問題である。

1.3. 預言者を援用できるか

改革の姿を再構成する素材として預言者を引用することが適切かどうかについては意見が分かれている。たとえばスウィーニー（M. A. Sweeney）は歴史的申命記史家

（Deuteronomistic Historian しばしば DtrH と略される）と申命記（Deuteronomy しばしば Dtn と略される）の他に「エレミヤ書・ゼファニヤ書・ナホム書・ハバクク書・イザヤ書・

³⁶ Cross, “The Theme of the Book of Kings and the Structure of the Deuteronomistic History,” 1973.

³⁷ Erik Eynikel, *The Reform of King Josiah and the Composition of the Deuteronomistic History* (Leiden: E. J. Brill, 1996).

³⁸ Barrick, *The King and the Cemeteries*.

アモス書・ホセア書・ミカ書」を含む聖書文学が、「実際、ダビデ的支配の下にエルサレム神殿を中心としてイスラエルとユダを統一するためにデザインされたプログラムとしてのヨシヤ改革の歴史的現実を指し示す」と主張している³⁹。これに対しスウィーニー説を念頭にその徹底的批判を行ったベン・ツヴィ (E. Ben Zvi) は、まず預言文学の中でもヨシヤ時代に関連づけることをテキストが要請しているのはエレミヤ書とゼファニヤ書だけだということを確認し、次にエレミヤ書は「部分的にしかヨシヤ改革と結びつけられ⁴⁰」ない上、関係がある場合 (エレ 25:2-3、36:2-3) でも「否定的態度」を表明していると指摘している (ただし彼は例外としてエレ 22:13-17、19 にも言及している)⁴¹。そしてゼファニヤ書については、「関連はヨシヤ治世の第一年あるいは彼が小さかったときのみ」であるととする⁴²。さらにエレミヤ書もゼファニヤ書もヨシヤが中心人物ではなく、改革への言及もないということが強調されている⁴³。したがって、ベン・ツヴィによれば、「預言書はヨシヤ時代のユダにおける歴史的環境の再構成に、同定可能で独立的な資料を提供しない⁴⁴」ことになる。

ベン・ツヴィ説の方により説得力があると思われる。というのは現在われわれが手にしている最終形態の聖書にみられる預言だけが流布していたのではなく、当時さまざまな預言が存在したものの、歴史的結果によって淘汰され「正しい」(と後に認定された) 預言だけが収録され、それ以外の預言は忘れ去られたか「偽りの」預言として短く登場するだけ

³⁹ Marvin A. Sweeney, *King Josiah of Judah: The Lost Messiah of Israel* (Oxford: Oxford University Press, 2001), 19. Sweeney のこの研究書は Anti Laato, *Josiah and David Revivius: The Historical Josiah and the Messianic Expectations of Exilic and Postexilic Times* (Stockholm: Almqvist & Wiksell International, 1992) を批判的に継承したものである。Laato は申命記史書のほか、エレミヤ書、エゼキエル書、ゼカリヤ書 1-8 章、ハガイ書、ゼカリヤ書 9-14 章、歴代誌上・下、エズラ書、ネヘミヤ書を対象として捕囚期および捕囚後のメシアニズムを抽出することを試みている。Sweeney は Laato の指摘する「ヨシヤのイメージが捕囚期と捕囚後間もない時期に...メシア的期待を形成することに果たした役割」(20) を認めるのであるが、「捕囚期と捕囚後のテキスト伝承にのみ排他的に集中したために、王国時代後期とそれを超える期間の重要な側面のいくつかを見落としてしまうことになった」(318) と批判し、「多くのユダヤの思想家たちが、ゼルバベルの時代より前にさえ、既に再建されたダビデ王朝という概念を廃棄しはじめた」(318) のだから「王国時代後期と捕囚期にはもはや、ダビデ王朝の王は、小さなあるいは従属的な役割しか果たしておらず、望ましいリーダー像は『ダビデ的な王』から『モーセ的なレビ人祭司』にシフトしていく」(318) としている。

⁴⁰ Ehud Ben Zvi, "Josiah and the Prophetic Books: Some Observations," in *Good Kings and Bad Kings*, ed. Grabbe, 47-64, 47.

⁴¹ Ben Zvi, "Josiah and the Prophetic Books: Some Observations," 51.

⁴² Ben Zvi, "Josiah and the Prophetic Books: Some Observations," 49.

⁴³ Ben Zvi, "Josiah and the Prophetic Books: Some Observations," 53.

⁴⁴ Ben Zvi, "Josiah and the Prophetic Books: Some Observations," 64.

になったと想定できるからである。したがって預言者の援用はふさわしくないと考えられる。改革に対する前 8 世紀や前 7 世紀の預言者の影響を考える向きもあるが、それらが価値ある文書として受け入れられたのは、おそらく記憶（か記録）されていた預言者の言葉が「実現」した後である。つまり、預言的文書に断片的に現れているのは「改革の影響」であって、「改革の原因」ではないということができる。

1.4. 改革の歴史性

このようにヨシヤの改革と原申命記が密接に結びついているとすれば、申命記の年代がヨシヤ時代でなければ、申命記的書物に基づいた改革などありえなかったということができる。申命記の年代を前 5 世紀とする説は昔も今も少数説ではあるが、近年全体的にトーラーの成立年代を下げる「低年代説⁴⁵」と呼ばれる見解が強くなってきたのに伴って、以前よりも信頼性を増してきているようである。

1.4.1. 歴史性否定説

ヘルシャー (G. Hölscher⁴⁶) はもっぱらエレミヤ書 (捕囚前から捕囚期) とエゼキエル書 (捕囚期) にヨシヤ改革の痕跡が見られないということから、ヨシヤ改革はフィクションであって、申命記の成立は前 500 年頃であるとした。列王記も歴代誌も検討せずに導き出

⁴⁵ 「低年代説」とは、考古資料に大きな比重を置くことによって生じたもので、聖書テキストの成立を以前よりはるかに遅く位置づける立場である。Finkelstein (Israel Finkelstein and Neal Asher Silverman, *The Bible Unearthed: Archaeology's New Vision of Ancient Israel and the Origin of its Sacred Text* (New York: A Touchstone Book, 2002) のように、すべてがヨシヤ時代にはじまったとしたり、さらに進んで捕囚期あるいは捕囚以後にはじめてトーラーや他の文書が成立したとするものがある。Chr. Uelinger, “Was There a Cult Reform under King Josiah? The Case for a Well-grounded Minimum,” in ed. Grabbe, *Good Kings and Bad Kings*, 308 は次のようにコメントしている。「この 30 年程で旧約学は『捕囚直前』『捕囚期』『捕囚後』への聖書資料の遅い年代づけという強い一般的傾向を目撃した。同時に、イスラエルおよびユダの歴史を再構成するための考古学的一次資料にますます重要性が置かれるようになっている。近年考古学は『遅い年代づけ』の大混乱の中にある。Finkelstein の『低年代』の提案についての重要な議論とともに。歴史記述の観点および方法的自覚という観点から、この一次資料へ向かう流れは、ただ歓迎される。解釈者に歴史研究への関心は残っていないが、聖書テキストを含む非考古学的な二次資料の、一次資料への劣位という新しい方法的ヒエラルキーに注意すべきである。」(ただし Uelinger はこの傾向を手放しで歓迎しているわけではなく、「歴史と神学の乖離」がさらに進むことに懸念を表明している)。

⁴⁶ Gustav Hölscher, “Komposition und Ursprung des Deuteronomiums,” ZAW 40 (1922): 161-255.

されたこの申命記の年代はヘルシャー本人が認めるように「暫定的で貧弱」な結論⁴⁷ではあるが、この説が現在まで続くフィクション説の基盤となったと考えられるので、少し詳しく見てみたい。ヘルシャーによると「この法 [申命記法] は実際、捕囚前の国家において有効な法ではなく、したがってそれはヨシヤ王が [前] 620 年に国家法として掲げた、神殿において発見された律法の書と同一ではありえない、という結果がもたらされる。⁴⁸」彼が、申命記法が国家において有効でないとする理由は、あまりにイデオロギー的性格が強く⁴⁹、理想主義的プログラムであると考えからである⁵⁰。理想主義・イデオロギー的・ユートピア的という根拠によって申命記が実際に国家法として起草されたことを否定しようとする立場はとくに申命記 16－18 章の「職制の法」、なかでも「王の法」についての非現実性を論うことが多い。

カイザー (O. Kaiser⁵¹) は、ヘルシャーが列王記すら見ずに雑な議論をしたことを批判しつつも、ヘルシャーと同様の結論に至っている。その根拠は王下 22－23 章の文学的層位を解明することは困難であるから、内容的に歴史性があるかどうか判断すべきというものである⁵²。ヘルシャー同様非常に根拠が薄弱である。ヴュルトヴァイン (E. Würthwein⁵³) もほぼ同じことを論じている。「王下 22－23 章は、申命記の年代とその個々の層のために考慮されるべきではない。それ自身に充分根拠のある、より正確な年代が発見されない限りは⁵⁴。」そしてこう述べている。「王下 22－23 章は、申命記史家の闘争の方法として理解されるべきである。ユダ人あるいはユダヤ人の共同体の生活において、申命記の祭儀的一儀礼的要求を遂行するための⁵⁵。」ニーア (H. Niehr) も同様に「王下 22－23 章に報告されているようなヨシヤの祭儀改革は、歴史的に証明されていないだけでなく、歴史的にありえ

⁴⁷ Hölscher, “Komposition und Ursprung des Deuteronomiums,” 238.

⁴⁸ Hölscher, “Komposition und Ursprung des Deuteronomiums,” 228.

⁴⁹ 「申命記立法のイデオロギー的性格は、それが捕囚前のユダに生まれたのではなくて、むしろ出来事の後時代属するということを示している。」(228)。“Der ideologische Charakter der deuteronomischen Gesetzgebung zeigt, daß sie nicht im vorexilischen Juda entstanden ist, sondern in die Zeit nach dem Falle gehört.”

⁵⁰ Hölscher, “Komposition und Ursprung des Deuteronomiums,” 228-230.

⁵¹ Otto Kaiser, *Einleitung in das Alte Testament: Eine Einführung in ihre Ergebnisse und Probleme*, 5th ed. (Gütersloh: Gütersloher Verlaghaus Gerd Mohn, 1984).

⁵² Kaiser, *Einleitung in das Alte Testament: Eine Einführung in ihre Ergebnisse und Probleme*, 133.

⁵³ Ernst Würthwein, “Die josianische Reform und das Deuteronomium,” *ZTK* 73 (1976): 395-423.

⁵⁴ Würthwein, “Die josianische Reform und das Deuteronomium,” 214.

⁵⁵ Würthwein, “Die josianische Reform und das Deuteronomium,” 214.

ないものとして評価されるべきであ⁵⁶」り、「捕囚期および捕囚後の申命記史家的著者が、捕囚直前の祭儀改革および浄化というフィクションを築き上げたのである⁵⁷」と述べている。ホフマンは、交差構造を理由にフルダの預言の部分を下 22-23 章の中心部分と考え、「ミシュネー⁵⁸」がフルダの時代には存在しなかったということを根拠に歴史性を否定している。しかし、現在ではエルサレムの第二地区（ミシュネー）がフルダの時代に存在していたことが知られているので、ホフマンの議論は弱められたといえよう⁵⁹。

1.4.2. デイヴィスとアルバーツの論争

低年代説をとるデイヴィス（P. R. Davies）のように、申命記の成立を前 5 世紀と考えるならば⁶⁰、そもそも申命記の内容を基礎とした前 7 世紀の改革などあったはずがないことになる。しかしアルバーツのように、申命記の伝承形成を前 7 世紀の 30 年代から前 6 世紀半ばと考えるならば、ヨシヤ時代に申命記の内容と深く関わる変化があったと解釈することができる。アルバーツはデイヴィスを以下 3 つの点において論駁している。第一に、「イスラエル」という語の広義の使用（南ユダ王国も北イスラエル王国も含めて「イスラエル」と呼ぶような）は既に前 8 世紀から一般的であり、デイヴィスのように歴史的「イスラエル」と北王国といわゆる「聖書的イスラエル」を厳密に区別する理由はない⁶¹。したがって申命記が「イスラエル」という語を完全に広義の意味で使用しているという事実は...前 7 世紀という年代を排除するものではない⁶²。さらにネヘミヤ書では特徴的に「ユダヤ人」という語が使われているので、申命記の「イスラエル」という術語の使用法を前 5 世紀という背景から説明するのは極度に困難である⁶³。第二に、デイヴィスは「伝統的な

⁵⁶ Herbert Niehr, “Die Reform des Joschija: Methodische, historische und religionsgeschichte Aspekte,” in *Jeremia und die “deuteronomistische” Bewegung*, ed. W. Gross (Weinheim: Belz Athenäum, 1995), 33-55, 51.

⁵⁷ Niehr, “Die Reform des Joschija,” 51.

⁵⁸ エルサレムの新市街。

⁵⁹ Cf. Nahman Avigad, *Discovering Jerusalem* (Nashville: Nelson, 1983), 23-60.

⁶⁰ Phillip R. Davies, “Josiah and the Law Book,” in ed. Grabbe, *Good Kings and Bad Kings*, 65-77 は留保をつけつつ、前 5 世紀という年代が「より（申命記の）文脈に合う」としている（75）。この場合彼が「文脈」として意味しているのは移民の存在・土着人口との葛藤・書かれた律法の重要性などである。

⁶¹ Rainer Albertz, “Why a Reform of Josiah’s Must Have Happened,” in ed. Grabbe, *Good Kings and Bad Kings*, 27-46, 30.

⁶² Albertz, “Why a Reform of Josiah’s Must Have Happened,” 31.

⁶³ Albertz, “Why a Reform of Josiah’s Must Have Happened,” 32.

前7世紀という年代づけを掘り崩すために、王の法（申 17:14-20）が何らかのユートピア主義的性格を反映しているとする⁶⁴」が、「より遅い年代がユートピア的概念をより現実的にするのかという問いは残る⁶⁵」として古代ギリシアの反証に言及している⁶⁶。第三に、「…ヘブライ語聖書の捕囚後の書物には、まったく一ハガイにおいてもゼカリヤにおいてもエズラと第三イザヤにおいても一エルサレムの他に聖所があるかどうかという問題をおこすようなヒントは存在しない⁶⁷。」「したがって我々は以下のように結論できる。申命記 12-26 章が前5世紀に年代づけられるべきだというデイヴィスの議論には、全く説得力がない。前7世紀という年代づけにはいくらか疑いがあるかもしれないが、申命記立法は、ペルシア時代の社会政治的状況および文学（資料）に、よりなじまないものである⁶⁸。」以上のようにアルバーツはデイヴィスの主張に説得的な論駁を行なっている。

この論争が示唆するところは、「ユートピア的規定」の現実性が説明可能であれば、ヘルシャー以来続いてきた申命記とヨシヤ改革を分離する試みは根拠を失い、改革の歴史性を主張することができるということである。

1.5. 日本における申命記およびヨシヤ改革研究史

1.5.1. 関根正雄の研究

ヴェルハウゼンが近代旧約学の父であるならば、関根正雄は日本の近代旧約学の父である。この分野における関根の学問的・教育的貢献は非常に大きい。最初に関根の、次いで関根の弟子である鈴木佳秀の申命記およびヨシヤ改革理解を概観すべきであろう。

⁶⁴ Albertz, “Why a Reform of Josiah’s Must Have Happened,” 34.

⁶⁵ Albertz, “Why a Reform of Josiah’s Must Have Happened,” 34.

⁶⁶ Albertz, “Why a Reform of Josiah’s Must Have Happened,” 35, n. 29. Cf. Albertz, *Religionsgeschichte Israels in alttestamentlicher Zeit, Teil 1: Von den Anfängen bis zum Ende der Königszeit* (Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1992), 352, n. 196.

⁶⁷ Albertz, “Why a Reform of Josiah’s Must Have Happened,” 36.

⁶⁸ Albertz, “Why a Reform of Josiah’s Must Have Happened,” 36.

1.5.1.1. ウェーバー説への依拠

関根は一貫してウェーバー (M. Weber) のひとつの提案とユンゲ (E. Junge⁶⁹) の研究書から受けた示唆を基に、ヨシヤ時代の軍事官僚制国家成立を前提とした申命記研究を行ってきた⁷⁰。さらにフォン・ラート (G. von Rad⁷¹) の影響下に、改革におけるレビ人祭司の役人としての役割を主張した。

繰り返し言及される関根の立脚点のひとつはウェーバーの『古代農業事情』(『古代社会経済史』というタイトルでも出版されているが同じ作品である) の一節である。「イスラエル」というくくりの中にあるヨシヤ時代についての短い言及の中にある「つまりヨシア王の改革以後においては、官僚制化と神政政治化とはあいならんで進行する⁷²。」という一文である。これだけではウェーバーの意図と文脈がわかりづらいので、前後をあわせて引用する。

さてこのような政治的な勢力関係の激しい転位と同時に、国家的・社会的状態も新しく組織化された。この新組織は、古い律法の時代にくらべて広範な諸状態の変化がはじまったことをしめしている。十分の一税は一神殿都市からきわめて遠いので一貨幣で納めてもよいとされなければならなかったのであるから、この新組織は広範な貨幣経済を前提している。中心神殿の地位の上昇の前に地方的祭司の地位がうしなわれていったため、農村地方の所々に世俗的な裁判官がつくられるにいたった。それゆえ、神殿祭司層の利害は農民の利害と一致したのであり、これら祭司層の利益はこの点で

⁶⁹ E. Junge, *Der Wiederaufbau Heerwesens des Heerwesens des Reiches Juda unter Josia*, (Stuttgart: Kohlhammar, 1937). 残念ながらこの本は入手できず目を通していないのだが、出版年とタイトルから推測できるのは、Junge はナチスの時代 (1933 年の政権獲得以降 1945 年の敗戦まで続いた) にあって、ドイツがヴェルサイユ条約を破棄し軍事官僚制復活に至るという時代情勢を、聖書解釈に持ち込んだのではないかということである。そのため近年 Junge を引用する旧約学研究者は皆無である。申命記の註解において Junge に言及している von Rad もまた、ドイツ近代史と古代イスラエル史を重ねて見ていたことについては筆者の書評「G. フォン・ラート著 山吉智久訳『古代イスラエルにおける聖戦』『キリスト教学』第 48 号、2006 年、151-54 頁を参照されたい。

⁷⁰ たとえば関根正雄「申命記とその影響—啓示の歴史的背景—」『聖書学論集』第 8 号、1971 年、68—88 頁 (566—92 頁)、70 頁 (569 頁) 参照。

⁷¹ フォン・ラート、2003 年、27-28 頁では von Rad 自身が Junge を引用し、レビ人祭司の役割を強調し、申命記がヨシヤ改革の綱領であることを否定している。

⁷² マックス・ウェーバー著 上原専禄・増田四郎監修 渡辺金一・弓削達共訳『古代社会経済史：古代農業事情』、東洋経済新報社、1984 年、179 頁。

も地方農村の門閥（ゲシュレヒター）の利害と反したのであった。このような状況はオリエントにおいてはたしかにしばしば典型的にあらわれる状況である。このような状況は裁判をつかさどる官僚制の端緒がうまれる機縁をつくりだした—このことはオリエントのどこにおいても起こったとかがえてよいのである—。つまりヨシヤ王の改革以後においては、官僚制化と神政政治化とはあいならんで進行する。（下線高橋）これと同じ事態はすでに関連箇所において言及したところのスメル人の王たちの行政組織においておこなわれたところであった（と思われる）。》貧民政策的《な意味で地方に穀物倉庫を設置し、そこに十分の一税の年総額の三分の一を備蓄するようさだめられている点でも、ユダ王国はオリエントの神政政治的・官僚制的都市王政の典型と一致する。（邦訳、170 頁⁷³）

たしかにウェーバーはこの記述においてヨシヤ改革は「官僚制化と神政政治化」を同時にもたらしたと述べているが、それは他のオリエントの都市国家と同じ類型的状態に入ることとらえられている。同時代のオリエントの都市国家の状況とイスラエルを比較する必要があると解すれば意義ある提案かもしれないが、ヨシヤ改革によってイスラエルが典型的なオリエントの都市国家の状況に至ったというウェーバーの想定自体に問題が指摘されねばならない。そもそもウェーバー自身がオリエントに典型的な専制的な王の支配にもとづく官僚制国家の成立に不可欠と考えるのは治水の必要性なのである。

東洋の治水耕作は、家畜を使用せざる原始的耨耕耕作から直接に成立した。これと相並んで園圃耕作 *Gartenkultur* が、メソポタミアにおけるユーフラテスやチグリス、エジプトにおけるナイルのごとき大河流より灌漑することによって発達した。この灌漑治水およびそれに関する規制は組織されたる計画経済を前提するが、例えばテーベの新王国においてもっとも徹底して展開されたように、近東の大規模なる王宮経済はこの組織的計画経済より発生したものである。アッシリア・バビロニアの国王達がおこした戦争は—それは畢竟メンナーハウスに起源を有する従者をもっておこされたのであるが—、運河開墾に用いる人間や荒蕪地の開拓に用いる人間を獲得せんがための

⁷³Max Weber, *Max Weber Gesamtausgabe Abteilung I: Schriften und Reden vol. 6, Zur Sozial- und Wirtschafts- geschichte des Altertums, Schriften und Reden, 1893-1908*, ed. J. Deininger (Tübingen: J. C. B. Mohr (Paul Siebeck), 2006), 449-451. 傍線部分の原文は“... Bureaukratisierung und Theokratisierung gehen Hand in Hand, ...”である。

人間狩が第一の目的であった。この場合、国王は水利の統制をその手中に収めたが、しかしこれがためには一種の官僚機構が必要であった。エジプトやメソポタミアにおける土木＝治水の官僚制 **Bau- und Wasserbürokratie** は世界でいちばん古い官僚制である。ところでこの官僚制は、この場合、まったく国王の自己経済の一体にすぎなかった。個々の官吏は王の奴隷あるいはクライアントであった。兵士も同様であり、その逃亡を防止するためにしばしば烙印が加えられた。国王の租税経済は実物経済であった。すなわち、国王は実物貢納を臣下に賦課し、エジプトでは、この実物貢納が倉庫に収納せられ、国王はこの倉庫から官吏や労働者への給与を取り出してこれを与えた。かくのごとく倉庫からとり出して実物のまま与えられる賜物 **Deputat** は官吏の俸給の最古の形態である。

この制度全体がもたらした結果は、エジプトにおいては、国の人口を挙げて国王に直属するということであった。かくのごとき隷属関係は、すべての臣民の賦役義務の形において、また、村落に対して賦課せられる給付に対する村落の連帯責任の形態において、あらわれ、最後には、これから発生し、トレミー王朝の下でイディア *ἰδέα* とよばれた原則となって、あらわれた。しからば、イディアの原則とは何か。すなわち、どの農民も単に彼の田畑の土くれに縛りつけられるのみでなく、彼の村落にも縛りつけられ、もし彼がそのイディア [所属地]を立証しえない場合には、何らの保護を受けえないもの **vogelfrei** とされること、これである。この制度はかならずしもエジプトのみでなく、メソポタミアや日本においても行われた（日本においては、七世紀から十世紀にかけて口分田制度があった）。いずれの場合においても、その当時の農民の地位は、ロシアのミールにおけるとまったく同様である⁷⁴。

なるほどメソポタミアのチグリス・ユーフラテス川やエジプトのナイル川の例を考えれば首肯できる。だがイスラエルには、そのような恩恵をもたらすと同時に氾濫をくりかえす大河は存在しない。その点で古代オリエントの都市国家と比較するより古代ギリシアの都

⁷⁴ マックス・ウェーバー著 黒正巖・青山秀夫訳『一般社会経済史要論』上巻、145-46 頁（引用にあたって旧字を新字に変えてある）。本書はウェーバーが 1919 年に行なった講義の再構成である。原書は *Max Weber, Max Weber Gesamtausgabe Abteilung III: Vorlesungen und Vorlesungsnachschriften vol. 6, Max Weber, Abriß der universalen Sozial- und Wirtschaftsgeschichte: Mit- und Nachschriften 1919/20*, ed. W. Schulz (Tübingen: J. C. B. Mohr, 2011), 144-46.

市国家と比較する方がより適切であり、実際最晩年の大著『古代ユダヤ教⁷⁵』においてウェーバーはこの比較を念頭においた分析を行っている⁷⁶。したがって、ウェーバーの著作の中でも年代が早い作品の片言隻語に深い意味を見ることは不適切である。

1.5.1.2. 「レビ人」役人登用説

さらに関根は、祭儀集中によって職を失った地方の「レビ人祭司」が役人として任用されたと想定するが、聖書内・聖書外テキストのどこにも根拠がない。逆に改革において地方聖所の祭司だった「レビ人祭司」（この語自体が意図的につくられたものである⁷⁷）は、旧約聖書においては、失職後「寡婦・孤児・寄留者」と同じ「貧しき人々」のカテゴリーに入れられるようになったということが読み取れる。申命記では繰り返し「レビ人」をないがしろにしないように勧めており、現実にはしばしばないがしろにされていたであろうことが容易に想像できる。関根は「ショーフェト（いわゆる「士師」）」と「ショーテル（書記）」（関根は後者がヨシヤ改革以降に使用されるようになったという仮説を提示している）という単語に注目して、このふたつの用語の使い分けに、レビ人祭司の役人登用が反映されていると主張している⁷⁸が、ショーテルがレビ人祭司であるという証拠は旧約聖書中に見えない。とにかく関根は申命記 18 章 6-7 節と列王記下 23 章 8-9 節の矛盾という、ヨシヤ改革においてしばしば問題となる論点をこのように解消しようと試みたのであった。

⁷⁵ Max Weber, *Max Weber Gesamtausgabe Abteilung I: Schriften und Reden vol. 21, Die Wirtschaftsethik der Weltreligionen. Das antike Judentum, Schriften und Reden, 1911-1920*, ed. Eckart Otto (Tübingen: J. C. B. Mohr (Paul Siebeck), 2005) 2 vols. 邦訳はマックス・ヴェーバー著 内田芳明訳『古代ユダヤ教』上・中・下巻、岩波文庫、1996 年。

⁷⁶ Cf. Yuko Takahashi, "A Study on Max Weber's *Ancient Judaism*: Theoretical Framework and Methodology," *MWS* 7.2 (2008): 213-29.

⁷⁷ Albertz, *Religionsgeschichte Israels in alttestamentlicher Zeit, Teil 1*, 343-45. R. アルベルツ著 高橋優子訳『ヨシヤの改革』教文館、2010 年、46-50 頁。

⁷⁸ Masao Sekine, "Beobachtung zu der josianischen Reform," *VT* 22 (1972): 361-68 (Short Note). 邦訳は関根正雄著 関根清三訳「ヨシヤ改革に関する諸考察」関根正雄著『旧約聖書学と共に』上巻、山本書店、1977 年、203-13 頁。

1.5.2. 鈴木佳秀の研究

鈴木佳秀は、師の見解を忠実に継承している。鈴木は2005年になっても「筆者は、ヨシヤ王が行政改革を行い、その総仕上げとして法典を編纂したという立場を取っている。⁷⁹⁾」と明言している。そして改革の担い手については「関根正雄によって指摘された解釈が重要である。ヨシヤ王によって地方のレビ人が召し集められ国家の役人として登用された可能性が関根によって指摘されている…。⁸⁰⁾」と書いている。また「申命記法の編纂の観点から言えば、当該の職責を担いうるのは地域共同体に任命派遣された『役人』に相違ない。私見によれば、彼らはもともとレビ人祭司であって、ヨシヤ王によって『役人』として登用された者たちである。」としている。レビ人役人説の根拠として鈴木は5点根拠を挙げているが⁸¹⁾、その中の二つ目は完全に誤った認識から出発している。彼は「町の門における裁判に、国家の官僚である裁判人と役人が任命され派遣されている。派遣された裁判人あるいは役人は、地方法共同体での裁判を司り法規の適用を監督する立場にある。特に刑の執行を監督し、死刑囚の埋葬を行う責任を持つ。裁判人と役人とは聖俗両面にわたる係争を分担している⁸²⁾。」(下線高橋)というのだが、旧約聖書において祭司というものは近親者を除く死体に近づいてはならないことになっている⁸³⁾。大祭司(申命記の時代には存在しなかったが)などは死んだ近親者にさえ近づくことが禁止されている⁸⁴⁾。鈴木はレビ人が役人になった瞬間に祭司としての禁忌が適用されなくなると想定しているわけではなく、逆に祭司こそそのような役割を果たすものであると考えているようで「祭司だけが死体を

⁷⁹⁾ 鈴木佳秀『ヘブライズム法思想の源流』創文社、2005年、130頁。

⁸⁰⁾ 鈴木、『ヘブライズム法思想の源流』、163頁。

⁸¹⁾ 鈴木、『ヘブライズム法思想の源流』、172-73頁。

⁸²⁾ 鈴木、『ヘブライズム法思想の源流』、172-73頁。

⁸³⁾ レビ記 21:1-4 試訳「ヤハウエはモーセに言った、アロンの子ら祭司たちに言え、彼らに言え、彼の親族のために自分を汚してはならない。しかしもし彼の近親者すなわち彼の母、彼の父、彼の息子、彼の娘、彼の兄弟のため、また彼にとっての近親者で処女である姉妹のためには汚れてもよい。同族の者のためには、決して汚れてはならない。」(下線高橋。)

⁸⁴⁾ レビ記 21:10-12 試訳「彼の兄弟のうち、頭に油注がれ聖別されて任命され祭服を着る大祭司は、彼の頭髪を乱してはならない。彼の衣服を引き裂いてはならない。すべて死体のところへ行ってはならない、彼の父のためにも彼の母のためにも汚れてはならない。彼は聖所から出てはならない。彼の神の聖所を汚してはならない。彼の神の注ぎの油による聖別のゆえに。わたしは彼の神である。」(下線高橋。レビ記の当該箇所が申命記より後だとしても、祭司観が突然大きく変わるとは考えにくい。)

処理できるのである⁸⁵」と述べている（下線高橋）。実際には、祭司には死体に触れることが原則として許されないのであって、申命記編纂過程および申命記の構成といった、レビ人役人登用説の根拠は間接的である上、信憑性が薄弱である。

1.5.3. 評価と問題点

関根から鈴木へと受け継がれてきたヨシヤ改革および申命記研究の意義は、それまであまり注目されなかった社会改革あるいは社会制度の革新という点に注目したことである。しかも鈴木は浩瀚な申命記研究書を著して、人称の数の交替を指標として9つの層を区別し、それぞれの時代を想定した。現在ではほとんど放棄されたテーマであるとはいえ、ほとんどの研究者が気づきながら、満足のいく説明を与えられなかった複雑なテーマにひとつの答えを与えたという点で重要な業績である。しかし、もっぱら申命記の文献学的研究からユダ王国の社会状況を再構成するというのは、方法的に無理がある。関根と鈴木に共通するのは、申命記の重要性を強調した上で、断片的に列王記や歴代誌などの記述や考古資料を援用する傾向であり、それは既に念頭におかれているモデルに合う資料だけを選択することを意味する。ヨシヤ改革理解の前提が、版図と人口が大幅に増加した軍事官僚制国家の成立であり、そのために申命記という国家法が要請され、しかも具体的な改革の担い手がレビ人であったという想定は現在の研究水準からは受け入れられない。滅びた北イスラエル王国からの移住者によって南ユダ王国の人口が急増したのは考古学的に確認できる事実である⁸⁶が、ヨシヤ王が「権力の空白」に乗じて常備軍と傭兵隊を整備し旧北イスラエル王国の領域を回復し、海岸平野にまで版図を広げたという想定は、現在おおいに疑われている。

もし強大なオリエン特型の軍事官僚制国家成立が改革と申命記編纂の前提であるとするなら、その前提がほとんど崩れた現在、その改革理解と申命記理解には大幅な修正が必要となろう。また関根と鈴木に限ったことではないが、同時代の楔形文書資料をほとんど顧慮しない旧約学者の研究姿勢は否定的に評価せざるをえない。改革当時の社会状況・国際情勢をほとんど聖書のみから類推するのは方法論的に問題である。少なくとも1950年代以

⁸⁵ 鈴木、『ヘブライズム法思想の源流』、168頁。申命記にも他の旧約聖書の文書にも、この見解の根拠となりうる内容を見つけないことができない。

⁸⁶ Cf. *NEAEHL*, vol. 2, 704 in “Jerusalem” 698-800. （引用部分の執筆者は Yigal Shiloh である。）

降は申命記および他の旧約聖書研究に利用可能な楔形文書資料が多数発見・出版されているのであるから、1970年代の関根、そして1980年代から2000年代にかけて研究を発表してきた鈴木はそれらを参照することができたと思われる。

1.6 ヨシヤ改革の「規模」についての新しい見解

主として考古資料とその解釈に基づいて、アルバーツのような伝統的立場が想定してきたよりは、限定的な規模の変化がヨシヤ時代のユダに起こったと推測する研究者が最近では多くなっている。ベン・ツヴィは『ヨシヤの帝国』は存在しなかった。その代わりに非常に限定的な領土的拡張（ベテルの領域）があり…。ヨシヤが自分の王座の下に一二部族の再統合を遂行したという証拠は全くない⁸⁷と述べており、ハルトマイヤー (C. Hardmeier) は「王下 23 :28b を別として…王下 23 :4-15*における祭儀的浄化と除去の措置について再構成されたカタログが…ヨシヤ治世における小規模な祭儀改革を証言している⁸⁸」と言っている。ナアマンの考えによるとサマリアの丘陵地帯に拡張した可能性はあるが、より北の中央丘陵地帯以上には進まず、ガリラヤあるいはイズレエルの谷は含まれていなかった⁸⁹。バリックはヨシヤの改革を「その宗教的（かつ政治的な）事柄についての見方が広く共有されていないか、社会全体の中では特に人気があるわけではない、ユダ社会の上層階級内での比較的小さな離反グループによって指導された宮廷反乱」と規定しているが、「しかしながら彼らが失敗したということが、後代の想像上の産物であるということを含意するわけではない⁹⁰」とも述べており、その歴史性自体は否定していない。

つまり、近年の研究においては、改革の歴史性については認める立場が多いものの、その規模はエルサレムを中心とするささやかなもので、とても「巨大な軍事官僚制国家」などと呼べるようなものではなかったと考えられているのである。

⁸⁷ Ben Zvi, “Josiah and the Prophetic Books,” 63.

⁸⁸ Christof Hardmeier, “King Josiah in the Climax of the Deuteronomistic History (2 Kings 22-23) and the Pre-Deuteronomistic Document of a Cult Reform at the Place of Residence (23. 4-15): Criticism of Sources, Reconstruction of Literary Pre-Stages and the Theology of History in 2 Kings 22-23,” in ed. Grabbe, *Good Kings and Bad Kings*, 123-63, 159.

⁸⁹ Na’aman, “Josiah and the Kingdom of Judah,” 219.

⁹⁰ Barrick, *The King and the Cemeteries* 171-73.

1.6.1. 「権力の空白」不在説

改革の規模についての議論に関連して最近とくに興味深いのは、従来広く認められてきた「権力の空白」説（アッシリアの支配とエジプトの支配との間に生じた政治的権力の空白に乗じてヨシヤ王が版図を拡大し、改革にも乗り出したという説）が挑戦を受けていることである。実際には「権力の空白」など存在せず、アッシリア支配の後すぐにエジプト支配がはじまったという説が以前より多くの支持を集めている⁹¹。この説によると、ヨシヤ時代のユダ王国は、前半はアッシリアの、後半はエジプトの属国であったことになる⁹²。そうであるならば、たとえばメツアド・ハシャブヤフから発見された書簡の背景が異なっ
て見えてくる。従来この書簡は、海岸地域までヨシヤがユダ王国の版図を拡大した証拠と考えられてきた⁹³のであるが、ユダ王国が常に属国状態にあったとすれば、宗主国の委託を受けて管理していたにすぎず、版図拡大の証拠とはならないことになる⁹⁴。ナアマンはメツアド・ハシャブヤフの他に、ユダ王国南部の要衝アラド出土のオストラカもこの説を支持すると考えており、アラドの指揮官エリヤシブがキッティームと呼ばれる人々に多くの物資を移送するよう命令されているが、この人々はエジプトかバビロニアに雇用されていたのであって、ユダ王にはこの人々に物資を移送する義務があったのであると考えている⁹⁵。実際エジプトは多くの傭兵と砦をもって主要な交易路を支配していた。後のエレファンティネ（エジプト）のユダヤ人傭兵の例を考えても蓋然性は高い⁹⁶。

⁹¹ Cf. Na'aman, "Josiah and the Kingdom of Judah," 217, 230. これに同意する Davies, "*Josiah and the Law Book*," 65-67; Ehud Ben Zvi, "Prophets and Prophecy in the Compositional and Redactional Notes in I-II Kings" ZAW 105 (1993): 331-51, 348; Uelinger, "Was There a Cult Reform under King Josiah? The Case for a Well-grounded Minimum," 295, n. 70 も参照。

⁹² Na'aman, "Josiah and the Kingdom of Judah," 230.

⁹³ Cf. Na'aman, "Josiah and the Kingdom of Judah," 220.

⁹⁴ Na'aman, "Josiah and the Kingdom of Judah," 220.

⁹⁵ Na'aman, "Josiah and the Kingdom of Judah," 223.

⁹⁶ Alexander Fantalkin, "Mezad Hashavyahu: Its Material Culture and Historical Background," TA 28 (2001): 3-165; Bernd U. Schipper, "Egypt and the Kingdom of Judah under Josiah and Jehoiakim," TA 37 (2010): 200-26 も同様の立場を採っている。

1.6.2. エジプト学の援用

この仮説のもうひとつの根拠として、エジプト学を援用したヨシヤの死の背景についての解釈がある⁹⁷。すなわち、ネコ2世がパレスティナへやって来たのは、前年プサメティコス1世が亡くなったため、無効となった宗主権条約を更新するため⁹⁸であり、ヨシヤとの戦闘のためではなかったというのである。

属国説においてしばしば言及されるのはアマルナ書簡⁹⁹などエジプト側の資料であるが、これらはヨシヤの治世とは異なる時代の資料であり、類推を許すエジプトの習慣が援用されているにすぎないので、決定的な証拠とは言い難い。また、「属国」の定義に関しての共通の理解を基盤としなければ、議論が不毛なものになってしまう可能性もある。アルバーツはこの点について、「アッシリアの撤退後政治的空白があったかどうかという問題は未決である—私はもっと知りたい」として、判断を留保している¹⁰⁰。

しかしエジプト学からの示唆はキッティームの解釈を含めて説得力があり、政治的空白はなくユダの事実上の支配権がアッシリアから空白なしにエジプトに移った蓋然性は高い。

⁹⁷ Na'aman, "Josiah and the Kingdom of Judah," 226-28. Cf. Yuko Takahashi, "Reconsidering Mezaḏ Hashavyahu," *AJBI* 39 (2014): 5-19.

⁹⁸ Helck はこれについて次のように提案している。「ここでは、役人の王への拘束は、君主の死とともに消え、新しい王は古い役人たちから新たに明示的な確認をとらねばならないという、エジプトの役人の習慣が影響を与えているかもしれない。それでたいいのエジプト王が、その統治の第一年に、シリアへ行ったということの理由も理解可能となる。新しい王に対して属王たちに宣誓させるということが、必要不可欠だったのである。」

(Wolfgang Helck, *Die Beziehungen Ägyptens zu Vorderasien im 3. und 2. Jahrtausend v. Chr.*, 2nd ed., (Wiesbaden: Otto Harrassowitz, 1971), 247). Lorton はとくに法的な国際関係についての研究書において、Aldred の見解に言及しつつ「…エジプトのシステムにおいて諸条約が両方の忠誠ある者の生きている間だけ有効であるということを示しているようだ。それで各々の王位継承に際して更新されねばならなかったのだ」としている (David Lorton, *The Judicial Terminology of International Relations in Egyptian Texts through dyn. XVIII*, (Baltimore: The Johns Hopkins University Press, 1974), 143)。Redford もこれらの研究者と同様に「エジプト新王国では、誓約は常に統治している王の名において行われ…、彼の死はその事実によって、拘束されていた者たちを解放した」と述べている (Donald B. Redford, "Sais and the Kushite Invasions of the Eighth Century B. C.," *JARCE* 22 (1985): 5-15, 7, n. 20)。エジプト学において、この解釈は広く受け容れられているようであるが、語源および文脈を根拠として、反対する研究者も存在する (Scott N. Morschauser, "The End of the sdf(𓂏)-Tr(yt) 'Oath,'" *JARE* 25 (1988): 93-103, 103)。

⁹⁹ たとえば Lorton は「息」にあたる語が「何か王の言うことだというのは明白であ」り (143)、アマルナ書簡において「(生命の) 息」という表現が、「エジプト王と属王たちのコミュニケーションを指して現れる」(144) と指摘している。Lorton の推測によると、このような言い回しは「単に条約関係に入るという同意のみならず、誓約自体を暗示している」(143)。

¹⁰⁰ Cf. Grabbe, ed. *Good Kings and Bad Kings*, "Reflection," 348. n. 14.

1.7 楔形文書資料と申命記の関係

1.7.1. ヒッタイトの文書か新アッシリアの文書か

申命記の成立に影響を与えた楔形文書資料として最初に注目されたのは、ヒッタイト王国が他の国々と結んだ「条約」であった。メンデンホール (G. E. Mendenhall¹⁰¹) は 1954 年にこの説を発表した。しかし翌 1955 年には「エサルハドン王位継承誓約文書」(と呼ぶのがふさわしいことが現在では明らかな文書¹⁰²) が発見され、1958 年にワイズマン (D. J. Wiseman¹⁰³) によって「エサルハドン宗主権条約 (The Vassal-Treaties of Esarhaddon : VTE)」として出版された。申命記 28 章の祝福と呪いのリストとの類似が指摘され¹⁰⁴、後にワインフェルド (M. Weinfeld) がもっとも説得的な説明を与えた¹⁰⁵。

たしかに申命記 28 章にある「祝福と呪いのリスト」の祝福の部分は ESOD には見られないし、申命記 1-11 章にある「歴史的序文」も ESOD にはついていないが、これは単に文書の性質の違いによるものである。特定の国家間での誓約と、ひとつの国と何百もの相手との誓約ではおのずから書式が異なるのである。ヒッタイトの「条約」文書に帰せられる特徴(祝福のリストが呪いのリストについていることや歴史的序文があること)は、古代西アジアに広くみられる習慣にすぎず、ヒッタイト特有のものとはいえない。それにもかかわらず聖書学者の中には、聖書中のアッシリアの描き方があまりにも凶暴なためか、新アッシリアの文書の影響よりヒッタイトの条約の影響を好む傾向も根強く残っている¹⁰⁶。

¹⁰¹ George E. Mendenhall, "Law and Covenant in Israel and the Ancient Near East," *BA* vol. XVII no. 2 (1954): 26-44; no.3, 1954, 49-76.

¹⁰² そもそも「条約」とは国家間でしか成立しない約束事であるが、ESOD は属国の王たち以外に領域内の町長・代官クラスにまで配布されているのであって、「条約」と呼ぶのはふさわしくないだけでなく誤りである。本論文では個々の研究者が当該文書を何と呼んでいるかにかかわらず、渡辺和子(彼女の業績については第 3 章で詳しく紹介する)の提案にしたがって ESOD という語を使用することにする。

¹⁰³ Donald J. Wiseman, "The Vassal-Treaties of Esarhaddon," *Iraq* 20 (1958): 1-99.

¹⁰⁴ Wiseman, "Vassal-Treaties of Esarhaddon," 87 が ESOD (444-45) と Dt. 28:17 を、同書 88 が ESOD (528-29) と Dt. 28:23-24 の参照を指示している。

¹⁰⁵ Moshe Weinfeld, *Deuteronomy and the Deuteronomistic School* (Oxford: Clarendon Press, 1972).

¹⁰⁶ Cf. Markus Zehnder, "Building on Stone? Deuteronomy and Esarhaddon's Loyalty Oaths (Part 1): Some Preliminary Observations," *BBR* 19 (2009): 341-74; Markus Zehnder, "Building on Stone? Deuteronomy and Esarhaddon's Loyalty Oaths (Part 2): Some Additional Observations," *BBR* 19 (2009): 511-35.

1.7.2. タイナト版の発見

最初に ESOD のひとつの断片が発見されたのはアッシリアの古い首都アッシュルであった。これまでに 3 つの断片（2 つの断片は 2009 年に Frahm が公刊）が知られている（アッシュル版）。1955 年には 9 部がニムルドで発見され（ニムルド版）、1958 年に出版されてから研究が進み、内容がほぼ理解できるようにもなった。しかしニムルド版が発見されたのが当時のアッシリアの首都のひとつカルフ（現在のニムルド）であり、発見された ESOD の名宛人がメディア人であったため、文書中に明記してあるように、本当に多くの名宛人に対してこれが発行され、それぞれが自分たちの領域へ持ち帰ったのかどうかは不明であった。

しかし、2009 年に発見され 2012 年に出版¹⁰⁷されたタイナト版はこの状況を一変させたといえる。現在のトルコにあるテル・タイナト（古代名キナリア、キヌルア）は、当時のアッシリア帝国の属州であり、新ヒッタイト人が住んでいた。クナリアの代官に宛てられたタイナト版 ESOD は、古い神殿の至聖所（一番奥の部屋）から発見されたのである。これは、ESOD が領域内および属国にくまなく存在していたであろうことを強く示唆している。代官や町長に配布されていたものが、忠実な属王であるユダ王国のマナセ王に交付されないなどということとはありえない。おそらくエルサレムのヤハウェ神殿に ESOD が安置されていたに違いない。それを読むことができ内容を知ることのできる立場にあったエリート層（宮廷役人＝書記とエルサレム神殿の祭司）は、ESOD の影響下において申命記を起草したと想定することが許される。この場合、ステイマンズ（H. U. Steymans¹⁰⁸）のようにアラム語訳を使ったと想定する向きもあるが、当時のエリート層は自国の言語以外の言語も学ばざるを得なかったのであって¹⁰⁹、ヘブライ語と同系統のセム語であるアッカド語が読めなかったとは思えない。おそらくアラム語訳を経ることなく直接アッカド語のテキストを参照して申命記が書かれたと想定される。

¹⁰⁷ Jacob Lauinger, “Esarhaddon’s Succession Treaty at Tell Tayinat: Text and Commentary,” *JCS* 64 (2012): 87-123. Cf. Timothy P. Harrison and James F. Osborne, “Building XVI and the Neo-Assyrian Sacred Precinct at Tell Tayinat,” *JCS* 64, (2012):125-43.

¹⁰⁸ Hans Ulrich Steymans, “Deuteronomy 28 and Tell Tayinat,” *Verbum et Ecclesia* 34 (2013). [Web Only]

¹⁰⁹ 外交上、ユダのような小国の施政者と役人たちが、その傘下にある大国の言語を知らずにいられるとは考えられない。

1.7.3. レヴィンソン（+スタッカー）とバーマンの論争

タイナト版を受けて、聖書法の専門家レヴィンソン（B. M. Levinson¹¹⁰）は申命記 13:1 が ESOD からの引用であることを証明した。さらにレヴィンソンとスタッカー（B. M. Levinson and J. Stackert¹¹¹）は申命記全体が ESOD の影響下に成立したと主張した。そしてステイマンスもタイナト版によって自分の説（申命記 28 章への ESOD の影響）がさらに確固たるものになったという論文を発表した¹¹²。それにもかかわらず、ヒッタイトの条約が申命記に影響したというテーゼにあくまでこだわるバーマン（J. Berman¹¹³）は、何も起こらなかったかのようにタイナト版を無視した論文を発表し続けている。その姿勢はレヴィンソンとスタッカーによって批判されたが、バーマンは反論し、さらにレヴィンソンとスタッカーが反論する形で、論争が行われた¹¹⁴。前 15-12 世紀のヒッタイトの条約文書（しかもそれは自国に宛てられたものではない）にアクセスするより前 672 年の文書（自

¹¹⁰ Bernard M. Levinson, “Esarhaddon’s Succession Treaty as the Source for the Canon Formula in Deuteronomy 13:1,” *JAOS* 130 (2010): 337-47. 2010 年にはまだタイナト版は出版されていなかったが、Levinson は出版前にこの情報にアクセスできたとし、論文内ではこれが “forth coming” として言及されている。

¹¹¹ Bernard M. Levinson and Jeffrey Stackert, “Between the Covenant Code and Esarhaddon’s Succession Treaty: Deuteronomy 13 and the Composition of Deuteronomy,” *JAJ* 3 (2012): 123-40. この論文で Levinson and Stackert は、タイナト版出版後も依然として ESOD を無視してヒッタイトの条約と申命記についての論文を発表し続ける J. Berman を批判した。

¹¹² Steymans, “Deuteronomy 28 and Tell Tayinat”. 筆者も Steymans とは独立に、2013 年の日本オリエント学会第 45 回学術大会において、ESOD が申命記 28 章と 13 章に影響したことについて発表を行なっている。それほどまでに 2012 年のタイナト版出版は旧約聖書学とくに申命記研究に影響を与える内容であったといえる。ちなみに E. Otto はタイナト版発見前から一貫して 28 章と 13 章に対する ESOD の影響を認めていた（Eckart Otto, *Mose: Geschichte und Legende* (München: C. H. Beck, 2006). 邦訳は E. オットー著 山我哲雄訳『モーセ：歴史と伝説』教文館、2007 年。とくに 56-67 頁参照）点が評価できるが、詳細については論じておらず認識に誤りも見られるのが難点である。

¹¹³ Cf. Joshua Berman, “CTH 133 and the Hittite Provenance on Deuteronomy 13,” *JBL* 130 (2011): 25-44; Joshua Berman, “Histories Twice Told: Deuteronomy 1-3 and the Hittite Treaty Prologue Tradition,” *JBL* 132 (2013): 229-50. 2011 年の論文はともかく、2012 年より後の、2013 年の論文が問題である。この 2 本の論文によって、Berman においてはタイナト版発見前後で、ESOD よりヒッタイトの条約の方が申命記に影響したのだという見解がまったく変わっていないことが明確に読み取れる。

¹¹⁴ Cf. Joshua Berman, “Historicism and Its Limits: A Response to Bernard M. Levinson and Jeffrey Stackert,” *JAJ* 4 (2013): 297-309; Bernard M. Levinson and Jeffrey Stackert, “The Limitations of ‘Resonance’: A Response to Joshua Berman on Historical and Comparative Method,” *JAJ* 4 (2013): 310-33. Berman は論点をずらして次元の違う問題を論じているように思われる。

国に宛てて発行されているもの) にアクセスする方が前 7 世紀ユダ王国のエリート層にとってよほど簡単であったであろう¹¹⁵。

1.7.4. クラウチ¹¹⁶の「タイナト後」の反対説

最近旧約神学者のクラウチがアッシリアの文書（とくに ESOD を念頭に置いている。ただし彼女は ESOD あるいは EST ではなく一番古く問題を孕んでいる VTE という略語を一貫して使用している）の影響が申命記にあったかどうかを論じた研究書を出版し、タイナト版の発見にもかかわらず、ESOD が直接申命記に影響したことを否定している。その主な論拠はタイトルにも使用されくり返し出現する“subversion”という概念に集約されている。要するにこの研究書は全体的に「アッシリアに対する反対運動あるいは思想的反抗としてユダが ESOD を似て非なるものに変えて申命記を作った」という立場を批判しているのである。ユダの中で ESOD にアクセスできたのは一部のエリートであろうから、一般のユダ人は知らなかったであろう。そういう状況で ESOD を換骨奪胎あるいは脱構築を試みても何の意味があるのか、というのである。申命記を読み聞かせられた人々は、それが ESOD のパロディであるということに気づく可能性がほとんどないのであるから、ESOD を使用する意味がないというのであろう。さらに彼女は ESOD の内容は「オリジナル」とはいえず古代西アジアに一般的な特徴しか備えていないので、とくに ESOD だけが申命記に大きな影響を与えたとはいえないと主張している。また、エルサレムからユダ王宛の ESOD が発見されていないことも論拠に挙げている¹¹⁷。

“Subversion”として成立しない、という点については、申命記記者が ESOD を独特の方法で使用した際、とくに「反アッシリア」を宣伝しようという意図はなかったことを指摘しなければならない。前 7 世紀後半のユダにとっては、アッシリアはもう力を持たない存在であったからである。アッシリア支配下にあっても「反アッシリア」の動きがあっても

¹¹⁵ Timothy P. Harrison, “Recent Discoveries at Tayinat (Ancient Kunulua/Calno) and Their Biblical Implications,” in *Congress Volume Munich 2013*, VT Sup. 163, ed. C. M. Maier (Leiden: Brill, 2014), 396-425 は、基本的に ESOD が申命記に影響したという立場をとっている。

¹¹⁶ Crouch, *Israel & The Assyrians*.

¹¹⁷ Cf. Crouch, *Israel & The Assyrians*, 148. この点については、理論物理学と実験物理学の関係と似たものが旧約聖書学と聖書考古学の間に成り立つことを指摘しておく。エルサレムから ESOD が出土すれば確定的な証拠といえるが、それ以前にも推測は可能であるし有用でもある。

おかしくないが、アッシリアの頸木から抜け出し、おそらくはエジプトの支配下（そうであれば「権力の空白状態」）にあったユダが、わざわざアッシリアの文書を使用するからには肯定的な意義があったはずである。政治支配から逃れてはじめてアッシリア文化の受容が可能になったのではないか。たとえば日本は第二次世界大戦中、アメリカの脅威にさらされていた時代には徹底的にアメリカ文化を否定していたが、戦後すぐ同じアメリカ文化を積極的に吸収しはじめた。この事例は正確にユダとアッシリアとの並行関係を形成するわけではないが、示唆的ではある。アッシリアが **ESOD** によってはじめたことは、ただ古代西アジアに一般的な要素を集めただけ（実際誓約を担保するためにアッシリアは古代西アジアのあらゆる呪いを集めているが）にとどまらず、新しい画期的な要素を含んでいた。それは、誓約というものが誓約を行った当事者の生存中のみ効力を持つというのが常識だったところへ、はじめの誓約当事者が亡くなった後も効力を持続させようとしたところであった。それによって「永遠の誓約」が概念上可能となった。それはユダが **ESOD** を受容した最大の理由であろう。国家を建て直そうと苦闘していたユダのエリート層は、新しい改革の理念をなんとかして民衆に根付かせようと考えたに違いない。その際、「アッシェルバニパルに従う」ということを誓った者たちが死んで代替わりしてもなお、あるいはアッシェルバニパルに従うことを要請したエサルハドン自身が亡くなっても、さらにはアッシェルバニパルが亡くなっても、その子孫に従うことを要求する **ESOD** の仕組みは重要であった。実際、ヨシヤの死によって改革が頓挫しても、さらにユダ王国自体が滅亡しても、ヤハウェとイスラエルの間の誓約は子々孫々受け継がれるべきものとして理解され、驚くべきことに、効力を持続して現在に至っている。これが古代イスラエルにのみ実現した稀有な例であるとしても、「永遠の誓約」という概念は、もちろん他の証拠が出土しない限りという留保をつけるべきだが、現時点では **ESOD** が最初に導入したと考えられるのである。つまり、ユダのエリートは既に弱体化したアッシリアに対する「あてこすり」を民衆に見せつけたかったのではなく、アッシリアのすぐれた（彼らが利用するに値する）概念装置を導入して民衆に自分たちの思想を根付かせたかったのである。

この主要な問題のほかにも、研究の進展を無視して **VTE** という語を使用し続けるなど、聖書外資料とくにアッシリアの資料の意義とその研究を軽視する傾向が顕著に見られ、申命記とアッシリアの関係を扱うという非常に興味深いテーマを持つ当該研究の深化は阻害されている。

1.7.5. マークル¹¹⁸の「タイナト後」の見解

ごく最近ドミニク・マークルは、筆者とほぼ同様の基本的見解を概説書の中で短く提示した¹¹⁹。それは、ヒッタイトの条約が申命記に直接的影響を与えたというには時間が隔たりすぎており（ヒッタイトの条約は前 15–13 世紀であり、イスラエルで重要な文書が現れるのは前 9 世紀半ば以降¹²⁰）、もっとも直接的影響を与えたといいうるのは ESOD（マークルはまだ Esarhaddon's Succession Treaties という語を使っているが）である¹²¹。ESOD は 2009 年にテル・タイナトでも発見された。これらの事情を総合的に考慮するなら、同様のものが、ユダ王マナセによってエルサレム神殿に「公的に展示されていた」という想定が許される、というのである¹²²。マークルは ESOD §§38A-42 と申命記 28:36-31 の対照表を載せ、いかに両者が重なりを持つかを示している¹²³。申命記では新アッシリアの神々の名が神ヤハウエに置き換えられていることにも言及しているが¹²⁴、第 3 章で扱う「交差的引用」には触れていない。しかも「エサルハドン王位継承条約 (EST)」という語を使っていることにみられるように、マークルは、欧文でも多数出版されている¹²⁵渡辺和子の業績(3.1. で詳説)を参照しておらず、そのため理解が表層に留まっているように思われる¹²⁶。

¹¹⁸ Dominik Markl, "God's Covenants with Humanity and Israel," in ed. John Barton, *The Hebrew Bible: A Critical Companion* (Princeton: Princeton University Press, 2016), 313-37.

¹¹⁹ Markl, "God's Covenants with Humanity and Israel," 313-15.

¹²⁰ Markl, "God's Covenants with Humanity and Israel," 313.

¹²¹ Markl, "God's Covenants with Humanity and Israel," 314.

¹²² Markl, "God's Covenants with Humanity and Israel," 314.

¹²³ Markl, "God's Covenants with Humanity and Israel," 315.

¹²⁴ Markl, "God's Covenants with Humanity and Israel," 314.

¹²⁵ Cf. Kazuko Watanabe, "Die literarische Überlieferung eines babylonisch-assyrischen Fluchthemas mit Anrufung des Mondgottes Sîn," *ASJ* 6, 1984, 99-119; Kazuko Watanabe, "Die Siegelung der 'Vasallenverträge Asarhaddons' durch den Gott Aššur," *BaM* 16, 1985, 377-92; Kazuko Watanabe, *Die adê-Vereidigung anlässlich der Thronfolgeregelung Asarhaddons*, Berlin: Mann, 1987; Kazuko Watanabe, "Die Anordnung der Kolumnen der VTE-Tafeln," *ASJ* 10, 1988, 265-66; Kazuko Watanabe, "Mit Gottessiegeln versehene hethitische 'Staatsverträge'," *ASJ* 11, 1989, 261-76; Kazuko Watanabe, "Esarhaddon's Succession Oath Documents Reconsidered in Light of the Tayinat Version," *Orient* 49, 2014, 145-70; Kazuko Watanabe, "Innovations in Esarhaddon's Succession Oath Documents Considered from the Viewpoint of the Documents' Structure," *SAAB* 21, 2016, 173-215; Kazuko Watanabe, "Aššurbanipal and His Brothers: Considered from the References in Esarhaddon's Succession Oath Documents," *Orient Supplement I*, 2019, 237-257..

¹²⁶ 少なくとも渡辺の、タイナト後の英語論文 2 本は参照することができたと思われる。

以上の研究史概観から要請されるのは、ESOD と申命記の比較である（その際レビ記にも言及すべきであろう）。そしてこれらの検討の基礎の上に、ヨシヤ改革を新しい視角から見ることを試みたい。

1.8. 本論文の方法

聖書の記述が出発点である場合、文献学が中心的方法となるべきである。考古学は、資料が豊富な場合には文献学を十分に補うことができる。したがって本論文は、文献学的方法および考古学的方法を用いる。

文献学および考古学の援用は、聖書文献学・聖書考古学にとどまるものではない。このテーマにおいては聖書資料も充分とはいえないため、内容的・時代的に関連が想定される楔形文書資料にあたる必要があるからである。とくに古代イスラエルに多大な影響を与えたことが容易に想像できる新アッシリアのアッカド語文献を参照することが要請される。具体的には近年の研究成果によって、前 672 年にエサルハドン王によって発行され、領内および属国にくまなく配布されたことがほぼ確実となったエサルハドン王位継承誓約文書¹²⁷と聖書資料を比較分析することで歴史的事象に新たな光を当てることができると期待されるからである。

¹²⁷ エサルハドン王位継承誓約文書には 3 つの版がある。アッシュル版はアッシリアの古い首都アッシュルから出土した断片であり、最初のものは Weidner によって公刊された。

(Ernst F. Weidner, “Assurbânipal in Assur,” *Archiv für Orientforschung* 13 (1939-1940): 204-18, Tf. XIV. アッシュル版の他の 2 つは 2009 年に Frahm によって公刊された(Eckart Frahm, *Historische und historisch-literarische Texte*, (Wiesbaden: Keilschrifttexte aus Assur literarischen Inhalts 3, 2009)。その後アッシリアの首都のひとつカルフ（現在のニムルド）で 1955 年に 9 部発見されたのがニムルド版であり、Wiseman によって公刊された。(Wiseman, “The Vassal-Treaties of Esarhaddon.”) そして 2009 年にトルコのテル・タイナト（古代名クナリア、クニリアあるいはクヌルア）で 1 部のタイナト版が発見され、Lauinger が解読可能な行の翻字と注解、そして新しく読めるようになった部分 (§1, 30, 35, 54, 54A, 54b, 67, 96A, 106) の英訳を公刊したが、完全な出版（すべての文字の手写によるコピーを含む）はまだなされていない。(Lauinger, “Esarhaddon’s Succession Treaty at Tell Tayinat.” Cf. Lauinger, “Some Preliminary Thoughts on the Tablet Collection in Building XVI from Tell Tayinat.” 当該文書については ESOD (Esarhaddon’s Succession Oath Documents) と表記する。Wiseman が “Vassal-Treaties” 「宗主権条約」という語を使った（その場合 VTE と略される）ために、当該文書が「条約」であるという誤解が広がり、現在でも「エサルハドン王位継承条約 (Esarhaddon’s Succession Treaty これは EST と略される)」などの略称が用いられているが、1987 年には渡辺和子が、当該文書が誓約（アデー）であることを証明した (Watanabe, *Die adê-Vereidigung anlässlich der Thronfolgeregelung Asarhaddons*) ため、現在では ESOD と呼ぶ

2. ヨシヤの改革に関する聖書考古学の知見

第1章で研究史の概要について論じたが、聖書考古学については「いまだ十分な成果が得られていない」と評価できる。ここでは実際に聖書考古学が「ヨシヤの研究」に関して何をどこまで明らかにしたといえるのか概観しておく必要がある。

2.1. 「ヨシヤの改革」とメツアド・ハシャブヤフ¹²⁸

紀元前7世紀後半（ユダ王国のヨシヤ王の治世）に、いわゆる原申命記（現在の形の申命記が成立する以前の原型的な申命記を指す。少なくとも12-26章の大部分を含むが、筆者はこの他に28章の大部分も含まれると考える。それは、当時の「法規定」においては、当該法令の遵守を担保するための「祝福と呪いの定式」が重要な部分だったと考えるからである）に基づいて行われたと考えられている「改革」は、以前はもっぱら聖書資料にもとづいて再構成されていた。しかし現在では改革の実態について利用可能な考古資料についての研究が以前よりは進んでいる。ヨシヤの改革についてもっとも重要といえるのは、メツアド・ハシャブヤフと呼ばれる遺跡から得られる情報である。それは、この砦が使用されていた時期がヨシヤ時代と重なると思われるからである。ここでは、この遺跡に注目して「ヨシヤの改革」の時代背景を探りたい。

メツアド・ハシャブヤフ（Mezad Hashavyahu）は、ヤブネー・ヤム（Yavneh-Yam）から1 kmほどの海岸地域に位置する砦の遺跡である。古代の名称が不明であるため「メツアド・ハシャブヤフ」すなわち「ハシャブヤフ¹²⁹の砦」と名づけられ¹³⁰、その物質文化¹³¹や碑文

のが適切であるからである。ESODのトランスクリプション（読み下し）および和訳は、渡辺和子『エサルハドン王位継承誓約文書』リトン、2017年を用いる。

¹²⁸ 本項は拙論「メツアド・ハシャブヤフ再考」市川裕・朴憲郁・廣石望・山我哲雄編『聖書学的宗教とその周辺』（＝『聖書学論集』第46号）、リトン、2014年、99－114頁【査読有り】を改訂したものである。

¹²⁹ 当該遺跡からの出土品に書かれている人名。

¹³⁰ これまで3期の発掘が行われている。第1期は1960年1月に行われ、代表者はJ. Naveh、第2期は同年9月で代表者はJ. NavehとP. Beck、そして第3期が1986年4-5月で代表者はR. Reichである。

¹³¹ 物質文化についてはFantalkin, “Mezad Hashavyahu” 参照。これは、発掘者たちの許可をも得た上で出版された、メツアド・ハシャブヤフのすべての出土品を網羅検討した、物質文化についての集成的研究である。

についての研究が行われている。メツアド・ハシャブヤフの特殊性は、ごく短い期間しか使用されず、その後自主的に廃棄されたという点である¹³²。

この遺跡から出土した資料の中でも筆者の関心にとってとくに重要なのは、ヨシヤ時代と関連すると思われる、出土した大量の東ギリシア土器（East Greek Pottery）やユダ王国ではあまり見られない砦の構造（Plan）といった当該地域では伝統的ではない物質的特徴と、ヘブライ語オストラコン（一般に「収穫者の書簡（Reaper's Letter）」と呼ばれるもの）である。前者は、この砦の支配者が誰なのかという問題に関わり、その解釈如何によって、後者の意味するところも変わってくることになる。

2.1.1. 物質文化の検討

この場所から発見されたオストラカには、ユダ系の人名やフェニキア系の人名¹³³が書かれている。また、東ギリシア系土器が多く出土しており、出土品に占める比率も高い。土器や人名だけで確定することはできないが、この場所にギリシア人、ユダ人、さらにはフェニキア人が居住していたと推測することがゆるされよう。少数のエジプト系土器（搬入土器のうち1パーセント¹³⁴）も見つかっているので、エジプト人も少数いたかもしれない。居住者の人口比率は土器の系統と量から推測するなら¹³⁵、主としてギリシア人、次にユダ人、少数のフェニキア人（やエジプト人）である。しかし、誰が実際にこの砦を支配していたかは定かではない。

研究者の見解はふたつに分かれる。ひとつはヨシヤかヨヤキム、つまりユダ王が支配していたという見解であり、もうひとつは、エジプトかバビロニアの支配下にあったという

¹³² Cf. Fantalkin, “Mezad Hashavyahu,” 49. 通常の遺跡は複数の区別できる時代にわたって継続的に使用されており、何層にも分かれている。メツアド・ハシャブヤフの年代は、Joseph Naveh, “A Hebrew Letter from the Seventh Century B. C.” *IEJ* 10 (1960): 129-39, 129 以来、前 7 世紀後半から前 6 世紀初めまでの範囲と考えられているが、Fantalkin, “Mezad Hashavyahu,” 143 はさらに細かく、最も早くて前 620 年から最も遅くても前 604 年の間の 15 年ほどとしている。

¹³³ Cf. Fantalkin, “Mezad Hashavyahu,” 114. ユダ系の名前が書かれているものは複数あるが、フェニキア系と思われる名前が書かれているものは、ひとつだけである。

¹³⁴ Fantalkin, “Mezad Hashavyahu,” 103.

¹³⁵ 後述するように、メツアド・ハシャブヤフでは交易の対象となるような高価な器は発見されず日用品だけが見つかる。もちろんこれは砦の自主的な廃棄の前に高価な品々がすべて持ち出されたということを示唆しているのかもしれないが、少なくとも日用品の出自と居住者の出自には相関関係を認めてよいと思われる。

ものである¹³⁶。従来の通説は、ヨシヤが版図を拡大したという歴代誌下 34:6 の記述¹³⁷を根拠として、ユダ王ヨシヤがこの砦を支配しギリシア人傭兵を使っていたと仮説的に解釈していた。しかし、この見解を支持する基盤は強くない。近年、エジプト¹³⁸がこの砦を支配し、ギリシア人やユダ人の傭兵を使っていたという説が有力になっている。その根拠としては、メツアド・ハシャブヤフの建築構造がユダの他の同時代の遺跡のものとは異なっており、むしろエジプト的であるということや、ギリシア人傭兵への物資補給が、エジプトの属王としてのユダ王の義務であった可能性などがある¹³⁹。当時オリエント世界におけるギリシア人傭兵の最大の雇用者はエジプトであった。若干の雇用が認められるバビロニアは、メツアド・ハシャブヤフの支配者であったとは考えにくい¹⁴⁰。

この砦は入り口が西向きであるなどイスラエルには建築学的並行例がない構造を持っている¹⁴¹。それに対してファンタルキンは、比較的似た構造のエジプトの砦を紹介している¹⁴²。それはメツアド・ハシャブヤフより約 1300 年も前のものではあるが、ヌビアにあったエジプトの砦 Semna el-Gharb である。どちらも岩がちな丘の上に建ち、L 字型の形態であり、空間分割の方法も似ているとされる¹⁴³。もっと時代の近い類例がなければ論拠として充分とはいえないが、メツアド・ハシャブヤフの構造がユダ的でないことは事実である。

¹³⁶ 他に、異なる国々による二段階の支配があったとする見解も存在するが、Fantalkin によると、二段階の建築の証拠はなく、土器も均一であって、この説は否定される。(Cf. Fantalkin, “Mezad Hashavyahu,” 17, 47-49.)

¹³⁷ この個所には、並行箇所之列王記下には存在しない「ヨシヤがシメオンの領域にまで祭儀改革を強制した」という内容の記述がみられる。

¹³⁸ この場合にも、どの王が支配していたかについて、研究者は一致していない。ネコ 2 世という説、プサメティコス 1 世という説、さらにネコ 2 世かプサメティコス 1 世のどちらか（はっきりしない）という説がある。最近 Schipper はプサメティコス 1 世の最後の年からネコ 2 世にかけてという提案をしている。Cf. Schipper, “Egypt and the Kingdom of Judah under Josiah and Jehoiakim,” 220-21.

¹³⁹ この点に関しては、アマルナ書簡からの類推が鍵となる。R. アルベルツ『ヨシヤの改革』に付されている訳者による「解説」147-71 頁、153-55 頁参照。

¹⁴⁰ Fantalkin, “Mezad Hashavyahu,” 141.

¹⁴¹ Fantalkin, “Mezad Hashavyahu,” 49.

¹⁴² Cf. Fantalkin, “Mezad Hashavyahu,” 49-51.

¹⁴³ Fantalkin, “Mezad Hashavyahu,” 52, n. 35 は Avraham Faust, “Doorway Orientation, Settlement Planning and Cosmology in Ancient Israel during Iron Age II,” OJA 20 (2001): 129-55, 134 を引用して、以下のように述べている。「Faust は、鉄器時代のユダ建築には、[入口が]東向きの傾向があると指摘している。この現象の機能的な説明はできないが、古代ユダ社会の宇宙論的原則に関わっていると提案している。彼によれば、メツアド・ハシャブヤフの[入口が]西向きの傾向は、エジプト起源である。」

搬入土器¹⁴⁴の多くは東ギリシア系であり¹⁴⁵、東エーゲ海の島々および西アナトリアの海岸部に帰属させる研究者が多い¹⁴⁶。メツアド・ハシャブヤフでは多様な東ギリシア土器が見ついている。それは鉢型土器、椀型土器、クラテール¹⁴⁷、料理用のポット、オイノコアイ¹⁴⁸、アンフォラ¹⁴⁹、ランプを含む。その年代は、前7世紀末から前6世紀初めと考えられる¹⁵⁰。メツアド・ハシャブヤフで発見された臼はキプロス¹⁵¹のオフィオライト（蛇紋岩）で作られており¹⁵²、クラテールのある種類のものも、おそらくキプロスのオフィオライトで作られている¹⁵³。東ギリシア系オイノコアイの中には野生のヤギを描いたもの（the Milesian Middle Wild Goat II Style）があり、年代決定の主要な指標のひとつとなっている（前625年—前600年）。ちなみに出土した土器はすべて日用品と考えられ、商業的に流通する価値のあるようなものではないため、この砦にギリシアの貿易業者がいた（ここにἐμπολιονつまり彼らの住居があった）可能性は低いといえよう¹⁵⁴。

従来メツアド・ハシャブヤフにはエジプト系の土器は存在しないとされてきたが、ファンタルキンによると、ひとつの器はナイルの粘土で作られており、上エジプトのヌビア産である可能性がある¹⁵⁵。エジプト支配を思わせるわずかな証拠は存在する。

¹⁴⁴ ここで「搬入土器」とは、ギリシア系のものとエジプト系のものを指している。

¹⁴⁵ ギリシア系土器の中には東ギリシア系でないものも含まれている。それはコリントのアリュバロス[古代ギリシアで香油や軟膏を入れるのに用いられた、首が短くて片方につく球状の瓶]とおもわれる出土品である。Cf. Fantalkin, “Mezad Hashavyahu,” 74, n. 14, 97.

¹⁴⁶ 東ギリシア土器全般について、Robert Manuel Cook and Pierre Dupont, *East Greek Pottery* (London: Routledge, 1998) を参照。

¹⁴⁷ ギリシアではワインと水を混ぜるのに使われた甕のことだが、パレスティナ考古学では、大型深鉢を指す。

¹⁴⁸ 水差し。

¹⁴⁹ 首が細長く底のつながった両取っ手つきの壺。

¹⁵⁰ Cf. Fantalkin, “Mezad Hashavyahu,” 74.

¹⁵¹ 「キプロス」は、アラド遺跡から出土した多数のオストラカに出現する「ktym (キッティーム)」と呼ばれる人々と関連する。この語はキプロスの町の古名「キティオン」から来ており、ギリシア人傭兵を指している。Cf. Yohanan Aharoni, et al., “Arad,” *NEAEHL* vol. 1: 75-87. Na’aman, “Josiah and the Kingdom of Judah,” 329-98 [=TA 18, 1991, 3-71] は、メツアド・ハシャブヤフもアラドもエジプトの砦であり、属王としてのユダ王が、そこに駐留していたギリシア人傭兵に物資補給の義務を負っていたと主張している。研究者の間に見解の一致は見られないが、最近では Schipper, “Egypt and the Kingdom of Judah under Josiah and Johoiakim” が Na’aman 説を強く支持している。

¹⁵² Fantalkin, “Mezad Hashavyahu,” 80.

¹⁵³ Fantalkin, “Mezad Hashavyahu,” 83.

¹⁵⁴ Fantalkin, “Mezad Hashavyahu,” 118, 137-39. ただし、もちろんこれはギリシアの貿易業者の不在証明にはならない。

¹⁵⁵ Fantalkin, “Mezad Hashavyahu,” 98.

2.1.2. ヘブライ語オストラコン（「収穫者の書簡」）検討

このオストラコンは6つの断片から成る。そのうち5つは守衛室（guard room）から、1つは守衛室の入り口の外で発見された¹⁵⁶。オストラコンの右下部分は欠損しており、そのため全15行中11-15行目は完全ではないので、様々な再構成が提案されている。文字はインクによって、ヘブライ語の筆記体で書かれている。字体については前6世紀はじめのラキシユ碑文（Lachish Ostraca）II-VIとの類似が指摘されている¹⁵⁷。整っているため、書記の手によると考えられる¹⁵⁸。しかし、その文体はぎこちなく¹⁵⁹、口述どおりに筆記されたのではないかと考えられている¹⁶⁰。

2.1.2.1. テクスト

1 ישמע אדני השר
2 את דבר עבדה עבדך
3 קצר היה עבדך בח
4 צר אסם ויקצר עבדך
5 ויכל ואסם כמים לפני שב
6 ת כאשר כל עבדך את קצר א
7 סם כימם ויבא הושעיהו בן שב
8 י ויקח את בגד עבדך כאשר כלת
9 את קצרי זה ימם לקח את בגד עבדך
10 וכל אחי יענו לי הקצרים אתי בחם
11 [השמש] אחי יענו לי אמן נקתי מא

¹⁵⁶ Naveh, “A Hebrew Letter from the Seventh Century B. C.,” 130.

¹⁵⁷ Joseph D. Amusin and M. L. Heltzer, “The Inscription from Mešad Ḥashavyahu: Complaint of a Reaper of the Seventh Century B. C.” *IEJ* 14 (1964): 148-57, 149.

¹⁵⁸ Cf. Amusin and Heltzer, “The Inscription from Mešad Ḥashavyahu,” 136, Yoshihide Suzuki, “A Hebrew Ostrakon from Mešad Ḥashavyahu: A Form-Critical Reinvestigation.” *AJBI* 8 (1982): 3-49, 7.

¹⁵⁹ Naveh, “A Hebrew Letter from the Seventh Century B. C.,” 136.

¹⁶⁰ Naveh, “A Hebrew Letter from the Seventh Century B. C.,” 136. 文体がぎこちないという評価がほとんどであるが、Anson F. Rainey, “Syntax and Rhetorical Analysis in the Hashavyahu Ostrakon,” *JANES* 27 (2000): 75-79, 79 は、それにもかかわらずこのテキストを「これらの節のシンタクスとレトリックを適切に理解するなら、このテキストは、激しい感情...だけでなく、欠点のない論理で満ちているのである。」と評価している。

12 [שם] בגדי ואמלא לשר להש

13 [.....] ואלו רח

14 [מם.....] בדך ולא תדחננו

.....]15

2.1.2.2. 試訳

- 1 私の主、高官様、お聞きください¹⁶¹、
- 2 彼の僕の言葉を。あなたの僕は
- 3 あなたの僕はハツエル・アサムの収穫者です¹⁶²、
- 4 そしてあなたの僕は収穫し
- 5 計量し、いつものように安息日の前に納めました。
- 6 あなたの僕がいつものように収穫を計量し、納めたとき、
- 7 ショバイの子ホシャヤフが来て、
- 8 あなたの僕の上着を取り上げました。私が私の収穫をいつものように計量したとき、
- 9 彼はあなたの僕の上着を取り上げました。
- 10 私とともに[太陽の]暑さの中で収穫した、私の兄弟たちすべてが私のために証言するでしょう。
- 11 私の兄弟たちは私のために証言するでしょう、私には本当に罪（責）がないということ
- を。
- 12[どうか彼に返却させてください]私の上着を。もしそうでないとしても高官様には義務
- があります。
- 13[...]そして彼に[憐れみ]を[与えてください]
- 14[あなたの僕の上着を返却させてください]そして彼を放置しないでください。
- 15[...]

¹⁶¹ שָׁמַע は希求形である。

¹⁶² 3 行目の קָצַר を分詞形として読むことには一致が見られる。ただ、קָצַר הָיָה は「収穫していた」とも「収穫者だった」とも訳せるので、わずかなニュアンスの違いが生じるとはいえ、意味上の違いはない。

2.1.2.3. 検討

1-2 行目は、サウル王に対するダビデの嘆願であるサム上 26:19 のはじまり **ועתה ישמע** (「今、私の主、王よ、どうか彼の僕の言葉を聞いてください」) と似ている。嘆願者が呼びかけの後、自分について「あなたの僕」ではなく「彼の僕」と言い換えることは、当該オストラコンに特有の現象ではなく、むしろ定式的な言い回しといえる。**שר** は定冠詞がついているとはいえ、いくらか曖昧な言葉である。実際に対象が特定されているとはいえない。**שר** は行政の長なら「高官」、軍隊の長なら「指揮官」などと訳すことができ、なんらかの役職をさしている¹⁶³。おそらく砦の行政を任されている役人か砦を指揮する軍人であろう。小さな砦のことであるから、両方を兼ねていたかもしれない。リューターヴェアデン (U. Rüterwörden) は、ヤハウエの祝福を祈る挨拶が欠けていることを根拠として、この**שר** がユダ人ではなく、したがってヤハウエ崇拝者ではない可能性を示唆している¹⁶⁴。**עבדה** の語尾は 3 人称単数男性形 (所有格) を示している。このような場合に **ה** が用いられる例は、ナヴェーが指摘する¹⁶⁵ とおり、しばしば見られる。とくに碑文では 3 人称男性接尾代名詞は **ה** だけで表現されるのが普通である。

5 行目には複数の重要な問題がある。まず **ויכל** の動詞の語根をどう解するかである。ひとつの可能性は **כלא** (抑える・留めておく) であり、もうひとつは **כול** (測る) である。前者の立場はナヴェー¹⁶⁶、アミュージンとヘルツァー (J. D. Amusin and M. L. Heltzer¹⁶⁷) ら

¹⁶³ Nahman Avigad, “The Governor of the City,” *IEJ* 26 (1976): 178-82 は **שר העיר** という言葉の入った圧痕 (Pl. 33:D) を紹介している。マナセの時代かヨシヤの時代のもの、あるいは前 600 年ころのものと考えられるこの圧痕は、王国時代に都市 (おそらくエルサレム) の行政の長 (市長・知事など) が職位として確立していたことを示している。当該圧痕の写真は Nahman Avigad (Revised and Completed by B. Sass), *Corpus of West Semitic Stamp Seals* (Jerusalem: Israel Academy of Science and Humanities, 1997), 171 参照。より鮮明な画像は A. マザール著 杉本智俊・牧野久実訳『聖書の世界の考古学』リトン、2003 年、341 頁参照。他に、アラドから出土した碑文 (Inscription 26) の 2 行目に **שר אדני** (私の主、高官様[?]) という類似の文が見られる。しかしこれには、Y. Aharoni がコメントしているように、**שר** だという可能性 (その場合は後に何か特定する語が続いていたであろう) と、人名の最初の綴りにすぎない可能性がある。Cf. Yohanan Aharoni, *Arad Inscriptions* (Jerusalem: The Israel Exploration Society, 1981), 52.

¹⁶⁴ Udo Rüterswörden, “Das Deuteronomium im Lichte epigraphischer Zeugnisse,” in *Sprachen-Bilder-Klänge : Dimensionen der Theologie im Alten Testament und in seinem Umfeld. Festschrift für Rüdiger Bartelmus zu seinem 65. Geburtstag.* eds., C. Karrer-Grube, J. Krispenz, T. Krüger, C. Rose and A. Schellenberg, (Münster : Ugarit-Verlag, 2009), 241-56, 251.

¹⁶⁵ Naveh は、メシヤ碑文、ラキシユ書簡、ヘブライ語聖書の例を挙げている。Naveh, “A Hebrew Letter from the Seventh Century B. C.,” 131.

¹⁶⁶ Naveh, “A Hebrew Letter from the Seventh Century B. C.,” 133-35.

がとり、後者の立場はクロス (F. M. Cross¹⁶⁸)、鈴木 (Y. Suzuki¹⁶⁹)、レンツ (J. Renz¹⁷⁰)、リンデンバーガー (J. M. Lindenberger¹⁷¹) らに支持されている。どちらも可能ではあるが、**ללא**では「(収穫し、) 終えました」となり、行為の進行をあらわせないで、文脈上「(収穫し、) 計りました」となる**כול**がより妥当と考えられる。次に**כמים**をどう解するかが問題となる。**כ**プラス**מים**と考えると、直訳で「日々のように」つまり「いつものように」「いつもの習慣に従って」などとなり、これを支持する研究者が多い。しかしナヴェー¹⁷²は**כ**プラス**נים**と読み、**נים**を知られていない単位と想定した。これはクロス¹⁷³やアミュージンとヘルツァー¹⁷⁴に批判され、ナヴェー¹⁷⁵自身、当初の説を放棄し、**מים**と読むようになった。この読みにはコンセンサスがあるが、しかし鈴木¹⁷⁶はタルモン (S. Talmon¹⁷⁷) 説を踏襲して、これを“regular quota”(他に“exact quota”“full quota”など)「(いつもの) 割り当て分に従って」と読むため、結果的にナヴェーが当初考えたような、単位を表す読みに近いといえる。量については「計量し」に含意されているため、「いつものように」と読むのが適切であろう。**שבת**の訳にも問題がある。本来「安息日の前に」と読むためには**השבת**と定冠詞がつくはずである。しかし原文には**ה**がない。そしてそもそも王国時代に「安息日」の制度が確立していたのかという疑問が残る。もし既に制度化されていたのなら「安息日」と訳すべきだが、捕囚期に確立した制度なら、単に「休み」「仕事の終わり」などと訳さねばならない。ここでは、「安息日」規定が捕囚期以降と同様のレベルにまで確立されていたかどうかはともかく、ヨシヤ時代に原申命記によってある程度確立していたという推測に立ち、かつ一般名詞としての「休み」との意味の重なりを含意しつつ「安息日」と訳出し

¹⁶⁷ Amusin and Heltzer, “The Inscription from Mesad Hashavyahu,” 150-57.

¹⁶⁸ Frank Moor Cross, “Epigraphic Notes on Hebrew Documents of the Eighth-Sixth Centuries B. C.: II. The Murabba’at Papyrus and the Letter Found near Yavneh-Yam,” *BASOR* 165 (1962): 34-47, 42-44.

¹⁶⁹ Suzuki, “A Hebrew Ostrakon from Masad Hashavyahu,” 5-6.

¹⁷⁰ Johannes Renz, *Die Althebräischen Inschriften Teil 1 : Text und Kommentar*, (Darmstadt : Wissenschaftliche Buchgesellschaft, 1995), 325.

¹⁷¹ James M. Lindenberger, “How Much for a Hebrew Slave? The Meaning of Mišneh in Debt 15:18” *JBL* 110 (1991): 479-98.

¹⁷² Naveh, “A Hebrew Letter from the Seventh Century B. C.,” 131-33.

¹⁷³ Cross, “Epigraphic Notes on Hebrew Documents of the Eighth-Sixth Centuries B. C.,” 42-44.

¹⁷⁴ Amusin and Heltzer, “The Inscription from Mesad Hashavyahu,” 149-151.

¹⁷⁵ Joseph Naveh, “Some Notes on the Reading of the Mešad Ḥashavyahu Letter,” *IEJ* 14, 1964, 158-59, 158.

¹⁷⁶ Suzuki, “A Hebrew Ostrakon from Masad Hashavyahu,” 10-11.

¹⁷⁷ Shemaryahu Talmon, “The New Hebrew Letter from the Seventh Century B. C. in Historical Perspective,” *BASOR* 176 (1964) 31-33. (=Shemaryahu Talmon, “The New Hebrew Letter from the Seventh Century B. C. in Historical Perspective,” ed. Shemaryahu Talmon, *King, Cult and Calendar in Ancient Israel: Collected Studies*, Leiden: Brill, 1986), 81-83.

である。6行目も5行目と同様に、**כל**の語根を**כלא**ととるか**כול**ととるかが問題となる。5行目と同様に**כול**と解する。ところで**קצר**に**ה**をつけて「彼の収穫」と校訂する例がある。アミュージンとヘルツァー¹⁷⁸やレンツ¹⁷⁹がこの読みを支持している。しかしその場合は**ה**を挿入して**קצרה**とせねばならない。したがって、これは単に「収穫」と読むべきであろう。さらに再び**כמים**が出現する（原文7行目だが試訳では6行目になっている）が、これも5行目と同様に解する。7行目の固有名詞は、ナヴェー¹⁸⁰が当初**השביהו**と読み、アミュージンとヘルツァー¹⁸¹もこれに従っているが、後にナヴェー¹⁸²は**הושעיהו**と読みを改めた。現在ではこの読みにコンセンサスがある。「ホシャヤフ」と読んでよいと思われる。8行目の**כלת**は三度目の**כלא**か**כול**かの問題である。5行目および6行目のときと一貫した読みをとる。

9行目にある、直訳すると「これらの日々」となる**זה ימים**は、たいていの研究者が**כמים**と同様の訳をあてる傾向にある。しかし、アミュージンとヘルツァー¹⁸³は「これらの（要求された）日々（のうちに）」と、別の訳をしている。おそらく同じ内容を別の表現で表しているので、とくに違った訳をする必要はないが、他の場所とは原語が違っていることに注意すべきであろう。10行目の「[太陽の]暑さの中で」（原文では10-11行目）は、欠けた箇所に**השמש**「太陽の」を補うことに一致がある。しかし11行目のその後に**וכל**「そしてすべての」を補うかどうかについては、意見が分かれるところである。しかしこれがあってもなくても10行目の「私の兄弟たちすべて」を意味することは自明なので、補う必要はないと考える。さて**שם**を補って**נקתי מאשם**とし「私には罪（責）がない」と読んでもまだ、12行目には、かなりのスペースが失われた場所にあったものと思われる。これ以降は実に多様な再構成が可能である。ほとんどの研究者は、後に続く語**בגדי**「私の上着」につながるフレーズとして、「を返してください」や「を返させてください」を想定する。しかし鈴木は「しかし、彼は私の上着を取り上げました」と補足している。これもまた可能ではあるが、内容的に後戻りしてしまうので、**השב נא את**「どうか返させてください（ヒフィル形）」と考えたい。次の**מלא**は、**מלא**（満たされている）のピエル形とも考えられ

¹⁷⁸ Amusin and Heltzer, “The Inscription from Mesad Hashavyahu,” 149-51.

¹⁷⁹ Renz, *Die Althebräischen Inshchriften, Teil 1*.

¹⁸⁰ Naveh, “A Hebrew Letter from the Seventh Century B. C.,” 131, 133.

¹⁸¹ Amusin and Heltzer, “The Inscription from Mesad Hashavyahu,” 149-150, 152.

¹⁸² Naveh, “Some Notes on the Reading of the Mešad Ḥashavyahu Letter,” 158.

¹⁸³ Amusin and Heltzer, “The Inscription from Mesad Hashavyahu,” 150, 152-154.

るが、אמとלאの間を分けて読むことも提案されており、これがふさわしいように思われる。つまり、「(そして) そうでないなら」という意味になる。クロス¹⁸⁴、レンツ¹⁸⁵、リンデンバーガー¹⁸⁶らがこの読みをとる。しかし、その後になにが続くのかは決定しがたい。直前の文を「私の上着を返して（あるいは「返させて」）ください」と補足した場合、「もしそうでないなら」に続くのは、内容的に上着が返ってこない場合にはこうなるという脅迫か、私に罪責がある場合にはこのようにしますという条件であろう。ナヴェー¹⁸⁷は「高官様に支払います」、クロス¹⁸⁸は「指揮官様に（上着を返す）義務があります」、レンツ¹⁸⁹は「(上着を) 指揮官様の元に置いてください」と補足している。リンデンバーガー¹⁹⁰の意識¹⁹¹（12-13 行目を「もし高官様がそれを彼の義務とは考えないなら、憐みからあなたの僕の上着を送り返してください」）は一見説得力がある。しかし、原申命記の立法趣旨のひとつは、支配者の憐れみに依存せずヤハウエの意思に依存する生存権の宣言にあると考えられる（後述）。そうだとすれば憐みに訴えるのは、ありえないとまでは言えないが、理念上の齟齬をきたすことになる。したがって、筆者は部分的にクロス説にしたがって **ואם לא לשר להשב**「(そして) そうでなくても高官様には[まだ上着（を返す）義務があります]」という読みを提案したい。

さて原文 13-14 行目の欠けた部分の後は「彼に憐みを」と読める。**רח**の後に**מם**を補って**רחמם**「憐れみ」と読むことについてはコンセンサスがあると言ってよい。しかしその前の部分はどう補足すべきだろうか。少なくとも**ותת(ו)**「(彼に)与えてください」といった内容が必要とされる。11 行目からオストラコンの文字は、はじまりが左に寄ってきているようにも見えるので、12 行目以下もその傾向が続いていると仮定すれば、さほど長い文はなかったと考えることもできよう。さて 14 行目の欠けた部分には**ע**を補って**השב את בגד עבדך**「あなたの僕の上着を返却させてください」など 13 行目の内容とある程度重なる内容が来るべきである。それは、このテキストの文体が、ほとんど前の行の内容を繰り返しながらも先へ進めるという形をとっているからである。その次が最後の問題である。**ולא**

¹⁸⁴ Cross, “Epigraphic Notes on Hebrew Documents of the Eighth-Sixth Centuries B. C.”44-46.

¹⁸⁵ Renz, *Die Althebräischen Inschriften, Teil 1*, 328.

¹⁸⁶ James M. Lindenberger, *Ancient Aramaic and Hebrew Letters (Tests)*, (Atlanta: Society of Biblical Literature, 2003), 110.

¹⁸⁷ Naveh, “A Hebrew Letter from the Seventh Century B. C.,” 134-136.

¹⁸⁸ Cross, “Epigraphic Notes on Hebrew Documents of the Eighth-Sixth Centuries B. C.,”44-45.

¹⁸⁹ Renz, *Die Althebräischen Inschriften, Teil 1*, 329.

¹⁹⁰ Lindenberger, *Ancient Aramaic and Hebrew Letters (Tests)*, 110.

¹⁹¹ Lindenberger の訳は、厳密さより意味を重視しているらしく、全体的に意識が多い。

וְתַחַת はどう解するのが適切だろうか。וְתַחַת と読んでその語根は וְתַחַת (何もしない、放置する)であり、文中の形はニフアル形と考えるか、あるいはוְתַחַת と読んでוְתַחַת (追い出す)が語根であると考えるかである。前者はナヴェー¹⁹²、アミュージンとヘルツァー¹⁹³、レンツ¹⁹⁴らに支持されており、後者はクロス¹⁹⁵、タルモン¹⁹⁶、鈴木¹⁹⁷らに支持されている。וְתַחַת はエレミヤ書 14:9 にしか現れない単語であるが、この語のニフアル形はוְתַחַת となるはずなので、וְתַחַת の方が妥当である。「追い出す」という訳以外にも、この単語には「投げ捨てる」という意味もあるので、その場合には「彼を投げ捨てないでください」と訳せる。そうだとすれば、意味的にוְתַחַת 説にも近いものとなる。15 行目には何か書いてあったかもしれないし、何も書いていなかったかもしれないが、いずれにせよ欠けた部分から考えて、長い文ではないだろう。

2.1.2.4. 文学類型

このテキストの差出人と受取人は定かではない¹⁹⁸が、ほとんどの場合書簡と考えられている。さらに申命記 24:12-13; 24:17 および出エジプト記 22:26-27 に見られる、貧しい者の上着を質にとっても日没には返却しなければならない、という規定との関連で法文書と考える研究者がほとんどである¹⁹⁹。つまり、「訴状」ということである。しかし、これを批判

¹⁹² Naveh, “A Hebrew Letter from the Seventh Century B. C.,” 134.

¹⁹³ Amusin and Heltzer, “The Inscription from Mesad Hashavyahu,” 150-152., esp. 154, n. 24.

¹⁹⁴ Renz, *Die Althebräischen Inschriften, Teil 1*, 329.

¹⁹⁵ Cross, “Epigraphic Notes on Hebrew Documents of the Eighth-Sixth Centuries B. C.,” 44-46

¹⁹⁶ Talmon, “The New Hebrew Letter from the Seventh Century B. C. in Historical Perspective,” 36.

¹⁹⁷ Suzuki, “A Hebrew Ostrakon from Masad Hashavyahu,” 5, 24-26

¹⁹⁸ 書簡には通常最初の部分に「誰から誰へ」というフレーズが来る。たとえばエレファンティネから出土した AP30 という書簡は「われわれの主バガヴァーヤ、ユダの指揮官へ、あなたの僕イエダンヤとその同僚たち、エレファンティネ砦の祭司たちから」という言葉で始まっている。(Cf. Lindenberger, *Ancient Aramaic and Hebrew Letters (Texts)*, 72-76). 宛名が欠けている場合でも、少なくとも差出人は書かれている。たとえば同じエレファンティネからの嘆願書である AP33 は「以下のあなたの僕たち、ゲマルヤの子イエダンヤ・ナタンの子マンツィ・ハガイの子シェマヤ・ヤトムの子ホシェア・ナットゥンの子ホシェア」(Lindenberger, *Ancient Aramaic and Hebrew Letters (Texts)*, 77)という差出人の名前の列挙で始まっている。

¹⁹⁹ Cf. Suzuki, “A Hebrew Ostrakon from Masad Hashavyahu,” 24. 「…ジャンルは法的嘆願である」、Talmon, “The New Hebrew Letter from the Seventh Century B. C. in Historical Perspective,” 29. 「…このオストラコンが法的文書だということを非常にありそうなことにする。」

し、「超法規的嘆願²⁰⁰」を行なっているのだと主張する者もいる。筆者は「訴状の下書き」であるとする。もっと正確に言うなら、書記による「訴状作成のためのメモ²⁰¹」である。というのは、名宛人である「高官」の名前も原告の名前も書かれていないからである。「高官」は当事者にとって自明であったかもしれないが、誰が訴え出ているかわからないものが法的文書にあたるはずがない。また、主語が一定していないことも傍証となるかもしれない。申命記の主語の交代はもっぱら編集過程に帰せられるわけだが、このオストラコンに複数の編集過程を想定することはできない。そうであるならば、下書きあるいはメモであるために、原告について3人称（3人称には「彼の僕²⁰²」と「あなたの僕」がある）と1人称（「私」）が入り混じっているものと考えられる。

物質文化に暗示されていたように、メツアド・ハシャブヤフがエジプトによって築かれ支配されていた砦であるとするならば、このヘブライ語オストラコンの内容はどのように理解されるべきなのか。従来はヘブライ語の書簡がユダ支配下の砦にいるユダの役人に宛てて書かれているものと解されてきた。しかし、この場所にギリシア系の傭兵とともにユダ人の傭兵が居住し、周辺には「収穫者」のようなユダ人の賦役労働者がいたとしてもなお、これがエジプトの砦であった可能性と両立しうる。それは、征服者は被征服者に自国の法を強制せず、元来の法を受容する慣習があったからである²⁰³。そうであるならば、エジプトの属王としてメツアド・ハシャブヤフに物資を補給する義務を負ったユダ王が、砦周辺でユダ人の賦役労働者に農作業をさせ、収穫物を砦に納めていたというのが背景として浮かび上がってくる図である。その文脈において、ユダ人の賦役労働者が、ユダ人の監督者から受けた（ユダの法に照らして）不当な仕打ちについて、もしかするとユダ人ではない砦の長を通して、ユダ当局に原状回復を求めているとみるのが妥当と考えられる。

²⁰⁰ F. W. Dobbs-Allsopp, "The Genre of the Mešad Hashavyahu Ostracon," *BASOR* 295 (1994): 49-55, 51. 彼がこのオストラコンのジャンルを「超法規的嘆願」とする根拠は法に「反して」解決を求めるサム下 14:2-22 との並行関係であるが、この箇所はオストラコンの内容と並行関係にあるとは考えられない。収穫者は、法に「反した」嘆願をしているのではなく、法に「則った」嘆願あるいは請願をしているのであるからである。

²⁰¹ Cf. Dobbs-Allsopp, "The Genre of the Mešad Hashavyahu Ostracon," 52. 「おそらく *šr* の前で聞いてもらう許可を得るための手続きの一部として、このオストラコンは嘆願の内容をまとめようとしかしていないようだ。」

²⁰² これについては上述のように、定型的表現とも考えられる。

²⁰³ Cf. Robert R. Wilson, "Israel's Judicial System in the Preexilic Period," *JQR* 74 (1983): 229-48, 247-48. この場合、ユダがエジプトに「征服された」というよりも、エジプトがアッシリアの支配領域を「継承した」というのがより正確である。

以上の所見から、メツアド・ハシャブヤフからの情報は、ヨシヤ改革の時期には従来想定されていたような「(アッシリアが退いた後の) 権力の空白」とそれに乗じた領土拡大があったことを示しているのではなくて、実はエジプトに支配されていたことを示しているといえよう。しかし、申命記法を前提にしたと思われる訴状（の下書き）が見つかることから、ユダ王国の中心部では何らかの申命記的な改革が行われていたという解釈も成り立つ²⁰⁴。エジプトに支配されていた時期に、なぜ自主的な改革が可能だったかについては、エジプトの関心は交易路のみにあり、後背地（ユダの主要領域）にはなかったという説明が妥当であろう²⁰⁵。

2.1.3. 小括

ヨシヤ時代とほぼ同時代にあたるメツアド・ハシャブヤフから得られる情報の最近の解釈は、当時のユダが独立した国で勢力も版図も拡大したという従来の変説の変更を迫るものである。ヨシヤが「乗じる」ことのできた権力の空白はなかったと推測される。つまりアッシリア支配を脱してすぐ、ユダはその中心領域の自治を維持したまま、エジプトの属国になっていた可能性が高い。予想される改革の全体像は、少なくともメツアド・ハシャブヤフのような海岸地域まで支配する大帝国は存在しなかったというものである。

2.2. 「ヨシヤの改革」とアラド

古代イスラエルの南の要衝にあるアラド²⁰⁶という砦の発掘は 1962 年から 1967 年まで 5 期にわたって行われた²⁰⁷。

²⁰⁴ ただし改革を前提しなくとも説明は可能である。

²⁰⁵ Cf. Schipper, “Egypt and the Kingdom of Judah under Josiah and Jehoiakim,” 220.

²⁰⁶ 「アラド」は聖書中にも「カナンのアラド」として登場する（民 21:1; 33:40 [王名として現れる]. Cf. ヨシュ 12:14）が、聖書のアラドと本節で扱う「アラド」は、別のものである。エジプトのカルナック神殿の戦勝碑文にある、シシャクの征服都市リスト（前 920 年ころ）にも「アラド」という砦が 2 つ載っている。ひとつは Arad Rabbat (Arad the Great) もうひとつは Arad of Beth Yeroham (Arad of Yeroham's House) である。これはネゲヴに 2 つの「アラド」が存在したことを示している。Cf. Yohanan Aharoni and Ruth Amiran, “Excavations at Tel Arad: Preliminary Report on the First Season, 1962,” *IEJ* 14 (1964): 131-147, 145-147; Ze'ev Herzog, Miriam Aharoni, and Anson F. Rainey, “Arad: An Ancient Israelite Fortress with a Temple to Yahweh,” *BAR* 13 (1987): 16-35, 20-22.

主たる発掘者であるアハロニ（Y. Aharoni）の決定した層位（第 XII から第 I まで）は現在でもそのまま使用されているが、その年代づけは今日疑問視されており、再検討が必要とされている。ヨシヤの改革との関連で決定的に重要なのは、この年代決定である。とくに、ここで発見された神殿と祭儀用具、多数のオストラカの年代と解釈が、いわゆる「ヨシヤの改革」（前 622-609 年）の理解を大きく左右するからである。

以下層位の年代づけと、それに密接に関連する個々の要素（神殿・2 枚の捧げ物用の皿・オストラコン（碑文 18）など）をアハロニ説とアハロニ説批判に分けて順に検討していきたい。

2.2.1. アハロニ説

旧約聖書の記述を重視する傾向にあり、層位の解釈にもそれが反映されている²⁰⁸。

2.2.1.1. 関係する層位の年代づけとその解釈²⁰⁹

層位 年代

VI 前 6 世紀はじめ（イスラエル）

VII 前 7 世紀末（イスラエル）

VIII 前 8 世紀末（イスラエル）

IX 前 8 世紀はじめ（イスラエル）

X 前 9 世紀（イスラエル）

X I 前 10 世紀（イスラエル）

²⁰⁷ Cf. Y. Aharoni, *Arad Inscriptions*, (Jerusalem: Israel Exploration Society, 1981), 4-6. 第 1 期は 1962 年春（指揮：Y. Aharoni and Amiran）、第 2 期は 1963 年夏（指揮：Y. Aharoni with M. Kochavi）、第 3 期は 1964 年夏（指揮：Y. Aharoni and R. Amiran）、第 4 期は 1965 年夏のはじめ（指揮：Y. Aharoni）、第 5 期は 1967 年夏（指揮：Y. Aharoni and B. Boyd）であった。これらの発掘の中心人物である Y. Aharoni は 1976 年に亡くなったが、彼の立場は同労者・後継者たち（Helzog, M. Aharoni, Rainey ら）によってほぼそのまま継承されている。

²⁰⁸ Y. Aharoni and Amiran, “Excavations at Tel Arad: Preliminary Report on the First Season, 1962,” 145 は、ふたつのアラドについての説明の導入として「繰り返されている聖書の伝統は、たとえそれが考古学的証拠と矛盾しているように見えたとしても、確実に信頼できる」と述べており、聖書資料を一次資料とする姿勢を示している。

²⁰⁹ Cf. Y. Aharoni, *Arad Inscriptions*, 5-10; Herzog, M. Aharoni and Rainey, “Arad: An Ancient Israelite Fortress with a Temple to Yahaweh,” esp. 18, 26-28.

X II 前 12 世紀はじめ (ケニ人)

2.2.1.2. 神殿

アハロニによるとアラド神殿は中庭・部屋・至聖所から成っており、デビール (至聖所) は一段高くなった小部屋として作られている。中庭には犠牲を捧げる祭壇があり、この祭壇の下で 2 枚の祭儀用の皿が発見された。小部屋の中には 2 つの石柱があり、そのうちのひとつはもう一方より大きく赤く塗られている²¹⁰。至聖所の入り口には、ふたつの大きさの異なる祭壇 (おそらく香を捧げる祭壇) があり、それぞれの大きさに対応した石柱に面している²¹¹。

この神殿は西向きである²¹²。神殿にはバーマー (高きところ) とマツツェボート (石柱) がある²¹³。ヘーカール (聖所) の壁は漆喰を塗ったベンチで囲まれている²¹⁴。

アハロニは、前 12 世紀はじめの第 X II 層を、モーセの舅²¹⁵に関するホバブ²¹⁶ (モーセの義兄弟) の子孫ケニ人²¹⁷と結びつける²¹⁸。旧約聖書によればモーセの舅はイスラエル人ではなくミディアン人であったが、祭司であった。アハロニは、ケニ人が祭壇を置いた跡に、イスラエル人も神殿を作ったとする。すなわち前 10 世紀の第 X I 層にヤハウエ主義的神殿を最初に建てたのが、エルサレムに第 1 神殿を築いたソロモンだと考えられている²¹⁹。そして複数回の改修をしながら使い続けられたあと、前 7 世紀末の第 VII 層で破壊されたと

²¹⁰ ふたつのマツツェボート (石柱) は、通常クンティレト・アジュルッドなどの例を念頭に、ヤハウエとアシェラを象徴するものと解されるが、その想定は確実ではないという指摘もある。杉本智俊「古代イスラエルの宗教関連考古資料と一神教の成立過程」市川裕・松村一男・渡辺和子編『宗教史とは何か<上巻>』リトン、2008 年、229-66 頁、245-47 頁参照。

²¹¹ 神殿の概要についてはマザール、『聖書の世界の考古学』、325 頁参照。

²¹² Cf. Yohanan Aharoni, "Arad: Its Inscriptions and Temple," *BA* 31 (1968): 2-32, 21.

²¹³ Y. Aharoni, "Arad: Its Inscriptions and Temple," 19.

²¹⁴ Y. Aharoni, "Arad: Its Inscriptions and Temple," 19.

²¹⁵ 出エジプト記 2:16, 18; 3:1 参照。

²¹⁶ 民数記 10 : 29 参照。

²¹⁷ 士師記 1:16; 4:11 参照。

²¹⁸ Cf. Y. Aharoni and Amiran, "Excavations at Tel Arad," 146; Herzog, M. Aharoni, and Rainey, "Arad: An Ancient Israelite Fortress with a Temple to Yahaweh," 19; マザール、『聖書の世界の考古学』、325 頁。Y. Aharoni 説にしたがって、第 X II 層とケニ人の関係を肯定するものとしては、Benjamin Mazar, "The Sanctuary of Arad and the Family of Hobab the Kenite," *JNES* 24 (1965): 297-303 がある。

²¹⁹ *NEAEHL vol. 1* 所収の "A rad" という項目 (75-87) は、Y. Aharoni, R. Amiran + O. Ilan, M. Aharoni によって執筆されている。Cf. M. Aharoni が執筆している 83.

されている²²⁰。さらに前 8 世紀末の第Ⅷ層はヒゼキヤ時代の改革と、第Ⅶ層はヨシヤ時代の改革と結びつけて理解される²²¹。つまり、ヒゼキヤ治世にアラド神殿の犠牲を捧げる祭壇が廃棄され、ヨシヤ治世にはアラド神殿自体が最終的に廃棄されたというのである。

2.2.1.3. 捧げ物用の皿（碑文 102 と 103）

アハロニによれば、神殿の犠牲を捧げる祭壇の下で発見された 2 枚の捧げ物用の皿にはそれぞれヘブライ語の文字が 2 つ刻まれている。それは *Qop + Kaf*²²²と解され、*Qadesh Kohanim* (祭司のために[とりわけられた]聖なる[もの])の頭文字とされた²²³。後にアハロニの流れをくむ研究者たちはこれを *Qop + Sin* と修正し、*Qadesh* (聖なる[もの]) の略と読むようになったが²²⁴、これらの文字がヘブライ文字であるという立場は変更していないようである²²⁵。

2.2.1.4. オストラコン（碑文 18）

第Ⅵ層から発見されたオストラコン（碑文 18）には「ヤハウエの家」という言葉が現れる。アハロニの立場では、この碑文はアラド神殿の破壊後のものということになり、アラド神殿を指すと考えるのが困難になる。それゆえアハロニは、これはエルサレム神殿を指

²²⁰ Cf. Herzog, M. Aharoni, and Rainey, “Arad: An Ancient Israelite Fortress with a Temple to Yahaweh,” 35.

²²¹ Herzog, M. Aharoni and Rainey, “Arad: An Ancient Israelite Fortress with a Temple to Yahaweh,” 35.

²²² より正確に言うなら、「よくわからない記号 (not a letter)」なのだが、それは「古拙のカーフ (archaic kaph)」と解されている。Cf. Y. Aharoni, *Arad Inscriptions*, 116. “The Fact that this letter was written so well leaves us no doubt that the second sign is not a letter. An archaic *kaph*, such as in the ancient Phoenician inscriptions, is impossible, since in all the Hebrew inscriptions, the right-hand stroke is lengthened below.”

²²³ Herzog, M. Aharoni, and Rainey, “Arad: An Ancient Israelite Fortress with a Temple to Yahaweh,” 30.

²²⁴ “Arad,” in *NEAEHL vol. 1*, 85 (M. Aharoni 執筆部分)。

²²⁵ Herzog, M. Aharoni, and Rainey, “Arad: An Ancient Israelite Fortress with a Temple to Yahaweh,” 35, n. 3.

していると解釈する²²⁶。そしてアラド神殿破壊後にも、アラドがなお祭儀的・行政的センターであったという所見を述べている²²⁷。

2.2.2. アハロニ批判説

アハロニの各層位の年代づけはクロス²²⁸、マザールとネツェル(A. Mazar and E. Netzer²²⁹)、ジムホニ(O. Zimhoni²³⁰)、ウシシュキン(D. Ussishkin²³¹)らによって批判されている。中でもウシシュキンが全体的な批判を行なっているので、彼の説を中心に見ていきたい。

2.2.2.1. 層位の年代と解釈

ウシシュキンは第X～VIII層をひとつの層位と考える。それは第X～VIII層の土器が均質とみなせるからであり、第VIII層の土器はテル・ラキシュ(Tel Lachish)第III層のそれとの比較によって、同年代と判断されることから、第X～VIII層の年代は、ジムホニ²³²を引いて、前8世紀後半と推測されている。さらに第VII～VI層も、ひとつの層位と考えられ、その年代は前6世紀はじめであるとされている。ひとつには第VII～VI層の土器集成の均一性²³³のためだが、もうひとつ理由がある。エリヤシブの印章と3つのオストラカは、アハロニが第VII層とした、火で破壊されたひとつの部屋から発見され、同じく火で破壊された近くの部屋から発見されたエリヤシブのアーカイブはアハロニによって第VI層とされている。ウシシュキンは、このふたつが別々の部屋だったことに疑義を呈し、「エリヤシブの印章とアーカイブは、同時に焼かれた同じひとつの部屋のふたつの部分から発見された²³⁴」と結論

²²⁶ Y. Aharoni, "Arad: Its Inscriptions and Temple," 15. Cf. Herzog, M. Aharoni, and Rainey, "Arad: An Ancient Israelite Fortress with a Temple to Yahaweh," 35.

²²⁷ Yohanan Aharoni, "Hebrew Ostraca from Tel Arad," *IEJ* 16 (1966): 1-7, 7; Y. Aharoni, "Arad: Its inscriptions and Temple," 17.

²²⁸ Frank Moor Cross, "The Offering Dishes with Phoenician Inscriptions from the Sanctuary of 'Arad'," *BASOR* 235 (1979): 75-78.

²²⁹ Amihai Mazar and Ehud Netzer, "Short Notes on the Israelite Fortress at Arad," *BASOR* 263 (1986): 87-91.

²³⁰ Oma Zimhoni, "The Iron Age Pottery of Tel 'Eton and its Relation to the Lachish, Tel Beit Mirsim and Arad Assemblages," *TA* 12 (1985) 63-90, 85-90.

²³¹ David Ussishkin, "The Date of the Judaean Shrine at Arad," *IEJ* 38 (1988): 142-157.

²³² Zimhoni, "The Iron Age Pottery of Tel 'Eton."

²³³ Mazar and Netzer, "Short Notes on the Israelite Fortress at Arad," 88-90.

²³⁴ Ussishkin, "The Date of the Judaean Shrine at Arad," 153.

しているのだ。彼はさらに「火による神殿の最終的破壊が起こったのは、第Ⅵ層の終わりであり、ユダ砦の最終的破壊と同時である²³⁵」と提案している。

2.2.2.2. 神殿

神殿は、おそらく第Ⅷ層の破壊（前 701 年ころ）後に砦が再建されたときに築かれた（前 7 世紀）と考えられる²³⁶。アハロニによって前 10 世紀とされる第ⅩⅠ層に現れる神殿は実際には前 7 世紀に設立されたと考えられるので、ソロモンによって設立されたのではない²³⁷。さらに第Ⅷ層に関連するとされるヒゼキヤの改革や第Ⅶ層に関連するとされるヨシヤの改革と関連づけることもほとんどできない²³⁸。最終的破壊は、ヨシヤの改革によるのではなく、前 6 世紀はじめのユダの砦の破壊と時を同じくして行われたとする。

2.2.2.3. 捧げ物用の皿（碑文 102 と 103）

2 枚の皿に刻まれているのは、ヘブライ語の文字ではなくフェニキア文字である²³⁹。したがってこれらの皿は、フェニキアのセンターから搬入されたと考えられる。刻まれている文字は *Qop + Sin* であり、意味は「聖なる（もの）」である²⁴⁰。ヘブライ語では 3 文字の間の文字が省略される例は知られていないが、フェニキア語では、しばしば省略される²⁴¹。さらにこれら 2 文字の古文書学的分析によると、それぞれの文字が使用された時代が重なるのは、前 7 世紀後半である²⁴²。つまりヒゼキヤ時代より後ということになる。ただしヨシヤ時代の前なのか後なのかは、この情報からは判断できないとされている。

²³⁵ Ussishkin, “The Date of the Judaeian Shrine at Arad,” 154.

²³⁶ Ussishkin, “The Date of the Judaeian Shrine at Arad,” 151.

²³⁷ Ussishkin, “The Date of the Judaeian Shrine at Arad,” 155-57.

²³⁸ Ussishkin, “The Date of the Judaeian Shrine at Arad,” 156.

²³⁹ Cross, “The Offering Dishes with Phoenician Inscriptions from the Sanctuary of ‘Arad,” 75.

²⁴⁰ Cross, “The Offering Dishes with Phoenician Inscriptions from the Sanctuary of ‘Arad,” 77.

²⁴¹ Cross, “The Offering Dishes with Phoenician Inscriptions from the Sanctuary of ‘Arad,” 77.

²⁴² Cross, “The Offering Dishes with Phoenician Inscriptions from the Sanctuary of ‘Arad,” 77.

2.2.2.4. オストラコン（碑文 18）

アラドの神殿は前 6 世紀はじめに砦とともに破壊されたと考えるので、ウシシュキンは、ナアマンとともに、碑文 18 に出て来る「ヤハウエの家」はエルサレム神殿ではなく、第 VI 層にまだ存在していたアラド神殿を指すとする²⁴³。

2.2.2.5. 他の要素について

2.2.2.5.1. 「キッティーム²⁴⁴」

アハロニはこれを、ユダ王国に使役されていたギリシア人傭兵と解する²⁴⁵。しかし、キッティームが実際ユダ王国に使役されていたかどうかについては、近年論争がある。メツァド・ハシャブヤフと同様、従来ユダ王国に使役されていたと考えられていたアラドのオストラカに何度も言及されるギリシア人傭兵は、実はエジプトに仕えていたのであり、ユダ王国はそれを管理していたにすぎないと解釈する余地がある。

2.2.2.5.2. エジプト的要素

アラドのオストラカには、多数のエジプト神聖文字のシンボル（とくに数を表すもの）が使用されている²⁴⁶。アハロニは、文字以外にも、度量衡の単位がエジプトのものだったという見解²⁴⁷を提出している。オストラカに出現する人名はほとんどがヘブライ語の人名

²⁴³ Ussishkin, “The Date of the Judaeen Shrine at Arad,” 155.

²⁴⁴ 創世記 10:4; 民数記 24:24; イザヤ書 23:1; エレミヤ書 2:10; エゼキエル書 27:6 などにあられる語。

²⁴⁵ 「旧約聖書においてキッティームという語は、通常ギリシア人、すなわちエーゲ海の島々の住人、とりわけキティ、キティオンという名の町があったキプロスの住人を指している。」(Y. Aharoni, “Arad: Its Inscriptions and Temple,” 14. Cf. Y. Aharoni and Amiran, “Excavations at Tel Arad”, 4)

²⁴⁶ Cf. Y. Aharoni, “Arad: Its Inscriptions and Temple,” 15-16. これについての詳細は Stephan Wimmer, *Palästinisches Hieratisch: Die Zahl- und Sonderzeichen in der althebräischen Schrift* (Wiesbaden: Harrassowitz Verlag, 2008) 参照。

²⁴⁷ Y. Aharoni, “Arad: Its Inscriptions and Temple,” 24. エジプトの単位として、長さの尺度である 2 種類のキュビト (common cubit と royal cubit) と重さの尺度であるデーベン (*deben*) に言及している。

であるが、ほかにギリシア系の人名とエジプト系の人名が書かれているものもある²⁴⁸。これらの要素は、単に当時ユダ王国においてエジプト神聖文字由来のシンボルが受容されていたことを示しているのかもしれないし、あるいはエジプトの支配を示しているのかもしれない。いずれにせよ、これらの情報から明確な結論を引き出すのは困難である。

2.2.3. 小括

アハロニ批判の立場はアハロニ説より説得的であり、「ヨシヤの改革」とアラドのユダ砦の神殿には直接的な関係を想定できないように思われる。アラド神殿の破壊はヨシヤの改革とは関連づけられず、(ヨシヤの改革が行われたと仮定するとしても、) その改革にもかかわらず、相変わらず宗教混淆的なヤハウエ祭儀が行われていたことを示している。したがってヨシヤの改革の歴史性を肯定するとしてもその範囲は、ユダ王国の南の境界と考えられてきたアラドには達しておらず、より限定的な範囲のものであったと考えなければならない。さらに、メツアド・ハシャブヤフなどの例を考え併せると、この砦でギリシア系傭兵であるキッティームを使役していたのがユダ王国であるという想定さえ、保持することが困難になってくる。多数のエジプト的要素から、この交易路上の砦がエジプト支配下にあった可能性を推測できるからである。そうであるならば、アラドの砦は、ヨシヤの改革によって行われたという祭儀改革の積極的証拠を提供するものとはいえないことになる。

2.3. 「ヨシヤの改革」とラキシユ

旧約聖書に記述のあるユダ王国の城塞都市ラキシユ（代下 11:9; 王下 18:17; イザ 36:2; エレ 34:7）は、現在のテル・エド・ドウエイル（Tell ed-Duweir）と同定されている。ラキシユの遺跡²⁴⁹には当然ヨシヤ治世（前 640-09 年）と重なる層およびその時代の前後の層が

²⁴⁸ Cf. Y. Aharoni, "Arad: Its Inscriptions and Temple," 11.

²⁴⁹ ラキシユの最初の発掘は 1932 年から 1938 年まで行われた（指揮：J. L. Starkey）。この発掘で特筆すべきことはラキシユ書簡と呼ばれる 18 個のオストラカが 1935 年に発見されたことである。J. L. Starkey の殺害後 O. Tafnell がこの発掘の Final Report を出した。その後アラドを発掘した Y. Aharoni がアラドと並行して 1966 年と 1968 年に小規模な発掘を行なったが、もっとも本格的な発掘を行なったのは Ussishkin である（第 1 期：1973 年から 1977 年、第 2 期：1978 年から 1983 年、第 3 期：1985 年から 1994 年）。Cf. David Ussishkin, "Lachish,"

含まれているため、いわゆるヨシヤの改革（前 622-09 年）の理解について何らかの示唆を得ることができる期待される。ここではラキシシュについて概観した後、とくに第Ⅲ層と第Ⅱ層からの情報についてヨシヤ改革との関連を探っていくことにしたい。

2.3.1. ラキシシュの層位（王国時代に関係する部分²⁵⁰）

第Ⅴ層：統一王国時代 要塞化されていない町・祭儀のための部屋

（前 925 年頃 エジプトのシシャクが火によって (?) 破壊）

第Ⅳ層：分裂王国時代 ユダの中心的城塞都市

第Ⅲ層：同上（ただし前 722 年に北イスラエル王国は滅亡）

（前 701 年頃 アッシリアのセナケリブが火によって (?) 破壊）

第Ⅱ層：ユダ王国時代 再建された（ヨシヤ時代？）が人口も規模も以前より縮小された城塞都市 ラキシシュ書簡（おそらく前 589 年初夏）

（前 587/86 年頃 バビロニアのネブカドネツアルが火によって (?) 破壊）

2.3.2. セナケリブによるラキシシュ攻略（前 701 年）直前の状況（破壊層直下）

旧約聖書²⁵¹およびアッシリアの資料²⁵²によると、ユダ王国のヒゼキヤ王は宗主国アッシリアに反抗してアッシリア王セナケリブに当時ユダ第二の城塞都市だったラキシシュを攻略されたが、首都エルサレムは攻囲されながらも奇跡的に破壊を免れた。

NEAEHL vol. 3 (1993): 897-911, 897-99; David Ussishkin, “Excavations at Tel Lachish 1973-1977, Preliminary Report” *TA* 5 (1978): 1-97; David Ussishkin, “Excavations at Tel Lachish 1978-1983, Second Preliminary Report,” *TA* 10 (1983): 97-175; David Ussishkin, “Excavations and Restoration Work at Tel Lachish: 1985-1994, Third Preliminary Report,” *TA* 23 (1996): 3-60. ラキシシュ発掘についての網羅的な報告としては David Ussishkin, *The Renewed Archaeological Excavations at Lachish (1973-1994)* 5 vols. (Tel Aviv: Tel Aviv University; Institute of Archaeology, 2004)がある。

²⁵⁰Cf. Ussishkin, “Lachish,” 898.

²⁵¹列王記下 18:13-19:36; 歴代誌下 32:1-26; イザヤ書 36:1-37:37 参照。

²⁵²Cf. A. Kirk Grayson and Jamie Novotny, *The Royal Inscriptions of Sennacherib, King of Assyria (704-681 BC), Part 1*, (Winona Lake: Eisenbrauns, 2012), 65-67 (Sennacherib 4); 96-97 (Sennacherib 15); 116 (Sennacherib 16); 132-33 (Sennacherib 17); 151 (Sennacherib 18); 162-63 (Sennacherib 19); 176-77 (Sennacherib 22); 193-94 (Sennacherib 23); 210 (Sennacherib 26); A. Kirk Garyson and J. Novotny, *The Royal Inscriptions of Sennacherib, King of Assyria (704-681 BC), Part 2*, (Winona Lake: Eisenbrauns, 2014), 80-81 (Sennacherib 46); 111 (Sennacherib 66); 185 (Sennacherib 140); 189 (Sennacherib 142); 192 (Sennacherib 143); 238 (Sennacherib 165); 352 (Sennacherib 1015).

従来ヒゼキヤのアッシリアとの戦闘準備の跡は、ラキシュ第Ⅲ層から発見された多くの「ラメレク壺²⁵³」に見ることができると考えられてきた。それは *lmlk*（「王に属する」）という印章が把手に押されている、四つの把手のある貯蔵用の壺である。1990 年までに 413 の *lmlk* 印影と 65 の個人の印影がラキシュで見つかっている。*lmlk* 印影のある把手のうち 352 個（85.23%）がエジプト由来の、4 枚の羽根を広げるタマオシコガネのシンボルを含んでいる。これらの壺はすべてユダの低地（シェフェラー）の粘土で作られており、これらがラキシュから遠くない所で作られたことを示している。ルメール（A. Lemaire²⁵⁴）によると、*lmlk* 印影のあるものもないものもすべて、ひとつの製作所で作られた。このことから、ウシシュキンはいくつかの貯蔵用の壺について以下のように提案している。

1. すべての壺が同時に使用された。
2. すべてのタイプの壺は前 701 年直前ヒゼキヤ時代にアッシリアとの戦いに備えて作られた。第Ⅲ層の破壊層から出土するからである。
3. 容量は一定していない。つまり量の統一のためのものではない。
4. *lmlk* 印章と個人の印章が同じ壺に押されていることがある。
5. *lmlk* 印章と個人の印章が注意せずに押されているので、とくに読まれる必要性はなかった。（4 つの把手のうち 2 つだけに印影があるもの、3 つにあるもの、4 つにあるものなどがある）²⁵⁵。

ウシシュキンや他の研究者たちは以上の特徴からラキシュ第Ⅲ層から出土した多量の貯蔵用壺は、アッシリアとの戦闘に備えてヒゼキヤが大急ぎで作らせた糧食（ワインなど）保存用の壺と考えたのである。

しかしながら、*lmlk* 印影や同心円状の刻印、さらにロゼット印影の分布について再検討したリップシツ、セルギ、コッホ（O. Lipschits, O. Sergi, and I. Koch²⁵⁶）による最近の研究によれば、*lmlk* 印影を持つ壺の把手や同心円状の刻印を持つ壺の把手はユダ王国末期の行政を時系列的に理解するために有効であり、彼らの再検討によると、*lmlk* 印影を持つ壺の

²⁵³ マザール、『聖書の世界の考古学』280-81 頁、296-98 頁参照。

²⁵⁴ Andre Lemaire, *Inscriptions hébraïques I. Les Ostraca*, (Paris: Cerf., 1977), 83-143.

²⁵⁵ Cf. Ussishkin, “Lachish,” 909.

²⁵⁶ Oded Lipschits, Omer Sergi and Ido Koch, “Judahite Stamped and Incised Jar Handles: A Tool for Studying the History of Late Monarchic Judah,” *TA* 38 (2011): 5-41.

把手がすべてセナケリブ侵攻に備えるために作られたという説は否定されるべきである。それは以下のような解釈のためである。

1. アッシリアの支配と同時に導入された *lmlk* 印影システムは、前 8 世紀末まで（つまり前 701 年まで）続いた。これはタイプ Ia, Ib, IIa という型の *lmlk* 印影を含む²⁵⁷。この時期のものは「初期 *lmlk* 印影」と呼ぶことができる。多量の初期 *lmlk* 印影がラキシユから発見されており²⁵⁸、ラキシユを中心とする低地（シェフェラー）にこの時期の経済的行政センターが存在したといえる。
2. 前 701 年のセナケリブによるラキシユ攻略の後、おそらくアッシリアの意向により、低地（シェフェラー）は再建されずに放置された。前 7 世紀（前半）の「後期 *lmlk* 印影」はタイプ IIb, IIc, XII を含むものであるが、ラキシユからはごく少数しか発見されていない²⁵⁹。その代わりに、エルサレム周辺の重要性が高まり、ラマト・ラヘルが新しい経済行政センターとして建設されたと考えられる。同心円状の刻印を持つ壺の把手²⁶⁰も、同じ時期のものと想定できる。これらは明らかに前 701 年以降のものと判断されるからである。
3. ロゼット印影²⁶¹を持つ壺の把手は、前 7 世紀後半に出現する。この時期にはアッシリアによって破壊されたラキシユが再建され、ユダ王国第三の行政センターとなった。ロゼット印影はヨシヤ王の改革によって導入されたと考えられる。ラキシユを含む低

²⁵⁷ Cf. Oded Lipschits, Omer Sergi and Ido Koch, “Royal Judahite Jar Handles: Reconsidering the Chronology of the *lmlk* Stamp Impressions,” *TA* 37 (2010): 3-32, 12.

²⁵⁸ Cf. Lipschits, Sergi, and Koch, “Judahite Stamped and Incised Jar Handles,” 12. ユダのシェフェラーで発見された *lmlk* 印影は初期のものが 467 個、後期のものが 7 個、同定できないものが 89 個であり、83%が初期のタイプである。同定できたものだけをカウントすると、98%がシェフェラーからのものである。なかでもラキシユからは、初期タイプが 378 個と最も多く発見されている。（二番目に多いのはエルサレムからの 90 個、三番目はラマト・ラヘルからの 45 個である）。

²⁵⁹ Lipschits, Sergi and Koch, “Judahite Stamped and Incised Jar Handles,” 16. ユダの領域から 396 個発見された後期タイプは、ラキシユでは 3 個しか出ていない。一番多いのはエルサレムの 145 個、二番目がラマト・ラヘルで 128 個、三番目はエル・ジブの 56 個であり、エルサレムとその周辺に集中している様子が観察される。

²⁶⁰ 同心円状の刻印を持つ壺の把手（concentric incised handles）は、エルサレムから一番多く出土している（116 個）。二番目がラマト・ラヘルの 64 個、三番目がエル・ジブの 41 個である。ラキシユからはわずか 2 個しか見つかっていない。

²⁶¹ ロゼット印影を持つ壺の把手は、エルサレムで 83 個、ラマト・ラヘルで 45 個、ラキシユで 24 個見つかっている。ロゼット印影の用いられた時期には、ラキシユが再度重要性を獲得しているようではあるが、以前ほどの重要性を持っていないことがうかがわれる。

地（シェフェラー）は、アッシリアの衰退にともなってこの時期に再建されたものの、前 701 年以前の状態までは回復しなかった。

この提案は説得力があり、初期 *lmlk* 印影、後期 *lmlk* 印影および同心円状の刻印、ロゼット印影をそれぞれ前 8 世紀、前 7 世紀前半、前 7 世紀後半に帰属させることには蓋然性が認められる。

2.3.3. ラキシシュ攻略（前 701 年）時の状況（破壊層）

セナケリブはアッシリアの首都をニネヴェに移し宮殿を建設した。その宮殿の“Room 36”の壁は、ラキシシュ攻略のレリーフで飾られていた。ウシシュキンは、この部屋にラキシシュからの略奪品も置かれていた可能性を示唆している²⁶²。そして、レリーフに描かれているセナケリブの位置は、戦後のようにも見えるが実は戦争時の陣営の位置を示していると主張している。それはラキシシュの南西の隅である²⁶³。

セナケリブの進入路も検出されており、この進入路と城壁のぶつかる所からは、鉄製の鏃、投石器の石、炭化した木、鎖の破片などが見つかっている²⁶⁴。

さらに西側斜面に近接したいくつかの洞窟に 1500 人分の男・女・子供の人骨（頭蓋骨は 695 個あり、大きな穴が開いているものもある）が埋められているのが発見されている²⁶⁵。リプシッツ、セルギ、コッホは、セナケリブのユダに対する軍事遠征の衝撃を以前より少なく見積もろうとする近年の見解を批判し、実態はむしろ逆であったと主張している²⁶⁶。

²⁶² Cf. Ussishkin, “Lachish,” 907; David Ussishkin, “The ‘Lachish Reliefs’ and the City of Lachish,” *IEJ* 30 (1980): 174-95, 176.

²⁶³ Ussishkin, “The ‘Lachish Reliefs’ and the City of Lachish,” 194-96.

²⁶⁴ マザール、『聖書の世界の考古学』280 頁。Cf. Amihai Mazar, *Archaeology of the Land of the Bible: 10,000-586 B.C.E.* (New York: Doubleday, 1990).

²⁶⁵ Cf. Ussishkin, “Lachish,” 908-10; マザール、『聖書の世界の考古学』、280 頁も参照。

²⁶⁶ Lipschits, Sergi and Koch, “Judahite Stamped and Incised Jar Handles,” 23-25.

2.3.4. ネブカドネツアルによるラキシシュ破壊（前 586/87 年）直前の状況（破壊層直下）

本論文との関連で、第Ⅱ層からの最も重要な出土品はラキシシュ書簡²⁶⁷とよばれるオストラカである。これらは非常に断片的なものが多く解釈が難しいものではあるが、バビロニアによる攻撃の前、おそらく前 589 年初夏（頃）のユダの状況を伝えている。

そもそも碑文は第Ⅴ、第Ⅳ層からは出土しておらず、第Ⅲ層からはわずかに発見されただけであるが、第Ⅱ層からは多数のヘブライ語オストラカ²⁶⁸、圧痕、印のついた錘が発見されており²⁶⁹、ヨシヤ時代を含む前 7 世紀から前 6 世紀初頭にかけて、ユダ王国において読み書き能力が一般（軍人・商人など書記以外の人々）にも広まったことを窺わせる。

ラキシシュ書簡が誰から誰へ送られたかはつねに明確というわけではない。しかし送り手の名が 1 回（オストラコン #3 の 1 行目「ホシャヤフ」）、受け手の名が 3 回（オストラコン #2 の 1 行目、#3 の 2 行目、#6 の 1 行目「ヤウシュ」）現れる。文面から推測されるのは、ホシャヤフがラキシシュ以外の近隣の砦にいる軍人であり、ヤウシュより下位の者であるということ、ヤウシュはラキシシュにいる軍人（おそらく司令官）であるということである。研究者はおおむねこのように想定しているが、ヤディン（Y. Yadin²⁷⁰）やリンデンバーガー²⁷¹などが支持する少数説もあり、それによるとホシャヤフがラキシシュにおり、ヤウシュはエルサレムにいる。この場合ラキシシュで発見されたオストラカは、実際にエルサレムに送られた書簡の写しか下書きと解釈される²⁷²。正式な文書を陶片に書くのは特殊な事態でなければ不自然なので、ホシャヤフとヤウシュの居所はともかく、オストラカが写しか下書きだという解釈は首肯できる。ナアマンは部分的に（#1, 10）この説を採り入れる余地があると考えているようだ²⁷³。これはナアマンによる当時の情報伝達システムについての理解と関連している。

²⁶⁷ ラキシシュ書簡のテキストと解釈については Dennis Pardee, *Handbook of Ancient Hebrew Letters*, (Chico: Scholars Press, 1982), 77-114; Lindenberger, *Ancient Aramaic and Hebrew Letters (Texts)*, 113-31; Renz, *Die Althebräischen Inschriften Teil 1*, 405-40 など参照。

²⁶⁸ ラキシシュでは碑文のあるオストラカが 22 個発見されている。1935 年に 18 個、1938 年に 3 個、1966 年に 1 個である。Cf. Pardee, *Handbook of Ancient Hebrew Letters*, 77.

²⁶⁹ Cf. Ussishkin, “Lachish,” 910.

²⁷⁰ Yigael Yadin, “The Lachish Letters – Originals or Copies and Drafts?” in *Recent Archaeology in the Land of Israel*, ed. H. Shanks (Washington, D. C.: Biblical Archaeology Society, 1984), 179-86.

²⁷¹ Lindenberger, *Ancient Aramaic and Hebrew Letters (Texts)*, 117.

²⁷² Cf. William Schniedewind, “Sociolinguistic Reflections on the Letter of a ‘Literate Soldier’ (Lachish 3),” *ZAH* 13 (2000): 157-67, 157; Ussishkin, “Lachish,” 910.

²⁷³ Nadav Na’aman, “The Distribution of Messages in the Kingdom of Judah in Light of the Lachish Ostraca,” *VT* 53 (2003): 169-80, 175.

ナアマンはラキシシュ・オストラカに注目して第一神殿時代末期のユダ王国における中央から地方への情報伝達システム（中央から地方に送られた書簡を近隣の役人（軍人）間で共有する慣習）の存在を指摘し、さらにそのような行政システムは短期間に変化するものではないという想定から、ヨシヤ改革の期間にも同様のシステムが機能しており、したがって中央の政策や議論は迅速に地方の役人（軍人）に共有されていたであろうという提案をしている²⁷⁴。実際オストラコン#3の19-21行、#5の3-7行、#6の3-15行、#16の3-5行（?）、#18の1-2行（?）には書簡の転送が行われている様子が読み取れる。

そしてそのような情報伝達・共有システムが機能するためには、基本的な読み書き能力が、書記以外の役人（軍人）にも備わっていなければならない。ラキシシュ#3の4-13行で下位²⁷⁵の役人（軍人）ホシャヤフが上位²⁷⁶の役人（軍人）ヤウシュに対して、自分は読み書き能力があると主張しているのは、この状況を示唆している。ホシャヤフが書記の助けをまったく借りなかったかどうかは明らかではないが、少なくとも基本的な読み書き能力はあったと想定するのが妥当であろう²⁷⁷。

ラキシシュ書簡の内容でもうひとつ興味深いのは、当時親バビロニアの傾向を持つ預言者が民に警告を発していたことがうかがわれることだ（#3の20-21行、#16の5行も?）。この預言者が誰であるかは同定できない（#16の5行目によると𐤊𐤍で終わる名前である）が、内容と時代からエレミヤのような預言者（エレミヤ書26:20に現れるウリヤなど）かエレミヤ自身ということも考えられる。エレミヤ書との関連では、#4の11-12行に現れる「ラキシシュとアゼカ」にも注目しなければならない。エレミヤ書34:7にはネブカドネツアルがユダの他の砦を落とし、もうラキシシュとアゼカしか残っていないという記述がある。

²⁷⁴ Na'aman, "The Distribution of Messages in the Kingdom of Judah in Light of the Lachish Ostraca," 174-76.

²⁷⁵ 職位の上下関係は書簡における「敬語の使用」によって明白に知られる。とくに **מי עבדך** **כלב כי** 「あなたの僕は犬にすぎませんのに…」という自己卑下（あるいは謙譲）の定型（サム下9:8; 王下8:13 参照）が#2の3-5行、#5の3-5行、#12の1-2行（?）に現れるのが印象的である。E. J. Bridge, "Polite Language in the Lachish Letters," VT 60 (2010): 518-34 は、この定型を「感謝」を表す定型としている。そしてこのような上下関係（下位の者が自分を「犬」と呼ぶほどへりくだる習慣があった）にもかかわらず、旧約聖書（詩篇や物語中の祈りなど）およびアラド書簡（Arad18）、ラキシシュ書簡（#3, 9）においては命令形も使用されている（ただし𐤍𐤏がついている）ことを指摘し、古代イスラエルにおいては下位の者も上位の者に対して意見を述べ、時には批判することさえ許されていたことに注意を喚起している。

²⁷⁶ 同上。

²⁷⁷ Cf. Schniedewind, "Sociolinguistic Reflections on the Letter of a 'Literate Soldier' (Lachish 3)," 163.

両者の間には#4の解釈によっては齟齬が生じる可能性がある（エレミヤ書には「ラキシシュとアゼカが残っている」と書かれているのにラキシシュ書簡#4には「アゼカはもう陥落した」と解釈する余地があるため）。しかしビギン（Z. B. Begin）が提案しているように、前7世紀にユダ人がそこに住んでいたことが考古学的に明らかになったマレシヤでこの書簡が書かれたと考えるなら、アゼカは陥落したのではなく、マレシヤからはそもそも見えないということで、両者の齟齬は解消されうる²⁷⁸。

2.3.5. 小括

ヨシヤ改革の時代は前701年のラキシシュ攻略と前587/86年のラキシシュ破壊の間にあたる。ラキシシュからは直接ヨシヤに言及する碑文などは出土していないが、ヨシヤ改革の前後の状況は、おそらくヨシヤ改革の時代と大きく異なることはないと思われる。そこから得られる主たる情報は、再建されたラキシシュが以前より小規模で人口も少ないこと、そしてユダ王国末期には情報伝達システムが存在し少なくとも砦の司令官たちには読み書き能力があったこと、さらにエレミヤを思わせる親バビロニア派の預言者の存在である。これらの情報からヨシヤ改革の歴史性については積極的な評価を下すことが可能になるが、他方その改革が及んだ範囲については、アラドやメツアド・ハシャブヤフを含まずラキシシュを西の境界と考えるべきであろう。ラキシシュが前701年に破壊された後100年を経ずに再建されたということをもって、ヨシヤ時代のユダの勢力をより広く見積もることも可能ではあるが、しかし再建されたラキシシュは以前のものより小さく人口もまばらであったことを考えると、ヨシヤの勢力が非常に盛んだったようには思えない。ラキシシュはむしろユダ王国の、事実上の勢力の境界をなす地点のひとつであったと考えるのが妥当である。

また *lmlk* 印影、同心円状の刻印、ロゼット印影を持つ壺の把手の分布から得られる知見によると、前8世紀の指標である初期 *lmlk* 印影がラキシシュから大量に発見され、前7世紀前半の指標である後期 *lmlk* 印影および同心円状の刻印がラキシシュからごく少量しか発見されないこと、そして前7世紀後半の指標であるロゼット印影が再びラキシシュで比較的多く（エルサレム、ラマト・ラヘルに次いで第3の量）発見されていることが、ユダ王国の行政システムにおけるラキシシュの地位の変遷を示していると考えられる。前701年のセナケ

²⁷⁸ Ze'ev B. Begin, "Does Lachish Letter 4 Contradict Jeremiah XXXIV 7?" VT 52 (2002): 166-74.

リブによる侵攻以前、ラキシュは王国の主要行政センターであったが、攻略以降はしばらく再建されずに放置され、その行政上の意義もほとんどなくなっていた。しかしおそらくアッシリアの撤退に伴って、ヨシヤ時代に再建される。元の重要性には及ばないまでも、行政センターとしての意義を回復していったと解釈することがゆるされるだろう。ラキシュは、書簡の転送共有システムの存在といった間接的な証拠からのみならず、ロゼット印影を持つ壺の把手の存在（と量）といった直接的な証拠からも、ヨシヤ改革の頃に行政的重要性をある程度回復した証拠を提供しているといえる。

2.4. 小括

以上「ヨシヤの改革」研究に際してしばしば「証拠」としてとりあげられるメツアド・ハシャブヤフ、アラド、ラキシュについて概観したが、ラキシュのデータから多少積極的な解釈を引き出せる以外には、ほとんど有意な要素が見いだせなかった。聖書考古資料からは茫漠としたヨシヤ改革の像を得る以上のことができない。改革の歴史性を否定する必要まではないが、「実証的アプローチ」からの果実を得ることは今のところ非常に難しいといわざるをえない。しかし将来的には画期的な発見がある可能性もあるので、聖書考古学の成果についても目配りを継続すべきである。

3. タイナト版「エサルハドン王位継承誓約文書 (ESOD)」公刊後のヨシヤの改革研究 「エサルハドン王位継承誓約文書 (ESOD)」の「申命記 (Dt.)」への直接的影響関係再考

279

3.1. ESOD と Dt.を比較する目的

本章の目的は、タイナト版 ESOD の発見による新知見を受けて、当該文書と周辺状況がヨシヤの改革あるいは申命記改革と呼ばれる歴史的事象に与えた影響を再検討することである。ここでの課題は ESOD の文献学的研究や申命記の文献学的研究そのものというよりは、ヨシヤ改革の宗教史的研究である。そしてその際「ESOD が申命記に何らかの影響を与えた」という自明の事柄（それを積極的に評価するか消極的に評価するかに関わらず、両テキストに似た記述が見られることを否定する者はいない）や、両テキストの間に引用にあたって使用されることがある「交差的引用」というレトリック自体を問題としているわけでもない。あえて言うとするれば、そのレトリックに新しい意味を見出す試みである。

さてタイナト後の現在旧約聖書学の世界では ESOD の申命記に対する影響を重要であるとみなす一部の研究者²⁸⁰と、それに反対する研究者²⁸¹が激しく対立している。ESOD の影響を過小評価しようとする研究者たちは Oral Tradition やレヴァント全体の文化など、特定不能の大きなカテゴリーにこの論点を吸収することに意を注いでいる。しかし筆者は、なお直接的影響関係を示すことは可能であると考え。それはテキストの形式的特徴を探ることで見出されるであろう。さらに ESOD と申命記の対応関係を再検討する必要がある。その際、渡辺和子の業績を参照することが必要条件となる。

²⁷⁹ 本章は拙論「タイナト版エサルハドン王位継承誓約文書公刊後における『ヨシヤ改革』についての研究—『エサルハドン王位継承誓約文書』の『申命記』への直接的影響関係再考—」『基督教學』第 54 号、2019 年、1-24 頁 [査読有り] を改訂したものである。

²⁸⁰ Cf. Eckart Otto, *Deuteronomium 12-34, Erster Teilband: 12, 1- 23, 15* (Freiburg: Verlag Herder, 2016); Thomas Römer (tr. by R. Geuss), *The Invention of God* (Cambridge: Harvard University Press, 2015) esp. 204; H. U. Steymans, “Review of C. L. Crouch, *Israel and the Assyrians: Deuteronomy, the Succession Treaty of Esarhaddon, and the Nature of Subversion*,” *RBL* (2016), <http://www.bookreview.org>, (7 pages)

²⁸¹ Cf. Crouch, *Israel and Assyrians*; Laura Quick, *Deuteronomy 28 and the Aramaic Curse Tradition* (Oxford: Oxford University Press, 2018); J. M. Hutton and C. L. Crouch, “Deuteronomy as a Translation of Assyrian Treaties: An Optional Translation Approach,” *HBAI* vol. 7 no.2 (2018): 201-252.

3.2. ESOD 研究への渡辺和子の貢献

渡辺和子は、この 30 年以上一貫して ESOD 研究の最先端を切り開いてきた研究者であり、ESOD 研究の第一人者であるといえる。ヨシヤの改革に深い関係を持つ申命記への影響という筆者の問題関心の範囲において、ESOD 研究に対する彼女の多大な貢献の核は 1) ESOD が宗主権条約ではなく、アデー（誓約）であることを証明したこと 2) ESOD が神の印章を押された「天命の書板」の機能を持っていることを認識したこと 3) ESOD の複雑な構成を論理的に整理し難解な新アッシリア語（文法）、とくにその条件節における動詞の直説法と接続法の用法を言語学的に正しく解明したことにある。

1) ESOD はアデーである

ESOD は宗主権条約であると誤解されていたが、実際には「アデー（誓約）」であるということを渡辺は博士論文において明らかにした²⁸²。

ESOD の各書板のすべては、アッシリアの国家神アッシュルの三つの印章によって押印された（…）原文書としての法的文書であり、「表題」にあるように「アデー」と名付けられている。メソポタミアには「誓い」を指す一般的な語として「マーミートゥ」（*māmītu*）があったが、それは、個人的な「誓い」をも意味し、また「誓い」が守られなかった場合に降りかかる「呪い」の意味でも用いられた。しかし「アデー」は個人的な事柄ではなく、社会的な事柄に関しての、ある種の儀礼的行為を伴う誓約による取決めを意味している。また「アデー」はその内容を記した「誓約文書（の書板）」も意味し得る（…）。²⁸³

「アデー」が用いられるのは「社会的な事柄」を対象とする場合であるという点が重要だと思われる。特定の王位継承を関係者すべてが承認するというのは、完全に社会的な事柄であるからである。

ヨシヤ改革が行ったと記録されている、ヤハウエとイスラエルの民との「社会契約（誓約）」締結（王下 23：1-3）には、ESOD が新アッシリア帝国内のすべての人（書板の実際の名宛人は属王や代官だとしても）に対してアッシュルバニパルと社会契約（誓約）

²⁸² Watanabe, *Die adê-Vereidigung anlässlich der Thronfolgeregelung Asarhaddons*.

²⁸³ 渡辺、『エサルハドン王位継承誓約文書』、13 頁。

を結ぶという形式が影響を与えていると考えられる。

2) ESOD は「天命の書板」である

渡辺は 1985 年以来 ESOD には神アッシュルの印章が押してあることを指摘してきたが、それゆえに ESOD は「天命の書板」（最高神が神々や人々の運命を記した書板で、ひとつしか存在しないものであり、毎年新年祭で更新されることになっていた）ではないかという提案もなされていた。この点に関して渡辺は 2010 年になって、明白な認識を示した。それは、ESOD は一部ではなく複数部存在するなど、典型的な「天命の書板」の特徴と完全に一致するわけではないが、概念を拡張した「天命の書板」であるという認識である。つまり、たとえ似た書版が多数存在するとしても、神アッシュルの印章自体がそれぞれを「原本」にし、唯一のものにするのである²⁸⁴。さらに、名宛人が同じものもなかったはずであるから、その意味でもそれぞれが唯一の文書であると考えられる。さらにごく最近渡辺はそのような「天命の書版」が全世界の人々に神として守るべきものと考えられるようになった、という見解を提出している²⁸⁵。

ESOD は興味深いことに、その聖なる書板を各々が自分の神と同様に扱うよう要求しており（タイナト版で判明した部分）、実際テル・タイナトでも至聖所から発見されている。聖書ではエルサレム神殿から「発見された」ことになっている文書が、聖なる文書としてその内容の遵守を要求している（王下 22：8－10）。物語では、それを知ったヨシヤ王があわてふためいてそれに従おうとしている（同 11 節以下）。「聖なる文書」（聖書）という概念に聖書学者が慣れ過ぎているため見落としがちだが、現在聖書と呼ばれる文書群の成立より前に、アッシリアには「天命の書板」というものが存在していたのである。つまり、そのような「先例」にならって、原申命記が起草され、さらに権威づけのため神殿から発見されたと報告されたものと考えられる。

²⁸⁴ 渡辺和子、『『エサルハドン王位継承誓約文書』にみる法的・宗教的・政治的意味合い』*The Journal for the Study of Humans and Culture* 17（論文：日本語・雑誌名：ハングル）, Institute for Humanities and Social Science, Dong-eui University, Pusan, Korea, 2010 年、167-99 頁、180－93 頁参照。

²⁸⁵ 2019 年 9 月の日本宗教学会での発表を参照。2020 年 3 月出版予定の『宗教研究』別冊紀要号に要旨が掲載される予定である。

3) ESOD の構成および言語学的問題の解決

とくに新アッシリア語における「接続法」の用法についての指摘が新しい地平を開いた²⁸⁶。「(あなた方は誓う、) 彼に (決して) 敵対しないことを」あるいは「もしあなたが、彼に敵対するならば」などと訳されてきた接続法の部分を「もし万が一にもあなたが彼に敵対するならば」と、話者の立場からしてあつてはならない、というニュアンスを反映させて正しく訳したのである。実は 1987 年以来渡辺はこのように解釈してきたのだが、ゲセニウス以来の伝統²⁸⁷が、渡辺の提案を理解しがたいものにしてきたといえる。最近になってやっと渡辺の提案が受け入れられる素地が整いつつある。

要するに旧約聖書学がアッカド語研究に与えた悪影響が、アッカド語研究者によってただされ、旧約聖書学に逆輸入される、という事態が生じているのである。この言語学的理解が共有されるようになれば、旧約聖書研究にも大きな変化がもたらされることであろう。この業績は、渡辺の校訂および翻訳についての信頼性を非常に高めるものであると考えられる。

以下本章では ESOD 研究を高い水準で継続してきた渡辺校訂訳を使用しつつ、新たな提案を行うことにしたい。

²⁸⁶ 渡辺和子「『エサルハドン王位継承誓約文書』のタイナト版による新知見と再検討―条件節における接続法の用法を中心に―」『オリエント』第 56 号、2013 年、55-70 頁；渡辺、『エサルハドン王位継承誓約文書』、17-18 頁参照。

²⁸⁷ ヘブライ語の文法書として権威のある E. Kautzsch ed. *Gesenius' Hebrew Grammar* (Oxford: Clarendon, 1910) の § 149 (471-72) は「誓いあるいは断言」を表現する場合には、通常「もし～なら」と訳される אם を אם לא “certainly not” (通常の訳「もし～ないなら」よりさらに強く「確かに～ない」) として解釈することを提案している。このゲセニウスの提案が同じセム語であるアッカド語文法書にも受け継がれ、長年正しい認識を妨げてきたのである。

3.3. 交差的引用あるいは転位

逐語的引用の他、聖書テキスト間の引用時に使用される “inverted quotation²⁸⁸” 「交差的引用」についてのサイデル (M. Seidel²⁸⁹)、ベーンチェス (P. C. Beentjes²⁹⁰)、レヴィンソン (B. M. Levinson²⁹¹) らの知見を援用すると、28 章はもちろん、類似が明白ではなかった 13 章にも、直接的引用関係が認められることが明白となる。それゆえはじめに 28 章を、次に 13 章と ESOD の関連を精査することにする (網羅的であるために、ここで 6:4-5 にも触れる。ただしこの部分については別の考察が必要とされるので、章を改めて ESOD との並行関係が認められることについて論じる)。

現在、申命記の成立時期との関連で、申命記と ESOD の並行関係をどう見るかが争われている²⁹²。以下、具体的に ESOD と申命記の対応関係を見ていくことにしたい。

²⁸⁸ “Inverted quotation” (P. C. Beentjes) は直訳すると「逆にした引用」であり、たとえば AB を BA にして引用することである。テキスト間の現象ではあるが、聖書にしばしば現れる交差構造との類似から、筆者は「交差的」という言葉を使用している。

²⁸⁹ Moshe Seidel, “Parallels between Isaiah and Psalms,” *Sinai* 38 (1955/6): 149-72, 229-40, 272-80, 335-55 (Hebrew). この論文においてサイデルは、イザヤ書と詩篇の間の引用において要素の順序が入れ替わることを指摘している。

²⁹⁰ Pancratius C. Beentjes, “Inverted Quotations in the Bible: A Neglected Stylistic Pattern,” *Bib.* 63, (1982): 506-23. この論文が指摘しているのは、サイデル同様、聖書テキスト間の引用においてしばしば「逆にした引用」が見られるということである。

²⁹¹ Cf. Levinson, “Esarhaddon’s Succession Treaty as the Source for the Canon Formula in Deuteronomy 13:1.” おそらく Levinson がはじめて、聖書テキストと聖書外テキストの引用関係について交差性を指摘した。

²⁹² たとえば Karen Radner, “Assur’s “Second Temple Period”: The Restoration of the Cult of Aššur, c. 538 BCE” in *Herrschaftslegitimation in vorderorientalischen Reich der Eisenzeit*, eds. Ch. Levin and R. Müller (Tübingen: Mohr Siebeck, 2017): 77-96 は、最近ペルシア時代のアッシュル祭儀の復興について論じているが、注 1 (77) に明白であるように、これはヨシヤの改革の歴史性を否定しペルシア時代に申命記が成立したと考える傾向にあるドイツ旧約学が、なぜユダ王国亡き時代に申命記が ESOD の影響を受けたのかを説明しよう (アッシリア学者に説明してもらおう) としたものと考えることができる。タイナト版 ESOD がヨシヤ改革に (歴史的に) 影響した蓋然性を非常に高めたからである。

3.4. ESOD と申命記 (Dt.²⁹³) の対応関係

3.4.1. ESOD§18 と Dt. 6:4-5

ESOD§18: 198-211 トランスクリプション (読み下し) ²⁹⁴

- a198 *šumma mēmēni ina ekalli bārtu lū ina kala ūmi*
a199 *lū ina kala mūši lū ina ḥarrāni lū ina qab(as)si māti ana*
a200 *Aššur-aḥu-iddina šar māt Aššur ētapaš (/N49D²⁹⁵: ētappaš) a[ttu]nu*
a201 *lā tašamme 'āšu [(šumma)l]ū ina kala ūmi lū ina kala mūši*
a202 *[ina l]ā siminīšu (/ simānīšu) mar'a šipri issu libbi ekalli*
a203 *ina muḥḥi mar'i šarri ittalka mā abūka*
a204 *rēška ittiši mā bēlī lillika*
a205 *attunu lā ta[šamm]e 'āšu lā turammāšu (/ N55F: turammāšunu; 誤記)*
a206 *lā illak [mašsar²]tušu tuda "anā*
a207 *adi issēn ina libbikunu ša bēlšu ira "amūni*
a208 *ina muḥḥi bēt bēlēšu maršaššūni (/ maršaššūni)*
a209 *illakūni ina ekalli šulmu ša šarri (/N55F:i[llakūni ina ekalli ana pānē šarri]³) bēlīšu*
a210 *emmarūni (/ N55F: errabū[ni]) ḥarammēma (/N47C: ḥarammāma) isse mar'i šarri*
a211 *bēlikunu ina ekalli tallakā*

ESOD§18 : 198-211 渡辺訳

¹⁹⁸ もし宮殿の誰かが、昼間でも、¹⁹⁹⁻²⁰¹ 夜間でも、遠征にあっても、国内にあっても、アッシリア王エサルハドンに対する反乱を実行に移した場合に、あなた方は彼に聞いて従ってはならない。(もし) 昼間でも、夜間でも ²⁰² ふさわしくない時に宮殿からの使者が ²⁰³⁻
²⁰⁴ 一人の王子のところに「あなたの父上があなたをお呼びになりました。我が主よ、来てください」と言って来た場合に、²⁰⁵ あなた方は彼に聞き従うな！彼を帰らせる(放免する)

²⁹³ 先に明示したとおり、ヘブライ語テキストについては BHS を使用し、和訳については筆者による試訳を用い、アパラトゥスについては必要な場合に限り言及することとする。

²⁹⁴ 行数の前にある a はアッシリア語を、b はバビロニア語を意味する。

²⁹⁵ トランスクリプションにおける N はニムルド版を意味し、イタリック体である場合にはイラク博物館所蔵、ローマン体である場合には大英博物館所蔵であることを指示する。

な！²⁰⁶⁻²¹¹ 彼（王子）は行くな！あなた方のうちの一人の、その主人を愛し、その主人の家を心配する者（*ša bēlšu ira”amūni ina muḥḥi bēt bēlēšu maršaššūni*）が宮殿に行って彼の主人である王の無事確かめるまで、あなた方は彼（王子）の[警護（？）]を強化しなければならない。その後であなた方はあなた方の主人である王子とともに宮殿に行かなければならない²⁹⁶。

Dt. 6:4-5

שמע ישראל יהוה אלהינו יהוה אחד⁵ ואהבת את יהוה אלהיך בכל לבבך ובכל נפשך⁴
ובכל מאדך

Dt. 6:4-5 試訳

4 聞け、イスラエルよ。ヤハウェ・わたしたちの神はひとり。

5 あなたはヤハウェ・あなたの神を、あなたのすべての心をもって、あなたのすべての魂をもって、あなたのすべての力をもって、愛しなさい。

ここは明白な引用関係が見られない箇所であるが、自分の持てるすべてをかけて（命をかけて）主人を愛する（聞き従う）ようにという内容には並行関係が認められる。ESODにおいては条件節が長く続く傾向がある。もちろん「もし万が一～するならば」、違約罰（「呪い」）が科せられるのである。詳しくは後に扱うが、古代の文脈では、条約や誓約といった「契約」において「愛する」ことは言葉・命令に従うことを意味しているのであって、現在この語を使うときに想定される感情的な愛着を排除するものではないが、基本的に服従を含意している。

3.4.2. ESOD §§63 - 64 と Dt. 28:23-24

§§63-64 トランスクリプション（読み下し）

§63: 526-529

b526 KIMIN²⁹⁷ (.KIMIN) *ilānī mala ina ṭuppi adē anni’e [š]umšunu zakru* KIMIN = 「同じく」

²⁹⁶ 渡辺、『エサルハドン王位継承誓約文書』、208-11 頁。

²⁹⁷ 本文中大文字のアルファベットで記述してある単語はシュメール語を意味する。

a527 *ammar libitti kaqquru lusiqqūnekkunu (/ N27, N35+: lisiqq[ūnekkunu])*

a528 *kaqqarkunu kī parzilli lēpušū mēmēni*

a529 *ina libbi lū lā iparru 'a*

§64: 526-529

a530 *kī ša issu libbi šamā 'ē ša sippari zunnu lā izannunūni (/N27, T²⁹⁸ izannunāni)*

a531 *kī ḥanni 'e zunnu nalšu ina (libbi) eqlātīkunu*

a532 *tamerātīkunu lū lā illak kūm zunni (/ N28C: zunnu; N27: [na]lšu)*

a533 *pe 'nāti (/ N27: peḥn[āti]) ana mātīkunu liznunā*

§63: 526-529 渡辺訳

⁵²⁶ 同じく（、同じく）、その名をこの書に挙げられたすべての神々が、⁵²⁷ あなた方に対して、一つの煉瓦のごとく土地を狭くするように。⁵²⁸⁻⁵²⁹ あなた方の土地を鉄のごとくするよ
うに。（そして）何もそこから芽を出さないように²⁹⁹。

§64 : 530-533

⁵³⁰ 青銅の天からは雨が降らないごとく、⁵³¹ このごとく雨（と）露があなた方の畑や⁵³² 草
地に行かないように。雨の代わりに⁵³³ あなた方の国に炭が降るように³⁰⁰。

Dt. 28:23-24

וְהָיוּ שְׁמִיךְ אֲשֶׁר עַל־רֹאשְׁךָ נַחֲשֶׁת וְהָאָרֶץ אֲשֶׁר־תַּחְתֶּיךָ בְּרוּץ²⁴ יִתֵּן יְהוָה אֶת־מִטְרֵךְ אֶרֶץ־
אֲבָק וְעֹפֶר מִן־הַשָּׁמַיִם יִרְדּוּ עֲלֶיךָ עַד הַשְּׁמֹדךָ

Dt. 28:23-24 試訳

23 あなたの頭の上の天は青銅となり、あなたの下の地は鉄となる。

24 ヤハウエはあなたの地に埃を雨（のように）与え、塵はあなたを滅ぼすまで、あなたの
上に天から降る。

²⁹⁸ タイナト版。

²⁹⁹ 渡辺、『エサルハドン王位継承誓約文書』、232-33 頁。

³⁰⁰ 渡辺、『エサルハドン王位継承誓約文書』、232-33 頁。

ここでは要素が3つあるためか、少し違った形の引用になっている。約束を破った場合の ESOD の呪いでは1) (あなた方の)土「地」(*kaqqarkunu*) が「鉄」(*parzilli*) のようになる 2) 天(*šamā*) が青銅(*sippari*) のようになる 3) 雨(*zunnu*) の代わりに炭(*pe'nāti*) が降る(*liznunā*)、という順序であるが、申命記においてはそれが1) (あなたの) 天(*שמ״ך*) が青銅(*נחשת*) となる 2) 地(*הארץ*) が鉄(*ברזל*) のようになる 3) 埃(*אבק*) や塵(*עפר*) が雨(*מטר*) のように降る(*יתן*) (*ירד*) というの順序になっており、1) と2) が逆転している。3) の内容はほぼ同じと考えられるが、厳密に言うと同じではなく、ESOD では「雨の代わりに炭が降る」のに対し申命記では「埃」が「(雨のように) 与え」られ、「塵」が「降る」のであるが、引用関係は明らかであろう。

3.4.3. §65 (534-536) と Dt. 28:25

§65: 534-536 トランスクリプション (読み下し)

a534 *kī ša annuku ina pān(ē) iṣāti lā izzazzūni*

a535 *attunu ina pān(ē) nak(i)rīkunu l[ā t]azzazā mār'ēkunu*

a536 *mār'ātēkunu ina qātēkunu lā tašabbatā*

§65: 534-536 渡辺訳

⁵³⁴ 錫が火の前でもちこたえられないごとく、535 あなた方は敵の前で立っているな！ あなた方は息子たち⁵³⁶ と娘たちをあなた方の手でつかむな³⁰¹！

Dt. 28:25

²⁵ יתנך יהוה נגף לפני איבך בדרך אחד תצא אליו ובשבעה דרכים תנוס לפניו והיית לזעוה
לכל ממלכות הארץ

Dt. 28:25 試訳

25 ヤハウェはあなたの敵の前で、あなたに敗北（撃破されること）を与える。あなたは彼に向かってひとつの道へ出て行くが、七つの道を通して彼の前から逃げる。あなたは地のすべての王国の恐怖となる。

³⁰¹ 渡辺、『エサルハドン王位継承誓約文書』、234-35 頁。

この箇所は直前の部分の続きである。ESOD の呪いにおいて使用されているたとえば「鉄・青銅・炭・錫 (*annuku*)」と同じ金属のカテゴリーを用いた表現で続いている³⁰²ことから、ESOD の文には内的一貫性を読み取ることができる。申命記の方はそれをなぞっているが、「錫」についての言及はなく、内容的に ESOD の「敵の前でもちこたえられなくなれ！」(*attunu ina pān(ē) nak(i)rīkunu l[ā t]azzazā*) と同義の「ヤハウエはあなたの敵の前であなたに敗北（撃破されること）を与える（יתנך יהוה נגף לפני איביך）ことを扱っている。

3.4.4. §41 と Dt. 28:26

§41: 425-427 トランスクリプション（読み下し）

b425 *Ninurta ašarēd ilānī ina šiltāḥīšu šamri lišamqitkunu (/ N56: lušamqit[kunu])*

b426 *dāmīkunu limalla šēru šīrkunu arū zību*

b427 *lišākil (/N28B: lušākil)*

§41: 425-427 渡辺訳

⁴²⁵ ニヌルタ、神々の先頭を行く者が、彼の怒りの矢によってあなた方を打ち倒すように。

⁴²⁶ あなた方の血で野を満たすように。あなた方の肉を鷲と禿鷹に ⁴²⁷ 食べさせる（=啄ま^{ついで}せる）ように³⁰³。

Dt. 28:26

והיתה נבלתך למאכל לכל-עוף השמים ולבהמת הארץ ואין מחריד²⁶

Dt. 28:26 試訳

26 あなたの屍は、すべて空の鳥と地の獣の食べ物となり、（その鳥獣を）驚かす者はない。

³⁰² Cf. Steymans, *Deuteronomium 28 und die adêzur Thronfolgeregelung Asarhaddons*, 102.

Steymans も金属のカテゴリーについて記述している。

³⁰³ 渡辺、『エサルハドン王位継承誓約文書』、224-25 頁。

ESOD と申命記はほぼ同じ呪いを扱っているが、厳密に言えば、ESOD が「鷲と禿鷹」(*arû zību*) によって死体を啄まれることになっているのに対して申命記の方は「(すべての空の) 鳥と地の獣」(לכל־עוף השמים ולבהמת) に食べられるとしている³⁰⁴。

3.4.5. ESOD §§38A-40 と Dt. 28:27-29

§38A: 418A-418C トランスクリプション (読み下し)

b418A *Anum šar ilānī mursu tānīhu di 'u diliptu*

b418B *nissatu lā tūb šīri (/ N27 : zēri) eli naphar*

b418C *bītātīkunu lišaznin*

§39

b419 *Sīn nannar šamē u eršetī saḥaršubbū*

ab420 *liḥallipkunu ina pān(ē) ili (/ilānī) u šarri e<r>ēbkunu (/N29, N56: erābkunu) ayi iqbi*

b421 *kīma (/ kī) serrēme (/N56: serrāme) šabīti šēru (/N56: ina šēri) rupdā*

§40

b422 *šamaš nūr šamāmī (u) qaqqari dīn kitti (/N27: mēšarī)*

b423 *ayi idīnkunu nitil īnīkunu lēšīma (/N27: liššīma)*

b424 *ina ekletti/e itallakā*

§§38A-40 渡辺訳

§38A: 418A-418C

418A アヌ、神々の王が、病気、辛苦、頭痛、不眠、418B 嘆息、不健康を418C あなた方のすべての家の上に、(雨のごとく) 降らせるように。

³⁰⁴ 旧約聖書には他にも類似の表現が複数ある(サム上 17:44, 46、サム下 21:20、詩 79:2、エレ 7:33、15:3、16:4、19:7、34:20、エゼ 29:5 など)ので、ESOD からの直接的引用の証拠とはならないかもしれない。しかし、あるテキストを受容する際、元来親しんできた表現に変えるということも充分考えられる。いずれにせよ、どちらがそのイメージの「起源」であるかという問題は未決定であるし、それはテキスト間の影響関係の判断には影響しない。

§39: 419-421

⁴¹⁹ スィン、天と地を照らす者が、あなた方にサハルシュブー病（＝ある種の皮膚病）を⁴²⁰
着せる（サハルシュブー病に罹らせる）ように。あなた方が神々と王の前に出る許可を与
えない（＝出ることを命じない）ように。⁴²¹（そして）野ロバやガゼルのごとく荒野を走
りまわれ！

§40: 422-424

⁴²²⁻⁴²³ シヤマシュ、天と地の光が、（真理に基づいた）公正な裁判（によって）あなた方を
裁かないように。あなた方の視力を曇らせるように。（そして）⁴²⁴ 闇の中をさまよい歩け！

305

Dt. 28:27-29

יִכְכָּה יְהוָה בְּשַׁחֲתֵי מִצְרִים וּבַעֲפָלִים וּבִגְרָב וּבַחֲרָס אֲשֶׁר לֹא־תֹכֵל לְהִרְפָּא²⁸ יִכְכָּה יְהוָה
בְּשִׁגְעוֹן וּבַעֲוֹרוֹן וּבַתְּמָהוֹן לִבָּב וְהָיִית מִמַּשֵּׁשׁ בַּצְּהָרִים כֹּאֲשֶׁר יִמַּשֵּׁשׁ הָעוֹר בְּאַפְלָה וְלֹא תִצְלִיחַ
אֶת־דֶּרֶכְכִּי וְהָיִית אֲך עֲשׂוֹק וּגְזוּל כָּל־הַיָּמִים וְאִין מוֹשִׁיעַ

Dt. 28:27-29 試訳

27 ヤハウエはあなたを癒されることができないエジプトの腫物（שחין）、腫物³⁰⁶、皮癬、
発疹で撃つ。

28 ヤハウエはあなたを狂気と盲目と心の混乱で撃つ

29 あなたは、盲目の者が暗闇の中で手探りするように、真昼に手探りする者になる。あな
たはあなたの道で栄えることがなく、生涯虐げられ略奪される者になり、救う者はいな
い。

ESOD §§38A-40 と Dt. 28:27-29 は、順序が入れ替わっているだけで構成要素はほとんど同
じである。ESOD では 1) 「病氣（muršu）、辛苦（tānīhu）、頭痛（di'）、不眠（diliptu）、嘆

³⁰⁵ 渡辺、『エサルハドン王位継承誓約文書』、224-25 頁。

³⁰⁶ ケティーフ（עפלים）では「丘」「砦」という意味になるが、ケレー（טהורים）では「腫物」「痔」という意味（複数形）になる。ケレーの読みをとる。

息 (nissatu)、不健康 (lā tūb šīri)」つまり「心身の不健康」 2) 「サハルシュブー病 (saḥaršubbū)」要するに「皮膚病」 3) 「(真理に基づいた) 公正な裁判 (によって) あなた方を裁かない」 (dīn kitti (/N27: mīšari) ayi idīnkunu) こと、つまり「不公正」 4) 「あなた方の視力を曇らせ」 (niṭil inīkunu lēšīma (/N27: liššīma)) 「暗闇の中をさまよい歩」させる (ina ekletti /e itallakā) こと、すなわち「盲目」という順序で要素が現れる。それに対して Dt. 28:27-29 では、1) 「エジプトの腫物」(שחין מצרים)、腫物(טהורים)、「皮膚」(גרם)、「発疹」(חרס)、つまり「皮膚病」 2) 「狂気」(שגעון) 3) 「盲且 (העור) の者が暗闇 (אפלה) で手探りするように真昼に手探りする」こと、つまり「盲目」 4) 「生涯虐げられ (עשוק) 略奪される者 (גזול) となる」こと、すなわち「不公正」となっている。アヌのもとらす心身の不健康(「病気、辛苦、頭痛、不眠、嘆息、不健康」)を狂気と同定できるならば 1) の要素と 2) の要素は順序が入れ替わっているといえる。そして 3) と 4) の要素は明白に順序が入れ替わっている。つまり交差的引用が観察できる。

3.4.6. ESOD §42 と Dt. 28:30-33³⁰⁷

ESOD §42: 428-430 トランスクリプション (読み下し)

b428 Delebat nabāt kakkabāni ina niṭil inīkunu hīrātīkunu

b429 ina sūn nak(i)rīkunu lišanīl mārīkunu

b430 ayi ibēlū būtkun nak(i)ru aḥū liza" iza mimmūkun

ESOD §42: 428-430 渡辺訳

⁴²⁸ 金星、星のなかでひときわ輝く者が、あなた方の目前で、あなた方の妻を ⁴²⁹ あなた方の敵の腰に寝かせるように。 あなた方の息子たちは ⁴³⁰ あなた方の家を所有しないように。 見知らぬ敵があなた方の財産を分けるように。 ³⁰⁸

³⁰⁷ Steymans, *Deuteronomium 28 und die adē zur Thronfolgeregelung Asarhaddons*, 107 は、神々と彼らのもとらす呪いについて触れているが、交差的引用については何も述べていない。

³⁰⁸ 渡辺、『エサルハドン王位継承誓約文書』、224-25 頁。

אִשָּׁה תֹאֲרֶשׁ וְאִישׁ אַחֵר יִשְׁגְּלֶנָה בֵּית תְּבִנָּה וְלֹא־תִשָּׁב בּוֹ כֶּרֶם תִּטַּע וְלֹא תַחלֵּלְנוּ ³¹ שׁוֹרֶךְ
טְבוּחַ לְעֵינֶיךָ וְלֹא תֹאכַל מִמֶּנּוּ חֶמֶרֶךְ גְּזוּל מִלִּפְנֶיךָ וְלֹא יִשׁוּב לָךְ צֹאנְךָ נִתְּנוֹת לְאִיבֶיךָ וְאִין לָךְ
מוֹשִׁיעַ ³² בְּנִיךָ וּבִנְתֶיךָ נִתְּנִים לָעַם אַחֵר וְעֵינֶיךָ רְאוּת וְכָלֹת אֲלֵיהֶם כָּל־הַיּוֹם וְאִין לֹאֵל יִדְּךָ ³³ פְּרִי
אֲדָמְתְּךָ וְכָל־יִגְיעֶךָ יֹאכַל עִם אֲשֶׁר לֹא־יָדַעְתָּ וְהָיִיתָ רֶק עֹשׂוֹק וְרִצּוֹן כָּל־הַיָּמִים

Dt. 28:30-33 試訳

- 30 あなたが女性と婚約しても、他人が彼女と寝る³⁰⁹。あなたが家を建てても、その中に住めない。あなたが葡萄畑を作っても、それを冒瀆することがない³¹⁰。
- 31 あなたの牛が、あなたの目の前で屠られても、あなたはそれを食べられない。あなたのロバがあなたの前から略奪されても、それはあなたのところに戻らない。あなたの家畜の群れはあなたの敵たちに与えられ、あなたを救う者はない。
- 32 あなたの息子たちと娘たちは他の民に渡され、あなたの目は一日中見て衰えるが、あなたの手に力はない。
- 33 あなたの土地の産物とあなたの労苦のすべては、あなたの知らない民が食べる。あなたはただ、生涯虐げられ抑圧される。

ESOD では 1) 「あなた方の妻 (*hīrātikunu*) をあなた方の敵の腰に (*ina sūn nak(i)rīkunu*) 寝かせる (*lišanīl*)」こと、すなわち「妻の凌辱」 2) 「あなた方の息子たち」 (*mārīkunu*) が「あなた方の家を」 (*būtkun*) 「所有せ」ず (*ayi ibēlū*) 「見知らぬ」 (*aḥū*) 「敵」 (*nak(i)ru*) が「あなた方の財産を」 (*liza"iza*) 「分ける」 (*mimmûkun*) こと、つまり「財産収奪」という順序で、Dt.でも 1) 「あなたが女性と婚約しても」 (אִשָּׁה תֹאֲרֶשׁ) 「他人が彼女と寝る」 (אִישׁ אַחֵר יִשְׁגְּלֶנָה) こと、すなわち「妻(婚約者)の凌辱」 2) 「あなたが家を建ててもその中に住め」ず (בֵּית תְּבִנָּה וְלֹא־תִשָּׁב בּוֹ)、「あなたの家畜の群れはあなたの敵たちに

³⁰⁹ ケティーブでは יִשְׁגְּלֶנָה 「彼女を略奪する」だが、ケレーは יִשְׁכַּבְנָה 「(彼女と)寝る」である。ケレーにしたがう。『サマリア人のヘブル五書』・偽ヨナタンタルグム・ウルガータは יִשְׁכַּב עִמָּה 「彼女と寝る」であり、いくつかの写本・タルグムも、ケレーのように読む。

³¹⁰ 「葡萄を冒瀆する」というのは、収穫後足で葡萄を踏むことを指しているようだ。したがって、「葡萄を収穫し使う」の意である。山我哲雄・鈴木佳秀訳『民数記 申命記』岩波書店、2001年、341頁(鈴木担当部分)参照。

与えられる」(צִאנָךְ נִתְּנוֹת לְאִיבֶיךָ) などの「財産収奪」というように要素の順序は同じである。

3.4.7. ESOD §47 と Dt. 28:53-57³¹¹

ESOD §47: 440-452 トランスクリプション (読み下し)

b440 *Adad gugal šamê eršeti zunnu šamūte ina māṭikunu liprus*

b441 *tamerātīkunu lizzammā ana {la} ṭābtu*

b442 *ina riḥši dannī mātkunu lirḥiṣ erbū*

b443 *muṣaḥḥir māti ebūrkunu līkul ikkil erī u tinūri*

ab444 *ina bītātīkunu ayi ibši uṭṭutu ana ṭe'āni (/N50A: ṭeyāni)*

a445 *lū (N27: li, 誤記) taḥliqakkunu kūm uṭṭiti eṣmātīkunu*

a446 *mar'ēkunu mar'ātēkunu liṭēnū kiṣru ša ubānīkunu*

a447 *ina lēši lū lā iṭabbu qāqānu issu libbi aṣūdātīkunu lēšu*

ab448 *lēkul ummu eli mārīša bābša līdil*

b449 *(ina būrīkunu) šīr mārīkunu aklā ina bubūti*

b450 *ḥuṣaḥḥi amīlu šīr amīli līkulū amīlu mašak amīli*

b451 *lillabiš šīrkunu kalbī šaḥī lēkulū*

b452 *eṭemmakunu pāqīdu nāq mē ayi irši*

ESOD §47: 440-452 渡辺訳

⁴⁴⁰ アダド、天と地の運河の監督者が、あなた方の地から雨 (ŠĒG = *šamūte*) を断つように。

⁴⁴¹ あなた方の畑は (すべて) 好ましいもの (*ṭābtu*) に欠けているように。⁴⁴²⁻⁴⁴³ 大洪水があなた方の国を水浸しにするように。国を小さくするイナゴがあなた方の収穫を食い尽くすように。碾き臼とパン焼きかまどの音が⁴⁴⁴ あなた方の家に無いように。碾くべき穀物が⁴⁴⁵ あなた方に無くなるように。穀物の代わりに、⁴⁴⁶⁻⁴⁴⁷ あなた方の息子たちと娘たちが、あなた方の骨を碾くように。指の第一関節 (でさえ) も、こね粉の中に沈まないように。

³¹¹ Cf. Steymans, *Deuteronomium 28 und die adē zur Thronfolgeregelung Asarhaddons*, 183.

Steymans は、申 28 : 53-57 を例として挙げつつ、食人のモチーフはアッシリアの契約 (誓約) における呪いのリストに属するものだ、と述べている。

カカーヌ鳥 (*qaqānu*) があなた方の器からこね粉を⁴⁴⁸ 啄むように。母親は自分の娘の前で
 さえ、戸に^{かんぬき} 門 をかけるように。⁴⁴⁹ あなた方は空腹のために、あなた方の息子たちの肉を
 食べよ！飢餓⁴⁵⁰ と欠乏のために、人間が人間の肉を食べるように。人間が人間の皮を⁴⁵¹
 着るように。あなた方の（死体の）肉を犬と豚が食べるように。⁴⁵² あなた方の死霊は世話
 をする者 (*pāqidu*)、水を注ぐ者 (*nāq mē*) を得ないように³¹²。

Dt. 28:53-57³¹³

53 ואכלת פרי-בטנך בשר בניך ובנתיך אשר נתן-לך יהוה אלהיך במצור ובמצוק אשר-יציק
 לך איבך⁵⁴ האיש הרך בך והענג מאד תרע עינו באחיו ובאשת חיקו וביתר בניו אשר יותיר⁵⁵
 מתת לאחד מהם מבשר בניו אשר יאכל מבלי השאיר-לו כל במצור ובמצוק אשר יציק לך
 איבך בכל-שעריך⁵⁶ הרכה בך והענגה אשר לא-נסתה כפ-רגלה הצג על-הארץ מהתענג
 ומרך תרע עינה באיש חיקה ובבנה ובבתה⁵⁷ ובשליתה היוצת מבין רגליה ובבניה אשר תלד
 כִּי־תאכלם בחסר-כל בסתר במצור ובמצוק אשר יציק לך איבך בשעריך

Dt. 28:53-57 試訳

- 53 あなたは、あなたの神ヤハウエが、あなたに与えた、あなたの胎の実を、あなたの息子
 たちとあなたの娘たちの肉を食べる。あなたの敵があなたを苦しめる包囲と窮乏の中で。
- 54 あなたの内の優美で非常に上品な男、彼の目が、彼の兄弟、彼の懐の妻、彼が生かして
 おいた残りの息子たちを苦しめる。
- 55 彼が食べている彼の息子たちの肉を誰にも与えず、残すことがない。あなたのすべての
 門において、あなたの敵があなたを苦しめる包囲と窮乏の中で。
- 56 上品で優美なために、足の裏を地に置こうともしない、あなたの内の優美な³¹⁴女が窮乏
 に陥れる。彼女の眼が、彼女の懐の夫、彼女の息子、彼女の娘を苦しめる。

³¹² 渡辺、『エサルハドン王位継承誓約文書』、226-27 頁。

³¹³ Cf. Steymans, *Deuteronomium 28 und die adē zur Thronfolgeregelung Asarhaddons*, 352.

Steymans は食人について、アッシリアのモティーフ、申命記の呪いのリストの他、本論文
 後述のレビ記における呪いのリストとの並行性にも触れており、アッシリアの伝統からの
 影響関係を見ているようだ。

³¹⁴ マソラ本文は「優美な」であるが、七十人訳はこれに σφόδρα = מאד 「非常に」を加え
 る。

57 彼女は、すべての欠乏の中で、彼女の足の間から出た後産や、彼女が産んだ彼女の子らを密かに食べる。あなたの門において、あなたの敵があなたを苦しめる包囲と窮乏の中で。

ESOD では自然災害によって食糧不足がおこり 1) 「母親は自分の娘の前でさえ、戸に門をかける」 (*ummu eli mārīša bābša lēdil*) というのは、つまり食糧を子にさえ与えずに食べるため、親が子を「疎む」ことであり 2) 「あなた方は空腹のために、あなた方の息子たちの肉を食べよ!」 (*ina būrikunu šīr mārīkunu aklā ina bubūti*) 「…人間が人間の肉を食べるように」 (*amīlu šīr amīli likul*)、すなわち「食人」という順序になっている。これに対して Dt. では、敵の包囲によって食糧不足がおこり 1) 「あなたは、あなたの胎の実を、あなたの息子たちとあなたの娘たちの肉を食べる」 (ואכלת פרי־בטנך בשר בניך ובנותיך) こと、つまり「食人」 2) 「あなたの内の優美で非常に上品な男、彼の目が、彼の兄弟、彼の懐の妻、彼が生かしておいた残りの息子たちを苦しめ」 (האיש הרך בך והענג מאד תרע עינו) (באחיז ובאשת חיקו וביתר בניו אשר יותיר הרכה בך והענגה אשר לא־נסתה כפ־רגלה הצג) (על־הארץ מהתענג ומרך תרע עינה באיש חיקה ובבנה ובבתה) すなわち「子らを疎む」こと、という順序になっており、明白に交差している。ただ食糧不足という事態は同じだが理由が違っている。ESOD は旱魃・大洪水・イナゴの害を挙げているが、Dt. は戦争状態を想定しているようだ。これはおそらくイスラエルがたびたび周囲の強国による攻囲を経験していたからであろう。前 701 年のセナケリブによるラキシシュ攻略とエルサレム攻囲がまだ生々しい記憶として残っていた頃ならなおさらである。食糧をめぐって親が子を退けるのは同じだが、ESOD では「疎み」が先に来て「食人」が後にあるが、Dt. では「食人」が先に来て「疎み」が後にあるところが逆転しており、交差的引用となっている。また Dt. は主体を「優美な男」と「優美な女」に分けて詳細に子を退け、子を食べること（女性は「後産」まで独占する）を描写している。「優美な」という形容によって、窮乏がさらに強調される。しかし死者崇拝を禁じる Dt. には、ESOD にある死後犬と豚に食べられることや死後の供養をしてもらえないこと（世話をしてもらえず水を注いでももらえないこと）は見られない。死者崇拝的要素を除いてはいるが、概ね同様の要素（食糧のための疎みと食

人) が描かれている。ただし、Dt. の方がおそらく現実の経験の影響で描写の激しさが増している³¹⁵。

3.4.8. ESOD §4c と Dt. 13:1

ESOD §4c: 57-61 トランスクリプション (読み下し)

- a57 ... šumma abutu ša Aššur-aḫu-iddina šar māt Aššur
a58 tennāni tušannāni šumma Aššur-bāni-apli mar 'a šarri rabi 'u (= GAL(-u)³¹⁶)
a59 ša bēt ridūti ša Aššur-aḫu-iddina šar māt Aššur (bēlkunu)
a60 (N30A, N55G, VAT³¹⁷, T: ukallimūkanūni) hannūmma lā tadaggalāni
a61 šarruttu bēluttu (/šarrūtu bēlūtu) ša māt Aššur ina muḥḥikunu lā uppašūni

ESOD §4c: 57-61 渡辺訳

⁵⁷ ...もしあなた方が万が一にも、アッシリア王エサルハドンの言葉 (*abutu*) を⁵⁸⁻⁶⁰ 変えるならば、取り換えるならば—。もしあなた方が万が一にも、(あなた方の主人である) アッシリア王エサルハドンの(／が示した)大皇太子アッシュルバニパルに従わないならば、
⁶¹ そして (その結果) 彼があなた方の上にアッシリアの王権と支配権を行使できなくなるならば—³¹⁸。

Dt. 13:1

את כל־הדבר אשר אנכי מצוה אתכם אתו תשמרו לעשות לא־תסף עליו ולא תגרע ממנו¹

Dt. 13:1 試訳

1 あなた方は³¹⁹、わたしがあなた方に命じる³²⁰すべてのことを守り行いなさい。これに付け加えてはならない。また、減らしてはならない。

³¹⁵ Cf. Steymans, *Deuteronomium 28 und die adē zur Thronfolgeregelung Asarhaddons*, 352. Steymans は「宗教史的パラレルにあふれている」と指摘している。

³¹⁶ シュメール語で「大きい」の意。「大皇太子」の「大」にあたる語。

³¹⁷ アッシュル出土文書。

³¹⁸ 渡辺、『エサルハドン王位継承誓約文書』、200-01 頁。

³¹⁹ サマリア人のヘブル五書、七十人訳、ペシッタ、ウルガータは二人称単数形「あなたは」。

³²⁰ サマリア人のヘブル五書、一部の七十人訳には「今日」がある。

ESOD では 1) 「もし万が一にも、アッシリア王エサルハドンの言葉を変えるならば、取り換えるならば」(*šumma abutu ša Aššur-aḫu-iddina šar māt Aššur tennāni tušannāni*) この文書にある呪いを受けることになるという、誓約文言の変更禁止 2) 「もしあなた方が万が一にも、(あなたの主人であるアッシリア王エサルハドンの(／が示した) 大皇太子アッシュルバニパルに従わないならば、そして(その結果) 彼があなた方の上にアッシリアの王権と支配権を行使できなくなるならば」(*šumma Aššur-bāni-apli mar 'a šarri rabi' u (= GAL(-u)) ša bēt ridūti ša Aššur-aḫu-iddina šar māt Aššur (bēlkunu) (N30A, N55G, VAT, T: ukallimūkanūni) ḥannūmma lā tadaggālāni šarruttu bēluttu (/šarrūtu bēlūtu) ša māt Aššur ina muḫḫikunu lā uppašūni*) この文書にある呪いを受けることになるという、アッシュルバニパルへの服従命令 となっているが、Dt. では 1) 「あなた方は、わたしがあなた方に命じるすべてのこと [言葉] を守り行いなさい」(*את כל־הדבר אשר אנכי מצוה אתכם אתו תשמרו לעשות*) という、ヤハウエへの服従命令 2) 「これに付け加えてはならない、また、減らしてはならない」(*לֹא־תִסַּף עָלָיו וְלֹא־תִגְרַע מִמֶּנּוּ*) という、誓約文言の変更禁止 となっており、明白な交差的引用が見られる³²¹。ここで服従対象が「大皇太子アッシュルバニパル」の代わりに「わたし (ヤハウエ)」となっていることに注意するべきである。

3.4.9. ESOD §§10-18³²² (ただし §§13-17 は多様な謀反の主体を想定した同型の文章が続くので省略する。§18 は前掲) と Dt. 13:2-11

§§10-12 トランスクリプション (読み下し)

§10 : 108-122

a108 *šumma abutu lā ṭābtu lā de'iqtu*

a109 *lā banītu ša ina muḫḫi Aššur-bāni-apli mar 'i šarri rabi' i (= GAL) ša bēt ridūti/e*

a110 *mar 'i Aššur-aḫu-iddina šar māt Aššur bēlikunu lā tarṣatūni*

a111 *lā ṭābatūni lū ina pī nak(i)rīšu*

³²¹ これを最初に指摘したのは Levinson, “Esarhaddon’s Succession Treaty as the Source for the Canon Formula in Deuteronomy 13:1,”である。

³²² §§8-17 は渡辺の整理によると条件節②にあたるが、§18 は制定事項③である。文体がまったく違う。構成については渡辺和子『エサルハドン王位継承誓約文書』にみる生と死、東洋英和女学院大学死生学研究所編『死生学年報 2015 死後世界と死生観』リトン、2015 年、105－44 頁、130 頁参照。

- a112 *lū ina pī salmīšu (/N45E: [sāl]imīšu)*
- a113 *lū ina pī ahhēšu*
- a114 *ahhē abbēšu mar 'ē ahhē abbēšu*
- a115 *qinnīšu zar 'i bēt abīšu lū ina pī ahhēkunu*
- a116 *mar 'ēkunu mar 'ātēkunu lū ina pī rāgimi*
- ab117 *maḥḥē mār ša 'ili amāt ili (/N46E: ilānī)*
- ab118 *lū ina (pī) naḫḫar ṣalmat qaqqadi mala bašû*
- a119 *tašammāni tupazzarāni*
- a120 *lā tallakānenni ana Aššur-bāni-apli mar 'i šarri rabi 'i (= GAL(-u))*
- a121 *ša bēt ridūti/e mar 'i Aššur-aḫu-iddina šar māt Aššur*
- a122 *lā taqabbāni*

§11: 123-129

- a123 *šumma (/ N46E: šummu) attunu Aššur-bāni-apli mar 'a šarri rabi 'u (= GAL(-u))*
- a124 *ša bēt ridūti/e ša Aššur-aḫu-iddina šar māt Aššur*
- a125 *iqâkkanūni lā ṭābtu lā de 'iqtu*
- a126 *teppašāneššūni (/N45A, N46E: teppašāneššunni) tašabbatāšūni*
- a127 *tadukkāšūni ana nak(i)rīšu taddanāšūni*
- a128 *ana šarrūte/i (šarrūtte) māt Aššur tunakkarāšūni*
- a129 *ana šarri šanīmma bēli šanīmma mam[ītu tatam]māni*

§12: 130-146

- a130 *šumma (/N46E: šummu) mēmēni ana Aššur-bāni-apli mar 'i [šarri rabi 'i š]a bēt ridūti/e*
- a131 *mar 'i Aššur-aḫu-iddina šar māt Aššur bēlīkunu ša ina [m]uḫḫīšu*
- a132 *adē issēkunu iškunūni*
- a133 *sīḫu bārtu ša d[u 'ākī]šu šamuttīšu*
- ab134 *ḫulluqīšu ana kāšunu [i]qabbâkkanūni*
- a135 *u attunu ina pī mēmēni tašammāni*
- a136 *ēpišānūti/e ša bārti/e lā tašabbatānenni*
- a137 *ina muḫḫi Aššur-bāni-apli mar 'i šarri rabi 'i (= GAL(-u)) ša bēt ridūti/e*

- a138 *lā tubbalānenni šumma (/N46E: šummu) ammar šabātīšunu*
- a139 *du'ākīšunu mašākunū lā tašabbatāšanūni*
- a140 *lā tadukkāšanūni šumšunu zar'ašunu*
- a141 *ina māti lā tuhallaqqāni*
- a142 *šumma (/N46E: šummu) ammar šabātīšunu du'ākīšunu*
- a143 *lā mašākunū uznē ša Aššur-bāni-apli mar'i šarri rabi'i (= GAL(-u))*
- a144 *ša bēt ridūti lā tupattāni issēšu*
- a145 *lā [t]azzazzāni ēpišānūti/e ša bārte*
- a146 *lā ta[s]abbatāni lā tadukkā[ni]*

§§10-12 渡辺訳

§10 : 108-122

¹⁰⁸⁻¹¹¹ もしあなた方が万が一にも、あなた方の主人であるアッシリア王エサルハドンの息子である大皇太子アッシュルバニパルに関して、好ましくない、悪意のある、芳しくない言葉を、彼の敵の口からでも、¹¹² 彼の味方の口からでも、¹¹³⁻¹¹⁴ あるいは彼の兄弟たち、彼の叔父たち、従兄弟たち、¹¹⁵⁻¹¹⁷ 彼の家族、彼の父の家の子孫の口からでも、あるいはあなた方の兄弟たち、息子たち、娘たちの口からでも、あるいは「呼ばれる者」、「神がかりの人」、神々の言葉を問う者の一員の口からでも、¹¹⁸ すべての黒頭（＝人間）たちの口からでも、¹¹⁹ 聞いて従うならば、（それを）隠すならば、¹²⁰⁻¹²¹ アッシリア王エサルハドンの息子である大皇太子アッシュルバニパルのところに来ないならば、¹²²（それを）言わないならば—³²³。

§11 : 123-146

¹²³⁻¹²⁵ もしあなた方が万が一にも、アッシリア王エサルハドンが（従うように）命じた大皇太子アッシュルバニパルに対して、好ましくない、悪意のある事を ¹²⁶ 実行に移すならば、彼（＝アッシュルバニパル）を捕えるならば、¹²⁷ 彼を殺すならば、彼を彼の敵に渡すならば、¹²⁸ 彼をアッシリアの王権から退けるならば、¹²⁹ 他の王、他の主人に誓いを立てる（*tatam[māni]*）ならば—³²⁴。

³²³ 渡辺、『エサルハドン王位継承誓約文書』、204-05 頁。

³²⁴ 渡辺、『エサルハドン王位継承誓約文書』、204-05 頁。

§12: 230-246

¹³⁰⁻¹³⁴ もし誰かが万が一にも、アッシリア王エサルハドンがそのためにあなた方と誓約を設定した大皇太子アッシュルバニパルに対して、彼を殺すこと (*d[u'ākī]šu*)、彼を死なせること (*šamuttišu*)、滅ぼすこと (が目的) の謀反 (*sīhu*)、反乱についてあなた方に言うならば、¹³⁵ そしてあなた方が万が一にも、(それを) 誰かの口から聞いて従うならば、¹³⁶ 反乱の実行者たち (*ēpišānūti ša bārte*) を捕えないならば、¹³⁷ 大皇太子アッシュルバニパルのものと ¹³⁸ 連れて来ないならば—。もし彼らを捕えること、¹³⁹ 殺すことがあなた方にとって可能である場合に、あなた方が万が一にも、彼らを捕えないならば、¹⁴⁰ 彼らを殺さないならば、彼らの名と彼らの子孫を ¹⁴¹ 国から滅ぼさないならば—。¹⁴² もし彼らを捕えること、殺すことがあなた方にとって可能でない場合に、¹⁴³⁻¹⁴⁴ あなた方が万が一にも、大皇太子アッシュルバニパルの耳に入れないならば、¹⁴⁵ 彼の側に立たないならば、反乱の実行者たちを ¹⁴⁶ 捕えないならば、殺さないならば—。³²⁵

Dt. 13:2-11

² כִּי־יִקוּם בְּקֶרֶבְךָ נָבִיא או חֵלֶם חֲלוֹם וְנָתַן אֵלֶיךָ אוֹת או מוֹפֵֿׁ׃ ³ וּבֹא הָאוֹת וְהַמּוֹפֶת אֲשֶׁר־דִּבֶּר אֵלֶיךָ לֵאמֹר נִלְכָּה אַחֲרֵי אֱלֹהִים אֲחֵרִים אֲשֶׁר לֹא־יַדְעֶתֶם וְנַעֲבֹדֵם ⁴ לֹא תִשְׁמַע אֶל־דִּבְרֵי הַנְּבִיא הַהוּא או אֶל־חֲלוֹם הַחֲלוֹם הַהוּא כִּי מִנְסָה יְהוָה אֱלֹהֵיכֶם אֶתְכֶם לְדַעַת הִישְׁכֶם אֱהָבִים אֶת־יְהוָה אֱלֹהֵיכֶם בְּכָל־לִבְבְּכֶם וּבְכָל־נַפְשְׁכֶם ⁵ אַחֲרֵי יְהוָה אֱלֹהֵיכֶם תֵּלְכוּ וְאִתּוֹ תִּירָאוּ וְאֶת־מִצְוֹתָיו תִּשְׁמְרוּ וּבִקְלוֹ תִשְׁמְעוּ וְאִתּוֹ תַעֲבֹדוּ וְבוֹ תִּדְבְּקוּן ⁶ וְהַנְּבִיא הַהוּא או חֵלֶם הַחֲלוֹם הַהוּא יוֹמֵת כִּי דַבַּר־סֵרָה עַל־יְהוָה אֱלֹהֵיכֶם הַמוֹצִיא אֶתְכֶם מֵאֶרֶץ מִצְרַיִם וְהַפֹּדֵךְ מִבֵּית עֲבָדִים לְהַדִּיחָךְ מִן־הַדֶּרֶךְ אֲשֶׁר צִוָּךְ יְהוָה אֱלֹהֶיךָ לֵלְכָתָּ בָּהּ וּבַעֲרַת הָרַע מִקֶּרְבְּךָ ⁷ כִּי יִסִּיתְךָ אַחִיךָ בֶן־אִמְךָ או־בִּנְךָ או־בֵּתְךָ או אִשְׁתְּ חִיקְךָ או רֵעֶךָ אֲשֶׁר כִּנְפֹשֶׁךְ בִּסְתֵּר לֵאמֹר נִלְכָּה וְנַעֲבֹדָה אֱלֹהִים אֲחֵרִים אֲשֶׁר לֹא יָדַעְתָּ אֹתָהּ וְאֶתְּךָ ⁸ מֵאֱלֹהֵי הָעַמִּים אֲשֶׁר סָבִיבְתִּיכֶם הַקְּרִבִּים אֵלֶיךָ או הַרְחִיקִם מִמֶּךָ מִקְצֵה הָאָרֶץ וְעַד־קְצֵה הָאָרֶץ ⁹ לֹא־תֵאָבֵה לוֹ וְלֹא תִשְׁמַע אֵלָיו וְלֹא־תַחֲמוֹס עֵינֶיךָ עָלָיו וְלֹא־תַחְמַל וְלֹא־תִכְסֶּה עָלָיו ¹⁰ כִּי הָרַג תִּהְיֶה־בּוֹ בְּרֹאשׁוֹנָה לְהַמִּיתוֹ וְיָד כָּל־הָעָם בְּאַחֲרָנָה ¹¹ וְסָקְלֹתָו בְּאַבְנִים וּמָתָ כִּי בִקֵּשׁ לְהַדִּיחָךְ מֵעַל יְהוָה אֱלֹהֶיךָ הַמוֹצִיאֲךָ מֵאֶרֶץ מִצְרַיִם מִבֵּית עֲבָדִים

³²⁵ 渡辺、『エサルハドン王位継承誓約文書』、204-07 頁。

Dt. 13 :2-11 試訳

- 2 あなたのうちに預言者や夢見る者がおこり、徴や奇跡をあなたに与えても、
- 3 彼があなたに言った、その徴や奇跡が起こり、あなた方の知らない他の神々に従い、われわれはそれに仕えよう、と彼が言っても、
- 4 あなたは、その預言者や夢見る者の言葉に従ってはならない。あなた方の神ヤハウエが、あなた方が、すべての心とすべての魂をもって、あなた方の神ヤハウエを愛しているか知ろうと、あなたがたを試みるからである。
- 5 あなた方は、あなた方の神ヤハウエに従い、彼をおそれ、彼の命令を守り、彼の声に聞きしたが、彼に仕え、彼につき従わなければならない。 6 その預言者や夢見る者は殺されなければならない。あなた方をエジプトの地から導き出し、奴隷の家から救い出した、あなた方の神ヤハウエに対する反逆の言葉のゆえに。あなたの神ヤハウエがあなたに歩むように命じたあなたの道から散らそうとする（反逆の言葉のゆえに）。あなたは、あなたの内からその悪を燃やし尽くしなさい。
- 7 あなたの兄弟、あなたの母の息子、³²⁶あなたの息子、あなたの娘、あなたの懐にいる妻、あなたの魂のようなあなたの友が、あなたを密かに唆して、あなたもあなたの父祖も知らなかった他の神々に従い仕えよう、と言っても、
- 8 それらがあなたがたの周りにいる近い民の神々であっても、地の果てから地の果てまでの、あなたから遠い民の神々であっても、
- 9 あなたは彼に同意してはならず、彼に聞き従ってはならない。あなたの目が彼を惜しんではならず、憐れんではならない。彼をかばってはならない。
- 10 実に、必ず彼を殺さなければならない³²⁷。彼を死に至らしめるには、はじめにあなたの手が彼に臨み、後で民のすべての手が臨まなければならない。
- 11 あなたは石をもって彼をとり除かなければならない。そして彼は死ぬ。彼は、あなたを、あなたをエジプトの地、奴隷の家から導き出したヤハウエから散らそうとしたからである。

³²⁶ サマリア人のヘブル五書、七十人訳には、ここに「あなたの父の息子」がある。

³²⁷ Cf. §26: 302-07 「³⁰²⁻³⁰²もし誰かが（アッシリア王）エサルハドンに対して謀反、反乱を実行に移した場合に、（そして）王座に³⁰⁴就いた場合に、もしあなた方が万が一にも、彼の王権を³⁰⁵喜ぶならば（彼を捕えないならば、³⁰⁶⁻³⁰⁷彼を殺さないならば）—。...。」（渡辺、『エサルハドン王位継承誓約文書』、217 頁。）

ESOD では 1) 「彼の兄弟たち」 (*aḥḥēšu*)、「彼の叔父たち」 (*aḥḥē abbēšu*)、「従兄弟たち」 (*mar'ē aḥḥē abbēšu*)、「彼の家族」 (*qinnīšu*)、「彼の父の家の子孫」 (*zar'i bēt abīšu*)、「あなた方の兄弟たち」 (*aḥḥēkunu*)、「息子たち」 (*mar'ēkunu*)、「娘たち」 (*mar'ātēkunu*) の「口」 (*pī*) からアッシェルバニパルにとって良くない言葉を聞いた場合、つまり親族や親友がアッシェルバニパルへの反逆を唆す場合、2) 「呼ばれる者」 (*rāgimi*)、「神がかりの人」 (*maḥḥē*)、「神々の言葉を問う者の一員」 (*mār ša'ili amāt ili*) の口 (*pī*) からアッシェルバニパルにとって良くない言葉を聞いた場合、要するに宗教的な人物がアッシェルバニパルへの反逆を唆す場合に、3) その者を殺さなければならないとしている（「殺す」 (*tadukkāšanūni*) ことが可能な場合には殺し、不可能な場合には当局に殺させることが命じられている）。それに対して Dt. は 1) 「預言者」 (**נביא**) や「夢見る者」 (**חלם**) が他の神々に仕えようと言った場合、つまり宗教的な人物がヤハウエへの反逆を唆す場合、2) 「あなたの兄弟」 (**אחיך**)、「あなたの母の息子」 (**בן־אמך**)、「あなたの息子」 (**בנך**)、「あなたの娘」 (**בתך**)、「あなたの懐にいる妻」 (**אשת חיקך**)、「あなたの魂のようなあなたの友」 (**רעך אשר כנפֿשך**) が他の神々に仕えようと言った場合、すなわち親族や親友がヤハウエへの反逆を唆す場合に 3) その者を「必ず殺さなければならない」 (**הרג תהרגנו**) としている。1) と 2) の順番が入れ替えられており、ここでも交差的引用が見られる。3) はほぼ同じ内容である。さらに明白にアッシェルバニパルとヤハウエを置き替えているのがわかる。

3.5. 申命記の「呪いのリスト」とレビ記の「呪いのリスト」の比較

ESOD と Dt. の比較だけでは証拠が足りないとする向きもあるようであるから、ここで聖書テキスト間での「交差的引用」についてみておく必要がある。申命記の「呪いのリスト」とレビ記 (Lev. と略記) の「呪いのリスト」の間には、一目瞭然の Dt. 28:33 と Lev. 26:19b 以外にも内容的な交差的引用が 2 組確認できる。

3.5.1. レビ記 26:14-39 試訳（神聖法典の呪いのリスト）

14 しかしもし³²⁸あなたがわたしに聞き従わず、これらすべての命令を行わないならば

³²⁸ 七十人訳は ἄλλὰ 「しかし」。

- 15 もしあなた方がわたしの掟を退け、またもしあなた方の魂がわたしの定めを嫌い、すべてわたしの命令を行わず、わたしの契約を破るならば、
- 16 実にわたしは、これらのことをあなた方に行う。わたしはあなた方の上に恐慌を臨ませ、肺病と熱病を起こさせ、目を衰えさせ、体をやせ衰えさせる。あなた方が種を蒔くことは空虚だ。あなたがたの敵が食べるからだ。
- 17 わたしはわたしの顔をあなた方に向ける。あなた方はあなた方の敵の前で撃たれ、あなた方を憎む者があなたがたを支配する。追う者がいないのに³²⁹、あなた方は逃げる。
- 18 もしこれらのことがあってもまだわたしに聞き従わないならば、わたしはあなた方の罪にしたがって、あなた方の懲らしめを七倍増し加える。
- 19 またわたしは、あなた方の誇りとする力を打ち砕き、あなた方の天を鉄のようにし、あなた方の地を青銅のようにする。
- 20 それは空しくあなた方の力を費やす。あなた方の土地には実りがなく、土地の木々にも実がならない。
- 21 もしあなた方がわたしに反対して歩み、わたしに聞き従うことを受け入れないならば、わたしはあなた方の罪にしたがって、七倍の災害をあなた方の上に増し加える。
- 22 わたしはあなた方に野獣を送るので、あなた方は子がなくなり、あなた方の家畜は滅ぼされる。そしてあなた方を小さくする。あなた方の道は荒廃する。
- 23 もしあなた方がこれらのことがあってもわたしの懲らしめを受け入れず、あなた方がわたしに反対して歩むなら、
- 24 実にわたしもまた、あなた方に反対して歩み、同様にあなた方の罪にしたがって七倍あなた方を撃つ。
- 25 わたしはあなた方の上に剣をもたらし、契約による復讐をする。あなた方があなた方の都市に集まるとき、あなた方の中に疫病を送り、敵の手に渡す。
- 26 あなた方のパンの棒をわたしが砕くとき、十人の女がひとつのかまどであなた方のパンを焼く。あなたがたのパンは重さを量って分けられるが、あなた方は食べても満足しない。
- 27 もしここにおいてもあなた方がわたしに聞き従わず、わたしに反対して歩むなら、
- 28 わたしは反対の怒りをもってあなた方とともに歩む。実にわたしはあなた方の罪にしたがって、あなた方を七倍懲らしめる。
- 29 あなた方は、あなた方の息子たちの肉をそしてあなた方の娘たちの肉を食べる。

³²⁹ 七十人訳は καὶ διώξονται 「そして（彼らは）追う」。

- 30 わたしはあなた方の高さ所を破壊し、あなた方の香を焚く祭壇を絶ち滅ぼす。あなた方の死体を偶像の死体の上に置く。わたしはあなた方を嫌う。
- 31 わたしはあなた方の都市を廢墟にする。わたしはあなた方の聖なる場所を荒らす。わたしはあなた方の宥めの香りを受け入れない。
- 32 わたしは地を荒廢させ、そこに住むあなた方の敵はそれを見て驚く。
- 33 そしてわたしはあなた方を諸民族の間に散らす。わたしはあなた方の後に剣を注ぐ。あなた方の地は廢墟になる。あなた方の都市は廢墟になる。
- 34 あなた方があなた方の敵の地にいる³³⁰荒廢のすべての日々、そのとき土地は休み、安息を受け入れる。
- 35 荒廢のすべての日々、あなた方がそこに住んでいたとき休まなかった分を、土地は休む。
- 36 あなた方のうち残った者たちにわたしは心の中の脅えをもたらす。敵の国において、葉の動く音が彼らを追い、彼らは剣を避けて逃げ、彼らは追う者がいないのに倒れる。
- 37 彼らは剣が目前にあるかのように、追う者がいないのに彼らの同胞につまずき倒れる。あなた方は、あなた方の敵の前に立つことができない。
- 38 あなた方は諸民族の中で滅びる。そしてあなた方の敵の地はあなたがたを喰らう。
- 39 あなた方のうち残った者さえも、罪のために³³¹敵の土地でやせ衰え、そして彼らの父祖の罪によってやせ衰える³³²。

3.5.2. 申命記の呪いのリストとレビ記の呪いのリストの比較検討

ここで ESOD が申命記に影響したという仮説の傍証として、レビ記への申命記の影響関係を瞥見したいと思う。契約に反した場合に与えられる違約罰としての「呪いのリスト」を比較すると、「交差的引用」という聖書テキスト間における伝統的引用法の特徴が際立つからである。

申命記の「呪いのリスト」は 28 章 15 節から 68 節までであり、レビ記の（神聖法典中の）「呪いのリスト」は 26 章 14 節から 39 節にある。申命記における呪いの内容と順序は 1) 不作 (23-24 節) 2) 敗戦 (25 節) 3) 死体が野獣の餌食になること (26 節) 4) 病氣

³³⁰ 七十人訳には αὐτῆς 「その（荒廢のすべての日々）」がある。

³³¹ 七十人訳は διὰ τὰς ἁμαρτίας αὐτῶν 「彼らの罪のゆえに」。

³³² 七十人訳は「そして彼らの父祖の罪によってやせ衰える」を欠く。

(27 節) 5) 精神的恐慌および盲目 (28 節) 6) 外国人による略奪 (30 節以下) 7) 食料難により息子や娘を食べること (53-57 節) である。他方レビ記の「呪いのリスト」では、1) 不作 (19-22 節) 2) 野獣が人と家畜を襲うこと (22 節) 3) 病気の発生による敗戦 および飢餓 (25-26 節) 4) 食料難により息子や娘を食べること (29 節) 5) 精神的恐慌 (36-39 節) となっている。「不作」が両者とも最初に来ている。その後は要素が逆になっている。すなわち申命記では「敗戦→野獣の害」の順であるところが、レビ記では「野獣の害→敗戦」となっている。さらに申命記では「精神的恐慌→(略奪)→食人」となっているところが、レビ記では「略奪」の要素は省かれているものの、「食人→精神的恐慌」というように、要素の順序が逆になっている。とくに注意を引くのが申命記 28 : 23 とレビ記 26:19b の関係³³³である。

Dt. 28:23

וְהָיוּ שְׂמִיךְ אֲשֶׁר עַל־רֹאשׁךָ נִחַשְׁתָּ וְהָאָרֶץ אֲשֶׁר־תַּחְתִּיךָ בְּבוּלָה²³

Dt. 28:3 試訳

あなたの頭の上の天は青銅となり、あなたの下の地は鉄となる。

Lev. 26:19b

וְנָתַתִּי אֶת־שְׁמִיכֶם כְּבְבוּלָה וְאֶת־אֲרָצְכֶם כְּנִחַשָּׁה^{19b}

Lev. 26:19b 試訳

(わたしは) あなた方の天を鉄のようにし、あなた方の地を青銅のようにする。

申命記が ESOD から「交差的引用」をしたのとは違う形でレビ記は申命記から「交差的引用」をしているのがわかる。レビ記は文単位ではなく単語単位での転位を行っているのだ。

³³³ Cf. Steymans, *Deuteronomium 28 und die adē zur Thronfolgeregelung Asarhaddons*, 288. Steimans は、ESOD§63-64 と Dt. 28:23-24 および Lev. 26:19-20 を表にして示しているが、交差的引用については特に注目していない。

天と地が金属のようになって雨も産物も得られないというのが呪いの内容なので、天が鉄でも青銅でも、あるいは地が鉄でも青銅でも、呪いの趣旨には変わりがない³³⁴。

そして、ここでも ESOD が天や地が金属のようになる、という比喻を作り出した最初のテキストかどうかということは問題にならない。ESOD は遺漏なきよう各支配領域の呪いを収集したのであるから、ユダや他のところで最初に使用された「呪いのことば」である可能性も高い。ここで重要なことは、この「比喻」の起源がどこなのかということではなく、テキストの影響関係の順序である。上記 3 つのテキストを比較するなら、ESOD のテキストが前 672 年に成立し、その影響下に（原）申命記が書かれ、さらに申命記の影響下にレビ記が書かれたという全体的な流れは想定できると思われる。

なぜ交差的引用という現象がおこるのかについては、もともと韻文の並行法において変化をつけるために用いられていた *inverted quotation* が、散文に用いられるようになり、その際には単語レベル、文レベル、内容レベルといった多様なレベルでの転位が起こるようになったと考えることができる。

3.6. 小括

以上見てきたところから、ユダ王国の書記が原申命記起草において ESOD から引用する比較的整った形式が見られる。それは、*Oral Tradition* のような変化し易い間接的影響ではなく、直接的影響を示唆しているということを筆者は提案する。「直接的」というのは、書板を書記が自分の横に置いたかどうかはともかく、アッカド語原文を読みながら、申命記のヘブライ語原文を書いていったということを意味する。これは先述したように、アラム語訳から引用したと想定しているステイマンズ³³⁵とは異なる。ステイマンズはタイナト版公刊以前に申命記 28 章という誰の目にも明らかな ESOD との並行箇所を詳細に調べ、両者に影響関係がないとはいえない、という見解を随所で述べている³³⁶のであるが、筆者は

³³⁴ それゆえ Baruch A. Levin, *The JPS Torah Commentary Leviticus*, (Philadelphia: The Jewish Publication, 1989), 186 は次のように述べている。レビ記 26 章 19 節の「わたしはあなた方の空を鉄のようにする」について「申命記 28 章 33 節の呪いに同じ陳述があり、前 7 世紀に統治したアッシリアのエサルハドン王の条約にもある」。レトリックに注目するとまったく「同じ」陳述があるのではなく、引用関係が明白な「転位」が検出できる。

³³⁵ Cf. Steymans, “Deuteronomy 28 and Tell Tayinat.”

³³⁶ Cf. Steymans, *Deuteronomium 28 und die adê zur Thronfolgelegung Asarhaddons*.

13 章³³⁷も 6 章 4－5 節も扱っている。オットーもタイナト以前から 6 章 4－5 節にさえ言及していたが、そもそもヨシヤの改革の歴史性を否定している³³⁸点で、筆者とはまったく出発点が異なる。

ヨシヤの改革に対する思想的意義について言えば、主意的連関を伴う行為を要求する「聖なる文書」の作成、さらに当事者の生死に依存することのない「永遠の誓約」（民の個々人は死ぬが子々孫々に伝えることが義務づけられている）という概念がヨシヤの改革とその影響を受けた後代に、当事者が意図したものより壮大な影響を与えることになったということが重要であると思われる。神々のみならずアッシュルバニパルやエサルハドンの位置にヤハウエを措定することで、ヤハウエにオリエントの専制君主的性質を付与し、また祭儀集中と祭儀浄化があらゆる複数性を排除したことから、後に改革者たちが意図することもなかった唯一神教への移行が生じたと想定できる。

³³⁷ Steymans が申命記 13 章にまったく触れていないわけではない。Cf. Steymans, *Deuteronomium 28 und die adê zur Thronfolgelegung Asaruhaddons*, 174, 226, 233, 333.

³³⁸ Cf. Otto, “Josia / Josiasreform,” in *RGG*⁴.

4. 申命記 6:4-5 の解釈と年代決定：「一神教」の変遷過程への位置づけ

ESOD と申命記の間には非常に似ている部分が存在するが、それは古代西アジアの文化の共通性を示すにとどまらないし、ただ単に特定の文書に影響を受けて似たような文書を作ったということにとどまらない。申命記の起草者は、ESOD の特別で思想史的に革命的な概念装置を意識的に導入したのである。もちろん彼らはユダ王国亡き後、それがさらに発展して、現在の唯一神教に至るとは思ひもしなかったに違いない。しかし、聖なる不変の文書や永遠の誓約を持つ神と民という概念から、今日「アブラハムの宗教」として知られ世界人口の半分以上に影響を与える思想が生まれてきたのだとすれば、その思想史的意義を小さく見積もることは決してできない。

4. 1. Dt. 6:4-5

שמע ישראל יהוה אלהינו יהוה אחד⁴ ואהבת את יהוה אלהיך בכל לבבך ובכל נפשך ובכל
מאדך

4.2. Dt. 6:4-5 直訳

4 聞け³³⁹ イスラエルよ ヤハウエ わたしたちの神 ヤハウエ ひとつ

5 あなたは愛しなさい ヤハウエ あなたの神を

あなたのすべての心をもって あなたのすべての魂をもって あなたのすべての力をもつて

4.3. 問題の所在

「聞け、イスラエルよ」の後に 4 つの名詞が並んでおり、それをどう解するかが問題となる。周知のとおりヘブライ語においては名詞文が成立するため、たとえば AB と書けば A is B あるいは B is A と訳することができる。しかしここでは名詞が 4 つあるため、まず文がひとつなのかふたつなのかを判断しなければならない。文がふたつと考えれば「ヤハウ

³³⁹ 「聞き従え」と訳することも可能である。

エはわたしたちの神 ヤハウエはひとり（ひとつ）」のようになる。しかし「ヤハウエ」と「わたしたちの神」を同格ととれば、「ヤハウエ・わたしたちの神は ひとり（ひとつ）[のヤハウエ]」といった訳になる。どちらの場合にも **יהוה** を副詞的にとって「ヤハウエのみ」と訳されることもあるが、**יהוה** のそのような用法は例外的である（通常 **לבד** が使われる）ことから不適切であるといえる。そして申命記においては「ヤハウエ」と「わたしたちの神」が並置されている場合常に同格になるため、当該箇所はふたつの文ではなくひとつの文と考えるのが妥当である。しかしその場合、どうしてもふたつめの「ヤハウエ」が浮いてしまう。

4.4. 解決策

この問題を解消する可能性のある提案が、最近クラウト (J. Kraut) ³⁴⁰によってなされた。彼によれば、この箇所には「階段並行法」(staircase parallelism) というレトリックが使われている。つまり **AB//AC** という形で **ABC** を意味するレトリックである。それが正しければ、4 節 b は「ヤハウエ・私たちの神はひとり（ひとつ）」のように訳せる。明らかな階段並行法の例としては、他に出エジプト記 15:3 やホセア書 12:6 がある。

出エジプト記 15 章 3 節

יהוה איש מלחמה יהוה שמו ³

出エジプト記 15:3 を、階段並行法を前提にして訳すと「ヤハウエ・戦士は彼の名前」のようになる。

ホセア書 12 章 6 節

ויהוה אלהי הצבאות יהוה זכרו ⁶

³⁴⁰ Judah Kraut, “Deciphering the Shema: Staircase Parallelism and the Syntax of Deuteronomy 6:4,” VT 61 (2011): 582-602.

同様にホセア書 12:6 は「ヤハウエ・万軍の神は彼の名前」のようになる。両者とも繰り返される「ヤハウエ」はレトリック上の重複にすぎないので、ひとつであるかのように扱ってよいことになる³⁴¹。

4.5. 解釈

さてクラウトの提案にしたがって「ヤハウエわたしたちの神はひとり」と訳した場合、今度は𐤇𐤍𐤅が何を意味しているかを考えなければならない。𐤇𐤍𐤅はもちろん「ひとつ」という数をあらわす単語であるが、意味の広がりにはそれにとどまらず、神に適用する場合「ユニークさ」や「比類なさ」を表す³⁴²こともある。そこで多少意識すると「ヤハウエわたしたちの神はエハド（特別）」となる。この場合には、出 15:3（「戦士」）やホセ 12:6（「万軍の神」）のように、神の性質を表す別名のように𐤇𐤍𐤅が用いられている可能性もある³⁴³。

次に 6:4 の含意を考える必要がある。「ヤハウエ＝ひとつ」というのは、唯一神教の宣言であろうか、それともイスラエルはヤハウエという神を礼拝し他の神は礼拝しないという拝一神教の宣言であろうか³⁴⁴。もし唯一神教だとすれば、この節の年代は捕囚期以降（前 6 世紀以降）になる。拝一神教ならば、それ以前（前 7 世紀以前）ということになる。後でみるようにこの箇所は唯一神教ではなく拝一神教の宣言であり、したがって年代は前 7

³⁴¹ Kraut によれば staircase parallelism はウガリット文学に 38 例、ヘブライ語聖書には 78 例見いだされる（601）。詩文におけるレトリックであるが散文中でも使われる。

³⁴² Cf. Kraut, “Deciphering the Shema,” 602, n. 69. 『『ひとつ』』のこのような理解は古代近東では、とくに神に関する場合珍しくなかった。アッカド語の *išten* の意味には、神への尊敬が含まれている。」

³⁴³ Cf. Cyrus H. Gordon, “His Name Is ‘One’,” *JNES* 29 (1970): 198-99. Gordon はゼカ 14:9 やヨブ 23:13 に言及しつつ、ヤハウエの名前が「エハド」であり、シェマーもこの文脈で理解されるべきだと提案している。

³⁴⁴ 通常 6:4 は拝一神教の宣言と解される。Albertz, *Religionsgeschichte Israels in alttestamentlicher Zeit, Teil 1*, 75. (拙訳 21、106 頁) はこれを「拝一神教＋単一ヤハウイズム」というようにより正確に把握している。しかし 6:4 を唯一神教の宣言と理解する例も皆無ではない。Cf. Samuel R. Driver, *A Critical and Exegetical Commentary on Deuteronomy* 3rd ed., (Edinburgh: T & T Clark, 1902), 90-92; Hermann Vorländer, “Der Monotheismus Israels als Antwort auf die Krise des Exils,” in *Der Einzige Gott: Die Geburt des biblischen Monotheismus*, ed. B. Lang, (München: Kösel, 1981), 84-113, 95. (B. ラング編 荒井章三・辻学訳『唯一なる神：聖書における唯一神教の誕生』新教出版、1994 年、161 頁)。当該頁はヘルマン・フォアレンダー「捕囚という危機に対する応答としてのイスラエル唯一神教」にある)。Driver は後代に成立したキリスト教の教理を読み込もうとしているのかもしれないが、申命記の年代を捕囚期と考える帰結かもしれない。フォアレンダーは明白に申命記の年代を捕囚期と考えている。

世紀後半ということになる。しかしそのような推定がどうして成り立つのかについて説明するには、いわゆる「一神教」の変容過程と申命記の編集過程について触れなければならない。

4.6. 古代イスラエルにおける「一神教」への諸段階

ここでは普遍的な「多神教→一神教」という「発展」を想定するのではなく、古代イスラエルに限った神観の変遷を扱うことにする。純粋な多神教や純粋な一神教を想定するのは現実的ではないので「多神教カテゴリー」と「一神教カテゴリー」という相対的な区別を用いる。そして多神教カテゴリーには多神教的ヤハウェ主義と一時的拝一神教が、一神教カテゴリーには恒常的拝一神教と唯一神教が含まれる。

王国時代以前から一神教的な神観が存在したという説も存在するが、考古学的に確認することはできない。考古資料から推測する限り、王国時代に入ってもイスラエルは多神教的だったようだ³⁴⁵。たしかにヤハウェは重要な神だが、常に他の女神（アシェラあるいはアシュタルテ）と一緒に現れる³⁴⁶。たとえばクンティレト・アジュールドの碑文には「ヤハウェと彼のアシェラ」という表現が見られる。さらに同じヤハウェでも、「サマリアのヤハウェ」「テマンのヤハウェ」など地方によって呼び名を区別しており、ヤハウェが複数性を持っているかのような表現の碑文も見つかっている³⁴⁷。要するに古代イスラエルは周辺諸国と同様の神観を持っていたと考えられる³⁴⁸。それが現在見られるアブラハムの諸宗教に至るにはいくつかの段階が存在したことであろう。まずヤハウェを主神とする多神教からヤハウェ拝一神教への変化があったはずである。その中にもおそらく「一時的拝一神教（戦争や旱魃などの危機に際して一時的に特定の神だけを礼拝すること）³⁴⁹」から「恒常的拝一神教」への変化が想定できる³⁵⁰。

³⁴⁵ Cf. Finkelstein and Silberman, *The Bible Unearthed*, 241-43.

³⁴⁶ Cf. Ephraim Stern, "From Many Gods to the One God: The Archaeological Evidence," in *One God – One Cult – One Nation: Archaeological and Biblical Perspectives*, BZAW 405, eds. R. G. Kratz and H. Spieckermann (Berlin: de Gruyter, 2010), 395, 398.

³⁴⁷ Cf. Stern, "From Many Gods to the One God," 397-99.

³⁴⁸ Cf. Stern, "From Many Gods to the One God," 399.

³⁴⁹ Cf. Bernhard Lang, "Die Jahwe-allein-Bewegung," in *Der Einzige Gott. Die Geburt des biblischen Monotheismus*, 47-83, 66-68（ラング「ヤハウェのみ運動とユダヤ一神教の形成」、97頁）。

³⁵⁰ Cf. Lang, "Die Jahwe-allein-Bewegung," 68（邦訳、100頁）。

古代イスラエルの場合、聖書資料から一時的拝一神教がうかがわれるのはヒゼキヤ王時代の記述である（王下 18:1-20:21; 代下 29:1-32:33）。「ヒゼキヤの改革」として記録されていること（王下 18:4; 代下 30:1-31:21）はかなり割り引いて受けとらねばならない³⁵¹が、それでもラキシュ攻略に代表される前 701 年のセナケリブの軍事遠征に際してヤハウエの加護を得るためにヤハウエのみを一時的に礼拝することが行われたかもしれない。軍事的危機が去ると同時に宗教的な変化も去り、すべてが元に戻ったように記述されている。そしてヨシヤの時代に恒常的拝一神教への移行が意識的に行われたのではないか。この「改革」（王下 22:1-23:30; 代下 34:1-35:27）が、多神教カテゴリーから一神教カテゴリーへの移行の転回点だと思われる。聖書資料によればヨシヤは祭儀改革と祭儀浄化を行なった。祭儀改革というのは地方聖所の廃止を伴うエルサレム神殿への祭儀集中（ポリヤハウィズムの禁止）を、そして祭儀浄化はヤハウエ以外の神々の排除（多神教の禁止）を意味している。もちろんユダ王国内部での出来事であるから、他の民族がヤハウエ以外の神々を礼拝することは前提されている。つまりここではまだ唯一神教（ヤハウエの他に神々は存在しないという見方）は出現していない。それは捕囚期に第二イザヤによってはじめて明確に言及されることになる。

4.7. 申命記の編集過程

通常理解では、申命記は原申命記と呼ばれる法的集成（主として 12-26 章と 28 章の大部分³⁵²）が申命記史家による改訂（元来の集成への変更と前後の枠の付加）を受けて現在の形になったとされている。しかし原申命記がいつ編纂されたか、そして申命記史家の改訂がいつ行われたかについては様々な見解が提出されている。とくに申命記史家については英語圏とドイツ語圏で理解が大きく異なる傾向にあるが、親王政的内容と反王政的内容が並存するので、捕囚前と捕囚期に編集が行われたと考えるのが自然であるし、捕囚期の

³⁵¹ 一般に歴代誌の記述は列王記よりも信頼性に欠けると考えられる。歴代誌はペルシア時代に列王記を当時の神学的理念の観点から書き直したものといえるからだ。

³⁵² Cf. Morton Smith, “Religiöse Parteien bei den Israeliten vor 587,” in *Der einzige Gott, Die Geburt des biblischen Monotheismus*, ed. B. Lang, 9-46, 39. (スミス「前五八七年以前のイスラエルにおける宗教グループ」、52 頁)。申命記 12-26 章の大部分を原申命記と考えることには一致があるとはいえ、細かい部分については研究者の間で意見が分かれている。たとえば Albertz は 6-28 章の大部分を原申命記と考えている (Albertz, *Religionsgeschichte Israels in alttestamentlicher Zeit, Teil 1*, 312、拙訳、12 頁)。

編集も複数の層に区別できるのでひとりによる一度の編集とは考えられない。そうだとすれば申命記の成立がヨシヤ時代（改革前：前 640-623 年ころ）で、最初の申命記史家的編集がヨシヤ時代（改革期：前 622-609 年ころ）である。そして捕囚期にも複数回の申命記史家的編集が行われ、ペルシア時代にも多少の編集が行われたかもしれない。

テル・タイナトでの ESOD の発見によって、前 672 年に発行された ESOD が申命記に直接的影響を及ぼしたという蓋然性が非常に高まった。とくに 13 章・28 章への影響は明らかといえる。そうだとすれば、原申命記にあたるこれらの箇所の編集が前 672 年以前とは考えられない。つまり、前 672 年以降に原申命記が成立したはずである。しかし親アッシリアであるマナセの時代に「地下運動」としてその作業が行われたというのは、純粋な推測にとどまる³⁵³。ヨシヤ時代になってはじめてそれが可能になったと考えた方が自然だ。そして前 622 年に改革がはじまってから、当時行われていた形式に則った法典として申命記史家が現在の形に近いものを作った。しかし前 609 年のヨシヤの死とともに改革は挫折し、前 586 年にはユダ王国が滅亡しエリート層はバビロン捕囚を経験する。この未曾有の危機の中で、第二の申命記史家が改訂を加えた。ペルシア時代にも歴史的变化を反映した小規模な改訂があったかもしれない。

それでは申命記 6:4 はこのうちのどの段階に位置づけられるだろうか。内容的には恒常的拝一神教で、編集はヨシヤ時代前半（改革前）にあたると思われる。この推測が正しければ 6:4 に唯一神教を読み込むことは適切ではないことになる。それは時代錯誤ということになる。明白な唯一神教は捕囚期に生じたと考えられるからである。考古学的に確認できる唯一神教の証拠はペルシア時代の帰還民におけるものが最初である³⁵⁴。

4.8. Dt. 6:5 の文学的背景

Dt. 6:5 ともっとも関係が深いのは ESOD であろう³⁵⁵。大皇太子アッシュルバニパルとヤハウエを入れ替えた誓約文書たる申命記は、新アッシリアの文書と同様、(ヤハウエに対す

³⁵³ Cf. Römer, *The So-called Deuteronomistic History*, 68-70. (邦訳 108-09 頁)。

³⁵⁴ Cf. Bernhard Lang, “Vorwort,” in *Der einzige Gott, Die Geburt des biblischen Monotheismus*, 7-8; Vorländer, “Der Monotheismus Israels als Antwort auf die Krise des Exils,” 102. (邦訳ではラングによる「序文」、10 頁およびフォアレンダー、173 頁)。

³⁵⁵ 申 6:4-5 との関連が考えられるのは §§17-18 であり、とりわけ 194 行目後半から 205 行目である。

る)「愛」を要求している。古代西アジアの文脈において「愛」は、感情的な愛着だけではなく行為を伴うものと考えられ、支配・被支配の関係ではとくに(政治的)服従を指示している³⁵⁶。そうでなければ政治的支配者や神を「愛しなさい」という命令は意味をなさないケースが出てくるであろう。6:5ではイスラエルのヤハウエに対する義務だけが書かれているので、ESODを範型にしている可能性が高いと言える。

さらに、申命記の2人称単数形「あなた」の使用自体が、ESODの文体を模倣した結果だという見解も提出されている³⁵⁷。これについては、ESODにおいては主に「2人称複数形」が使われていることを指摘しなければならない(1人称複数形や3人称単数形もある)。しかし、一般に法規定において使用されるのが「人が～した場合、～」という3人称を用いた決疑法である³⁵⁸のに対し、誓約文書であるESODが「あなた方は～すべきである」あるいは「あなた方は～してはならない」という2人称(ほとんど複数形)の文体を使用しており、申命記が異例なことに法規定に2人称(単数形および複数形)を用いていることについては注意を払うべきであろう。

もうひとつ興味深いのは、6:5に出て来る「心」「魂」「力」の3つが一緒に出現するのは、旧約聖書中で他に1か所しかないということである。それは列王記下23:25である。

25 וַיֹּכְמֵהוּ לֹא־הָיָה לִפְנֵי מֶלֶךְ אֲשֶׁר־שָׁב אֶל־יְהוָה בְּכָל־לִבּוֹ וּבְכָל־נַפְשׁוֹ וּבְכָל־מַאֲדוֹ כְּכֹל תּוֹרַת מֹשֶׁה וְאַחֲרָיו לֹא־קָם כָּמֹהוּ

³⁵⁶ Cf. Jeffrey H. Tigay, *The JPS Torah Commentary Deuteronomy*, (Philadelphia: The Jewish Publication Society, 1996), 77; Albertz, *Religionsgeschichte Israels in alttestamentlicher Zeit, Teil 1*, 330 (拙訳、115頁(注106))、Römer, *The So-called Deuteronomistic History*, 75 (邦訳、117頁) ; William L. Moran, “The Ancient Near Eastern Background of the Love of God in Deuteronomy,” *CBQ* 25 (1963): 77-87, 月本昭男『詩篇の思想と信仰IV』新教出版、2013年、342-44頁参照。

³⁵⁷ J. Gordon McConville, “Singular Address in Deuteronomistic Law and the Politics of Legal Administration,” *JSOT* 26.3 (2002): 19-36. 英語のyouは2人称単数形でもあり2人称複数形でもあるため、McConvilleは誤解しているものと思われる。

³⁵⁸ たとえばハンムラビ法典の§6は以下のものである。「もし人が神(殿)あるいは王宮の財産を盗んだなら、その人は殺されなければならない。また、彼の手から盗品を受け取った者も殺されなければならない。」(中田一郎訳『ハンムラビ「法典」』第2版、リトン、2002年、10頁)。

直訳すると以下ようになる。「彼（ヨシヤ）のような王は彼の前にはいなかった（彼は）ヤハウエに立ち返った 彼のすべての心をもって 彼のすべての魂をもって 彼のすべての力をもって すべてモーセのトラーのよう に 彼の後にも彼のような者（王）は起こらなかった」この特徴的な言い回しとヨシヤへの留保なしに肯定的な態度から、この部分はおそらく列王記下における Dtr¹ ³⁵⁹ の結びであると考えられる³⁶⁰。申命記 6:5 と同じ層であり、時期はヨシヤ治世（の後半）つまり前 7 世紀後半であろう。

4.9. 申命記に対する ESOD の影響関係についての批判

上述のように申命記に対する ESOD の直接的影響関係はほぼ確実といってよい³⁶¹。もちろん申命記を含む旧約聖書への古代西アジアの文学伝統の一般的影響は否定するべくもない³⁶²。しかし申命記については、前 672 年の ESOD が直接的に、他の諸伝統（前 2000 年紀のヒッタイトの諸条約やエジプトの「アメンエムオペの教訓」³⁶³）が間接的に影響していると考えるのが妥当であろう。

³⁵⁹ Dtr¹ とは、研究史で説明したとおり、クロス学派における王国時代の申命記史家を指す。

³⁶⁰ 王下 18:5-6 にも類似の表現が見られる。論理的には矛盾するが、後にも先にもないような王を形容する一般的表現と考えるべきではないか。あるいはヒゼキヤ礼賛の表現とヨシヤ礼賛の表現をそれぞれ別の編集者（編集時期）に帰属させることも可能ではある。

³⁶¹ Cf. Steymans, “Deuteronomy 28 and Tell Tayinat.”

³⁶² Cf. Serge Frolov and Allen Wright, “Homeric and Ancient Near Eastern Intertextuality in 1Samuel 17,” *JBL* 130 (2011): 451-71. Frolov and Wright は、しばしばホメロスとの並行関係を指摘されるサム上 17 章のダビデとゴリアトの物語について分析し、ギリシアの文学的影響を否定し古代西アジアのテキストの文学的影響を肯定している。

³⁶³ 「アメンエムオペの教訓」は前 12 世紀に編纂されたエジプトのテキストで、書記教育に用いられた。内容的には個人的敬虔が表れており、箴言に影響を与えたことが知られている。Cf. Bernhard Lang, *The Hebrew God: Portrait of an Ancient Deity*, (London: Yale University Press, 2002), 118. (B. ラング著 加藤久美子訳『ヘブライの神：旧約聖書における一神格の肖像』教文館、2009 年、168 頁)。

4.10. 新アッシリアの「条約」とヒッタイトの「条約³⁶⁴」の相違点

それでは、具体的にどのような点がアッシリアの影響で、どのような点がヒッタイトの影響なのであろうか。ワインフェルド³⁶⁵が論じるところによると、両者の相違は以下のようなものである。

ヒッタイトの国際条約の定型は 1) 序言 2) 歴史的序文 3) 同盟の条項 4) 契約 5) 証人の召喚 6) 祝福と呪い 7) 誓約と他の要素（書かれた文書の寄託・定期的読み上げの条項・写しの授与など）である³⁶⁶。

新アッシリアの「条約」類型（誓約文書を含む）はヒッタイトの「条約」類型の発展形とみることができるとはいえ、3つの主要な点で異なっている。a) 新アッシリアのものは歴史的序文を持たない³⁶⁷ b) 新アッシリアのものには呪いはあるが祝福がない c) ヒッタイトの条約においては契約条項の大部分が、属国が必要なときには救出に行くといった宗主側の約束である（が新アッシリアのものにはそれがない）³⁶⁸。

これを念頭に置いて申命記を見ると、新アッシリアの文書（ESOD³⁶⁹）には見られず、ヒッタイトの「条約」文書（古代西アジアの「条約」文書一般）に見られる特徴が認識できる。それは、申命記には長い歴史的序文（1-11章）があり、祝福のリストがあり（28:1-13）、宗主にとえることもできるヤハウエの救出義務がある（たとえば 30:3-4）からである。申命記にはヒッタイトの「条約」文書に見られる特徴が存在するのだが、それは青銅器時代末期から古代西アジア全域にわたって一般的に存在した影響つまり間接的な影響であって、新アッシリアの ESOD のように直接的文学的影響関係を伴うものではない。したがっ

³⁶⁴ この対比は誤解を生むかもしれない。ここでは「ヒッタイトの条約」が独自のものであるというのではなく、古代西アジアの条約文書の典型的な例として「ヒッタイトの条約」を考えている。また「条約」という訳語自体にも留保をつけなければならない。

³⁶⁵ Moshe Weinfeld, "Covenant Making in Anatolia and Mesopotamia," *JANES* 22 (1993): 135-39.

³⁶⁶ Weinfeld, "Covenant Making in Anatolia and Mesopotamia," 135.

³⁶⁷ Cf. Simo Parpola and Kazuko Watanabe, *Neo-Assyrian Treaties and Loyalty Oaths*. (Helsinki: Helsinki University Press, 1988). もちろん「歴史的序文がない」というのは「序言がない」ということではない。Weinfeld が念頭に置いているのは、ヒッタイトの条約に見られるような「どのような経緯で両国が宗主国・属国関係に入ったのか」という「語り」である。

³⁶⁸ Weinfeld, "Covenant Making in Anatolia and Mesopotamia," 135-37.

³⁶⁹ 新アッシリアの文書の特徴というより、ESOD の特徴という方が正確である。

てヒッタイトの条約の伝統に依拠して申命記に対する ESOD の影響を過小評価することは端的に誤りと言うべきである³⁷⁰。

4.11. 新アッシリアとユダの深いつながり

前 701 年のセナケリブによるラキシシュ攻略やエルサレム攻囲の記述から、ユダと新アッシリアの間には、支配-被支配関係があったのみならず、ある種の敵対関係も存在したという印象が持たれている。しかし、これは一面的な真理であって、ユダ王国とアッシリア帝国の間には今まで知られてきた以上に密接な関係があったという提案もなされている³⁷¹。ユダとアッシリアには姻戚関係があり³⁷²、アッシリアがユダに課した税は他の国より軽く³⁷³、ラキシシュ攻略の後でさえ他の国より罰が軽かったという³⁷⁴。さらにラキシシュ攻略後にも錘のシステムをアッシリアのものに強制しなかったという事実が知られている³⁷⁵。ダリー (S. Dally) によれば両者は宗主国・属国関係にあったというよりは保護国・庇護国関係にあったようだ³⁷⁶。これらの要素は申命記に ESOD が強い影響を与えたことの傍証となるかもしれない。

³⁷⁰ そもそも「新アッシリアの文書」と「ヒッタイトの『条約』」を対立するものであるかのように比較する視座に問題があるかもしれない。アッシリアの *adē*「アデー」もヒッタイトの *išhiul*「イシュヒウル」もその核にあるのは「誓約」概念であり、それを「条約」「契約」「誓約」などと訳し変えているにすぎない。もしかするとヘブライ語の *berith*「ベリート」も「契約」と訳すより「誓約」の方がふさわしいかもしれない。イシュヒウルを「誓約」と訳しうることは渡辺和子「古代オリエントの誓約と神の印章」脇本平也・柳川啓一編『現代宗教学 4 権威の構築と破壊』東京大学出版会、1992 年、85–114 頁、とくに 100、109 頁参照。また「イシュヒウル」と「ベリート」が重なる概念でありうることは Ada Taggar-Cohen, “Biblical *covenant* and Hittite *išhiul* reexamined,” *VT* 61: 2011, 461-488 参照。

³⁷¹ S. Dalley, “Recent Evidence from Assyrian Sources for Judean History from Uzziah to Manasseh,” *JSOT* 28 (2004): 387-401.

³⁷² Dally, “Recent Evidence from Assyrian Sources for Judean History from Uzziah to Manasseh,” 395-97.

³⁷³ Cf. Finkelstein and Silberman, *The Bible Unearthed*, 265 (邦訳、317 頁)。

³⁷⁴ ラキシシュ・レリーフ (David Ussishkin, *The Conquest of Lachish by Sennacherib*, Tel Aviv: Tel Aviv University; The Institute of Archaeology, 1982 参照) の図像では、ユダ人よりヌビア人の方がより重く罰せられているように見える (とくに Ussishkin, *The Conquest of Lachish by Sennacherib*, 86-89, 113 参照)。Cf. Dalley, “Recent Evidence from Assyrian Sources for Judean History from Uzziah to Manasseh,” 391.

³⁷⁵ Dally, “Recent Evidence from Assyrian Sources for Judean History from Uzziah to Manasseh,” 389-91.

³⁷⁶ Dally, “Recent Evidence from Assyrian Sources for Judean History from Uzziah to Manasseh,” 390.

4.12. 小括

以上みてきたところから、申命記 6:4-5 の年代は前 7 世紀後半と推測され、ESOD の強い影響がうかがわれる。当該箇所は原申命記には存在しなかったかもしれないが、ヨシヤ時代（改革期）に最初の申命記史家によって原申命記に付け加えられたと思われる。6:4 は重要な箇所であるにもかかわらず解釈が困難であるが、おそらくヤハウェの「比類なさ」「特別性」を強調しており、恒常的拝一神教の宣言であって、元来唯一神教の宣言であったとは解せない。ヒッタイト文学を含む古代西アジア一般の間接的影響は歴史的序文という 6:4-5 が含まれるユニットの性格自体に読み取れるが、6:5 に命じられる「愛」はイスラエルのヤハウェに対する愛であって、ヤハウェのイスラエルへの愛は言及されていない。この点から、申命記 6:5 にもっとも影響を及ぼしたのはヒッタイトの伝統ではなく ESOD のものであると想定できる。もちろん複合的引用の可能性を否定するものではないが、申命記 6:4-5 に関する限り、もっぱら ESOD から引用されているというべきであろう。

5. 古代イスラエルにおける王権観の変遷：申命記と申命記史家を中心として³⁷⁷

聖書資料に現れる古代イスラエルにおける王権の特徴は、古代西アジアの周辺諸国のそれと重なりを持ちながら、重要な相違を示している。それはイスラエルの王が民からの超越性を持たない、すなわちイスラエルの王権が比較的弱いということである。本章では、この特徴ゆえに、ユダ王国の宮廷役人（書記）グループが ESOD の形式と内容を受容する際、神々やエサルハドン、アッシュルバニパルが主体（あるいは客体）になっている部分にヤハウェを入れて読むということが可能になり、しかもその読み替えゆえに後の思想史に巨大な影響を与えたのではないかという提案をする。原申命記から存在していると考えられる「王の法」（申 17:14-20）は王権を顕著に制限しているが、（ヨシヤ時代の）申命記史家においてこの方向は後退している。そして、捕囚後にはヤハウェが王と同一視されることになる。その背後には、幼いヨシヤ王の後見をしたグループの関心、成人したヨシヤ王を利用しようとしたグループの関心、そして王制自体が存在しなくなった後に力を持ったグループの関心を順に読み取ることができるかもしれない。

5.1. 古代イスラエルにおける王権

古代イスラエルにおいて王とは自由民の男子の中から選ばれるものであり、「同輩者中の第一人者」にすぎなかったとされる。その点で古代ギリシアの都市国家における王権のあり方に近いものであった。その事情はサウルの王選出の物語³⁷⁸に反映していると見ることができる³⁷⁹。これに対して概ね古代西アジアの王は「神の子³⁸⁰」として民の前に現れる。たとえばアッシリアの王は神アッシュルの「僕」（「副王」と訳されることもある）と考えられていた。形式上神が第一ではあるが、王は人間の中では圧倒的な力を持つ者であり、その意味で超越的性質を備えていたのである。それゆえ王は法制定権と最高裁判権を持つ

³⁷⁷ 本章は拙論「古代イスラエルにおける王権観の変遷：申命記と申命記史家を中心として」『旧約学研究』第 12 号、2016 年、43－57 頁【査読有り】を改訂したものである。

³⁷⁸ サムエル記上 9:1-11:15 参照。

³⁷⁹ ただしサウルの出身地が含まれる北イスラエルの王権の方が南ユダの王権より弱い傾向にあるということにも留意しなければならない。

³⁸⁰ Cf. Bernhard M. Levinson, “The Reconceptualization of Kingship in Deuteronomy and the Deuteronomistic History’s Transformation of Torah,” VT 51, (2001): 511-34, 514.

ていた。しかしイスラエルの王が、自ら法制定を行なったという記録は存在しない³⁸¹。申命記史家の手になると考えられる列王記下 23 章の契約締結は、ヨシヤによって宣布されているが、根拠となる文書は彼の与り知らぬところからもたらされたものであった（王下 22:8-10）。

5.2. 申命記による ESOD の受容

ESOD の主たる関心事は、エサルハドンの死後、アッシュルバニパルがアッシリア王になることを確実にすることであった。アッシュルバニパルは長子ではなく、兄弟のシャマシュ・シュム・ウキンはバビロニア王に定められていた。エサルハドンは自身が長子ではなかったため、王位を確実にするのに苦労した経験があった。そのため存命中に ESOD を発行し、アッシュルバニパルの兄弟たちをはじめ属国属領にアッシュルバニパルへの忠誠をあらかじめ要求したのである。そしてそれを確実にするため、各地の呪いを集めた長い「呪いのリスト」（誓約を破った場合にふりかかる呪いの一覧）を付している。

イスラエルが ESOD のスタイルおよび内容を原申命記（おそらく 12-26 章および 28 章）にとりいれた際、非常に重要な「読み替え」が行われ、この「読み替え」がのちの思想史に大きな影響を与えることになったと考えられる。ESOD の「大皇太子アッシュルバニパル」、「エサルハドン」そして神々はイスラエルの王（あるいは皇太子）とではなく、原則的に「神ヤハウエ」と（エサルハドンの位置にモーセが入ることもある）入れ替えられたのである。もちろん王権を正当化するのもヤハウエであるが、王そのものも人間ではなくヤハウエ自身であるかのような読み替えである。それゆえヨシヤのような特別な王についてさえ、旧約聖書においては「アッシュルバニパルの即位式の讃美」との直接的な並行関係が明確に検出できないのも不思議ではない。申命記の「王の法」はこのような観点から、王権について前例のない厳しい制限を規定している。

³⁸¹ H. J. ベッカー著 鈴木佳秀訳『古代オリエントの法と社会：旧約聖書とハンムラピ法典』ヨルダン社、1989 年、218 頁参照。Cf. Hans Jochen Boecker, *Recht und Gesetz im Alten Testament und im Orient* 2nd ed. (Neukirchener, 1984), 123. (原著初版は 1976 年)。王が自分で自分の権利を制限するはずがないという理由で、ヨシヤ改革の歴史性に疑問を提起する向きもあるが、ヨシヤ自身は法を作成していないことに注意する必要がある。おそらく後見を受けていた幼児期に実質的に王権が制限され、成人後には「発見された」文書の「呪いのリスト」によって、制限を受け容れるよう説得されたものと想定される。同時にヨシヤの王権は、文書とその内容の宣布のために利用されるのである。

5.3. 王の法 (Dt. 17:14-20) 試訳

14 あなたが、あなたの神ヤハウェがあなたに与える地に行き、あなたがそれを所有してそこに住むとき、あなたが「周りの他のすべての民のように、私の上に王を立てよう」と言うなら、

15 あなたはあなたの上に、ヤハウェ・あなたの神が選ぶ王をあなたの上に立てなければならない。あなたの同胞の中からあなたの上に立てなければならない。あなたの上に、あなたの同胞でない外国人を置くことはできない。

16 彼（王）は自分のために馬を増やしてはならない。そして³⁸²馬を増やすために民をエジプトに戻してはならない。ヤハウェはあなたがたに³⁸³「この道をふたたび戻らせてはならない」と言われたからである。

17 そして彼は自分のために妻を増やしてはならない。彼の心を逸らしてはならない。そして銀と金を自分のためにおびただしく増やしてはならない。

18 そして彼が彼の王国の王座の上に自分を座らせるようになったとき、彼は自分のために、レビ人祭司の前で、この律法の写しを³⁸⁴巻物に書かなければならない。

19 それは彼とともにあり、すべて生きている日々、彼は自分のためにそれを³⁸⁵読み上げなければならない。彼が彼の³⁸⁶神ヤハウェを畏れることを学び、この律法のことばをすべて³⁸⁷守り、これらの律法³⁸⁸を行なうために。

20 彼の心が彼の同胞に対して高ぶらないように、そして右にも左にも逸れないように、彼と彼の子らがイスラエルの中で長く生きるためである。

³⁸² ホウムズ・パーソンズの印刷本による写本、ペシッタ、タルグム、偽ヨナタン・タルグム、ウルガータには *ἐαυτῷ* 「自分のために」がある。

³⁸³ ウルガータ、七十人訳はこれを欠き、ウルガータとひとつのヘブライ語写本は *אני* 「私に」となっている。

³⁸⁴ 七十人訳は *τὸ δευτερονόμιον τοῦτο ταύτας* 「第二の律法を」となっており、ウルガータもそれにしたがっている。「ミシュネー」は「写し」とも「第二の」とも読めるからである。

³⁸⁵ 「それ」はマソラ本文では男性形であるが、セビール、サマリア五書、タルグムでは女性形である。男性形をとれば指示対象が「巻物」になり、女性形では「律法」となる。

³⁸⁶ ウルガータと少数の写本および七十人訳では *אֱלֹהֶיךָ* 「あなたの神」。

³⁸⁷ 「この律法のことば（複数）をすべて」は、七十人訳では *τὰς ἐντολάς ταύτας* 「このことば（複数）を」であり、七十人訳（アンブロシアヌス写本・小文字写本）では *τὰς ἐντολάς αὐτοῦ* 「彼のことば（複数）を」である。

³⁸⁸ 「これらの律法を」は、ウルガータ（ケニコットの印刷本による異読：69）と偽ヨナタン・タルグムでは *כָּל* 「すべて（この律法のことばを）」となっている。

「王の法」の中でも、16-17 節の内容は驚くべきものである。王に対して軍事力の強化が禁止され（16 節）、妻を増やすことが禁止され（17 節）、財産を多く増やすことが禁止され（17 節）ている。許されているのは律法の写しをつくり、生涯読み上げることだけであり（18-19 節）、それも（長く生きるために）同胞に対して高ぶらないため（20 節）と説明されている。通常王に認められている諸権利をほとんどすべて剥奪し、王権を法の下に従属させるという「立憲君主制」が目指されているが、これは少なくとも古代地中海地域においては稀有な規定である。

5.4. 申命記の編集過程と王権観の推移

捕囚期以降は王制自体が消滅する。ダビデ王統のメシア待望は存続するが、それよりもヤハウェ自身が王であり、メシアであるという思想が強められていく。この際、原申命記やヨシヤ改革期の申命記史家とは異なるグループが影響力を持つようになったと想定できる。それはエゼキエルのような祭司家系のグループである。おそらくこの時期に成立したと考えられる³⁸⁹神聖法典（レビ記 17-26 章）には、王権のヒントもでてこない上、内容的には申命記を後退させたものとなっている³⁹⁰。捕囚期の申命記史家の仕事は、なぜ神の民であるイスラエルがヤハウェによって災いを与えられるのかという神義論問題に答えることその他、王や国家なしでも民族の同一性を確保できるように聖なる文書を整えることであった。その結果、ヤハウェは「唯一神」となり、弱者の生存権もヤハウェの命令によって直接担保されることになったのではないだろうか。

³⁸⁹ ベッカー、『古代オリエントの法と社会』、290-93 頁参照。ベッカーは捕囚期と限定してはいないが、王制が失われたあとに成立したとしている。Cf. Boecker, *Recht und Gesetz im Alten Testament und im Alten Orient*, 163-65.

³⁹⁰ Cf. Norbert. Lohfink, “Poverty in the Laws of the Ancient Near East and of the Bible,” *ThS* 52 (1991): 34-50, 47-49.

5.5. 王として即位するヤハウエ（詩篇 47³⁹¹・93・96・97・98・99 篇³⁹²など）³⁹³

概ね捕囚期より後、とくに第二神殿時代と考えられるいくつかの詩篇には、「ヤハウエは王となられた」といった宣言³⁹⁴が繰り返し現れる。これは、捕囚後帰還民の共同体において、ヤハウエを王に擬制した自治が行われたことを示していると思われる。聖書資料によるとペルシア王クロスは前 538 年にイスラエル捕囚民の帰還を認めたようだが、それは政治的に独立する許可ではなく、宗教的な自治を行なう許可であった。ヤハウエの即位の詩篇には、歴代誌におけると同様、この間の事情が反映していると考えられる。

これらの詩篇には、ヤハウエが王として即位する際には公正と正義が確立される、という思想が表現されている。即位の際に行われる王の自由意思による立法行為である。捕囚後のヤハウエは唯一神に高められているため、人々の抑圧からの解放もイスラエルに限定されず宇宙レベルで語られることになる。

Ps. 47:3 試訳

実にいと高きヤハウエは畏れられる 全地の³⁹⁵偉大な王である

Ps. 47:7-9 試訳

7 神を讃美せよ³⁹⁶ 讃美せよ 我らの王を讃美せよ 讃美せよ³⁹⁷

8 実に神は全地の王 マスキールで讃美せよ

9 神は諸国民³⁹⁸の上に王となられた 神は³⁹⁹聖なる王座に就かれた

³⁹¹ 月本昭男『詩篇の思想と信仰Ⅱ』新教出版、2006 年、273-85 頁参照。

³⁹² 月本昭男『詩篇の思想と信仰Ⅳ』新教出版、2013 年、278-88、320-66 頁参照。

³⁹³ 以下「詩篇」を Ps. と略記する。

³⁹⁴ ヤハウエが王として即位する、というイメージもアッシリア由来であるかもしれない。本論文に付した参考資料の「アッシェルバニパルの即位式の讃美」にも「アッシェルは王である」という宣言が登場する。さらに紀元前 2000 年より前から、アッシェルが王であり、人間の支配者はその部下であるという思想が確認できるからである。渡辺和子「アッシリアの自己同一性と異文化理解」、277-278 頁参照。

³⁹⁵ 少数の写本ではאלהים「神々の」。

³⁹⁶ 少数の写本ではלא「神に／神のために」。そしてペシッタでは「輝きの中（の神） bšwbh' in splendore」。

³⁹⁷ 最後のזמרו「讃美せよ」をふたつの写本とペシッタは欠く。

³⁹⁸ ふたつの写本と七十人訳（ヴェロネンシス写本・アレクサンドリア写本）ではכל「すべての（諸国民）」。

³⁹⁹ ひとつの写本では欠く。BHS は削除を提案。

Ps. 93:1 試訳

⁴⁰⁰ヤハウェは王となられた (יהוה מלך) 威厳を纏って 纏って
ヤハウェは力を帯びて
世界は堅く据えられ 揺るがされない

Ps. 96:10 試訳⁴⁰¹

諸国民に言え、ヤハウェは王となられた (יהוה מלך)
世界は堅く据えられ 揺るがされない
彼は公正をもって諸民族を裁く

Ps. 96:13 試訳⁴⁰²

ヤハウェの前で
実に彼は来られる 実に彼は来られる
地を裁き 正義をもって世界を裁くために
そして諸国民を彼の真実をもって

Ps. 97:1 試訳

ヤハウェは王となられた (יהוה מלך)
地は歓喜せよ 多くの島々は

Ps. 98:2 試訳

ヤハウェは知らされた 彼の救いを
諸国民の眼に 彼は正義を明かされた

⁴⁰⁰ 七十人訳にはこの前に εἰς τὴν ἡμέραν τοῦ προσαββάτου, ὅτε κατώκισται ἡ γῆ αἶνος ᾠδῆς τῷ Δαυιδ 「安息日の前日のために。その土地がはじめて住まれたとき、ダビデによる歌の讃美」がある。

⁴⁰¹ 全体に歴代誌上 16:31 の引用と考えられる。

⁴⁰² 全体に歴代誌上 16:33 の引用と考えられる。

Ps. 98:6 試訳

ラッパ⁴⁰³と角笛の音をもって喜び叫べ

王であるヤハウェの前で

Ps. 98:9 試訳

ヤハウェの前で

実に彼は来られる 地を裁くために

彼は正義をもって世界を裁く

公正をもって諸国民を

Ps. 99:1 試訳

ヤハウェは王となられた (יהוה מלך) 諸国民は震えよ

彼はケルビムに座す 地は震えよ

以上見てきたように、ヤハウェの即位の詩篇には、唯一神ヤハウェ＝王という図式と、したがってヤハウェが全世界を裁き、正義をもたらす者であるという理解が示されている。捕囚期に生じ、捕囚後そして第二神殿時代に確立した王権観をうかがうことができる。

5.6. 小括

少なくともヨシヤ王が幼く後見を受けていた時期の王権は、相対的に弱いものであった。そのため原申命記に ESOD のスタイルと内容を受容する際、神々のみならずエサルハドンやアッシュルバニパルの場所に神ヤハウェを読み込むという奇抜なアイディアが生まれたのかもしれない。その後ヨシヤ改革期には、王の力を利用して（原）申命記を宣布する必要上、列王記などの申命記史家的作品では、王権が再強化されている。しかし先の「読み替え」ゆえに、王制の存在しない捕囚期には当該文書とその内容の神聖化が進み、王権は人間ではなくヤハウェ自身に帰属するという観念が成立したのである。

⁴⁰³ ペシッタは בחצרות 「ラッパ（をもって）」を欠く。

6. 「ヨシヤの改革」と詩篇 72・80 篇⁴⁰⁴

本章の目的は、いわゆるヨシヤの改革（列王記下 22 : 1-23 : 30 ; 歴代誌下 34 : 1-35 : 27）と詩篇 72・80 篇の関連性を探ることにある。ヨシヤの改革研究史においては、詩篇のような作品は、その文学的特質上特定の歴史的出来事と排他的に結びつけることが難しいため、ほとんど扱われてこなかった。他方詩篇研究史においては、とくに詩篇 72 篇および 80 篇についてヨシヤの改革との関連に言及する例が散見され、ヨシヤの改革と両詩篇の関係についてさらなる考察が必要とされている。以下順にふたつの詩篇を見ていくことにしたい。

6.1. 詩篇 72 篇

6.1.1. 詩篇 72 篇試訳

1 ソロモンによせて

神よ、あなたの公義を王に、
あなたの正義を王の子に授けてください。

2 彼があなたの民を、正義をもって裁き、 あなたの貧しい者たちを、公義をもって裁きますように。

3 山々はあなたの民に平安を、 丘々は正義をもたらしますように。

4 彼が貧しい者たちの訴えを裁き、貧しい者の子らを救い、 抑圧する者たちを打ち碎きますように。

5 彼が太陽と月のあるかぎり、 いつも在りますように⁴⁰⁵。

6 彼が雨のように、刈り取られた芝の上に降りますように 地に滴る驟雨のように。

⁴⁰⁴ 本章は拙論「ヨシヤの改革と詩篇 72・80 篇」『旧約学研究』第 9 号、2012 年、1－14 頁〔査読有り〕を改訂したものである。

⁴⁰⁵ 七十人訳 καὶ συμπαραμενεῖ にしたがっている。マソラ本文は יִרְאוּךָ 「彼らがあなたを恐れますように。」

- 7 彼の日々に、正義が萌えだし、
月のなくなるときまで、平安が豊かにありますように。
- 8 彼が海から海まで、
川から地の果てまで、支配しますように。
- 9 さばくの住人たちは彼の前にひざまずき、
彼の敵たちは塵をなめますように。
- 10 タルシシュと島々の王たちが贈り物を持ってきますように、
シェバとセバの王たちが貢ぎ物を持って。
- 11 すべての王たちが彼にひざまずき、
すべての民が彼に仕えますように。
- 12 実に彼は、叫ぶ貧しい者たちを、
貧しい者と、助ける者のない者を、救ってくださる。
- 13 彼は弱い者たちと貧しい者たちを憐れみ、
貧しい者たちの生命を救う。
- 14 抑圧と暴力から、彼は彼らの生命を救い、
彼らの血は、彼の目に尊い。
- 15 彼が生き、彼にシェバの黄金を与えますように、
彼が彼のために祈り続け、彼は彼を常に祝福しますように。
- 16 地には穀物が豊かにあり、それが山頂で波打ちますように、
その果実はレバノンのようであり、
彼らは町から、地の植物のように繁栄しますように。
- 17 彼の名が永遠に続き、彼の名が太陽の前で増し加わりますように、
すべての民が彼において祝福され、彼らが彼を祝福された者と言いますように。
- 18 ヤハウエ、神よ、イスラエルの神は讃えられよ。
彼だけがすばらしいことを為される。
- 19 栄えある彼の名が永遠に讃えられ、
彼の栄光が全地を満たしますように。
アーメン、アーメン。
- 20 エッサイの子ダビデの祈りは終わった。

6.1.2. 詩篇 72 篇構成

1 節 a 表詞

1 節 b-7 節 王のための嘆願

8-11 節 世界支配者としての王

12-15 節 貧しい者を救う者としての王

16-17 節 地と王への祝福の嘆願

18-19 節 讃美

20 節 奥付

詩篇 72 篇は、「王の詩篇」に分類される。C. A.ブリッグスと E. G.ブリッグスはこれを「元来即位する王のための嘆願であった⁴⁰⁶」と主張しているが、この詩篇が実際に即位式で用いられたかどうかについては明らかでない⁴⁰⁷。もしこれが「即位式における讃美」の類型にあたるとすると、次に問題となるのは、この詩篇が「アッシュルバニパルの即位式の讃美⁴⁰⁸」に直接的に依存しているかどうか、ということである。たとえばオットーは、アーネット (M. Arneht) の説にしたがって、両者の間に直接的依存関係があると想定している⁴⁰⁹。アーネットは、ヤハウエを太陽神と同定し、詩篇 72 篇は「アッシュルバニパルの即位式の讃美」に直接的文学的に依存していると主張している⁴¹⁰。これに対してツェンガー

⁴⁰⁶ C. A. Briggs and E. G. Briggs, *A Critical and Exegetical Commentary on the Book of Psalms*, Vol. II, (New York: Charles Scribner's Sons, 1907), 131. Cf. Marvin E. Tate, *Psalms 51-100*, (Dallas: Word Books, 1990), 222.

⁴⁰⁷ 月本昭男『詩篇の思想と信仰Ⅲ』新教出版、2011年、304頁。「本詩は、ひろく、王の儀式で詠われた王のための『とりなし』の祈りであった、とみられてきた。だが、その儀式を特定することには、未だ誰も成功していない。まずは王の即位式が思いあたるだろう。だが、王の即位式を背景にする詩篇二篇や一〇篇と本詩は性格を異にする。5節や16節から想定される季節祭についても、その祭礼の詳細は伝えられていない。要するに、本詩の儀礼的背景は明らかでない。」

⁴⁰⁸ このテキストのトランスクリプトおよび英訳については Alasdair Livingstone ed., *Court Poetry and Literary Miscellanea*, (Helsinki: Helsinki University Press, 1989), 26-28 あるいは Benjamin Read Foster, *Before the Muses: An Anthology of Akkadian Literature*, 3rd ed., (Bethesda: CDL Press, 2005), 815-17 参照。(ただし後者は訳のみ)。内容については前者からの試訳(「参考資料」)を参照されたい。

⁴⁰⁹ Eckart Otto, "Josia/Josiareform," in *RGG*⁴, vol. 4, 587-90, 587.

⁴¹⁰ Martin Arneht, "Sonnen der Gerechtigkeit": *Studien zur Solarisierung der Jahwe-Religion im Lichte von Psalm 72*, BZABR I, (Wiesbaden: Harrassowitz, 2000). このシリーズの編集責任者は E・オットーである。

(E. Zenger) は、ヤハウェの「太陽神」としての要素はこの詩篇で中心的なものではないとし、詩篇 72 篇には古代西アジアの文学からの一般的影響は認められるものの、両者の間には十分な類似性がない⁴¹¹、としてアーネットの主張を批判している。この論点を念頭に置いてテキストの検討に入ろう。

6.1.3. 詩篇 72 篇検討

表詞 (1 節 a) を、一般に行われるように「ソロモンのために⁴¹²」と解するならば、これは現在のテキストの編集者がこの詩篇をダビデに仮託した疑似的な設定 (20 節参照) であり、その主張には歴史性がないと言わねばならない。しかし、これを「ソロモンによせて⁴¹³」と読めば、本来的な設定であることを示しているということになる。どちらの場合でも、ダビデ王が実際にソロモン王のために詠ったとは考えられない。というのは、「貧しい者」(2 節および 4 節) のための「公義と正義」というテーマは、ダビデやソロモンの時代より、ヨシヤの改革の時代によく合致する (エレミヤ書 22:15-16⁴¹⁴参照) からである。それゆえ C. A. ブリッグスと E. G. ブリッグスは詩篇 72 篇をヨシヤについて謳ったものとし⁴¹⁵、ツェンガーは紀元前 7 世紀としているのである⁴¹⁶。

3 節の「山々」と「丘々」は、王の公義に反応しているが、これは単に自然を擬人化したものと読むべきではない⁴¹⁷。たしかに 5-7 節では、王がほとんど神格化されているかのようにも見えるが、これは「王が正義と公義を行うなら、自然はそれに反応して民に祝福

⁴¹¹ Frank-Lothar Hossfeld und Erich Zenger, *Psalmen 51-100*, (Freiburg: Herder, 2000), 308-10. このセクション (詩篇 72 篇) は、ツェンガーが担当している。

⁴¹² לְשֹׁלֹמֹה の ל は「～のために」とも「～によせて」とも解しうる。

⁴¹³ 同上。

⁴¹⁴ 「15 あなた [ヨヤキム] は杉で競うゆえに王なのか？あなたの父 [ヨシヤ] は食べたり飲んだりしたが公義と正義をおこなった。そしてそのとき彼は幸福だった。 16 彼は貧しい者と窮している者の訴えを裁き、そのとき彼は幸福だった。それが私を知ることではなかったか？」(エレ 22:15-16 [試訳]) この箇所については月本、『詩篇の思想と信仰 III』306 頁参照。Cf. Briggs and Briggs, *A Critical and Exegetical Commentary on the Book of Psalms*, vol. II, 132-34.

⁴¹⁵ Cf. Briggs and Briggs, 133.

⁴¹⁶ Hossfeld und Zenger, *Psalmen 51-100*, 308, 313-15.

⁴¹⁷ 月本『詩篇の思想と信仰 III』、301 頁。「このような表現を単なる自然の擬人化とみてはならない。自然が神の正義と公正の実現に参与するのは、正義と公正が創造の神ヤハウェの意思であり、創造された自然の秩序と別ではないからである。天と地そして山々がヤハウェの審判に『証人』として呼び出されるのも、こうした創造信仰に基づく (...)。」

をもたらす」という「創造」の秩序についての見方を反映していると考えられる。8-11 節は、偉大な支配者としての王を描写している。彼は領域を拡大し（8 節）、支配を好まないさばくの民さえも統治している（9 節）。近隣の王たちは贈り物や貢ぎ物を持ってやって来る（10 節）。この部分は、「すべての王たち」が彼にひざまずき、「すべての民」が彼に仕えるように（11 節）という世界支配者としての王のイメージで閉じられている。この王のイメージはメシア主義的かつ終末論的であるため、この部分は現実のイスラエル王が存在しなくなってから、つまり捕囚以後に年代づけられる。

12-14 節は苦しむ者たちの助け手としての王について具体的なイメージを提示している。1 節 b-7 節と 12-14 節には内容的な連続性がある。15 節⁴¹⁸は、解釈によってまったく逆の「嘆願」となりうる。一方では「彼（集合的な意味での「民」）」が生きて（וִיחִי）、「彼（王）」に（לוֹ）「シェバの黄金を捧げますように」（וִיתֵן）、そして「彼（民）」は常に「彼（王）」のために（בְּעֵדוֹ）「祈り続けますように」（וִיתְפַּלֵּל）、「彼（民）」は常に「彼（王）」を祝福しますように」（יְבָרְכֵנָהוּ）と読むことができる。この読みを採用すると、この節は一次的テキストとは考えにくくなる。それが善王に対する民の反応と考えられるにしても、「貧しい者のための王の公義と正義」という全体的なテーマに反するからである。この場合、15 節は二次的テキストと判断せざるを得ない。他方、次のような読みも可能である。「彼（集合的な意味で「苦しむ者」）」が生きて（וִיחִי）、「彼（王）」が「彼（苦しむ者）」に（לוֹ）シェバの黄金を与えますように（וִיתֵן）、そして「彼（王）」は「彼（苦しむ者）」のために（בְּעֵדוֹ）「祈り続けますように」（וִיתְפַּלֵּל）、「彼（王）」は「彼（苦しむ者）」を常に「祝福しますように」（יְבָרְכֵנָהוּ）⁴¹⁹。この読み方は、当該詩篇の流れをスムーズにするので、最初の読み方よりも蓋然性が高い。この解釈をとれば、15 節は一次的テキストの一部と考えられる。この観点からすれば、前述の「アッシュルバニパルの即位式の讃美」と似た内容を持つ 17 節も、二次的テキストに分類される。18-19 節は第二ダビデ詩集を閉じる賛美である。20 節は同じ機能をもつか、あるいは第一・第二ダビデ詩集を閉じる役割を果たしているかもしれない⁴²⁰。

⁴¹⁸ וִיחִי וִיתֵן לוֹ מִזֶּהָב שֶׁבַּא וִיתְפַּלֵּל בְּעֵדוֹ תָּמִיד כָּל הַיּוֹם יְבָרְכֵנָהוּ

⁴¹⁹ Cf. 月本、『詩篇の思想と信仰Ⅲ』、294、299 頁および Gianni Barbiero, “The Risks of a Fragmented Reading of the Psalms: Psalm 72 as a Case in Point,” ZAW 119 (2008): 67-91, 79.

⁴²⁰ David Willgren, “Psalm 72:20: A Frozen Colophon?” JBL 135 (2016): 49-60 は、メディア論的観点から、詩篇が二つの写本に分けられており、詩篇 72 篇 19 節がちょうど詩篇の内容の終りであったと考えている。それをメタレベルで示すメモのような機能が 20 節であったのだが、20 節までが本文と混同された可能性を示唆している。

以上の所見から、詩篇 72 篇は紀元前 7 世紀後半のヨシヤ改革と強い関係がある部分（一次的部分）と、より後代の部分（二次的部分）に区別することができる。したがって、当該詩篇全体がヨシヤの改革と関係するわけではないが、主要部分と改革との関係は認められる。そして、詩篇 72 篇が「アッシュルバニパルの即位式の讃美」から直接的あるいは間接的影響を被っていたとしても⁴²¹、内容的にはそれを逆転あるいは換骨奪胎（現代的に言えば「脱構築」）したものとなっている。「アッシュルバニパルの即位式の讃美」の内容は、詩篇 72 篇の中でも、主要な部分（一次的部分）ではなく、二次的な部分により適合すると考えられる。したがって、楔形文書資料からの一般的影響は当然としても、当該詩篇の主要部分については「アッシュルバニパルの即位式の讃美」に対する直接的依存関係は非常に疑わしいといえる。次に詩篇 80 篇について見ることにしよう。

6.2. 詩篇 80 篇

6.2.1. 詩篇 80 篇試訳

- 1 指揮者のために。ゆり（の調べ）。アサフの証し。調べ。
- 2 イスラエルの牧者よ、お聞きください。
あなたはヨセフを羊のように導き、ケルビムの上に座し輝いておられます。
- 3 エフライムとベニヤミンそしてマナセの前であなたの力を目覚めさせ、
私たちの救いのために来てください。
- 4 神よ、私たちを元に返し、あなたの顔を輝かせてください、
そうすれば私たちは救われるでしょう。
- 5 万軍の神ヤハウエよ、
いつまであなたはご自分の民の祈りに対して煙を吐かれる⁴²²のですか。
- 6 あなたは彼らに涙のパンを食べさせ、
涙を飲ませられました⁴²³。

⁴²¹ Cf. Barbiero, “The Risks of a Fragmented Reading of the Psalms,” 80, n. 43. Barbiero は、詩篇 72 篇と「アッシュルバニパルの即位式の讃美」に類似はあるが、後者の前者に対する直接的文学的依存関係を見るのは強引だ、としている。

⁴²² 「煙を吐く」（עשנת）は「怒る」の意。

- 7 あなたは私たちを近隣の民と争わせ、
私たちは敵たちから嘲られています。
- 8 万軍の神よ、私たちを元に返し、あなたの顔を輝かせてください、
そうすれば私たちは救われるでしょう。
- 9 あなたは葡萄の木をエジプトから引き抜き、
民を追い出して、それを植えられました。
- 10 あなたは彼女（葡萄の木）を整え、
彼女の根をもって、地を満たしました。
- 11 山々は神の杉の木の枝々の影におおわれました。
- 12 その枝々は海に達し、その若芽は川に達しました。
- 13 なぜあなたは彼女の壁を崩されるのですか。
通りかかる者たちが皆彼女を焼きました。
- 14 森の猪が彼女を引き裂き、
野の獣が彼女を食いつくしました。
- 15 万軍の神よ、戻ってください。
天から見下ろし、この葡萄の木を訪れてください。
- 16 そしてあなたの右手が植えられた株を訪れてください。
そしてその（息）子をあなたのために強めてください。
- 17 彼女は火で焼かれ、切り倒されました。
彼らは、叱責によって、あなたの前で滅びるでしょう。
- 18 あなたの右の手の人に、
あなたがあなたのために強められた人の子の上に、あなたの手がありますように。
- 19 彼は二度とあなたに背かないでしょう。
私たちは生きて、あなたの名を呼びます。
- 20 万軍の神ヤハウエよ、私たちを元に返し、あなたの顔を輝かせてください、
そうすれば私たちは救われるでしょう。

⁴²³ マソラ本文にはשליש「第三の」という語がここにある。しかしペシッタはこれを欠いている。マソラ本文に忠実に読む場合、「バトの三分の一」などと校訂しなければならない。本試訳ではこれを除いている。

6.2.2. 詩篇 80 篇構成

1節	表詞
2-3 節	嘆願
4 節	リフレイン
5-7 節	苦難の描写
8 節	リフレイン
9-17 節	葡萄の木のたとえ
9-10 節	出エジプトおよび土地取得の回顧
11-12 節	神の守りの記憶
13-14 節	現在の無防備な状況
15 節	リフレイン（短い形）
16 節	嘆願
17 節	現在の破壊的状況
18 節	メシア的なものへの期待
19 節	讃美の誓い
20 節	リフレイン

6.2.3. 詩篇 80 篇検討

詩篇 80 篇は、疑いなく「民の嘆き」に分類される⁴²⁴。七十人訳はこれを、おそらく 2-3 節の内容から、アッシリアによる侵攻⁴²⁵を嘆くものと解釈している⁴²⁶。たしかに 2-3 節の内容は、北王国末期に関連のある要素を示している。「ベニヤミン」（3 節）は南ユダの領域に属するが、「ヨセフ」（2 節）、「エフライム」と「マナセ」（3 節）は北イスラエルの領域に属する。ここではいくつかの推測が成り立つ。ひとつはこの部分がアッシリア侵攻下の北イスラエルで作られた、という推測、もうひとつはヨシヤ時代に作られた、という推

⁴²⁴ Cf. Tate, *Psalms 51-100*, 308, 314; Hossfeld und Zenger, *Psalmen 51-100*, 310.

⁴²⁵ 紀元前 732 年におけるアッシリアの侵攻および紀元前 722 年のサマリア陥落などが考えられる。

⁴²⁶ 七十人訳 79 :1 には ψαλμὸς ὑπὲρ τοῦ Ἀσσυρίου 「アッシリアに関する詩篇」とある。

測である⁴²⁷。2-3 節は明らかに北王国の出来事を扱っているが、それはもちろん「その時代に」当該詩篇が作られたということを意味するわけではない。

4 節にある（ほかに 8 節、20 節にあり、15 節には短い形がある）リフレインは、エルサレム神殿神学⁴²⁸を指示しているようだ。ツェンガーは、このリフレインについて、一次的詩篇から後に挿入されたものと主張している⁴²⁹が、C. A. ブリッグスと E. G. ブリッグスは、これが一次的要素であって、書記のミスによって部分的に欠けてしまったものと考え、同じ形のリフレインが 5 回あるように校訂している（4 節、8 節、11 節と 12 節の間、15 節、20 節）⁴³⁰。C. A. ブリッグスと E. G. ブリッグスによると、本来 5 回すべてのリフレイン部分が「万軍のヤハウェよ、私たちを元に返してください、そしてあなたの顔を輝かせてください、そうすれば私たちは救われるでしょう」となっていたはずなのである。つまり彼らは現在のテキストに、「万軍の」（4 節）を補い、11 節と 12 節の間にリフレインを丸ごと挿入し、さらに 15 節には「そしてあなたの顔を輝かせてください、そうすれば私たちは救われるでしょう」を補って、それらを 8 節・20 節と同じになるよう校訂している⁴³¹。しかし彼らの校訂は、11 節と 12 節の間への挿入および 15 節の付加について問題がある。それらの挿入が、イスラエルを葡萄の木にたとえるメタファーの流れを寸断するからである。このリフレインの方が主要な部分が成立してからの（おそらく捕囚期以降の）挿入であると考えるのが自然である。5-6 節は人々の絶望を示している。9-12 節では、彼らは出エジプトから土地取得を経ていわゆるダビデ・ソロモン王国の繁栄（11-12 節）に至る神の祝福と守りを回顧している。それにもかかわらず、神はイスラエルの（城）壁を破壊し、彼らが無防備な状況に捨て置いた（13-14 節）。15 節は、短い形になってはいるものの、4 節や 20 節のようなリフレインによる嘆願である。16 節および 18 節の解釈については「（息）子」（16 節）と「人の子」（18 節）の意味をめぐる論争がある。筆者は、16 節 a の「切り株」と並行関係をなすであろう 16 節 b の「子」は、「イスラエル・葡萄の木」を指すと考え。そして 18 節 a において「あなたの右手の人」とパラレルをなすであろう 18 節 b の「人の子」は、メシア主義的な意味での王的人物を指していると考え。たしかに「彼

⁴²⁷ これらの推測は、さらに後代（ペルシア時代以降）において諸伝承がまとめられたという想定を妨げるものではない。

⁴²⁸ Cf. Hossfeld und Zenger, *Psalmen 51-100*, 456. エルサレム神殿神学の内容についての詳細は Albertz, *Religionsgeschichte Israels in alttestamentlicher Zeit, Teil 1*, 200-12 参照。

⁴²⁹ Hossfeld und Zenger, *Psalmen 51-100*, 456.

⁴³⁰ Briggs and Briggs, *A Critical and Exegetical Commentary on the Book of Psalms*, Vol. II, 65.

⁴³¹ Briggs and Briggs, *A Critical and Exegetical Commentary on the Book of Psalms*, Vol. II, 65.

女（イスラエル）は火で焼かれ」「切り倒された」（17 節）というのは、ヒゼキヤやヨシヤの時代にはあてはまらない。しかし、この節を捕囚期あるいは捕囚後のものと考えれば、この矛盾は容易に解消する。実際ラート（A. Laato）は、ヨシヤが捕囚期および捕囚後の時代にメシア的人物になっていったとしており⁴³²、スウィーニーに至っては、このプロセスが既に王国時代にははじまっており、ヨシヤもみずからをメシアと認識し、国家を救うメシア的王としてのアイデンティティを持っていた⁴³³、と考えている。後者は時代をさかのぼりすぎているかもしれないが、メシア待望は危機の時代の自然な反応といってもよいので、紀元前 722 年のサマリア陥落時には生じていたかもしれない。つまり捕囚後まで待たずとも形成された可能性がある。そうだとすれば、C. A. ブリッグスと E. G. ブリッグスのように、メシア的要素を根拠として、マカベア時代の編集者を想定する⁴³⁴必要はなくなる。19 節は、ほとんど神を脅迫する勢いで讃美を誓っており、彼らの逼迫した状況がうかがわれる。

以上の所見から、この詩篇の形成過程を、以下のように想定しうる。まず 2-3 節にあるもっとも早いと考えられる素材は、北王国に対するアッシリアの衝撃によって生じたものである。2-3 節に古い部族名が現れるからといって、これを王国以前のものとする必要はない。旧北王国の領域に近い「ベニヤミン」の名は、おそらく旧北イスラエルの人々を南ユダに結びつける意図を示している。4 節、8 節、20 節、（部分的には 15 節）のリフレインは、南ユダで生まれたエルサレム神殿神学の典型的な表現と考えられる。これらの北イスラエル起源の要素と南ユダ起源の要素は、おそらくヨシヤ時代に旧北イスラエル出身者を旧南ユダ王国の人々との統合を願って、意識的に統合されたのであろう。さらに捕囚期あるいは捕囚後に、ある種のメシア待望によって、17-18 節がつけ加えられた。

つまり、詩篇 80 篇の現在の形は、主としてヨシヤ時代にまとめられたであろう部分と、捕囚期あるいは捕囚後に年代づけられる部分との複合体である。詩篇 80 篇は、多くの層から成る古代イスラエルの「民の嘆き」である。ヨシヤ時代は、この詩篇にとって重要な時代であったであろうが、それはヨシヤ時代のみがこの詩篇の成立に与ったということを意味しているわけではない。

⁴³² Laato, *Josiah and David Revivus*, 356, 365.

⁴³³ Sweeney, *King Josiah of Judah*, 318-20.

⁴³⁴ Briggs and Briggs, *A Critical and Exegetical Commentary on the Book of Psalms*, vol. II, 202.

6.3. 小括

ヨシヤ改革の時代は、詩篇 72・80 篇のある部分と深い関係持っていると考えられる。もちろんそれは、ヨシヤ改革を歴史的に再構成する際の素材として使える性質のものではない。しかし固有名詞を用いず、特定の歴史的出来事と排他的に結び付ける必要のない詩文にこそ、かえって政治的配慮なしに、特定の歴史的出来事への生の証言が含まれるということもないとはいえない。

ここで確かに言えることは、ヨシヤ王とアッシェルバニパル王の並行関係は詩篇作者の意識下には存在したかもしれないが、明確な形では検出されないということである。

第 6 章のための参考資料

「アッシェルバニパルの即位式の讃美⁴³⁵」

和訳⁴³⁶

シャマシュ、天と地の王が、あなたを 4 つの地域の統治へと上らせてくださるように。

あなたに王笏を与えたアッシェルが、あなたの日々、年々を長くしてくださるように。

あなたの土地をあなたの足下に広げよ！

シェルアがあなたの名をあなたの神に称揚してくださるように。

穀物と銀、油、シャッカ⁴³⁷の牛とバリク⁴³⁸の塩が良いように、アッシェルバニパル、アッシリアの王が、彼の地の神々と一致できますように！

彼に雄弁と理解と真実と正義が贈り物として与えられますように！

アッシェルの人々が銀 1 シェケルで 30 コルの穀物を買えますように！

アッシェルの人々が銀 1 シェケルで 3 セアの油を買えますように！

アッシェルの人々が銀 1 シェケルで 30 ミナの羊毛を買えますように！

劣った者が語り、優った者が聞きますように！

優った者が語り、劣った者が聞きますように！

アッシリアのすべての人に一致と平和がありますように！

アッシェルは王である—実にアッシェルが王である！

アッシェルバニパルはアッシェルの代行者であり、彼の手の創造物である。

偉大な神々が彼の統治を確かなものとし、彼らがアッシェルバニパル、アッシリア王の生命を守りますように。

彼らが、国土と彼の人々を広げるために、まっすぐな王笏を彼に与えてくださるように！

⁴³⁵ アッシェルバニパルの即位年は紀元前 668 年ころと考えられる。アッシリア・バビロニアの即位式一般に関しては、月本昭男『古代メソポタミアの神話と儀礼』岩波書店、2010 年、110-15 頁参照。「アッシェルバニパルの即位式の讃美」については、同書 113 頁の記述を参照。

⁴³⁶ これは、Livingstone ed., *Court Poetry and Literary Miscellanea*, 26-27 の英訳から筆者が訳出したものであり、アッカド語からのものではない。したがって、この和訳には、リビングストンによる校訂も反映されている。

⁴³⁷ 神名。

⁴³⁸ 都市名。

彼の統治が更新され、彼らが彼の王座を永遠に確固たるものとしてくださるように！

彼らが彼を日ごとに月ごとに年ごとに祝福し、彼の統治を守ってくださるように！

彼の年々には、天から雨があり、地下の水源から水が継続的にありますように。

私たちの主アッシュルバニパルに、長い日々、多い年々を、強い武器を、長い統治を、豊かな年々を、良い名を、名声を、平安と喜びを、吉兆の神託を、そして他の王たちに対する優位性をお与えください！

彼が祝福を終えた後、彼はシャマシュの前にある香炉の前で以下の祝福を語った。

アヌが彼の王冠を、イリル⁴³⁹が彼の王位を、ニヌルタが彼の武器を、ネルガルが彼の光輝を与えた。ヌスクは彼の前に助言者を送って置いた。

王に不忠をもってあるいは罪をもって語る者は—それが優れた者なら、武器をもって滅びるように、彼が豊かな者なら、貧しくなるように。

王に対して心に悪を企む者は—エラ⁴⁴⁰が彼に疫病の発作をもたらすように。

王に対して心に不正なことを言う者は—彼の基礎が風となり、彼の衣服の房が破れるように。

天と地のすべての神々よ、集まってください、そして周到な人物アッシュルバニパル王を祝福してください！

彼の手を戦争と戦闘の武器で満たし、彼に黒い頭の人々⁴⁴¹を与え、彼が彼らの羊飼いのように支配しますように。

⁴³⁹ エンリルの別称。

⁴⁴⁰ 「シャマシュ」「アヌ」「イリル」「ニヌルタ」「ネルガル」「ヌスク」「エラ」はすべて神名である。

⁴⁴¹ 「人間」を指している。

結論

本論文では、研究史をたどることによってエサルハドン王位継承誓約文書(ESOD)と申命記の比較の必要性が明らかになったため、両者の比較を行なった。その際 ESOD 研究の第一人者である渡辺和子の業績を主として参照した。

「交差的引用」という手法によって、多少わかりづらくはなっているものの、逆にその痕跡によって、ESOD の申命記（主に 28 章と 13 章、そして 6 章の一部）への直接的影響（唯一の影響ではないであろうが）を示すことができた。原申命記の記者（そしてヨシヤ時代の申命記史家も）は、この文書を作成する際、自分の近くに ESOD あるいはその写しを置いていたのかもしれない。つまり未発見ではあるが、エルサレム神殿に ESOD がヤハウェとともに祀られていたというのが非常にありそうなことであると言える。

ESOD 受容の際、ユダ王国の書記は奇抜な置き替えを行なった。ESOD に出て来る神々の場所にヤハウェを入れただけでなく、王エサルハドンや皇太子アッシュルバニパルの場所にまでヤハウェを読み込んだのである。そしてユダ王国の主神であったヤハウェは排他的な崇拝を恒常的に受けることになった。これを一神教的カテゴリーへの移行が起こったと評価することができる。それは聖書の記述とは異なり、前 7 世紀にはじめて起こったことと考えられる。「(自分たちの) 神と同じように」 ESOD という文書を祀るという、はじめは強制された習慣を脱構築し、文書を尊重しそこに記された契約を守る、という形の宗教がこのとき生まれたのである。この宗教は、国家なきあとのユダヤ人のアイデンティティを形成し、彼らを混沌とした世界の中で生き残らせてきた。後に現れるキリスト教やイスラム教も、同じ文書を基礎として生まれてきた。現在見られる唯一神教の立場から聖書を読むと、最初から唯一神教が存在したように感じられるが、そうではなく、前 7 世紀後半という特定の時点に、エルサレムの宮廷周辺にいた書記層・祭司層といった特定の人々が、彼らの国家のために行なったことの結果唯一神教が生まれたのである。この改革運動は、はるかに遠い反響を引き起こした。

ESOD が申命記に与えた直接的影響の指標が「交差的引用」にみられるということの傍証としては、レビ記 26 章（神聖法典中）の「呪いのリスト」と申命記 28 章の「呪いのリスト」の間にも「交差的引用」がみられることが挙げられる。ユダの書記は一貫して、というわけではないにしてもかなりの頻度で、他のテキストからの引用の際、語・文・要素の順序を逆にするという習慣を持っていた。それが純粋に文学的な理由を持つ習慣なのか、

引用関係を示す意図を持ったものなのかは未決定であるが、たとえ引用関係を示すのが目的であったとしても、当時のユダの状況を考えると、一部のエリート層にのみ意味を持つことであったであろう。現時点では、このレトリックは文学的な対称性を作るという本来の目的が拡張されたものであるということを提案したい。今日英語圏の学者がそれとは言わずにシェイクスピア作品の言葉を口にするときのように「分かる人だけが分かる」技巧であった可能性さえある。

「交差的引用」の意図が何であれ、この技巧は、今日の読者にとってテキスト間の直接的影響関係を示す指標として機能するのである。この技巧の痕跡を辿ることによって、少なくとも ESOD から申命記へ、申命記からレビ記への引用関係が証明されたと思われる。申命記全体が ESOD の影響の産物とまではいえないが、最も重要な神ヤハウェと民イスラエルの「永遠の誓約」の確立という点において、申命記は ESOD の子なのである。

この認識を前提すると、宗教史学研究をさらに深めることが可能となる。本論文ではいわゆる一神教の発展過程と、それに密接に関係すると考えられる古代イスラエルにおける王権観の変遷について、整合的な把握が可能となることを示した。ESOD の申命記に対する直接的影響関係についての認識は、旧約学および宗教思想史研究にも資するであろう。

文献表

(欧文文献については *The SBL Handbook of Style* 2nd ed. 準拠)

- Abba, Raymond. "Priests and Levites in Deuteronomy." *VT* 27 (1977): 257-67.
- Abrams, Dominic, and Michael A. Hoggs, eds. *Social Identity Theory: Constructive and Critical Advances*. New York: Harvester Wheatsheaf, 1990.
- Abusch, Tzvi, and Karel Van der Toorn, eds. *Mesopotamian Magic: Textual, and Interpretive Perspectives*. Groningen: Styx, 1999.
- Ackerman, Susan. *Under Every Green Tree: Popular Religion in Sixth-Century Judah*. Atlanta: Scholars Press, 1992.
- Ackroyd, Peter R. "A Judgement Narrative between Kings and Chronicles? An Approach to Amos 7:9-17." Pages 71-87 in *Canon and Authority: Essays in Old Testament Religion and Theology*. Edited by G. W. Coats and B. O. Long. Philadelphia: Fortress, 1977.
- _____. "The Temple Vessels: A Continuity Theme." Pages 46-60 in *Religious Tradition of the Old Testament*. Edited by Peter R. Ackroyd. London: SCM, 1987.
- Aharoni, Yohanan and Ruth Amiran. "Excavations at Tel Arad: Preliminary Report on the First Season, 1962." *IEJ* 14 (1964): 131-47.
- Aharoni, Yohanan. "The Province-List of Judah." *VT* 9 (1959): 225-46.
- _____. "Excavations at Tel Arad. Preliminary Report on the Second Season, 1963," *IEJ* 17 (1967): 233-49.
- _____. "Hebrew Ostraca from Tel Arad." *IEJ* 16 (1966): 1-7.
- _____. "Arad: Its Inscriptions and Temple." *BA* 31 (1968): 2-32.
- _____. *Arad Inscriptions*. Jerusalem: The Israel Exploration Society, 1981.
- Aharoni, Yohanan. et al. "Arad." *The New Encyclopedia of Archaeological Excavations in the Holy Land* 1: 75-87.
- Ahlström, Gosta Wermer. *Aspects of Syncretism in Israelite Religion*. Translated by E. J. Sharpe. Lund: Gleerup, 1963.
- _____. "King Josiah and the DWD of Amos vi. 10." *JSS* 26 (1981): 7-9.
- _____. *The History of Ancient Palestine: From the Paleolithic Period to Alexander's Conquest*. JSOT Sup. 146. Edited by D. V. Edelman. Minneapolis: Fortress, 1993.

- Akerlof, George A. "The Missing Motivation in Macroeconomics." *The American Economic Review* 97 (2007): 5-36.
- Akerlof, George A., and Rachel E. Kranton. "Economics and Identity." *The Quarterly Journal of Economics*, 115 (2000): 715-53.
- _____. "Identity and the Economics of Organizations." *Journal of Economic Perspectives* 19, (2005): 9-36.
- _____. *Identity Economics: How our Identities Shape our Work, Wages, and Well-Being*. Princeton: Princeton University Press, 2010.
- Albertz, Rainer. *Weltschöpfung und Menschenschöpfung: Untersucht bei Deuterojesaja, Hiob und in den Psalmen*. Stuttgart: Calwer, 1974.
- _____. "Hintergrund und Bedeutung des Elterngabots im Dekalog." *ZAW* 90 (1978): 348-74.
- _____. "Jer 2-6 und die Frühzeitverkündigung Jeremias." *ZAW* 94 (1982): 20-47.
- _____. "Die Intentionen und die Träger des Deuteronomistischen Geschichtswerks." Pages 37-53 in *Schöpfung und Begreitung: für Claus Westermann zum 80 Geburtstag*. Edited by Rainer Albertz, F. W. Golka, and J. Kegler. Stuttgart: Calwer, 1989.
- _____. *Religionsgeschichte Israels in alttestamentlicher Zeit, Teil 1: Von den Anfängen bis zum Ende der Königszeit*. Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1992.
- (R・アルベルツ著 高橋優子訳『ヨシヤの改革』教文館、2010年 [原著 304-373 頁の抄訳])
- _____. *Religionsgeschichte Israels in alttestamentlicher Zeit, Teil 2: Vom Exil bis zu den Makkabäern*. Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1992.
- _____. *A History of Israelite Religion in the Old Testament Period, Vol. I: From the Beginnings to the End of the Monarchy*. Translated by John Bowden. Louisville: Westminster John Knox, 1994.
- _____. *A History of Israelite Religion in the Old Testament Period, Vol. II: From the Exile to the Maccabees*. Translated by John Bowden. Louisville: Westminster John Knox, 1994.
- _____. "Wer Waren die Deuteronomisten? Das historische Rätsel einer literarischen Hypothese." *EvT* 57 (1997): 319-38.
- _____. *Die Exilzeit, 6. v. Chr.* Stuttgart : Kohlhammer, 2001.

- _____. *Kult, Konflikt und Versöhnung: Beiträge zur Kultischen Sühne in religiösen, sozialen und politischen Auseinandersetzungen des antiken Mittelmeerraumes*. AOAT 285. Edited by Rainer Albertz. Münster: Ugarit-Verlag, 2001.
- _____. "KPR: Kultische Sühne und politische und gesellschaftliche Versöhnung." Pages 135-49 in *Kult, Konflikt und Versöhnung: Beiträge zur Kultischen Sühne in religiösen, sozialen und politischen Auseinandersetzungen des antiken Mittelmeerraumes*. AOAT 285. Edited by Rainer Albertz. Münster: Ugarit-Verlag, 2001.
- _____. *Israel in Exile: The History and Literature of the Sixth Century B. C. E.* Leiden; Boston: Brill, 2004.
- _____. *Persönliche Frömmigkeit und offizielle Religion*. Stuttgart: Calwer, 1978. Repr., Atlanta: Society of Biblical Literature, 2005.
- _____. "Why a Reform of Josiah's Must Have Happened." Pages 27-46 in *Good Kings and Bad Kings*. Edited by Lester L. Grabbe. New York: T & T Clark, 2005.
- _____. "Family Religion in Ancient Israel and its Surroundings." Pages 89-112 in *Household and Family Religion in Antiquity*. Edited by J. Bodel and S. M. Olyan. Malden: Blackwell, 2008.
- _____. "Personal Piety." Pages 135-146 in *Religious Diversity in Ancient Israel and Judah*. Edited by Francesca Stavrakopoulou, and John Barton. London: T & T Clark, 2010.
- Alfink, B. "Die Schlacht bei Megiddo und der Tod des Josias (609)." *Bib.* 15 (1934): 173-84.
- Allen, Leslie C. "More Cuckoos in the Textual Nest: At 2 Kings xxiii.5; Jeremiah xvii.3; Micah iii.3; vi.16 (LXX); 2 Chronicles xx.25 (LXX)." *JTS* 24 (1973): 69-74.
- Alt, Albrecht. "Judas Gaue unter Josia." *Palästina-jahrbuch des Deutschen Evangelischen Instituts für Altertumswissenschaft des Heiligen Landes zu Jerusalem*. 21 (1925): 100-117.
- _____. "Die Heimat des Deuteronomiums." Pages 250-75 in *Kleine Schriften zur Geschichte des Volkes Israel*. München: Beck, 1953.
- _____. "The Formation of the Israelite State in Palestine." Pages 171-237 in *Essays in Old Testament History and Religion*. Oxford: Blackwell, 1966.
- _____. "The Monarchy in the Kingdoms of Israel and Judah." Pages 311-35 in *Essays on Old Testament History and Religion*. Garden City: Doubleday, 1967.
- Althann, Robert. "Josiah." *The Anchor Bible Dictionary*. 3: 1015-18.

- Amusin, Joseph D., and M. L. Heltzer. "The Inscription from Mesad Hashavyahu: Complaint of a Reaper of Seventh Century B.C." *IEJ* 14 (1964): 148-57.
- Anbar, Moshe. "The Story about the Building of an Altar on Mount Ebal: The History of its Composition and the Question of the Centralization of the Cult." Pages 304-9 in *Das Deuteronomium: Entstehung, Gestalt und Botschaft*. Edited by Norbert Lohfink. Leuven: Leuven University Press, 1985.
- Anderson, Benedict. *Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism*. New York: Verso, 1991.
- Arneth, Martin. "Sonne der Gerechtigkeit": *Studien zur Solarisierung der Jahwe-Religion im Lichte von Psalm 72*. BZABR 1. Wiesbaden: Harrassowitz, 2000.
- Athas, George. *The Tel Dan Inscription: A Reappraisal and a New Interpretation*. Sheffield: Sheffield Academic, 2003.
- Auffarth, Christoff. "Justice, the King and the Gods: Polytheism and Emerging Monotheism in the Ancient World." Pages 421-53 in *One God – One Cult – One Nation: Archaeology and Biblical Perspectives*. Edited by R. G. Kratz and H. Spieckermann. Berlin: de Gruyter, 2010.
- Auld, A. Graeme. "The 'Levitical Cities': Text and History." *ZAW* 91 (1979): 194-206.
- _____. *Kings*. Edinburgh: Saint Andrew, 1986.
- _____. "Reading Joshua after Kings." Pages 167-81 in *Words Remembered, Texts Renewed: Essays in Honor of J. F. A. Sawyer*. Edited by J. Davies et al. Sheffield: Sheffield Academic, 1995.
- Avigad, Nahman. "The Governor of the City." *IEJ* 26 (1976): 178-82.
- _____. "Baruch the Scribe and Jarahmeel the King's Son." *IEJ* 28 (1978): 52-56.
- _____. *Discovering Jerusalem*. Oxford: Blackwell, 1984.
- _____. *Corpus of West Semitic Stamp Seals*. Jerusalem: Israel Academy of Sciences and Humanities, 1997.
- Avioz, Michael. "What Happened at Megiddo? Josiah's Death as Described in the Book of Kings." *BN* 142 (2009): 5-11.
- Badawy, Alexander. *A History of Egyptian Architecture*. Berkeley: University of California Press, 1966.

- Barbiero, Gianni. "The Risks of a Fragmented Reading of the Psalms: Psalm 72 as a Case in Point." *ZAW* 119 (2008): 67-91.
- Barcina, Cristina. "The Display of Esarhaddon's Succession Treaty at Kalḫu as a Means of Internal Political Control." *AO* 14 (2016): 11-52.
- Barker, Margaret. "Hezekiah's Boil." *JSOT* 95 (2001): 31-42.
- Barrick, W. Boyd. "On the 'Removal of the High Places' in 1-2 Kings." *Bib.* 55 (1974): 255-57.
- _____. "The Funerary Character of 'High-Places' in Ancient Palestine: A Reassessment." *VT* 25 (1975): 565-95.
- _____. "On the Meaning of *bet-hab* / and *bate-habbamot* and the Composition of the Kings History." *JBL* 115 (1996): 621-42.
- _____. "Dynastic Politics, Priestly Succession, and Josiah's Eighth Year." *ZAW* 112 (2000): 564-82.
- _____. *The King and the Cemeteries: Toward a New Understanding of Josiah's Reform*. Leiden: Brill, 2002.
- Barstad, Hans M. "Lachish Ostrakon III and Ancient Israelite prophecy." Pages 8-12 in *Avraham Malamat Volume. ERETZ ISRAEL* 24. 1993.
- Barton, John. "Reflecting on Religious Diversity." Pages 191-93 in *Religious Diversity in Ancient Israel and Judah*. Edited by Francesca Stavrakopoulou and John Barton. London: T & T Clark, 2010.
- Becking, Bob. "From Apostasy to Destruction: A Josianic View on the Fall of Samaria (2 Kings 17, 21-23)." Pages 279-97 in *Deuteronomy and Deuteronomistic Literature for C. H. W. Brekelmans*. Edited by M. Vervenne and J. Lust. Leuven: Leuven University Press, 1997.
- Beckman, Gary M. *Hittite Diplomatic Texts*. 2nd edition. Atlanta: Scholars Press, 1999.
- Beentjes, Pancratius C. "Inverted Quotations in the Bible: A Neglected Stylistic Pattern." *Bib.* 63 (1982): 506-23.
- _____. "'Sweet is his Memory, Like Honey to the Plate': King Josiah in Ben Sira 49,1-4." *BZ* 34 (1990): 262-66.
- Begg, Christopher T. "A Bible Mystery: The Absence of Jeremiah in the Deuteronomistic History" *IBS* 7 (1985): 139-64.

- _____. "The Death of Josiah in Chronicles." *VT* 37 (1987): 1-8.
- _____. "The Death of Josiah: Josephus and the Bible." *ETL* 64 (1988): 157-63.
- Begin, Ze'ev, B. "Does Lachish Letter 4 Contradict Jeremiah XXXIV 7?" *VT* LII (2002): 166-74.
- Begrich, J. *Die Chronologie der Könige von Israel und Juda und die Quellen des Rahmens der Königsbücher*. Nendeln: Kraus Reprint, 1966.
- Ben-Dov, Jonathan. "Writing Oracle and as Law: New Contexts for the Book-Find of King Josiah" *JBL* 127 (2008): 223-39.
- Ben-Sasson, Haim Hillel ed. *History of Jewish People*. Cambridge: Harvard University Press, 1976.
- Ben-Zvi, Ehud. *A Historical-Critical Study of the Book of Zephaniah*. BZAW 192. Berlin: de Gruyter, 1991.
- _____. "Prophets and Prophecy in the Compositional and Redactional Notes in I-II Kings" *ZAW* 105 (1993): 331-51.
- _____. "Josiah and the Prophetic Books: Some Observations." Pages 47-64 in *Good Kings and Bad Kings*. Edited by Lester L. Grabbe. New York: T & T Clark, 2005.
- Berlinerblau, Jacques. "Preliminary of the Sociological Study of Israelite 'Official Religion'." Pages 153-70 in *Ki Baruch Hu: Ancient Near Eastern, Biblical, and Judaic Studies in Honor of B. A. Levine*. Edited by R. Chazan, W. W. Hallo, and L. H. Schiffmann. Winona Lake: Eisenbrauns, 1999.
- Berman, Joshua. "CTH 133 and the Hittite Provenance of Deuteronomy 13." *JBL* 130 (2011): 25-44.
- _____. "Histories Twice Told: Deuteronomy 1-3 and the Hittite Treaty Prologue Tradition." *JBL* 132 (2013): 229-50.
- _____. "Historicism and Its Limits: A Response to Bernard M. Levinson and Jeffrey Stackert." *JAJ* 4 (2013): 297-309.
- _____. "The History of Legal Theory and the Study of Biblical Law." *CBQ* 76 (2014): 19-39.
- Bern, Alfrink. "Die Schlacht bei Megiddo und der Tod des Josias (609)." *Bib.* 15 (1934): 173-84.
- Berry, G. R. "The Code Found in the Temple." *JBL* 39, 1920, 44-51.
- Biran, Avraham, and Joseph Naveh. "An Aramaic Stele Fragment." *IEJ* 43 (1993): 81-98.
- _____. "The Tel Dan Inscription: A New Fragment." *IEJ* 45 (1995): 1-18.

- Birch, W. F. "The Valley of Hinnom and Zion." *PEFQS*, (1882): 55-58.
- Bird, Phillis A. "The End of the Male Cult Prostitute: A Literary-Historical and Sociological Analysis of Hebrew *qades-qedesim*." Pages 37-80 in *Congress Volume, Cambridge 1995*. Edited by J. A. Emerton. Leiden: Brill, 1997.
- Blenkinsopp, John. "Deuteronomy and the Politics of Post-Mortem Existence." *VT* 46 (1995): 1-16.
- _____. *A History of Prophecy in Israel*. Revised and enlarged ed., Louisville: Westminster John Knox Press, 1996.
- (J・ブレンキンソップ著 樋口進訳『旧約預言者の歴史：カナン定住からヘレニズム時代まで』教文館、1997年)
- _____. "The Judean Priesthood during the Neo-Babylonian and Achaemenid Periods: A Hypothetical Reconstruction." *CBQ* 60 (1998): 25-43.
- Bloch-Smith, Elizabeth M. "The Cult of the Dead in Judah: Interpreting the Material Remains." *JBL* 111 (1992): 213-24.
- _____. *Judahite Burial Practices and Beliefs about the Dead*. JSOT Sup. 123. Sheffield: JSOT Press, 1992.
- Block, Daniel. "How Many Is God? An Investigation into the Meaning of Deuteronomy 6:4-5." *JETS* 47 (2004): 193-212.
- Blum, Erhard. *Studien zur Komposition des Pentateuch*. Berlin: de Gruyter, 1990.
- Boecker, Hans Johan. *Recht und Gesetz im Alten Testament und im Alten Orient*. Neukirchener, 1976 (2nd ed. 1984).
- (H. J. ベッカー著 鈴木佳秀訳『古代オリエントの法と社会：旧約聖書とハンムラビ法典』ヨルダン社、1989年)
- _____. *Law and the Administration of Justice in the Old Testament and Ancient East*. Translated by J. Moiser. Minneapolis: Augsburg, 1980.
- Böhler, Dieter. "Geschlechterdifferenz und Landbesitz: Strukturuntersuchungen zu Jer 2,2-4,2." Pages 91-127 in *Jeremia und die "deuteronomistische Bewegung"*. Edited by W. Groß. Weinheim: Belz Athenäum, 1995.
- Boehmer, J. "König Josias Tod." *AR* 30 (1933) 199-203.
- Bosman, Jan Petrus. *Social Identity in Nahum: A Theological-Ethical Enquiry*. Piscataway: Gorgias Press, 2008.

- Bozak, Barbara. A. *Life "Anew": A Literary-Theological Study of Jer. 30-31*. Roma: Editrice Pontificio Instituto Biblico, 1991.
- Braulik, Georg. *Deuteronomium*. Würzburg: Echter, 1986.
- _____. *Die deuteronomistischen Gesetze und der Dekalog: Studien zum Aufbau von Deuteronomium 12-26*. Stuttgart: Verlag Katholisches Bibelwerk, 1991.
- _____. "Der unterbrochene Dekalog. Zu Deuteronomium 5,12 und 16 und ihrer Bedeutung für den deuteronomischen Gesetzeskodex." *ZAW* 120 (2008): 169-83.
- _____. "Die deuteronomistische Landeroberungserzählung aus der Joschijazeit in Deuteronomium und Josua." Pages 89-150 in *Das deuteronomistische Geschichtswerk*. Edited by H. J. Stipp. Frankfurt: Lang, 2011.
- Brekelmans, Christianus. "Wisdom Influence in Deuteronomy." Pages 123-34 in *A Song of Power and the Power of Song: Essays on the Book of Deuteronomy*. Edited by D. L. Christensen. Winona Lake: Eisenbrauns, 1993.
- Bremmer, Jan N. "The Scapegoat between Hittites, Greeks, Israelites, and Christians." Pages 175-86 in *Kult, Konflikt und Versöhnung: Beiträge zur Kultischen Sühne in religiösen, sozialen und politischen Auseinandersetzungen des antiken Mittelmeerraumes*. Edited by Rainer Albertz. AOAT 285. Münster: Ugarit-Verlag, 2001.
- Brewer, Marilynn B. "The Social Psychology of Intergroup relations: Social Categorization, Ingroup Bias, and Outgroup Prejudice." Pages 695-715 in *Social Psychology: Handbook of Basic Principles*. Edited by A. W. Kruglanski and E. Tory Higgins. New York: The Guilford Press, 2007.
- Brian, Avraham, and Joseph Naveh. "An Aramaic Stele Fragment from Tel Dan." *IEJ* 43 (1993): 81-98.
- Bridge, E. J. "The Tel Dan Inscription: A New Fragment." *IEJ* 45 (1995): 1-18.
- _____. "Polite Language in the Lachish Letters." *VT* 60 (2010): 518-34.
- Briggs, C. A. and E. G. Briggs. *A Critical and Exegetical Commentary on the Book of Psalms, Vol. I*. Edinburg: T & T Clark, 1906.
- _____. *A Critical and Exegetical Commentary on the Book of Psalms, Vol. II*. New York: Charles Scribner's Sons, 1907.
- Bright, John. *A History of Israel*. 4th ed. Louisville: Westminster John Knox Press, 2000.

- Brown, Francis, S. R. Driver, and C. A. Briggs. *Hebrew English Lexicon of the Old Testament*. 1907. Repri., Oxford: Clarendon, 1951.
- Brown, Rupert. *Group Processes: Dynamics within and between Groups*. 2nd edition. Oxford: Blackwell Publishing, 2000.
- Brown, Sally. "2 Kings 23:1-20." *Int.* 60 (2006): 68-70.
- Bruggemann, Walter. *A Commentary on Jeremiah: Exile & Home Coming*. Grand Rapids: Eerdmans, 1998.
- Bruno, Christopher R. "A Note Pertaining to the Translation of Deut 6:4." *VT* 59 (2009): 320-22.
- Buchholtz, Joachim. *Die Ältesten Israels im Deuteronomium*. Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1988.
- Budde, Karl. "Das Deuteronomium und die Reform König Josias." *ZAW* 44 (1926): 177- 224.
- Burke, Peter James, ed. *Contemporary Social Psychological Theorie*. Stanford: Stanford University Press, 2006.
- Campbell, Antony F. "Martin Noth and the Deuteronomistic History." Pages 31-62 in *The History of Israel's Traditions: The Heritage of Martin Noth*. Edited by Mckenzie, S. L. and M. P. Graham. JSOT Sup. 182. Sheffield: Sheffield Academic Press, 1994.
- Cannon, W. W. "A Note on Dr. Welch's Article 'The Death of Josiah'." *ZAW* 44 (1926): 63-64.
- Carmichael, Calum M. *The Laws of Deuteronomy*. Ithaca: Cornell University Press, 1974.
- Carney, T. F. *The Shape of the Past: Models and Antiquity*. Lawrence: Coronado Press, 1975.
- Carroll, R. M. Daniel, ed. *Rethinking Contexts, Rereading Texts: Contributions from the Social Sciences to Biblical Interpretation*. JSOT Sup. 299. Sheffield: Sheffield Academic Press, 2000.
- Carroll, Robert P. *When Prophecy Failed: Reactions and Responses to Failure in the Old Testament Prophetic Tradition*. London: SCM Press, 1979.
- _____. *Jeremiah: A Commentary*. Philadelphia: Westminster, 1986.
- _____. *Jeremiah*. Sheffield: JSOT Press, 1989.
- _____. "Prophecy and Society." Pages 203-25 in *The World of Ancient Israel: Sociological, Anthropological, and Political Perspectives*. Edited by R. E. Clements. Cambridge: Cambridge University Press, 1989.

- Carter, Charles E., Charles Edward Carter, and Carol L. Meyers, eds. *Community, Identity, and Ideology: Social Science Approaches to the Hebrew Bible*. Winona Lake: Eisenbrauns, 1996.
- Carton, J. E. "Temple and *bamah*: Some Considerations." Pages 150-65 in *The Pitcher is Broken: Memorial Essays for Gösta W. Ahlström*. Edited by S. W. Holloway, and L. K. Handy. Sheffield: Sheffield Academic Press, 1995.
- Chalcraft, David J., ed. *Social-Scientific Old Testament Criticism*. Sheffield: Sheffield Academic Press, 1997.
- _____, ed. *Sectarianism in Early Judaism: Sociological Advances*. London: Equinox, 2007.
- Chaney, M. L. "Debt Easement in Israelite History and Tradition." Pages 127-39 in *The Bible and the Politics of Exegesis: Essays in Honor of Norman K. Gottwald on his Sixty-Fifth Birthday*. Edited by K. Jobling et al. Cleveland: Pilgrim, 1991.
- Chavel, Simeon. "'Let My People Go!' Emancipation, Revelation, and Scribal Activity in Jeremiah 34:14*." *JSOT* 76 (1997): 71-95.
- Chirichigno, G. C. *Debt-slavery in Israel and the Ancient Near East*. *JSOT Sup.* 141. Sheffield: JSOT Press, 1993.
- Cholewinski, Alfred. *Heiligkeitsetz und Deuteronomium: Eine vergleichende Studie*. Rome: Biblical Institute Press, 1976.
- Christensen, Duane L. "Zephaniah 2:4-15: A Theological Basis for Josiah's Program of Political Expansion." *CBQ* 46 (1984): 669-82.
- _____. *Deuteronomy 1:1-21:9*. Nashville: Thomas Nelson, 2001.
- _____. *Deuteronomy 21:10-34:12*. Nashville: Thomas Nelson, 2002.
- Claburn, W. E. "The Fiscal Basis of Josiah's Reform." *JBL* 92 (1973): 11-22.
- Clements, Ronald. E. "Deuteronomy and Jerusalem Cult Tradition." *VT* 15 (1965): 300-12.
- _____. *God's Chosen People: A Theological Interpretation of the Book of Deuteronomy*. London: SCM Press, 1968.
- (R・E・クレメンツ著 船水衛司訳『神の選民：申命記の神学的解釈』教文館、1984年)
- _____. *A Century of Old Testament Study*. London: Lutterworth Press, 1976.
- (R. E. クレメンツ著 村岡崇光訳『近代旧約聖書研究史：ヴェルハウゼンから現代まで』教文館、1978年)

- _____, ed. *The World of Ancient Israel: Sociological, Anthropological, and Political Perspectives*. Cambridge: Cambridge University Press, 1989.
- (R・E・クレメンツ編 木田献一・月本昭男監訳『古代イスラエルの世界：社会学・人類学・政治学からの展望』リトン、2002年)
- _____. “The Deuteronomic Law of Centralisation and the Catastrophe of 587 B. C. E.” Pages 5-25 in *After the Exile: Essays in Honor of R. Mason*. Edited by J. Barton, and D. J. Reimer. Macon: Mercer University Press, 1996.
- Clote, Walter Theophilis Woldemar. *Versification and Syntax in Jeremiah 2-25: Syntactical Construction in Hebrew Colometry*. Atlanta: Scholars Press, 1989.
- Cogan, Mordechai. *Imperialism and Religion: Assyria, Judah and Israel in the Eighth and Seventh Centuries B.C.E.* Missoula: Scholars Press, 1974.
- _____. “Israel in Exile – The View of a Josianic Historian.” *JBL* 97 (1978): 40-44.
- _____. “Judah under Assyrian Hegemony: A Re-examination of Imperialism and Religion.” *JBL* 112 (1993): 403-14.
- _____. *1 Kings: A New Translation with Introduction and Commentary*. New York: Doubleday, 2001.
- Cogan, Mordechai, and H. Tadmor. *II Kings: A New Translation with Introduction and Commentary*. New York: Doubleday, 1988.
- Coggins, Richard. “An Alternative Prophetic Tradition?” Pages 77-94 in *Israel’s Prophetic Tradition: Essays in Honor of P. R. Ackroyd*. Edited by R. Coggins et al. Cambridge: Cambridge University Press, 1982.
- Cohn, Robert L. *2 Kings*. Collegeville, MN: The Liturgical Press, 2000.
- Cole, Robert. L. *The Shape and Message of Book III (Psalms 73-89)*. JSOT Sup. 307. Sheffield: Sheffield Academic Press, 2000.
- Collins, John J. *The Intention of Judaism: Torah and Jewish Identity from Deuteronomy to Paul*. Oakland: University of California Press, 2017.
- Conrad, D. “Einige (archäologische) Miscellen zur Kultgeschichte Judas in der Königszeit.” Pages 28-32 in *Textgemäss: Aufsätze und Beiträge zur Hermeneutik des Alten Testaments: Festschrift für E. Würthwein zum 70. Geburtstag*. Edited by A. H. J. Gunneweg, and O. Kaiser. Göttingen, 1979.

- Conroy, C. "Reflections on the Exegetical Task: Apropos of Recent Studies on 2 Kg 22-23." Pages 255-68 in *Pentateucal and Deuteronomistic Studies: Papers Read at the XIIIth IOSOT Congress Leuven, 1989*. Edited by C. Brekelmans, and J. Lust. Leuven University Press, 1990.
- Cook, Robert Manuel, and Pierre Dupont. *East Greek Pottery*. London: Routledge, 1998.
- Copozza, Dora, and Rupert Brown, eds. *Social Identity Processes*. London: Sage Publications, 2000.
- Coppens, J. "La réforme de Josias: L'objet de la réforme de Joias et la loi trouvée par Helcias." *ETL* 5 (1928): 581-98.
- Cothey, Antony. "Ethics and Holiness in the Theology of Leviticus." *JSOT* 30 (2005): 131-51.
- Craigie, Peter C. *The Book of Deuteronomy*. Grand Rapids: Eerdmans, 1976.
- Craigie, Peter C., P. H. Kelley, and J. F. Drinkard, Jr. *Jeremiah 1-25*. Dallas: Word Books, 1991.
- Crisp, Richard J., and Miles Hewstone, eds. *Multiple Social Categorization: Processes, Models and Applications*. New York: Psychology Press, 2006.
- Crook, Zeba. "Honor, Shame, and Social Status Revisited." *JBL* 128 (2009) 591-611.
- Cross, Frank Moore. "Epigraphic Notes on Hebrew Documents of the Eighth-Sixth Centuries B. C.: II. The Murabba'at Papyrus and the Letter Found Near Yvneh-Yam." *BASOR* 165 (1962): 34-47.
- _____. "The Theme of the Book of Kings and the Structure of the Deuteronomistic History." Pages 274-89 in *Canaanite Myth and Hebrew Epic: Essays in the History of the Religion of Israel*. Edited by F. M. Cross. Cambridge: Harvard University Press, 1973.
- _____. "Two Offering Dishes with Phoenician Inscriptions from the Sanctuary of 'ARAD." *BASOR* 235 (1979): 75-78.
- _____. "A Literate Soldier: Lachish Letter III." Pages 41-47 in *A Biblical and Related Studies Presented to Samuel Iwry*. Edited by Kort, and S. Morschauser. Winona Lake: Eisenbrauns, 1985.
- Cross, Frank Moore, and D. N. Freedman. "Josiah's Revolt against Assyria." *JNES* 12 (1953): 56-58.
- Crouch, C. L. *The Making of Israel: Cultural Diversity in the Southern Levant and the Formation of Ethnic Identity in Deuteronomy*. Leiden: Brill, 2014.

- _____. *Israel & The Assyrians: Deuteronomy, the Succession Treaty of Esarhaddon, & the Nature of Subversion*. Atlanta: SBL Press, 2014.
- Crüsemann, Frank. “ ‘...damit er dich segne in allem Tun deiner Hand...’ (Dtn 14, 29): Die Produktionsverhältnisse der späten Königszeit, dargestellt am Ostrakon von Mesad Hashavjahu, und die Sozialgesetzgebung des Deuteronomium.” Pages 72-103 in *Mitarbeiter der Schöpfung: Bibel und Arbeitswelt*. Edited by L. Schottroff, and W. Schottroff eds. München: Chr. Kaiser, 1983.
- _____. *Die Tora: Theologie und Sozialgeschichte des alttestamentlichen Gesetzes*. München: Chr. Kaiser, 1992.
- _____. *Bewahrung der Freiheit: das Thema des Dekalogs in sozialgeschichtlicher Perspektive*. Gutersloh: Chr. Kaiser, 1993.
- _____. *The Torah: Theology and Social History of Old Testament*. Translated by A. W. Mahnke. Minneapolis: Fortress, 1996.
- Cryer, Frederick H. “On the Recently-Discovered ‘House of David’ Inscription.” *SJOT* 8 (1994): 1-19.
- Dalley, S. “Recent Evidence from Assyrian Sources for Judaeon History from Uzziah to Manasseh.” *JSOT* 28 (2004): 387-401.
- Davies, Phillip R. “Urban Religion and Rural Religion.” Pages 104-117 in *Religious Diversity in Ancient Israel and Judah*. Edited by Francesca Stavtrakopoulou and John Barton. London: T & T Clark, 2010.
- Davies, Phillip R. *In Search of ‘Ancient Israel*. JSOT Sup. 148. Sheffield: JSOT Press, 1992.
- _____. “Josiah and the Law Book.” Pages 65-77 in *Good Kings and Bad Kings*. Edited by Lester L. Grabbe. New York: T & T Clark, 2005.
- Day, John. “Asherah in the Hebrew Bible and Northwest Semitic Literature.” *JBL* 105 (1986): 385-408.
- Delamarter, Steve. “The Death of Josiah in Scripture and Tradition: Wrestling with the Problem of Evil?” *VT* 54 (2004): 29-60.

- Delcor, M. “Les cultes étrangers en Israël au moment de la réforme de Josias d’après 2R 23 : Etude de religions sémitiques comparées.” Pages 91-123 in *Mélanges bibliques et Orientaux en l’honneur de M. H. Cazelles*. AOAT 212. Edited by A. Caquot, and M. Delcor. Kevelaer : Butzon & Bercker, 1981.
- De Pury, Albert, Thomas Römer, and Jean-Daniel Macchi, eds. *Israel Constructs its History: Deuteronomistic Historiography in Recent Research*. JSOT Sup. 306. Sheffield: Sheffield Academic Press, 2000.
- De Tillesse, C. Minette. “Joaquim, repoussoir du ‘Pieux’ Josias: Parallélismes entre II Reg 22 et Jer 36.” ZAW 105 (1993). 352-76.
- Dever, William G. “The Silence of the Text: An Archaeological Commentary on 2 Kings 23.” Pages 143-168 in *Scripture and Other Artifacts: Essays on the Bible and Archaeology in Honor of P. J. King*. Edited by M. D. Coogan, J. C. Exum, and L. E. Stager. Louisville: Westminster John Knox Press, 1994.
- _____. *What did the Biblical Writers Know and When did They Know it?: What Archaeology can Tell us about the Reality of Ancient Israel*. Grand Rapids: Eerdmans, 2002.
- _____. *Did God Have a Wife?: Archaeology and Folk Religion in Ancient Israel*. Grand Rapids: Eerdmans, 2005.
- _____. *The Lives of Ordinary People in Ancient Israel: Where Archaeology and the Bible Intersect*. Grand Rapids: Eerdmans, 2012.
- Dietrich, Jan. “Psalm 72 in Its Ancient Syrian Context.” Pages 144-160 in *Mideating between Heaven and Earth: Communication with the Divine in the Ancient Near East*. Edited by C. L. Crouch, Jonathan Stöckland, and Anne Elise Zernecke. London: T and T Clark International, 2012.
- Dietrich, W. *Prophetie und Geschichte: Eine redaktionsgeschichtliche Untersuchung zum deuteronomistischen Geschichtswerk*. Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1972.
- _____. “Josia und das Gesetzbuch (2 Reg. xxii).” VT 27 (1977): 13-35.
- _____. *Israel und Kanaan: Vom Ringen zweiter Gesellschaftssysteme*. Stuttgart: Verlag Katholisches Bibelwerk, 1979.
- (ヴァルター・ディートリヒ著 山我哲雄訳『イスラエルとカナーン二つの社会原理の葛藤ー』新地書房、1991年)

- _____. “‘...den Armen das Evangelium verkünden’: Vom befreienden Sinn biblischer Gesetz.” *TZ* 41(1985): 31-43.
- _____. “Martin Noth and the Future of the Deuteronomistic History.” Pages 153-75 in *The History of Israel’s Traditions: The Heritage of Martin Noth*. Edited by S. L. Mckenzie, and M. P. Graham. Sheffield: Sheffield Academic Press, 1994.
- Dion, Paul E. “Deuteronomy 13: The Suppression of Alien Religious Propaganda in Israel during the Late Monarchial Era.” Pages 147-216 in *Law and Ideology in Monarchic Israel*. Edited by B. Halpern, and D. W. Hobson. Sheffield: JSOT Press, 1991.
- _____. “Les KYTM de Tel Arad: Grecs ou Phéniciens?” *RB* 99 (1992): 70-97.
- Dobbs-Allsopp, F. W. “The Genre of the Mesad Hashavyahu Ostrakon.” *BASOR* 295 (1994): 49-55.
- Dozeman, Thomas B. “The Way of the Man of God from Judah: True and False Prophecy in the Pre-Deuteronomistic Legend of 1 Kings 13.” *CBQ* 44 (1982): 379-93.
- Driver, Samuel Rolles. *A Critical and Exegetical Commentary on Deuteronomy*. 3rd ed. Edinburgh: T & T Clark, 1951.
- Dummermuth, Fritz. “Zur deuteronomischen Kulttheologie und ihren Voraussetzungen.” *ZAW* 70, (1958): 59-98.
- Dutcher-Walls, Patricia. “The Social Location of the Deuteronomists: A Sociological Study of Factional Politics in Late Pre-Exilic Judah.” *JSOT* 52 (1991): 77-94.
- _____. “The Circumscription of the King: Deuteronomy 17:16-17 in its Ancient Social Context.” *JBL* 121 (2002): 601-16.
- Ebach, Jürgen. “ADRMMLK, ‘Molech’ und BA’AL ADR: Eine Notiz zum Problem der Moloch-Verehrung im alten Israel.” *UF* 11 (1979): 219-26.
- 越後谷朗 「イザヤ書 36-39 章と列王記下 18:13-20:19、どちらが先か？」『基督教研究』第 64 巻第 1 号、2002 年、1-13 頁。
- Edelman, Diana V. “Biblical Morech Reconsidered.” *JAOS* 107 (1987): 727-31.
- _____. “Huldah the Prophet – of Yahweh or Asherah?” Pages 231-50 in *Feminist Companion to Samuel and Kings*. Edited by A. Brenner. Sheffield: Sheffield Academic Press, 1994.
- _____. “What if We Had no Accounts of Sennacherib’s Third Campaign or the Place Reliefs Depicting his Capture of Lachish?” *BibInt* 8 (2000): 88-103.
- _____. “Hezekiah’s Alleged Cultic Centralization.” *JSOT* 32.4 (2008): 395- 434.

- _____. “Cultic Sites and Complexes beyond the Jerusalem Temple.” Pages 82-103 in *Religious Diversity in Ancient Israel and Judah*, Edited by Francesca Stavrakopoulou, and John Barton. London: T & T Clark, 2010.
- Elligar, K., and W. Rudolph, eds. *Biblia Hebraica Stuttgartensia*. 5th ed. Stuttgart: Deutsche Bibelgesellschaft, 1997.
- Emerton, John Adney. “Priests and Levites in Deuteronomy: An Examination of Dr. G. E. Wright’s Theory.” *VT* 12 (1962): 129-38.
- _____. “The Biblical High Place in the Light of Recent Study.” *PEQ* 129 (1997): 116-32.
- _____. “‘The High Places of the Gates’ in 2 Kings XXIII 8.” *VT* 44 (1994): 455-67.
- _____. “YHAWH and His Asherah: The Goddess or Her Symbol?” *VT* 44 (1999): 315-37.
- _____. “Were the Lachish Letters Sent to or from Lachish?” *PEQ* 133 (2001): 2-15.
- Eph’al, Israel. “On Warfare and Military Control in the Ancient Near Eastern Empires: A Research Outline.” Pages 88-106 in *History, Historiography and Interpretation: Studies in Biblical and Cuneiform Literature*. Edited by Hayim Tadmor, and Moshe Weinfeld. Jerusalem: Magnes, 1983.
- Esler, Philip F., ed. *Ancient Israel: The Old Testament in Social Context*. Minneapolis: Fortress, 2006.
- Esler, Philip F., and A. C. Hagedorn. “Social-Scientific Analysis of the Old Testament: A Brief History and Overview.” Pages 15-32 in *Ancient Israel: The Old Testament in Social Context*. Edited by Philip Esler. Minneapolis: Fortress, 2006.
- Eslinger, Lyle M. “Josiah and the Torah Book: Comparison of 2 Kgs 22:1-23:28 and 2 Chr 34:1-35:19.” *HAR* 10 (1985): 37-62.
- Epsztein, Leon. *La Justice sociale dans la Proche-Orient ancien et la Peuple de la Bible*. Paris: Editions du Cerf. 1983.
- _____. *Social Justice in the Ancient Near East and the People of the Bible*. Translated by J. Bowden. London: SCM Press, 1986.
- Evans, Carl D. “Judah’s Foreign Policy from Hezekiah to Josiah.” Pages 157-78 in *Scripture in Context: Essays on the Comparative Method*. Edited by C. D. Evans, W. W. Hallo, and J. B. White. Pittsburgh: Pickwick, 1980.
- Eynikel, Erik. “Prophecy and Fulfillment in the Deuteronomic History: 1 Kgs 13; 2 Kgs 23, 16-18.”

- Pages 227-37 in *Pentateuchal and Deuteronomistic Studies: Paper Read at the XIIIth IOSOT Congress, Leuven, 1989*. Edited by C. Brekelmans, and J. Lust. Leuven: Leuven University Press, 1990.
- _____. *The Reform of King Josiah and the Composition of the Deuteronomistic History*. Leiden: Brill, 1996.
- Fales, Frederick Mario. "After Ta'yinat: The New Status of Esarhaddon's Adê for Assyrian Political History." *RA* 106 (2012): 133-158.
- Fantalkin, Alexander. "Mezad Hashavyahu: Its Material Culture and Historical Background." *TA* 28 (2001): 3-165.
- Fantalkin, Alexander, and Oren Tal. "Re-Discovering the Iron Age Fortress at Tell Qudadi in the Context of Neo-Assyrian Imperialistic Policies." *PEQ* 141(2009): 188-206.
- Faust, Avraham. "Doorway Orientation, Settlement Planning and Cosmology in Ancient Israel during Iron Age II." *OJA* 20 (2001): 129-55.
- _____. "The Excavations at Tel 'Eton (2006-2009): A Preliminary Report." *PEQ* 143 (2011) 198-224.
- _____. "The Interests of the Assyrian Empire in the West: Olive Oil Production as a Test-Case." *JESHO* 54 (2011): 62-86.
- Fensham, F. Charles. "Widow, Orphan, and the Poor in Ancient Near Eastern Legal and Wisdom Literature." *JNES* 21(1962): 129-39.
- Finkelstein, Israel. "The Archaeology of the United Monarchy: An Alternative View." *Levant* 28 (1996): 177-87.
- _____. "State Formation in Israel and Judah." *NEA* 62 (1999): 35-52.
- Finkelstein, Israel, and Amihay Mazar. *The Quest for the Historical Israel: Debating Archaeology and the History of Early Israel (Invited Lectures Delivered at the Sixth Biannual Colloquium of the International Institute for Secular Humanistic Judaism, Detroit, October 2005)*. Edited by B. B. Schmidt. Atlanta: Society of Biblical Literature, 2007.
- Finkelstein, Israel, and Nadav Na'aman, eds. *The Fire Signal of Lachish: Studies in the Archaeology and History of Israel in the Late Bronze Age, Iron Age, and Persian Period in Honor of David Ussishkin*. Winona Lake: Eisenbrauns, 2011.

- Finkelstein, Israel, and Neal Asher Silberman. *The Bible Unearthed: Archaeology's New Vision of Ancient Israel and the Origin of its Sacred Text*. New York: A Touchstone Book, 2002.
- (I・フィンケルシュタイン / N・A・シルバーマン著 越後谷朗訳『発掘された聖書：最新の考古学が明かす聖書の真実』教文館、2009年)
- _____. "Temple and Dynasty: Hezekiah, the Remaking of Judah and the Rise of the Pan-Israelite Ideology." *JSOT* 30.3 (2006): 259-85.
- Finkelstein, Israel, and Lily Singer-Avitz. "Reevaluating Bethel." *ZDPV* 125 (2009): 33-48.
- Floyd, Michael H. *Minor Prophets Part 2*. Grand Rapids: Eerdmans, 2000.
- Foster, Benjamin Read. *Before the Muses: An Anthology of Akkadian Literature*. 3rd ed. Bethesda: CDL Press, 2005.
- Fox, Nili Sacher. *In the Service of the Kings: Officialdom in Ancient Israel and Judah*. Cincinnati: Hebrew Union College Press, 2000.
- Frahm, Eckart. *Historische und historisch-literarische Texte (Keilschrifttexte aus Assur literarischen Inhalts 3)*. WDOG 121. Wiesbaden: Keilschrifttexte aus Assur literarischen Inhalts 3, 2009.
- Frankena, Rintje. "The Vassal-Treaties of Esarhaddon and the Dating of Deuteronomy." *OS* 14 (1965): 122-54.
- Freed, Alexander. "The Code Spoken of in II Kings 22-23." *JBL* 40 (1921): 76-80.
- Fried, Lisbeth S. "The High Places (Bamot) and the Reforms of Hezekiah and Josiah: An Archaeological Investigation." *JAOS* 122 (2002): 437-65.
- Frick, Frank S. "Social Science Methods and Theories of Significance for the Study of the Israelite Monarchy: A Critical Review Essay." *Semeia* 37 (1986): 9-52.
- Fritz, Volkmar. *Das Erste Buch der Könige*. Zürich: Theologischer Verlag, 1996.
- _____. *Das Zweite Buch der Könige*. Zürich: Theologischer Verlag, 1998.
- _____. *1 & 2 Kings*. Translated by Anselm Hagedorn. Minneapolis: Fortress, 2003.
- Frolov, Serge, and Allen Wright. "Homeric and Ancient Near Eastern Intertextuality in 1 Samuel 17." *JBL* 130 (2011): 451-71.
- Frost, Stanley Brice. "The Death of Josiah: A Conspiracy of Silence." *JBL* 87 (1968): 369-82.
- Galan, José M. "What Is He, the Dog?" *UF* 25 (1993): 173-80.
- Gallagher, William R. *Sennacherib's Campaign to Judah*. Leiden: Brill, 1999.

- Geoghegan, Jeffrey C. *The Time, Place, and Purpose of the Deuteronomistic History: The Evidence of "Until This Day."* Providence: Brown University, 2006.
- Gerbrandt, Gerald Eddie. *Kingship According to the Deuteronomistic History.* Atlanta: Scholars Press, 1986.
- Gerstenberger, Erhard, *Wesen und Herkunft des "Apodiktischen Rechts."* Neukirchen-Vluyn: Neukirchener Verlag, 1965.
- Gertz, Jan Christian. *Die Gerichtsorganisation Israels im deuteronomistischen Gesetz.* Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1994.
- Glass, Zipporah G. "Land, Slave Labor and Law: Engaging Ancient Israel's Economy." *JSOT* 91 (2000): 27-39.
- Gieselmann, Bernd. "Die sogenannten josianische Reform in der gegenwärtigen Forschung." *ZAW* 106 (1994): 223-42.
- Glatt-Gilad, David A. "The Role of Huldah's Prophecy in the Chronicler's Portrayal of Josiah's Reform." *Bib.* 77 (1996): 16-31.
- Gleis, Matthias. *Die Bamah.* Berlin: de Gruyter, 1997.
- Gordon, Cyrus H. "His Name Is 'One'." *JNES* 29 (1970): 198-99.
- Gordon, Robert P., and Hans M. Barstad, eds. *"Thus Speaks Ishtar of Arbela": Prophecy in Israel, Assyria, and Egypt in the Neo-Assyrian Period.* Winona Lake: Eisenbrauns, 2013.
- Gottwald, Norman K. "Social Class as an Analytic and Hermeneutical Category in Biblical Studies." *JBL* 112 (1993): 3-22.
- Grabbe, Lester L., ed. *Can a "History of Israel" Be Written?* JSOT Sup. 245. Sheffield: Sheffield Academic Press, 1997.
- _____. ed. *Good Kings and Bad Kings.* London: T & T Clark, 2005.
- _____. "The Kingdom of Judah from Sennacherib's Invasion to the Fall of Jerusalem: If We Had only the Bible...." Pages 78-122 in *Good King and Bad Kings.* Edited by Lester L. Grabbe. London: T & T Clark, 2005.
- _____. "Reflections on the Discussion." Pages 339-50 in *Good King and Bad Kings.* Edited by Lester L. Grabbe. London: T & T Clark, 2005.

- _____. “ ‘Many Nations Will Be Joined to YHWH in That Day’: The Question of YHWH outside Judah.” Pages 175-87 in *Religious Diversity in Ancient Israel and Judah*. Edited by Francesca Stavrakopoulou, and John Barton. London: T & T Clark, 2010.
- Graupner, Axe. “Zum Verhältnis der beiden Dekalogfassungen Ex 20 und Dtn 5.” *ZAW* 99 (1987): 308-29.
- _____. *Auftrag und Geschichte des Propheten Jeremia: Literaristische Eigenart, Herkunft und Intention vordeuteronomistischer Prosa im Jeremiabuch*. Neukirchen-Vluyn: Neukirchener Verlag, 1991.
- Gray, John. *I & II Kings: A Commentary*. London: SCM Press, 1964.
- Grayson, A. Kirk, and Jamie Novotny. *The Royal Inscriptions of Sennacherib, King of Assyria (704-681 BC)*. Part 1. Winona Lake: Eisenbrauns, 2012.
- _____. *The Royal Inscriptions of Sennacherib, King of Assyria (704-681 BC)*. Part 2. Winona Lake: Eisenbrauns, 2014.
- Gressmann, Hugo. “Josia und das Deuteronomium.” *ZAW* 42 (1924): 313-37.
- Gross, Walter. “Lying Prophet and Disobedient Man of God in 1Kings 13: Role Analysis as an Instrument of Theological Interpretation of an Old Testament Narrative Text.” *Semeia* 15 (1979): 97-135.
- Gunkel, Hermann, and Joachim Begrich. *Introduction to Psalms: The Genre of the Religious Lyric of Israel*. Macon: Mercer University Press, 1998.
- Gunn, David M., and Paula M. McNutt, eds. “*Imagining*” *Biblical Worlds: Studies in Spatial, Social and Historical Constructs in Honor of James W. Flanagan*. Sheffield: Sheffield Academic Press, 2002.
- Gunneweg, Antonius H. J. *Priester und Leviten*. Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1965.
- Hadley, Judith M. *The Cult of Asherah in Ancient Israel and Judah: Evidence for a Hebrew Goddess*. New York: Cambridge University Press, 2000.
- Hagedorn, Anselm C. “Guarding the Parents’ Honour-Deuteronomy 21.18-21.” *JSOT* 88 (2000): 101-21.
- _____. *Between Moses and Plato: Individual Society in Deuteronomy and Ancient Greek Law*. Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 2004.

- _____. “‘Who would invite a stranger from abroad?’ The Presence of Greeks in Palestine in Old Testament Times.” Pages 68-93 in *The Old Testament in Its World: Papers Read at the Winter Meeting, January 2003 The Society for Old Testament Study and the Joint Meeting, July 2003 The Society for Old Testament Study and Het Oudtestamentisch Werkgezelschap in Nederland en België*. Edited by R. P. Gordon, and J. C. de Moor. Leiden: Brill, 2005.
- _____. “When did Zephaniah Become a Supporter of Josiah’s Reform?” *JTS* 62 (2011): 453-75.
- Hahn, Herbert Ferdinand. *The Old Testament in Modern Research*. London: SCM Press, 1956.
- Halbe, Jörn. “Passa-Massot im deuteronomischen Festkalender.” *ZAW* 87 (1975): 147-68.
- Hallo, William W. “Biblical History in its Near Eastern Setting.” Pages 77-79 in *Israel’s Past in Present Research: Essays on Ancient Israelite Historiography*. Edited by V. P. Long. Winona Lake: Eisenbrauns, 1999.
- _____. “Royal Ancestor Worship in the Biblical World.” Pages 381-401 in *Sha’arei Talmon: Studies in the Bible, Qumran, and the Ancient Near East presented to Shemaryahu Talmon*. Edited by M. Fishbane et al. Winona Lake: Eisenbrauns, 1992.
- Halpern, Baruch. *The Constitution of the Monarchy in Israel*. Chico: Scholars Press, 1981.
- _____. “The Centralization Formula in Deuteronomy.” *VT* 31 (1981): 20-37.
- _____. “Jerusalem and the Lineages in the Seventh Century BCE.” Pages 11-107 in *Law and Ideology in Monarchic Israel*. JSOT Sup. 124. Edited by Baruch Halpern, and D. W. Hobson. Sheffield: JSOT Press, 1991.
- _____. “The Baal (and the Asherah) in Seventh-Century Judah: Yhwh’s Retainers Retired.” Pages 115-154 in *Konsequente Traditionsgeschichte. Festschrift für Klaus Baltzer zum 65. Geburtstag*. OBO 126. Edited by R. Bartelmus et al. Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1993.
- _____. “Why Manasseh is Blamed for the Babylonian Exile: The Evolution of a Biblical Tradition.” *VT* 48 (1998): 473-514.
- Halpern, Baruch, and David S. Vanderhooft. “The Editions of Kings in the 7th – 6th Centuries BCE.” *HUCA* 62 (1991): 179-244.

- _____. "Jerusalem and the Lineages in Seventh Century BCE: Kingship and the Rise of Individual Moral Liability." Pages 1-107 in *Law and Ideology in Monarchic Israel*. JSOT Sup. 124. Edited by Baruch Halpern, and D. W. Hobson. Sheffield: JSOT Press, 1991.
- Hamilton, Jeffries M. "Ha' ARES in the Shemitta Law." *VT* 42 (1992): 214-22.
- _____. *Social Justice and Deuteronomy: The Case of Deuteronomy 15*. Atlanta: Scholars Press, 1992.
- Hundley, Michael. "To Be or Not to Be: A Reexamination of Name Language in Deuteronomy and the Deuteronomistic History." *VT* 59 (2009): 533-55.
- Handy, Lowell K. "Hezekiah's Unlikely Reform" *ZAW* 100 (1988): 111-15.
- _____. "The Role of Huldah in Josiah's Cult Reform." *ZAW* 106 (1994): 40-53.
- _____. "Historical Probability and the Narrative of Josiah's Reform in 2 Kings." Pages 252-75 in *The Pitcher is Broken: Memorial Essays for Gösta W. Ahlström*. Edited by S. W. Holloway, and Lowell K. Handy. Sheffield: Sheffield Academic Press, 1995.
- _____. "Josiah in a New Light: Assyriology Touches the Reforming King." Pages 415-31 in *Orientalism, Assyriology and the Bible*. Edited by S. W. Holloway. Sheffield: Sheffield Phoenix Press, 2007.
- Haran, Menahem. "The Uses of Incense in the Ancient Israelite Ritual." *VT* 10 (1960): 113-29.
- Hardmeier, Christof. "Umrisse eines vordeuteronomistischen Annalenwerks der Zidkijazeit: Zu den Möglichkeiten computergestützter Textanalyse." *VT* 40 (1990): 165-84.
- _____. "König Joschija in der Klimax des DtrG (2 Reg 22f.) und das vordtr. Dokument einer Kultreform am Residentzort (23,4-15*)." Pages 81-145 in *Erzählte Geschichte: Beiträge zur narrativen Kultur im alten Israel*. Edited by R. Lux. Neukirchen-Vluyn: Neukirchener, 2000.
- _____. "King Josiah in the Climax of the Deuteronomic History (2 Kings 22-23) and the Pre-Deuteronomic Document of a Cult Reform at the Place of Residence (23: 4-15): Criticism of Sources Reconstruction of Literary Pre-Stages and the Theology of History in 2 Kings 22-23." Pages 123-63 in *Good Kings and Bad Kings*. Edited by Lester L. Grabbe. London: T & T Clark, 2005.

- Harrison, Timothy P., and James F. Osborne. "Building XVI and the Neo-Assyrian Sacred Precinct at Tell Tayinat." *JCS* 64 (2012): 125-43.
- Harrison, Timothy P. "Lion-Adorned Monumental Gate Complex Unearthed at Tell Tayinat, Turkey." *NEAFB* 55 (2012).
- _____. "Recent Discoveries at Tayinat (Ancient Kunulua/Calno) and Their Biblical Implications." Pages 396-425 in *Congress Volume Munich 2013*. VT Sup. 163. Edited by Ch. M. Maier. Leiden: Brill, 2014.
- 長谷川修一「ヨシヤはネコと戦ったのか—列王記下 23 章 29 節に関する一考察—」『キリスト教学』第 55 号、2014 年、93-116 頁。
- Heider, George C. *The Cult of Molek: A Reassessment*. JSOT Sup. 43. Sheffield: JSOT Press, 1985.
- Helck, Wolfgang. *Die Beziehungen Ägyptens zu Vorderasien im 3. und 2. Jahrtausend v. Chr.*, 2nd ed. Wiesbaden: Otto Harrassowitz, 1971.
- Heltzer, Michael. "Some Questions concerning the Economic Policy of Josiah, King of Judah." *IEJ* 50 (2000): 105-08.
- Hentschel, Georg. *1 Könige; 2 Könige*. Leipzig: St. Benno-Verlag, 1985.
- Hepner, Gershon. "Abraham's Incestuous Marriage with Sarah: A Violation of the Holiness Code." *VT* LIII (2003): 143-55.
- Herion, Gary A. "The Impact of Modern and Social Science Assumptions on the Reconstruction of Israelite History." in *JSOT* 34 (1986): 3-33.
- Herrmann, Siegfried. "Die konstruktive Restauration: Das Deuteronomium als Mitte biblischer Theologie." Pages 155-70 in *Probleme biblischer Theologie: Gerhard von Rad zum 70. Geburtstag*. Edited by Hans Walter Wolff. München: Chr. Kaiser Verlag, 1971.
- _____. *Jeremia*. Neukirchen-Vluyn: Neukirchener Verlag, 1990.
- _____. *Jeremia: Der Prophet und das Buch*. Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft, 1990.
- Herrmann, Wolfram. "Jahwe und des Menschen Liebe zu Ihm zu DTN. VI 4." *VT* 50 (2000): 47-54.
- Herzog, Ze'ev. "The Stratigraphy at Arad: A Rejoinder," *BASOR* 267 (1987): 77-79.
- _____. "Perspectives on Southern Israel's Cult Centralization: Arad and Beer-Sheba." Pages 167-99 in *One God – One Cult – One Nation: Archaeology and Biblical Perspectives*. Edited by R. G. Kratz, and H. Spieckermann. Berlin: de Gruyter, 2010.

- Herzog, Ze'ev, et al. "The Israelite Fortress at Arad." *BASOR* 254 (1984): 1-34.
- Herzog, Ze'ev, Miriam Aharoni, and Anson F. Rainey. "Arad: An Ancient Israelite Fortress with a Temple of Yahweh." *BAR* 13/2 (1987): 16-35.
- Hobbs, T. Raymond. *2 Kings*. Waco: Word Books, 1985.
- Höffken, Peter. "Eine Bemerkung zum religionsgeschichtlichen Hintergrund von Dtn 6,4." *BZ. NF* 28, (1984): 88-93.
- Hölscher, Gustov. "Komposition und Ursprung des Deuteronomiums." *ZAW* 40 (1922): 161-255.
- Hoffmann, Hans Detlef. *Reform und Reformen: Untersuchungen zu einem Grundthema der deuteronomistischen Geschichtsschreibung*. Zürich: Theologischer Verlag, 1980.
- Hoffman, Y. "The Deuteronomistic Concept of the Herem." *ZAW* 111 (1999): 196-210.
- Hoffmeier, James K. "Further Evidence of Infant Sacrifice in the Ancient Near East." *BAR* 13/2 (1987): 60-61.
- Hogg, Michael A. *The Social Psychology of Group Cohesiveness: From Attraction to Social Identity*. New York: Harvester Wheatscheaf, 1992.
- _____. "Social Psychology of Leadership." Pages 716-33 in *Social Psychology: Handbook of Basic Principle*. Edited by A. W. Kruglanski, and E. T. Higgins. New York; London: The Guilford Press, 2007.
- Hogg, Michael A. and Dominic Abrams. *Social Identifications: A Social Psychology of Intergroup Relations and Group Processes*. London; New York: Routledge, 1988.
- Holladay, William L. "'On Every High Hill and under Every Green Tree' ." *VT* 11 (1961): 170-76.
- _____. "A Coherent Chronology of Jeremiah's Early Career." Pages 58-73 in *Le Livre de Jérémie: Le Prophète et son Milieu, les Oracles et leur Transmission*. 3rd ed. Edited by Pierre-Maurice Bogaert. Leuven: Leuven University Press, 1997.
- _____. *Jeremiah 1: A Commentary on the Book of Prophet Jeremiah Chapters 1-25*. Philadelphia: Fortress, 1986.
- _____. *Jeremiah 2: A Commentary on the Book of Prophet Jeremiah Chapters 26-52*. Minneapolis: Fortress, 1989.
- Hollenstein, Helmut. "Literarkritische Erwägungen zum Bericht über die Reformmassnahmen Josias 2Kön. XXIII 4ff." *VT* 27 (1977): 321-36.

- Holloway, Steven W. “King Josiah of Judah: The Lost Messiah of Israel by Marvin A. Sweeney.” *JNES* 66 (2007), 304-06.
- Holt, Else Kragelund. “Jeremiah’s Temple Sermon and the Deuteronomists: An Investigation of the Redactional Relationship between Jeremiah 7 and 26.” *JSOT* 36 (1986): 73-87.
- Hooker, Paul K., and John H. Hayes. “The Year of Josiah’s Death: 609 or 610?” Pages 96-103 in *The Land That I Will Show You: Essays on the History and Archaeology of the Ancient Near East in Honor of J. Maxwell Miller*. Edited by J. Andrew Dearman, and M. Patrick Graham. Sheffield: Sheffield Academic Press, 2001.
- Hoppe, Leslie J. “Jerusalem in the Deuteronomistic History.” Pages 107-10 in *Das Deuteronomium: Entstehung, Gestalt, und Botschaft*. Edited by N. Lohfink. Leuven: Leuven University, 1985.
- Hossfeld, Frank-Lothar, and Erich Zenger. *Psalmen 51-100*. Freiburg: Herder, 2000.
- _____. *A Commentary on Psalms 51-100*. Translated by L. M. Maloney. Minneapolis: Fortress, 2005.
- _____. *A Commentary on Psalms 101-150*. Translated by L. M. Maloney. Minneapolis: Fortress, 2011.
- Houston, Walter. “The Kings Preferential Option for the Poor: Rhetoric, Ideology and Ethics in Psalm 72.” *BibInt* 7 (1999): 341-67.
- Houtmann, Cornelis. “Die ursprünglichen Bewohner des Landes Kanaan im Deuteronomium. Sinn und Absicht der Beschreibung ihrer Identität und ihres Charakters.” *VT* 52 (2002) 51-65.
- Hudson, Michael. “The Lost Tradition of Biblical Debt Cancellations.” 1993.
<http://exiledonline.com>
- Hutton, Jeremy M. “Southern, Northern and Transjordanian Perspectives.” Pages 149-74 in *Religious Diversity in Ancient Israel and Judah*. Edited by Francesca Stavrakopoulou, and John Barton. London: T & T Clark, 2010.
- Hutton, Jeremy M. and L. L. Crouch. “Deuteronomy as a Translation of Assyrian Treaties an ‘Optimal Translation Approach’.” *HBAI* (2018): 201-252.
- Ihromi. “Die Königin Mutter und der ‘am ha’arez im Reich Juda.” *VT* 24 (1974): 421-29.
- 池田裕・大島力・樋口進・山我哲雄監修『新版総説旧約聖書』日本キリスト教団出版局、2007年。

池田裕訳『列王記』岩波書店、1999 年。

Isbell, Charles D. “2 Kings 22:3-23:24 and Jeremiah 36: A Stylistic Comparison.” *JSOT* 8 (1978): 33-45.

Ishida, Tomoo. “‘The People of the Land’ and the Political Crises in Judah.” *AJBI* 1 (1975): 23-38.

石黒則年「申命記 6:4-5 に関する考察と翻訳文の提案：(nephesh) の概念を中心として」『大阪キリスト教短期大学紀要』第 51 号、2011 年、1-12 頁。

Jamieson-Drake, David W. *Scribes and Schools in Monarchic Judah: A Socio-Archaeological Approach*. Sheffield: Sheffield Academic Press, 1991.

Janzen, David. “Why the Deuteronomist Told about the Sacrifice of Jephthah’s Daughter.” *JSOT* 29.3 (2005): 339-57.

_____. “An Ambiguous Ending: Dynastic Punishment in Kings and the Fate of the Davidides in 2 Kings 25.27-30.” *JSOT* 33.1 (2008): 39-58.

Japhet, Sara. *I and II Chronicles: A Commentary*. London: SCM Press, 1993.

_____. “From the King’s Sanctity to the Chosen City.” Pages 3-15 in *Jerusalem: Its Sanctuary and Centrality to Judaism, Christianity, and Islam*. Edited by L. I. Levine. New York: Continuum, 1999.

Jenkins, Richard. *Social Identity*. 3rd ed. London; New York: Routledge, 2008.

Jensen, Keith, Joseph Call, and Michael Tomasello. “Chimpanzees Are Rational Maximizers in an Ultimatum Game.” *Science* 5 October, (2007): 107-9.

Jepsen, Alfred. “Die Reform des Josia.” in L. Rost ed., *Festschrift für F. Baumgärtel zum 70. Geburtstag 14. Januar 1958*. Erlangen: Universitätsbund Erlangen, 1959, 97-108.

_____. “Gottesmann und Prophet: Anmerkungen zum Kapitel 1. Könige 13.” Pages 171-82 in *Probleme biblischer Theologie: Gerhard von Rad zum 70. Geburtstag*. Edited by H. W. Wolff. München: Chr. Kaiser, 1971.

Jokiranta, Jutta. “Qumran – The Prototypical Teacher in the Qumran Pesharim: A Social-Identity Approach.” Pages 254-63 in *Ancient Israel: The Old Testament in Its Social Context*. Edited by P. F. Esler. Minneapolis: Fortress, 2006.

Joosten, Jan. *People & Land in the Holiness Code: An Exegetical Study of the Ideational Framework of the Law in Leviticus 17-26*. Leiden; New York: Brill, 1996.

- Junge, Ehrhard. *Der Wiederaufbau des Heerwesens des Reiches Juda unter Josia*. Stuttgart: Kohlhammar, 1937.
- Kaiser, Otto. *Einleitung in das Alte Testament: Eine Einführung in ihre Ergebnisse und Probleme*. 5th ed., Gütersloh: Gütersloher Verlaghaus Gerd Mohn, 1984.
- 角間太郎「申命記法—その存在根拠と前提—」『金沢美術工芸大学学報』第 17 号、1973 年、27-37 頁。
- 同 「古代イスラエルの法と思想—神聖法集・祭司法典—」『金沢美術工芸大学学報』第 18 号、1974 年、45-58 頁。
- 勝村弘也著『詩篇注解』日本キリスト教団出版局、1992 年。
- Kautsch, E. ed. *Gesenius' Hebrew Grammar*. 2nd ed. Translated by A. E. Cowley. Oxford: Clarendon, 1910.
- Keel, Othmar and Christoph Ueling. *Göttinnen, Götter und Gottessymbole: Neue Erkenntnisse zur Religionsgeschichte Kanaans und Israel aufgrund bislang unerschossener Quellen*. Freiburg im Breisgau; Wien: Herder, 1992.
- _____. *Gods, Goddesses, and Images of God in Ancient Israel*. Translated by T. H. Trapp. Minneapolis: Augsburg Fortress, 1998.
- Keel, Othmar. "Jahwe und die Sonnengottheit von Jerusalem." Pages 269-306 in *Ein Gott allein? JHWH-Verehrung und biblischer Monotheismus im Kontext der israelitischen und altorientalischen Religionsgeschichte: 13. Kolloquium der Schweizerischen Akademieder Geistes- und Sozialwissenschaften 1993*. Edited by W. Dietrich, and M. A. Klopfenstein. Freiburg: Universitäts, 1994.
- Keown, Gerald L., Paula J. Scalise, and Thomas G. Smothers. *Jeremiah 26-52*. Dallas: Word Book, 1995.
- Kessler, Rainer. *Staat und Gesellschaft im vorexilischen Juda: Vom 8. Jahrhundert bis zum Exil*. Leiden: Brill, 1992.
- _____. *Sozialgeschichte des alten Israel : Eine Einführung*. Darmstadt:Wissenschaftliche Buchgesellschaft, 2006.
- _____. *The Social History of Ancient Israel: An Introduction*. Translated by L. M. Maloney, Minneapolis: Fortress, 2008.

- Kilpp, Nelson. *Niederreißen und Aufbauen: Das Verhältnis von Heilsverheissung und Unheilsverheissung bei Jeremia und im Jeremiabuch*. Neukirchen-Vluyn: Neukirchener Verlag, 1990.
- Kippenberg, Hans Gerhard. *Religion und Klassenbildung im antiken Judäa: Eine religionssoziologische Studie zum Verhältnis von Tradition und gesellschaftlicher Entwicklung*. 2nd ed. Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1978.
- Kim, Uriah Y. *Decolonizing Josiah: Toward a Postcolonial Reading of the Deuteronomistic History*. Sheffield: Sheffield Phoenix Press, 2005.
- Kitchen, Kenneth Anderson. *On the Reliability of the Old Testament*. Eerdmans, 2006.
- Kitz, Ann Marie. *Cursed Are You!: The Phenomenology of Cursing in Cuneiform and Hebrew Texts*. Winona Lake: Eisenbrauns, 2014.
- Klein, Ralph W. *2 Chronicles: A Commentary*. Minneapolis: Fortress, 2012.
- Kletter, Raz. "Comment: Conceptual Intelligence, Lmlk Storage Jars and the Bath Unit in Iron Age Judah." *Journal of Archaeol Method and Theory*. 16 (2009): 357-65.
- Knight, Douglas A., and Gene M. Tucker, eds. *The Hebrew Bible and Its Modern Interpreters*. Philadelphia: Fortress; Chico: Scholars Press, 1985.
- Knoppers, Gary N. "'There Was None like Him': Incompatibility in the Books of Kings." *CBQ* 54 (1992): 411-31.
- _____. "The Deuteronomist and the Deuteronomic Law of the King: A Reexamination of a Relationship." *ZAW* 108 (1996): 329-46.
- _____. "Is there a Future for the Deuteronomistic History?" Pages 119-34 in *The Future of the Deuteronomistic History*. Edited by Thomas C. Römer. Leuven: Leuven University Press, 2000.
- _____. "Rethinking the Relationship between Deuteronomy and the Deuteronomistic History: The Case of Kings." *CBQ* 63 (2002): 393-415.
- Knoppers, Gary N., and J. Gordon McConville, eds. *Reconstructing Israel and Judah: Recent Studies on the Deuteronomistic History*. Winona Lake: Eisenbrauns, 2000.
- Knoppers, Gary N., and Kenneth A. Ristau, eds. *Community Identity in Judean Historiography: Biblical and Comparative Perspectives*. Winona Lake: Eisenbrauns, 2009.

- Koch, Klaus. "Gefüge und Herkunft des Berichts über die Kultreformen des Königs Josia: Zugleich ein Beitrag zur Bestimmung hebräischer 'Tempora'." Pages 80-92 in *Alttestamentlicher Glaube und Biblischer Theologie: Festschrift für H. D. Preuß zum 65. Geburtstag*. Edited by J. Hausmann and H. J. Zobel. Stuttgart: Kohlhammer, 1992.
- Köckert, Matthias. "YHWH in the Northern and Southern Kingdom." Pages 357-94 in *One God – One Cult – One Nation: Archaeology and Biblical Perspectives*. Edited by R. G. Kratz, and H. Spieckermann. Berlin: de Gruyter, 2010.
- Krauss, Stuart. "The Word 'GER' in the Bible and its Implications." *JBQ* 34 (2006): 264-70.
- Kraut, Judah. "'Deciphering the Schema': Staircase Parallelism and the Syntax of Deuteronomy 6:4." *VT* 61 (2011): 582-602.
- Kratz, Reinhard G. "The Idea of Cultic Centralization and its Supposed Ancient Near Eastern Analogies." Pages 121-44 in *One God – One Cult – One Nation: Archaeology and Biblical Perspectives*. Edited by R. G. Kratz, and H. Spieckermann. Berlin: de Gruyter, 2010.
- Kugler, Robert A. "Holiness, Purity, the Body, and Society: The Evidence for Theological Conflict in Leviticus." *JSOT* 76 (1997): 3-27.
- Kutsch, Ernst. *Verheissung und Gesetz: Untersuchungen zum sogenannten "Bund" im Alten Testament*. Berlin: de Gruyter, 1973.
- Laato, Anti. *Josiah and David Redivivus: The Historical Josiah and the Messianic Expectations of Exilic and Postexilic Times*. Stockholm: Almqvist & Wiksell International, 1992.
- Labahn, Antje. "The Delay of Salvation within Deutero-Isaiah." *JSOT* 85 (1999): 71-84.
- LaBianca, Oystein, and Randall Younker. "The Kingdoms of Ammon, Moab, and Edom: The Archaeology of Society in the Late Bronze / Iron Age Transjordan (ca. 1400-500 B. C. E.)." Pages 399-415 in *Archaeology of Society in the Holy Land*. Edited by T. Levy. London: Leicester University Press, 1995.
- Lance, H. Darrell. "The Royal Stamps and the Kingdom of Josiah." *HTR* 64 (1971): 315-32.
- Lanzkowski, Günter. *Einführung in die Religionswissenschaft*. Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft, 1980;1991.
- Lang, Bernhard. "Die Jahwe-allein Bewegung." Pages 47-83 in *Der einzige Gott. Die Geburt des biblischen Monotheismus*. Edited by Bernhard Land. München: Kösel, 1981.

- (B・ラング編 荒井章三・辻学訳『唯一なる神：聖書における唯一神教の誕生』新教出版、1994年)
- _____. “The Yahwe-alone Movement and the Making of Jewish Monotheism.” Pages 13- 59 in *Monotheism and the Prophetic Minority: An Essay in Biblical History and Sociology*. Edited by Bernhard Lang. Sheffield: Almond Press, 1983.
- _____. “George Owell im gelobten Land: Das Buch Deuteronomium und der Geist kirchlicher Kontrolle.” Pages 21-35 in *Kirche und Visitation: Beitrag zur Erforschung des frühneuzeitlichen Visitationswesens in Europa*. Edited by Ernst Walter Zeeden, und Peter Thaddaus Lang. Stuttgart: Klett-Cotta, 1984.
- _____. “The Decalogue in the Light of a Newly Published Palaeo-Hebrew Inscription (Hebrew Ostrakon Moussaieff No.1).” *JSOT* 77 (1998): 21- 25.
- _____. *The Hebrew God: Portrait on an Ancient Deity*. London: Yale University Press, 2002.
- (B・ラング著 加藤久美子訳『ヘブライの神：旧約聖書における一神格の肖像』教文館、2009年)
- Lauinger, Jacob. “Some Preliminary Thoughts on the Tablet Collection in Building XVI from Tell Tayinat.” *CSMS* 6 (2011): 5-14.
- _____. “Esarhaddon’s Succession Treaty at Tell Tayinat: Text and Commentary.” *JCS* 64 (2012): 87-123.
- _____. “The Neo-Assyrian adê: Treaty, Oath or Something Else?” *Zeitschrift für Altorientalische und Biblische Rechtsgeschichte*. 19 (2013): 99-115.
- _____. “Neo-Assyrian Scribes, ‘Esarhaddon’s Succession Treaty’ and the Dynamics of Textual Mass Production.” Pages 285-314 in *Texts and Contexts: The Circulation and Transmission of Cuneiform Texts in Social Space*. Edited by Paul Delnero and Jacob Lauinger. Boston: Walter de Gruyter, 2015.
- _____. “Approaching Ancient Near Eastern Treaties, Laws, and Covenants.” *JAOS* 136 (2016): 125-134.
- Lemaire, Andre. “L’ Ostrakon de Mesad Hashavyahu (yavneh-Yam) Replacé dans son Contexte.” *Semitica* 21 (1971): 57-79.
- _____. *Inscriptions hébraïques I. Les Ostraca*. Paris: Cerf., 1977.

- Lemche, Niels Peter. "The Manumission of Slaves - The Fellow Year - The Sabbatical Year - The Jubel Year." *VT* 26 (1976): 38-59.
- Lenski, Gerhard E. *Power and Privilege: A Theory of Social Stratification*. New York: McGraw-Hill, 1966.
- Leuchter, Mark. *Josiah's Reform and Jeremiah's Scroll: Historical Calamity and Prophetic Response*. Sheffield: Sheffield Phoenix Press, 2006.
- _____. "The Manumission Laws in Leviticus and Deuteronomy: The Jeremiah Connection." *JBL* 127 (2008): 635-53.
- _____. "'The Prophets' and 'the Levites' in Josiah's Covenant Ceremony." *ZAW* 121 (2009): 31-47.
- Levin, Baruch A. *The JPS Torah Commentary Leviticus*. Philadelphia: The Jewish Publication, 1989.
- Levin, Christoph. "Joschija im deuteronomistischen Geschichtswerk." *ZAW* 96 (1984): 351-71.
- _____. *Die Verheißung des neuen Bundes: In ihrem theologiegeschichtlichen Zusammenhang ausgelegt*. Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1985.
- _____. "Der Dekalog am Sinai." *VT* 35 (1985): 165-91.
- _____. *Das Alte Testament*. München: C. H. Beck, 2001.
- Levinson, Bernard. *Deuteronomy and the Hermeneutic of Legal Innovation*. New York: Oxford University Press, 1997.
- Levinson, Bernard M., and Jeffrey Stackert. "Between the Covenant Code and Esarhaddon's Succession Treaty: Deuteronomy 13 and the Composition of Deuteronomy." *JAJ* 3 (2012): 123-40.
- _____. "The Limitations of 'Resonance': A Response to Joshua Berman on Historical and Comparative Method." *JAJ* 4 (2013): 310-33.
- Levinson, Bernard M. "The Reconceptualization of Kingship in Deuteronomy and the Deuteronomistic History's Transformation of Torah." *VT* 51 (2001): 511-34.
- _____. "The Birth of the Lemma: The Restrictive Reinterpretation of the Covenant Code's Manumission Law by the Holiness Code (Leviticus 25:44-46)." *JBL* 124 (2005): 617-39.
- _____. "The 'Effected Object' in Contractual Legal Language: The Semantics of 'If You Purchase a Hebrew Slave' (Exod. XXI 2)." *VT* LVI (2006): 485-504.

- _____. *Legal Revision and Religious Renewal in Ancient Israel*. New York: Cambridge University Press, 2008.
- _____. "Esarhaddon's Succession Treaty as the Source for the Canon Formula in Deuteronomy 13:1." *JAOS* 130 (2010): 337-47.
- _____. *"The Right Chorale": Studies in Biblical Law and Interpretation*. Winona Lake: Eisenbrauns, 2011.
- _____. *A More Perfect Torah: At the Intersection of Philology and Hermeneutics in Deuteronomy and the Temple Scroll*. Winona Lake: Eisenbrauns, 2013.
- Lewis, Peter E. "Is There a Parallel between 1Samuel 3 and the Sixth Chapter of the Egyptian Book of the Dead?" *JSOT* 31.3 (2007): 365-76.
- Lewis, Theodore J. *Cults of the Dead in Ancient Israel and Ugarit*. Atlanta: Scholars Press, 1989.
- Lindenberger, James M. "How Much for a Hebrew Slave? The Meaning of Mišneh in Debt 15:18." *JBL* 110 (1991): 479-98.
- _____. *Ancient Aramaic and Hebrew Letters (Texts)*. Atlanta: Society of Biblical Literature, 2003.
- Linville, James R. "Rethinking the 'Exilic' Book of Kings." *JSOT* 75 (1997): 21-42.
- _____. *Israel in the Book of Kings: The Past as a Project of Social Identity*. Sheffield: Sheffield Academic Press, 1998.
- Lipinski, Edward. "The Goddess Atarat in Ancient Arabia, in Babylon, and in Ugarit: Her Relation to the Moon-God and the Sun-Goddess." *OLP* 3 (1972): 101-19.
- _____. *On the Skirts of Canaan in the Iron Age: Historical and Topographical Researches*. Leuven: Peeters, 2006.
- Lipschits, Oded, Omer Sergi, and Ido Koch. "Royal Judahite Jar Handles: Reconsidering the Chronology of the lmlk Stamp Impressions." *TA* 37 (2010): 3-32.
- _____. "Judahite Stamped and Incised Jar Handles: A Tool for Studying the History of Late Monarchic Judah." *TA* 38 (2011): 5-41.
- Livingstone, Alasdair, ed. *Court Poetry and Literary Miscellanea*. Helsinki: Helsinki University Press, 1989.
- Liwak, Rüdiger. *Der Prophet und die Geschichte: Eine literar-historische Untersuchung zum Jeremiabuch*. Stuttgart: Kohlhammer, 1987.

- Lohfink, Norbert, "Die Bundesurkunde des Königs Josias." *Bib.* 44, 1963, 261-88.
- _____. "Die Gattung der 'Historischen Kurzgeschichte' in den letzten Jahren von Juda und in der Zeit des Babylonischen Exils." *ZAW* 90 (1978): 319- 47.
- _____. "Der junge Jeremia als Propagandist und Poet: Zum Grundstock von Jer 30-31." Pages 351-68 in *Le Livre de Jeremie: le prophet et son milieu, les oracles et leur transmission*. Edited by P. M. Gogaert et al. Leuven: Leuven University Press, 1981.
- _____. "Kerygmata des deuteronomistischen Geschichtswerks." Pages 87-100 in *Die Botschaft und die Boten. Festschrift für Hans Walter Wolff zum 70. Geburtstag*. Edited by J. Jeremias, and L. Perlitt Neukirchen-Vluyn: Neukirchener Verlag, 1981.
- _____. "Die Schichten des Pentateuch und der Krieg." Pages 51-110 in *Gewalt und Gewaltlosigkeit im Alten Testament*. Edited by Norbert Lohfink. Freiburg: Herder, 1983.
- _____. "Zur deuteronomistischen Zentralisationsformel." *Bib.* 65 (1984): 297-329.
- _____. "Zur neueren Diskussion über 2 Kön 22-23." Pages 24-48 in *Das Deuteronomium. Entstehung, Gestalt, Botschaft*. Edited by Norbert Lohfink. Leiden: University Press, 1985.
- _____. *The Option for the Poor*. Berkeley: Berkeley Institute of Bible, Archaeology and Law, 1987.
- _____. "The Cult Reform of Josiah of Judah: 2 Kings 22-23 as a Source for the History of Israelite Religion." Pages 459-75 in *Ancient Israelite Religion: Essays in Honor of Frank Moore Cross*. Edited by Patrick D. Miller, Jr., Paul D. Hanson, and S. Dean McBride. Philadelphia: Fortress, 1987.
- _____. "2 Kön 23,3 und Dtn 6,17." *Bib.* 71 (1990): 34-42.
- _____. "Poverty in the Laws of the Ancient Near East and of the Bible." *ThS* 52 (1991): 34-50.
- _____ with Thomas Römer. *Die Väter Israels in Deuteronomium*. Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1991.
- _____. "Recent Discussion on 2 Kings 22-23: The State of the Question." Pages 36-61 in *A Song of Power and the Power of Song*. Edited by D. L. Christensen. Translated by L. M. Maloney. Winona Lake: Eisenbrauns, 1993.

- _____. "Distribution of the Functions of Power: The Laws Concerning Public Offices in Deuteronomy 16:18-18:22." Pages 336-52 in *A Song of Power and the Power of Song: Essays on the Book of Deuteronomy*. Edited by D. L. Christensen. Winona Lake: Eisenbrauns, 1993.
- _____. "Gab es seine deuteronomistische Bewegung?" Pages 313-82 in *Jeremia und die 'deuteronomistische Bewegung'*. Edited by W. Groß. Weinheim : Beltz Athenäum Verlag, 1995.
- _____. "Was There a Deuteronomistic Movement?" Pages 36-66 in *Those Elusive Deuteronomists: The Phenomenon of Pan- Deuteronomism*. Edited by L. S. Scheraring, and S. L. McKenzie. Sheffield: Sheffield Academic Press, 1999.
- Lorton, David. *The Judicial Terminology of International Relations in Egyptian Texts through dyn. XVIII*. Baltimore: The Johns Hopkins University Press, 1974.
- Lowery, Richard H. *The Reforming Kings: Cults and Society in First Temple Judah*. JSOT Sup. 120. Sheffield: JSOT Press, 1991.
- Lundbom, Jack R. "The Lawbook of Josianic Reform." *CBQ* 38 (1976): 293-302.
- _____. "Baruch, Seraiah, and Expanded Colophons in the Book of Jeremiah." *JSOT* 36 (1986): 89-114.
- _____. *Deuteronomy: A Commentary*. Grand Rapids: Eerdmans, 2013.
- Lyons, Michael. *From Law to Prophecy: Ezekiel's Use of the Holiness Code*. New York: T & T Clark, 2009.
- Maag, V. "Erwägungen zur deuteronomischen Kultzentralisation." Pages 90-98 in *Kultur, Kulturkontakt und Religion*. Edited by V. Maag. Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht 1980.
- Malamat, Abraham. "The Last Wars of the Kingdom of Judah." *JNES* 9 (1950): 218-27.
- _____. "The Last King of Judah and the Fall of Jerusalem: An Historical-Chronological Study." *IEJ* 18 (1968): 137-56.
- _____. "Josiah's Bit for Armageddon: The Background of the Judean-Egyptian Encounter in 609 B.C." *JANESCU* 5 (1973): 267-79.
- _____. "Megiddo, 609 B.C.: The Conflict Re-examined." *ActAnt* 22 (1974): 445-49.

- _____. “The Kingdom of Judah between Egypt and Babylon: A Small State within a Great Power Confrontation.” Pages 117-29 in *Text and Context: Old Testament and Semitic Studies for F. C. Fensham*. JSOT Sup. 48. Edited by W. Claassen. Sheffield: JSOT Press, 1988.
- Malamat, Abraham, and Hayim Tadmor. *History of the Jewish People. Vol. One (The Ancient Times I)*. London: Weinfeld and Nicolson; Cambridge: Harvard University Press, 1976.
- Markl, Dominik. “God’s Covenants with Humanity and Israel.” Pages 313-37 in *The Hebrew Bible: A Critical Companion*. Edited by John Barton. Princeton: Princeton University Press, 2016.
- 松田伊作訳『詩篇』岩波書店、1998 年。
- Mayers, Carol. “Houshold Religion.” Pages 118-34 in *Religious Diversity in Ancient Israel and Judah*. Edited by Francesca Stavrakopoulou, and John Barton. London: T & T Clark, 2010.
- Mayes, A. D. H. “King and Covenant: A Study of 2 Kings Chs 22-23.” *Herm* 125 (1978): 34-47.
- _____. *Deuteronomy*. London: Marshall, Morgan and Scott; Grand Rapids: Eerdmans, 1979; 1981.
- _____. “Sociology and the Old Testament.” Pages 39-63 in *The World of Ancient Israel: Sociological, Anthropological and Political Perspectives*. Edited by R. E. Clements. Cambridge: Cambridge University Press, 1989.
- Mays, James Luther. *Psalms*. West Minster John Knox Press, 1994.
- (J. L. メイズ著 左近豊訳『詩篇』日本基督教団出版局、2000 年)
- Mayshar, Joram. “Who Was the *Toshav*?” *JBL* 133 (2014): 225-46.
- Mazar, Amihai. *Archaeology of the Land of the Bible: 10,000-586 B.C.E.* New York: Doubleday, 1990.
- (A.マザール著 杉本智俊・牧野久実訳『聖書の世界の考古学』リトン、2003 年)
- Mazar, Amihai and Ehud Netzer. “Short Notes on the Israelite Fortress at Arad.” *BASOR* 263 (1986): 87-91.
- Mazar, Benjamin. “The Sanctuary of Arad and the Family of Hobab the Kenite.” *JNES* 24 (1965): 297-303.
- _____. “The Kingdom of Judah under Josiah.” *TA* 18 (1991): 3-17.

- McCarthy, D. J. *Treaty and Covenant: A Study in Form in the Ancient Oriental Documents and in the Old Testament* 2nd ed. Rome: Biblical Institute Press, 1978.
- McConville, J. Gordon. *Law and Theology in Deuteronomy*. JSOT Sup. 33. Sheffield: JSOT Press, 1984.
- _____. "Narrative and Meaning in the Book of Kings." *Bib.* 70 (1989): 50-73.
- _____. "Singular Address in the Deuteronomic Law and the Politics of Legal Administration." *JSOT* 26.3 (2002): 19-36.
- McKane, William. "Relations between Poetry and Prose in the Book of Jeremiah with Special Reference to Jeremiah III 6-11 and XII 14-17" Pages 220-37 in *Congress Volume: Vienna 1980*. Edited by J. A. Emerton. Leiden: E. J. Brill, 1981.
- _____. *A Critical and Exegetical Commentary on Jeremiah, Vol. I*. Edinburgh: T & T Clark, 1986.
- _____. *A Critical and Exegetical Commentary on Jeremiah, Vol. II*. Edinburgh: T & T Clark, 1996.
- McKay, John William. *Religion in Judah under the Assyrians: 732-609 BC*. London: SCM Press, 1973.
- McKenzie, Steven L. *The Trouble with Kings: The Composition of the Books of Kings in the Deuteronomistic History*. VT Sup. 42. Leiden: Brill, 1991.
- _____. "The Book of Kings in the Deuteronomistic History." Pages 281-307 in *The History of Israel's Tradition: The Heritage of Martin Noth*. JSOT Sup. 182. Edited by S. L. McKenzie, and M. P. Graham. Sheffield: Sheffield Academic Press, 1994.
- Mead, James K. "Kings and Prophets, Donkeys and Lions: Dramatic Shape and Deuteronomistic Rhetoric in 1 Kings XIII." *VT* 49 (1999): 191-205.
- Mein, Andrew. *Ezekiel and the Ethics of Exile*. Oxford; New York: Oxford University Press, 2001.
- Mendenhall, George E. "Law and Covenant in Israel and the Ancient Near East." *BA* vol. XVII no. 2 (1954): 26-44.
- _____. "Law and Covenant in Israel and the Ancient Near East." *BA* vol. XVII no. 3 (1954): 49-76.
- Mendenhall, George E., and Gary A. Herion. "Covenant." *The Anchor Bible Dictionary* Vol. 1: 1179-202.

- Merendino, R. P. “Dt 27, 1-8. Eine Literarkritische und Überlieferungsgeschichtliche Untersuchung.” *BZ. NF* 24 (1980): 194-207.
- Mettinger, Tryggve N. D. *King and Messiah: The Civil and Sacral Legitimation of the Israelite Kings*. Lund: CWK Gleerup, 1976.
- Metzger, Martin. *Grundriß der Geschichte Israels*. Neukirchen-Vluyn: Neukirchener Verlag, 1963.
(マルティン・メツガー著 山我哲雄訳『古代イスラエル史』新地書房、1983 年)
- Milgrom, Jacob. “Does H Advocate the Centralization of Worship?” *JSOT* 88 (2000): 59-76.
- Miller, James Maxwell, and J. H. Have. *A History of Ancient Israel and Judah*. 2nd ed. Louisville: Westminster John Knox Press, 2006.
- Miller, Patrick D. *Deuteronomy*. Louisville: Westminster John Knox Press, 1987.
- _____. “The World and Message of the Prophets: Biblical Prophecy in its Context.” Pages 97-112 in *Old Testament Interpretation: Past, Present, and Future: Essays in Honour of G. M. Tucker*. Edited by J. L. Mays, D. L. Petersen, and K. H. Richards. Edinburgh: T & T Clark, 1995.
- Mitchell, T. C. “Judah until the Fall of Jerusalem (c. 700-586 B.C.).” Pages 371-409 in *The Assyrian and Babylonian Empires and Other States of the Near East, from the Eighth to the Sixth Centuries B.C.* Edited by J. Boardman et al. Cambridge: Cambridge University Press, 1991.
- 宮田玲「旧約聖書におけるアシェラ」『基督教研究』第 65 巻第 1 号、2004 年、96－108 頁。
同 「シエマーにおける『一（エハド）』理解」『基督教研究』第 65 巻第 2 号、2004 年、195-214 頁。
- Moenikes, Ansgar. “Zur Redaktionsgeschichte des sogenannten Deuteronomistischen Geschichtswerks.” *ZAW* 104 (1992): 333-348.
- Mommsen, N., I. Perlman, and J. Yellin, “The Provenience of *lmlk* Jars.” *IEJ* 34 (1984): 89-113.
- Monroe, Lauren A. *Josiah’s Reform and the Dynamics of Defilement: Israelite Rites of Violence and the Making of a Biblical Text*. Oxford: Oxford University Press, 2011.
- Montgomery, James A. “Archival Data in the Book of Kings.” *JBL* 53 (1934): 46-52.
- _____. *A Critical and Exegetical Commentary on the Book of Kings*. Edinburgh: T & T Clark, 1951.

- Moran, William L. "The Ancient Near Eastern Background of the Love of God in Deuteronomy" *CBQ* 25 (1963): 77-87.
- _____. *The Amarna Letters*. English edition. Baltimore; London: The Johns Hopkins University Press, 1992.
- Morschauser, Scott N. "The End of the $\text{sdf}(\equiv)$ -Tr(yt) 'Oath'." *JARCE* 25 (1988): 93-103.
- 村岡崇光・土岐健治訳 日本聖書学研究所編『聖書外典偽典 第1巻』教文館、1975年。
- Na'aman, Nadav. "Sennacherib's 'Letter to God' on His Campaign to Judah." *BASOR* 214 (1974): 25-39.
- _____. "Arad in the Topographical List of Shishak." *TA* 12 (1985): 91-92.
- _____. "The Debated Historicity of Hezekiah's Reform in the Light of Historical and Archaeological Research." *ZAW* 107 (1995): 179-95.
- _____. "The Contribution of Royal Inscriptions for a Re-evaluation of the Book of Kings as a Historical Source." *JSOT* 82 (1999): 3-17.
- _____. "The Fire Signals of Lachish Revisited." *PEQ* 131 (1999): 65-67.
- _____. "The Distribution of Messages in the Kingdom of Judah in Light of the Lachish Ostraca." *VT* 53 (2003): 169-80.
- _____. "Ostrakon 40 from Arad Reconsidered." Pages 199-204 in *Saxa loquentur. Studien zur Archäologie Palästinas/Israels Festschrift für Volkmar Fritz zum 65. Geburtstag*. (AOAT 302). Edited by C. G. den Hertog, U. Hübner, and S. Münger. Münster: Ugarit-Verlag, 2003.
- _____. "Josiah and the Kingdom of Judah." Pages 189-247 in *Good Kings and Bad Kings*, Edited by Lester L. Grabbe. London: T & T Clark, 2005.
- _____. "The Kingdom of Judah under Josiah." Pages 329-98 in *Ancient Israel and Its Neighbors*. Indiana, Eisenbrauns, 2005.
- _____. "Ostrakon No. 7 from Arad Reconsidered." Pages 265-67 in *Confronting the Past: Archaeological and Historical Essays on Ancient Israel in Honor of William G. Dever*. Edited by Gitin, S., J. E. Wright, and J. P. Dessel. Winona Lake: Eisenbrauns, 2006.
- _____. "The King Leading Cult Reform in His Kingdom: Josiah and Other Kings in the Ancient Near East." *ZAR* 12 (2006): 131-168.

- _____. “The ‘Discovered Book’ and the Legitimation of Josiah’s Reform.” *JBL* 130 (2011.): 47-62.
- _____. “Textual and Historical Notes on the Eliashib Archive from Arad.” *TA* 38 (2011): 83-93.
- Nakanose, Shigeyuki. *Josiah’s Passover*. Eugene: Wipf and Stock Publishers, 1993.
- Nakhai, B. Alpert. “What’s a Bamah? How Sacred Space Functioned in Ancient Israel.” *BAR* 20.3 (1994): 18-29.
- 中田一郎訳『ハンムラビ「法典」』第2版、リトン、2002年（初版1999年）。
- Naveh, Joseph. “A Hebrew Letter from the Seventh Century B.C.” *IEJ* 10 (1960): 129-39.
- _____. “More Hebrew Inscriptions from Mesad Hashavyahu.” *IEJ* 12 (1962): 27-32.
- _____. “The Excavations at Masad Hashavyahu: Preliminary Report.” *IEJ* 12 (1962): 89-113.
- _____. “Some Notes on the Reading of the Mesad Hashavyahu Letter.” *IEJ* 14 (1964): 158-59.
- _____. “Hashavyahu, Mezad.” *The Encyclopedia of Archaeological Excavations in the Holy Land*. Vol. 2: 585-86.
- Nelson-Jones Richard. *The Double Redaction of the Deuteronomistic History*. JSOT Sup. 18. Sheffield: JSOT Press, 1981.
- _____. “Josiah in the Book of Joshua.” *JBL* 100 (1981): 531-40.
- _____. “Realpolitik in Judah (687-609 BCE).” Pages 177-89 in *Scripture in Context II: More Essays on the Comparative Method*. Edited by W. W. Hallo et al. Winona Lake: Eisenbrauns, 1983.
- _____. *First and Second Kings*. Louisville: Westminster John Knox Press, 1987.
- _____. “The Double Redaction of the Deuteronomistic History: The Case Is Still Compelling.” *JSOT* 29.3 (2005): 319-37.
- Nicholsky, N. M. “Pascha im Kulte des jerusalemischen Temples.” *ZAW* 45(1927): 171-90.
- Nicholson, E. W. “The Centralisation of the Cult in Deuteronomy.” *VT* 13 (1963): 380-89.
- _____. “Josiah’s Reformation and Deuteronomy.” *TGUOS* 204 (1963; 1964): 77-84.
- _____. *Deuteronomy and Tradition: Literary and Historical Traditions in the Book of Deuteronomy*. Philadelphia: Fortress Press, 1967.
- _____. “Josiah and the Priests of the High Places (II Reg 23,8a. 9).” *ZAW* 119 (2007): 499-513.

- Niditch, Susan. "Experiencing the Divine: Heavenly Visits, Earthly Encounters and the Land of the Dead." Pages 11-22 in *Religious Diversity in Ancient Israel and Judah*. Edited by Francesca Stavrakoulou, and John Barton. London: T & T Clark, 2010.
- Niehr, Herbert. "Die Reform des Joschija: Methodische, historische und religionsgeschichtliche Aspekte." Pages 33-55 in *Jeremia und die deuteronomistische Bewegung*. Edited by W. Gross. Weinheim: Beltz Athenäum, 1995.
- _____. "'Israelite' Religion and 'Canaanite' Religion." Pages 23-36 in *Religious Diversity in Ancient Israel and Judah*. Edited by Francesca Stavrakoulou, and John Barton. London: T & T Clark, 2010.
- Nissinen, Martti. "The Dubious Image of Prophecy." Pages 26-41 in *Prophets, Prophecy, and Prophetic Texts in Second Temple Judaism*. Edited by M. H. Floyd, and R. D. Haak. London: T & T Clark, 2006.
- Noll, Kurt L. "Deuteronomistic History or Deuteronomic Debate? (A Thought Experiment)" *JSOT* 31.3 (2007): 311-45.
- Noth, Martin. *Überlieferungsgeschichtliche Studien I*, 2nd ed. Tübingen: Max Niemeyer, 1957.
(マルティン・ノート著 山我哲雄訳『旧約聖書の歴史文学：伝承史的研究』日本基督教団出版局、1988年)
- Noth, Martin. *Gesammelte Studien zum Alten Testament*, 2nd ed. München: Chr. Kaiser, 1960.
- _____. *The Deuteronomistic History*. JSOT Sup. 15. Sheffield: JSOT Press, 1981.
- Nylander, Carl. "A Note on the Stonecutting and Masonry of Tel Arad." *IEJ* 17 (1967): 56-59.
- O'Brien, Mark A. "The 'Deuteronomistic History' as a Story of Israel's Leaders" *ABR* 37 (1989): 14-34.
- _____. *The Deuteronomistic History Hypothesis: A Reassessment*. Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1989.
- Oestreicher, Theodor. *Das Deuteronomische Grundgesetz*. Gütersloh: C. Bertelmann, 1923.
- Ogden, Graham S. "The Northern Extent of Josiah's Reforms." *ABR* 26 (1978): 26-34.
- Otto, Eckart. *Jerusalem, die Geschichte der Heiligen Stadt: Von den Anfängen bis zur Kreuzfahrerzeit*. Stuttgart: Kohlhammer, 1980.
- _____. "Town and Rural Countryside in Ancient Israelite Law: Reception and Redaction in Cuneiform and Israelite Law." *JSOT* 57 (1993): 3-22.

- _____. “Vom Bundesbuch zum Deuteronomium: Die deuteronomistische Redaktion in Dtn 12-26.” Pages 260-78 in *Biblische Theologie und gesellschaftlicher Wandel für N. Lohfink*. Edited by G. Braulik, W. Gross, and S. McEvenue. Freiburg: Herder, 1993.
- _____. *Theologische Ethik des Alten Testaments*. Stuttgart: Kohlhammer, 1994.
- _____. “Aspects of Legal Reforms and Reformulations in Ancient Cuneiform and Israelite Law.” Pages 160-96 in *Theory and Method in Biblical and Cuneiform Law: Revision, Interpretation, and Development*. JSOT Sup. 181. Edited by B. M. Levinson. Sheffield: Sheffield Academic Press, 1994.
- _____. “Rechtsreformen in Deuteronomium xii-xxvi und im mittellassyrischen Kodex der Tafel A (KAV 1).” Pages 239-73 in *Congress Volume. Paris 1992*. Edited by J. A. Emerton. Leiden: Brill, 1995.
- _____. “The Pre-Exilic Deuteronomy as a Revision of the Covenant Code.” Pages 112-22 in *Kontinuum und Proprium: Studien zur Sozial- und Rechtsgeschichte des Alten Orients und des Alten Testaments*. E. Otto. Wiesbaden: Harrasowitz, 1996.
- _____. *Das Deuteronomium : Politische Theologie und Rechtsreform in Juda und Assyrien*. Berlin: de Gruyter, 1999.
- _____. “Josia/Josiareform.” Pages 587-90 in *Religion in Geschichte und Gegenwart: Handwörterbuch für Theologie und Religionswissenschaft*. 4th ed., Vol. 4. Edited by H. D. Betz et al. Tübingen: Mohr Siebeck, 2001.
- _____. *Mose: Geschichte und Legende*. München: C. H. Beck, 2006.
- _____. “Perspektiven der neuen Deuteronomiumsforschung,” *ZAW* 119 (2007): 319-40.
- _____. *Deuteronomium 1, 1-4, 43*. Freiburg: Herder, 2012.
- _____. *Deuteronomium 4, 44-11, 32*. Freiburg: Herder, 2012.
- _____. *Deuteronomium 12, 1-23, 15*. Freiburg: Herder, 2016.
- _____. *Deuteronomium 23, 16-34, 12*. Freiburg: Herder, 2017.
- Pakkala, Juha. “The Date of the Oldest Edition of Deuteronomy.” *ZAW* 121 (2009): 388-401.
- _____. “Why the Cult Reforms in Judah Probably Did Not Happen.” Pages 201-35 in *One God – One Cult – One Nation: Archaeology and Biblical Perspectives*. Edited by R. G. Kratz, and H. Spieckermann. Berlin: de Gruyter, 2010.
- Pardee, Dennis. “Letters from Tel Arad.” *Ugarit-Forschungen* 10. (1978): 289-336.

- _____. *Handbook of Ancient Hebrew Letters: A Study Edition*. Edited by B. O. Long. Chico: Scholars Press (The Society of Biblical Literature Sources for Biblical Study 15), 1982.
- _____. "A Brief Note on Mesad Hashavyahu Osrakon, 1. 12 'w' ml'." *BASOR* 239 (1980):47-48.
- Park, Sung Jin. "The Cultic Identity of Asherah in Deuteronomistic Ideology of Israel." *ZAW* 123 (2011): 553-64.
- Parker, Simon B. *Stories in Scripture and Inscriptions: Comparative Studies on Narratives in Northwest Semitic Inscriptions and the Hebrew Bible*. Oxford: Oxford University Press, 1997.
- _____. "Did the Authors of the Books of Kings Make Use of Royal Inscriptions?" *VT* 50, (2000): 357-78.
- Parpola, Simo, and K. Watanabe. *Neo-Assyrian Treaties and Loyalty Oath*. Helsinki: Helsinki University Press, 1988.
- Parpola, Simo. *Assyrian Prophecies*. Helsinki: Helsinki University Press, 1997.
- Paul, M. J. "Hilkiah and the Law (2 Kings 22) in the 17th and 18th Centuries: Some Influences on W. M. L. de Wette." Pages 9-12 in *Das Deuteronomium: Entstehung, Gestalt und Botschaft*. Edited by Norbert Lohfink. Leuven: Leuven University Press, 1985.
- _____. "King Josiah's Renewal of the Covenant (2 Kings 22-23)." Pages 267-76 in *Pentateuchal and Deuteronomistic Studies: Papers Read at the XIIIth JOSOT Congress, Leuven, 1989*. Edited by C. Brekelmans, and J. Lust. Leuven: Leuven University Press, 1990.
- Payne, David F. *Deuteronomy*. Edinburgh: The Saint Andrew Press, 1985.
- Pecirkova, Jana. "The Administrative Methods of Assyrian Imperialism." *ArOr* 55 (1987):162-75.
- _____. "The Significance of the Book of Joshua in Noth's Theory of the Deuteronomistic History." Pages 213-34 in *The History of Israel's Traditions: The Heritage of Martin Noth*. JSOT Sup. 182. Edited by S. L. McKenzie, and M. P. Graham. Sheffield: Sheffield Academic Press, 1984.
- Person, Raymond F., Jr. *The Deuteronomic School: History, Social Setting, and Literature*. Leiden: Brill, 2002.

- Petrovich, Douglas N. "Building XVI at Tell Tayinat: The Religious Dimensions and Significance of a Tripartite Temple at Neo-Assyrian Kunulua." (Dissertation: University of Toronto, 2016)
- Phillips, Anthony. *Deuteronomy*. Cambridge: Cambridge University Press, 1973.
- Pietsch, Michael. "Von Königen und Königtümern: eine Untersuchung zur Textgeschichte der Königsbücher." *ZAW* 119 (2007): 39-58.
- _____. *Die Kultreform Josias: Studien zur Religionsgeschichte Israels in der späten Königszeit*. Tübingen: Mohr Siebeck, 2013.
- Pitkänen, Pekka. "Dr Jekyll and Mr Hyde? : Deuteronomy and the Rights of Indigenous Peoples." *PT* 11 (2010): 399-409.
- Plein, Ina. "Erwägungen zur Überlieferung von 1 Reg 11,26-14,20." *ZAW* 78 (1966): 8-24.
- Poorthuis, M. J. H. M., and Joshua Schwartz, eds. *A Holy People: Jewish and Christian Perspectives on Religious Communal Identity*. Leuven: Brill, 2006.
- Postmes, Tom, and Nyla R. Branscombe, eds. *Rediscovering Social Identity*. New York: Psychology Press, 2010.
- Preuß, Horst Dietrich. *Deuteronomium*. Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft, 1982.
- _____. "Zum deuteronomistischen Geschichtswerk." *TR* 58 (1993): 341-95.
- Prichard, James B., ed., *Ancient Near Eastern Texts Relating to the Old Testament*. 3rd ed. Princeton: Princeton University Press, 1969.
- Priest, John. "Huldah's Oracle." *VT* 30 (1980): 366-68.
- Provan, Iain. *1 & 2 King*. Peabody: Hendrickson, 1995. (New International Biblical Commentary 7)
- Quick, L. *Deuteronomy 28 and the Aramaic Curse Tradition*. Oxford: Oxford University Press, 2018.
- Rad, Gerhard von. *Deuteronomium-Studien*. 2nd ed., Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1948.
- _____. *Studies in Deuteronomy*. Translated by D. Stalker. London: SCM Press, 1953.
- _____. *Der Heilige Krieg im alten Israel*. 3rd ed. Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1958.
- (G・フォン・ラート著 山吉智久訳『古代イスラエルにおける聖戦』教文館、2006年)
- _____. *Old Testament Theology*. 2 vols. Translated by D. M. G. Stalker. New York: Harper & Row, 1962-1965.

- _____. "The Deuteronomic Theology of History in I and II Kings." Pages 205-21 in *The Problem of the Hexateuch and Other Essays*. Edited by Gerhard Von Rad. Translated by R. E. V. Trueman. Edinburgh: Oliver & Boyd, 1966.
- _____. *The Problem of the Hexateuch and Other Essays*. Translated by R. E. V. Trueman. Edinburgh: Oliver & Boyd, 1966.
- _____. *Deuteronomy: A Commentary*. Translated by D. Barton. London: SCM Press, 1966.
- _____. "Das Deuteronomium und die großen Propheten." Pages 80-108 in *Gesammelte Studien zum Alten Testament. Bd. II*. Edited by Gerhard Von Rad, and Rudolf Smend. München: Chr. Kaiser Verlag, 1973.
- _____. *Das fünfte Buch Moses Deuteronomium: Übersetzt und erklärt*. 4th ed. Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1983.
- _____. *Holy War in Ancient Israel*. Translated by M. J. Dawn. Grand Rapids: Eerdmans, 1991.
- Radner, K. "Assyrische tuppi ade als Vorbild für Deuteronomium 28,20-44?" Pages 251-278 in *Die deuteronomistischen Geschichtswerke: Redaktion- und religionsgeschichtliche Perspektiven zur „Deuteronomiums“-Diskussion in Tora und Vorderen Propheten*. BZAW 365. Edited by M. Witte, K. Schmid, D. Prechel, and J. C. Gertz. Berlin: de Gruyter, 2006.
- _____. "'Assur's Second Temple Period': The Restoration of the Cult of Aššur, c. 538BCE." Pages 77-96 in *Herrschaftslegitimation in vorderorientalischen Reichen der Eisenzeit*. ORA 21. Edited by C. Levin and R. Müller. Tübingen: Mohr Siebeck, 2017.
- Radovan, Z. "'David' Found at Dan." *BAR* 20/2 (1994):26-39.
- Rahmani, L. Y. "Ancient Jerusalem's Funerary Customs and Tombs: Part Two." *BA* 44 (1981): 229-35.
- Rainey, Anson F. "Watching out for the Signal Fires of Lachish." *PEQ* 119 (1987): 149-51.
- _____. "Hezekiah's Reform and the Altars at Beer-Sheba and Arad." Pages 334-54 in *Scripture and Other Artifacts: Essays on the Bible and Archaeology in Honour of Philip J. King*. Edited by M. D. Cogan et al. Louisville: Westminster John Knox, 1994.
- _____. "Syntax and Rhetorical Analysis in the Hashavyahu Ostrakon." *JANES* 27 (2000): 75-79.

- Ramos, Melissa, "A Northwest Semitic Curse Formula: The Sefire Treaty and Deuteronomy 28." *ZAW* 128 (2016): 205-220.
- Redford, Donald B. "Sais and the Kushite Invasions of the Eighth Century B. C." *JARCE* 22 (1985): 5-15.
- _____. *Egypt, Canaan and Israel in Ancient Times*. Princeton: Princeton University Press, 1992.
- Reicke, B., and L. Rost, eds., *Biblisch-historisches Handbuch*. I-IV, Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht. 1963-1979.
- (荒井献・石田友雄編『旧約新約聖書大事典』教文館、1989年)
- Reis, Pamela Tamarkin. "Vindicating God: Another Look at 1 Kings XIII." *VT* 44 (1994): 376-86.
- Rendtorff, Rolf. *Das überlieferungsgeschichtliche Problem des Pentateuch*. BZAW 147. Berlin: de Gruyter, 1976.
- (R. レントルフ著 山我哲雄訳『モーセ五書の伝承史的問題』教文館、1987年)
- _____. "Die Erwählung Israels als Thema der deuteronomischen Theologie." Pages 75-86 in *Die Botschaft und die Boten: Festschrift für Hans Walter Wolff zum 70. Geburtstag*. Edited by J. Jeremias, und L. Peritt. Neukirchener Verlag, 1981.
- _____. *Das Alte Testament: Eine Einführung*. Neukirchen-Vluyn: Neukirchener Verlag, 1983.
- _____. *The Old Testament: An Introduction*. Translated by J. Bowden. Philadelphia: Fortress, 1991.
- Resnick, David. "A Case Study in Jewish Moral Education: (Non-) Rape of the Beautiful Captive." *Journal of Moral Education* 33. (2004): 307-19.
- Renz, Johannes. *Die althebräischen Inschriften, Teil 1: Text und Kommentar*. Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft, 1995.
- Richter, Sandra L. *The Deuteronomistic History and the Name Theology: lesakken semo sam in the Bible and the Ancient Near East*. BZAW 318. Berlin: de Gruyter, 2002.
- Richter, W. "Kakīš 3 – Vorschlag zur Konstitution eines Textes" *BN* 37 (1987): 73-103.
- Roaf, Michael. *Cultural Atlas of Mesopotamia and the Ancient Near East*. Facts on File, 1990.
- (マイケル・ローフ著 松谷敏雄監訳『古代のメソポタミア』朝倉書店、1994年)
- _____. "The Place of the Name in Deuteronomy." *VT* 57 (2007): 342-66.
- Roberts, Jimmy J. M. "The Davidic Origin of the Zion Tradition." *JBL* 92 (1973): 329-44.

- _____. “Zion in the Theology of the Davidic-Solomonic Empire.” Pages 93-108 in *Studies in the Period of David and Solomon and Other Essays: Papers Read at the International Symposium for Biblical Studies, Tokyo, 5-7 December, 1979*. Edited by T. Ishida. Winona Lake: Eisenbrauns, 1982.
- Robinson, Donald W. B. *Josiah's Reform and the Book of the Law*. London: Tyndale Press, 1951.
- Robinson, Joseph. *The Second Book of Kings*. Cambridge: Cambridge University Press, 1976.
- Römer, Thomas. *Israels Väter: Untersuchungen zur Väterthematik im Deuteronomium und in der deuteronomistischen Tradition*. Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1990.
- _____. “Transformations in Deuteronomistic and Biblical Historiography: On ‘Book-Finding’ and other Literary Strategies.” *ZAW* 109 (1997): 1-11.
- _____. “Why Would the Deuteronomists Tell about the Sacrifice of Jephthah’s Daughter.” *JSOT* 77 (1998): 27-38.
- _____. *The Future of the Deuteronomistic History*. Edited by Thomas Römer. Leuven: Leuven University Press, 2000.
- _____. *The So-called Deuteronomistic History: A Sociological, Historical and Literary Introduction*. T & T Clark, 2005.
- (トーマス・C・レーマー著 山我哲雄訳『申命記史書：旧約聖書の歴史書の成立』日本キリスト教団出版局、2008 年)
- _____. “From Prophets to Scribe: Jeremiah, Huldah and the Invention of the Book.” Pages 86-96 in *Writing the Bible: Scribes, Scribalism and Script*. Edited by P. R. Davies, and T. Römer. Durham: Acumen, 2013.
- _____. “Yhwh, the Goddess and Evil: Is ‘Monotheism’ an Adequate Concept to Describe the Hebrew Bible’s Discourses about the God of Israel?” *Verbum et Ecclesia* 34. 2 (2013). [Web Only] <https://verbumeteclesia.org.za/index.php/ve/article/view/841>
- _____. “The Current Debate about ‘Israel’s First History’, the so-called Deuteronomistic History.” (2014). (2014 年 5 月 8 日、東京神学大学における公開講義の際使用され、翌日希望者に送信されたパワーポイント資料)
- _____. *The Invention of God*. Translated by Raymond Geuss. Cambridge: Harvard University Press, 2015.

- Römer, Thomas C. and Albert de Pury. "Deuteronomistic Historiography (DH): History of Research and Debated Issues." Pages 24-141 in *Israel Constructs its History: Deuteronomistic Historiography in Recent Research*. Edited by Albert de Pury, Thomas Römer, and J. Macchi. Sheffield: Sheffield Academic Press, 2000.
- Rösel, Hartmut N. *Von Josua bis Jojachin: Untersuchen zu den deuteronomistischen Geschichtsbüchern des Alten Testaments*. VT Sup. 75. Leiden: Brill, 1999.
- Rofé, Alexander. "The Strata of the Law about Centralisation of Worship in Deuteronomy and the History of the Deuteronomic Movement." VT 22 (1972): 221-26.
- _____. "The Text Criticism of Psalm 80 – Revisited." VT 61 (2011): 298-309.
- Rogerson, J. W. "The Use of Sociology in Old Testament." Pages 245-56 in *Congress Volume: Salamanca, 1983*. Edited by J. A. Emerton. Leiden: Brill, 1985.
- Rose, Martin. *Der Ausschließlichkeitsanspruch Jahwes: deuteronomische Schultheologie und die Volksfrömmigkeit in der späten Königszeit*. Stuttgart: Kohlhammar, 1975.
- _____. "Bemerkungen zum historischen Fundament des Josia-Bildes in II Reg 22f." ZAW 89 (1977): 50-63.
- Rost, Leonhard. "Das kleine geschichtliche Credo." Pages 11-25 in *Das kleine Credo und andere Studien zum Alten Testament*. Edited by Leonhard Rost. Heidelberg: Quelle & Meyer 1965.
- _____. "Zur Vorgeschichte der Kultusreform des Josia." VT 19 (1969): 113-20.
- _____. "Josias Passa." Pages 87-93 in *Studien zum Alten Testament*. Edited by Leonhard Rost. Stuttgart, 1974.
- Rowton, Michael B. "Jeremiah and the Death of Josiah." JNES 10 (1951): 128-30.
- Russel, Stephan C. *The King and the Land: A Geography of Royal Power in the Biblical World*. New York: Oxford Press, 2017.
- Rüterswörden, Udo. *Die Beamten der israelitischen Königszeit: Eine Studie zu 'sr und vergleichbaren Begriffen*. BZAW 117. Stuttgart: Kohlhammer, 1985.
- _____. *Von der politischen Gemeinschaft zur Gemeinde: Studien zu Dt. 16,18-18,22*. Bonner biblische Beiträge 65. Frankfurt am Main: Beltz Athenäum, 1987.
- _____. *Dominium terrae: Studien zur Genese einer alttestamentlichen Vorstellung*. BZAW 215. Berlin: de Gruyter, 1993.

- _____. "Das Deuteronomium im Lichte epigraphischer Zeugnisse." Pages 241-56 in *Sprechen-Bilder-Klänge: Dimensionen der Theologie um Alten Testament und in seinem Umfeld. Festschrift für Rüdiger Bartelmus zu seinem 65. Geburtstag*. Edited by C. Karrer-Grube et al. Münster: Ugarit-Verlag, 2009.
- Sawyer, John F. "Biblical Alternatives to Monotheism." *Theology* 87 (1984): 172-80.
- Schäfer-Lichtenberger, Christa. "Zur Funktion der Soziologie im Studien des Alten Testaments." Pages 179-202 in *Congress Volume: Oslo 1998*. Edited by A. Lemaire, and M. Saebo. Leiden: Brill, 2000.
- Schaper, Joachim. "Auf der Suche nach dem alten Israel? Text, Artefakt und 'Geschichte Israels' in der alttestamentlichen Wissenschaft vor dem Hintergrund der Methodendiskussion in den Historischen Kulturwissenschaften Teil I," *ZAW* 118 (2006): 1-21.
- _____. "Auf der Suche nach dem alten Israel? Text, Artefakt und 'Geschichte Israels' in der alttestamentlichen Wissenschaft vor dem Hintergrund der Methodendiskussion in den Historischen Kulturwissenschaften Teil II," *ZAW* 118 (2006): 181-96.
- Scharbert, Joseph. "Jeremia und die Reform des Joschija." Pages 40-57 in *Le Livre de Jérémie: le Prophète et son milieu oracles et leur transmission, Nouvelle édition mise à jour*. Edited by P. M. Bogaert. Leuven: Leuven University Press, 1997.
- Schaudig, Hanspeter. "Cult Centralization in the Ancient Near East?: Conceptions of the Ideal Capital in the Ancient Near East." Pages 145-68 in *One God – One Cult – One Nation: Archaeology and Biblical Perspectives*. Edited by R. G. Kratz, and H. Spieckermann. Berlin: de Gruyter, 2010.
- Schipper, Bernd U. "Egypt and the Kingdom of Judah under Josiah and Jehoiakim." *TA* 37 (2010): 200-26.
- Schmid, Konrad. "The Canon and the Cult: The Emergence of Book Religion in Ancient Israel and the Gradual Sublimation of the Temple Cult." *JBL* 131 (2012): 289-305.
- Schmidt, W. H. *Einführung in das Alte Testament*. 5th ed. Berlin: de Gruyter, 1995.
- _____. *Old Testament Introduction*. 2nd ed. Edited by M. J. O'Connell, and D. J. Reimer. New York: de Gruyter; Louisville: Westminster John Knox Press, 1995.
- Schmitt, R. *Exodus und Passah, ihr Zusammenhang im Alten Testament*. Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1975.

- Schniedewind, William. "The Problem with Kings: Recent Study of the Deuteronomistic History." *RelSRev* 22 (1995): 22-27.
- _____. "Sociolinguistic Reflections on the Letter of a 'Literate Soldier' (Lachish 3)." *ZAH* 13 (2000): 157-67.
- Schorch, Stephan. "'A Young Goat in Its Mother's Milk?': Understanding an Ancient Prohibition." *VT* 60 (2010): 116-30.
- Schoors, Antoon. *Die Königreiche Israel und Juda im 8. und 7. Jahrhundert v. Chr.: Die assyrische Krise*. Stuttgart: Kohlhammer, 1998.
- Schottroff, W. "Soziologie und Altes Testament." *VF* 19/2 (1974): 46-66.
- Schreiner, Joseph. "Jeremia und die Joschijanische Reform: Probleme-Fragen-Antworten." Pages 11-31 in *Jeremia und die 'deuteronomistische Bewegung'*. Edited by W. Groß. Weinheim : Beltz Athenäum, 1995.
- Schröter, Ulrich. "Jeremias Botschaft für das Nordreich, zu N. Lohfinks Überlegungen zum Grundbestand von Jeremia XXX-XXXI." *VT* 35 (1985): 312-29.
- Schröter, Ulrich et al. eds, *Qumran Cave 4: Deuteronomy, Joshua, Kings: Discoveries in the Judean Desert 14*. Oxford: Clarendon Press, 1995.
- Schunk, K. D. "Zentralheiligtum, Grenze Heiligtum und 'Höhenheiligtum' in Israel." *Num.* 18 (1971): 132-40.
- Segal, Michael. "Monotheism and Angelology in Daniel." Pages 405-420 in *One God – One Cult – One Nation: Archaeology and Biblical Perspectives*. Edited by R. G. Kratz, and H. Spieckermann. Berlin: de Gruyter, 2010.
- Seidel, Moshe. "Parallels between Isaiah and Psalms." *Sinai* 38 (1955-1956): 149-72, 229-40, 272-80, 335-55 (Hebrew).
- Seidl, Th. "Die Wortereignisformel in Jeremia." *BZ* 23 (1979): 20-47.
- _____. "Jeremias Tempelrede: Polemik gegen die joschijanische Reform? Die Paralleltraditionen Jer 7 und 26 auf ihre Effizienz für das Deuteronomismusproblem in Jeremia befragt." Pages 141-79 in *Jeremia und die 'deuteronomistische Bewegung'*. Edited by W. Groß. Weinheim : Beltz Athenäum, 1995.
- Seitz, Christopher R. *Theology in Conflict: Reactions to the Exile in the Book of Jeremiah*. BZAW 176. Berlin: de Gruyter, 1989.

- _____. “The Prophet Moses and the Canonical Shape of Jeremiah.” *ZAW* 101 (1989): 3-27.
- Seiz, Gottfried. *Redaktionsgeschichtliche Studien zum Deuteronomium*. Stuttgart: Kohlhammer, 1971.
- Sekine, Masao. “Beobachtung zu der josianischen Reform.” *VT* 22 (1972): 361-68 (Short Note).
 (関根正雄著 関根清三訳「ヨシヤ改革に関する諸考察」関根正雄著『旧約聖書学と共に』
 上巻、山本書店、1977 年、202-13 頁)
- 関根清三訳『エレミヤ書』岩波書店、2002 年。
- 同 「旧約一神教の再構築—旧約学・哲学との対話から」『日本の神学』第 44 号、2005
 年、11-40 頁。
- Seybold, Klaus. *Der Prophet Jeremia: Leben und Werk*. Stuttgart: Kohlhammer, 1993.
- Shanks, H. “Who-or What- Was Molech?” *B AR* 22, 4 (1996): 13.
- Shaw, Ian. “Fortress and Frontiers.” Pages 15-24 in *Egyptian Warfare and Weapons*. Edited by Ian Shaw. Princes Rigborough, Buckinghamshire: Shire, 1991.
- Shiloh, Yigal. “Judah and Jerusalem in the Eighth-Sixth Centuries BCE.” Pages 97-105 in *Recent Excavations in Israel: Studies in Iron Age Archaeology*. Edited by S. Gitin, and W. G. Dever. Winona Lake: Eisenbrauns, 1989.
- Shveka, Avi. “Arad Ostrakon No. 7: In Search of the True Solution to the Riddle.” *Hebrew Studies* 46 (2005): 49-70.
- Simkins, Ronald A. “Patronage and the Political Economy of Monarchic Israel.” *Semeia* 87 (1999): 123-44.
- Simon, Uriel. “1Kings 13: A Prophetic Sign – Denial and Persistence.” *HUCA* 47 (1976): 81-117.
- Smelik, K. A. D. “The Riddle of Tobiah’s Document: Difficulties in the Interpretation of Lachish III, 19-21.” *PEQ* 122 (1990): 133-38.
- _____. “Who Is your Servant Dog? Ostraca from Lachish.” Pages 116-31 in *Writing from Ancient Israel: A Handbook of Historical and Religious Documents*. Edited by K. A. D. Smelik. Translated by G. I. Davies. Westminster: John Knox Press, 1991.
- _____. “Moloch, Molekh or Molk-Sacrifice? A Reassessment of Evidence Concerning the Hebrew Term Molekh.” *SJOT* 9/1 (1995): 133-42.

- Smend, R. "Das Gesetz und die Völker." Pages 494-509 in *Probleme biblischer Theologie: Festschrift für G. von Rad zum 70. Geburtstag*. Edited by H. W. Wolff. München: Chr. Kaiser, 1971.
- _____. "Essen und Trinken – ein Stück Weltlichkeit des Alten Testaments." Pages 446-59 in *Beiträge zur Alttestamentlichen Theologie: Festschrift für W. Zimmerli zum 70. Geburtstag*. Edited by H. Donner, R. Hahnhart, and R. Smend. Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1977.
- _____. "The Law and the Nations: A Contribution to Deuteronomistic Traditional History." Pages 95-110 in *Reconsidering Israel and Judah: Recent Studies on the Deuteronomistic History*. Translated by P. T. Daniels. Edited by G. N. Knoppers, and J. G. McConville. Winona Lake: Eisenbrauns, 2000.
- Smith, Morton. "A Not on Burning Babies." *JAOS* 95 (1975): 477-79.
- _____. "Religiöse Parteien bei den Israeliten vor 587." Pages 9-46 in *Der Einzige Gott: Die Geburt des biblischen Monotheismus*. Edited by B. Lang. München: Kösel, 1981.
- Snaith, Norman H. "The Cult of Molech." *VT* 16 (1966): 123-24.
- Soggin, J. Alberto. "Der jüdische 'am-ha'ares und das Königtum in Juda: Ein Beitrag zum Studium der deuteronomistischen Geschichtsschreibung." *VT* 13 (1963): 187-95.
- _____. "Ancient Israel: An Attempt at a Social Economic Analysis of the Available Data." Pages 201-08 in *Text and Context: Old Testament and Semitic Studies for F. C. Fensham*. Edited by W. Classen. Sheffield: JSOT Press, 1988.
- Spieckermann, Hermann. *Juda unter Assur in der Sargonidenzeit*. Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1982.
- _____. "God and His People: The Concept of Kingship and Cult in the Ancient Near East." Pages 341-56 in *One God – One Cult – One Nation: Archaeology and Biblical Perspectives*, Edited by R. G. Kratz, and Hermann Spieckermann. Berlin: de Gruyter, 2010.
- Stackert, Jeffrey. *A Prophet like Moses: Prophecy, Law, and Israelite Religion*. Oxford: Oxford University Press, 2014.
- Stamm, Johann Jacob. *Der Dekalog im Lichte der neueren Forschung*. 2nd ed. Stuttgart: Paul Haupt Bern, 1962.

- (シュタム / アンドリユウ著 左近淑・大野恵正訳『十戒』新教出版、1970、1997 年)
 _____. *The Ten Commandments in Recent Research*. Stamm, J. J. and Maurice Edward Andrew.
 London: SCM Press, 1967.
- Stavrakopoulou, Francesca. “ ‘Popular’ Religion and ‘Official’ Religion: Practice, Perception, Portrayal” Pages 37-58 in *Religious Diversity in Ancient Israel and Judah*. Edited by Francesca Stavrakopoulou, and John Barton. London: T & T Clark, 2010.
- Stavrakopoulou, Francesca, and J. Barton, eds., *Religious Diversity in Ancient Israel and Judah*, London: T & T Clark, 2010.
- _____. “Introduction: Religious Diversity in Ancient Israel and Judah.” Pages 1-8 in *Religious Diversity in Ancient Israel and Judah*. Edited by Francesca Stavrakopoulou, and John Barton. London: T & T Clark, 2010.
- Steck, Odil Hannes and Barth, H. *Exegese des Alten Testaments: Leitfaden der Methodik*. 6th ed. Neukirchen-Vluyn: Neukirchener Verlag, 1976.
- (H・バルト / O・H・シュテック著 山我哲雄訳『旧約聖書釈義入門：その方法と実際』日本基督教団出版局、1984 年)
- Steck, Odil Hnnes. *Old Testament Exegesis: A Guide to the Methodology*. 2nd ed. Translated by J. D. Nogalski. Atlanta: Scholars Press, 1998.
- Steil, Armin. *Krisen-Semantik: Wissenssoziologische Untersuchungen*. Opladen: Leske + Budrich, 1993.
- Steinberg, Naomi. “The Deuteronomic Law Code and the Politics of State Centralization.” Pages 161-70 in *The Bible and the Politics of Exegesis: Essays in Honor of N. K. Gottwald on his Sixty-Fifth Birthday*. Edited by D. Jobling, P. L. Day, and G. T. Sheppard. Cleveland: Pilgrim Press, 1991.
- Stern, Ephraim et al. eds., *The New Encyclopedia of Archaeological Excavations in the Holy Land*. 4 vols. Jerusalem: Israel Exploration Society & Carta, 1993.
- Stern, Ephraim. “The Eastern Border of the Kingdom of Judah in its Last Days.” Pages 399-409 in *Scripture and Other Artifacts: Essays on the Bible and Archaeology in Honor of P. J. King*. Edited by M. D. Coogan, J. C. Exum, and L. E. Stager. Louisville: Westminster John Knox Press, 1994.
- _____. “The Babylonian Gap: The Archaeological Reality.” *JSOT* 28.3 (2004): 273-77.

- _____, ed. *The New Encyclopedia of Archaeological Excavations in the Holy Land* 5. Supplement Volume. Edit Jerusalem: Israel Exploration Society; Washington, D. C.: Biblical Archaeology Society, 2008.
- _____. “From Many Gods to the One God: The Archaeological Evidence.” Pages 395-403 in *One God – One Cult – One Nation: Archaeology and Biblical Perspectives*. Edited by R. G. Kratz, and Hermann Spieckermann. Berlin: de Gruyter, 2010.
- Steymans, Hans Ulrich. *Deuteronomium 28 und die ade zur Thronfolgeregelung Asarhaddons: Segen und Fluch im Alten Orient und in Israel*. Freiburg: Schweiz: Univ.-Verl.; Göttingen: Vandenhoeck und Ruprecht, 1995.
- _____. “Die neueassyrische Vertragsrhetorik der ‘Vassal Treaties of Esarhaddon’ und das Deuteronomium.” Pages 89-152 in *Das Deuteronomium*. Edited by G. Braulik. Frankfurt: Peter Lang, 2003.
- _____. “Deuteronomy 28 and Tell Tayinat.” *Verbum et Ecclesia* 34. 2 (2013). [Web Only] <https://verbumeteccllesia.za/index.php/ve/article/view/870>
- Stott, Katherine. “Finding the Lost Book of the Law: Re-reading the Story of ‘The Book of Law’ (Deuteronomy-2 Kings).” *JSOT* 30.2 (2005): 153-69.
- 杉本智俊「古代イスラエルの宗教関連考古資料と一神教の成立過程」市川裕・松村一男・渡辺和子編『宗教史とは何か』上巻、リトン、2008年、229-66頁。
- Suzuki, Yoshihide. “A Hebrew Ostrakon from Masad Hashavyahu: A Form-critical Reinvestigation.” *AJBI* 8 (1982): 3-49.
- _____. “Deut. 6:4-5: Perspectives as a Statement of Nationalism and of Identity of Confession.” *AJBI* 9 (1983): 65-87.
- 鈴木佳秀「申命記改革における王国の司法行政」『聖書学論集』第20号、1985年、50-94頁。
- 同『申命記の文献学的研究』日本基督教団出版局、1987年。
- Suzuki, Yoshihide. “Deuteronomic Reformation in View of the Centralization of the Administration of Justice.” *AJBI* 13 (1987): 22-58.
- 鈴木佳秀「ヨシヤ王による占領政策—同化政策にみられる新しいイスラエル像の構築—」『聖書学論集』第25号、1991年、29-70頁。

- Suzuki, Yoshihide. "A New Aspect on Occupation Policy by King Josiah: Assimilation and Codification in View of Yahwism." *AJBI* 18 (1992): 31-61.
- _____. "A New Aspect of דברים Deuteronomy in View of an Assimilation Policy of King Josiah." *AJBI* 21 (1995): 3-27.
- 鈴木佳秀訳『十二小預言書』岩波書店、1999年。
- 同 「申命記史家による歴史書編纂」『言語』2003年12月号、42-49頁。
- 同 『ヘブライズム法思想の源流』創文社、2005年。
- 同 「神義論の書としてみた旧約聖書」『創文』483号、2006年、45-48頁。
- Swanson, Kristen A. "A Reassessment of Hezekiah's Reform in Light of Jar Handles and Iconographic Evidence." *CBQ* 64 (2002): 460-69.
- Sweeney, Marvin A. "The Critique of Solomon in the Josianic Edition of the Deuteronomistic History." *JBL* 114 (1995): 607-22.
- _____. "Jeremiah 30-31 and King Josiah's Program of National Restoration and Religious Reform." *ZAW* 108 (1996): 569-83.
- _____. *King Josiah of Judah: The Lost Messiah of Israel*. Oxford: Oxford University Press, 2001.
- _____. *Zephaniah: Hermeneia*. Minneapolis: Augsburg Fortress, 2003.
- _____. "Josiah." *Dictionary of the Old Testament: Historical Books*. Downers Grove: InterVarsity Press. 2005, 575-79.
- _____. *I & II Kings*. Louisville: Westminster John Knox Press, 2007.
- Taggar-Cohen, Ada. "Biblical covenant and Hittite *išhiul* Reexamined." *VT* 61 (2011): 461-488.
- 高橋虔・B・シュナイダー監修『新共同訳旧約聖書注解Ⅲ（ダニエル書—マラキ書）続編 注解（トビト記—マナセの祈り）』日本基督教団出版局、1993年。
- 同 『新共同訳旧約聖書注解Ⅱ（ヨブ記—エゼキエル記）』日本基督教団出版局、1994年。
- 同 『新共同訳旧約聖書注解Ⅰ（創世記—エステル記）』日本基督教団出版局、1996年。
- 高橋優子「G. フォン・ラート著 山吉智久訳『古代イスラエルにおける聖戦』『キリスト教学』48号、2006年、151-54頁。

高橋優子「マックス・ウェーバー『古代ユダヤ教』—理論枠組についての一考察」『聖書学論集』第 39 号、2007 年、25-43 頁。

同 「マックス・ウェーバー『古代ユダヤ教』—パーリア概念と諸問題—」『宗教研究』第 355 号、2008 年、170-71 頁。

Takahashi, Yuko. “A Study on Max Weber’s *Ancient Judaism*: Theoretical Framework and Methodology.” *MWS* 7.2 (2008): 213-29.

高橋優子「マックス・ウェーバーと宗教史」市川裕・松村一男・渡辺和子編『宗教史とは何か』上巻、リトン、2008 年、101-24 頁。

同 「マックス・ウェーバーと現代ヘブライ語聖書研究—英語圏における一動向」佐藤研・月本昭男編『経験としての聖書』（『聖書学論集』第 41 号・大貫隆教授献呈論文集）、リトン、2009 年、157-70 頁。

同 「マックス・ウェーバーと現代ヘブライ語聖書研究」『宗教研究』第 359 号、2009 年、256-57 頁。

同 「ヘブライ語聖書研究—社会科学批評によるアプローチ—」『宗教研究』第 363 号、2010 年、296-97 頁。

同 「解説」R・アルベルツ著 高橋優子訳『ヨシヤの改革』教文館、2010 年、147-71 頁。

同 「紀元前七世紀後半の古代イスラエルにおける社会諸集団の分析」『宗教研究』第 367 号、2011 年、234-35 頁。

Takahashi, Yuko. “Applying Social Identity Theory ‘to Ancient Israelite Society’.” *IAHR 2010 Congress Proceedings*, (2011): 409.

<http://individual.utoronto.ca/yeungsydney/IAHR-2010-Congress-Proceedings-WEB.pdf>
[D](#)

高橋優子「解説」ムリー・J・コーン著 高橋優子訳「イサクのトラウマ」関根清三編著『アブラハムのイサク 献供物語：アケダー・アンソロジー』日本キリスト教団出版局、2012 年、134 頁。

同 「申命記における祭司と王—社会的アイデンティティ理論の適用—」『宗教研究』第 371 号、2012 年、311-12 頁。

同 「ヨシヤの改革と詩篇 72・80 篇」『旧約学研究』第 9 号、2012 年、1-14 頁。

同 「『ヨシヤの改革』と聖書外資料」『宗教研究』第 375 号、2013 年、189-90 頁。

- 同 『『ヨシヤの改革』とアラド遺跡』『宗教研究』第 379 号、2014 年、213-14 頁。
- Takahashi, Yuko. “Reconsidering Meʿad Ḥashavyahu.” *AJBI* 39 (2014): 5-19.
- 高橋優子「メツアド・ハシャブヤフ再考」市川裕・朴憲郁・廣石望・山我哲雄編『聖書的宗教とその周辺』リトン、2014 年、99-114 頁。
- 同 「ラキシユ再検討ー『ヨシヤの改革』理解に向けてー」『宗教研究』第 88 巻別冊、2015 年、262-63 頁。
- 同 「古代イスラエルにおける王権観の変遷：申命記と申命記史家を中心として」『旧約学研究』第 12 号、2016 年、43-57 頁。
- 同 「『ヨシヤの改革』研究史ータイナト版『エサルハドン王位継承誓約文書』発見を受けてー」『宗教研究』第 91 巻 1 号、2017 年、1-23 頁。
- 同 「タイナト後の『ヨシヤの改革』研究史」『宗教研究』第 91 巻別冊、2018 年、258-259 頁。
- 同 「『エサルハドン王位継承誓約文書 (ESOD) と『申命記 (Dt.)』の比較」『基督教學』第 53 号、2018 年、25-29 頁。
- 同 「『エサルハドン王位継承誓約文書 (ESOD) の『申命記 (Dt.)』への影響ー直接的文学的引用関係を探るー」『日本オリエント学会第 60 回大会研究発表要旨集』2018 年。(www.j-orient.com/wp/wp-content/uploads/2018/09/60-abstract.pdf)
- 同 「申命記 6 章 4-5 節の解釈と年代」『宗教研究』第 92 巻別冊、2019 年、274-275 頁。
- 同 「タイナト版エサルハドン王位継承誓約文書公刊後における『ヨシヤ改革』についての研究ー『エサルハドン王位継承誓約文書』の『申命記』への直接的影響関係再考ー」『基督教學』第 54 号、2019 年、1-24 頁。
- Talmon, Shemaryahu. “The New Hebrew Letter from the Seventh Century B.C. in Historical Perspective.” *BASOR* 176 (1964): 29-38.
- _____. “The New Hebrew Letter from the Seventh Century B. C. E.” Pages 79-88 in *King, Cult and Calendar in Ancient Israel*. Edited by Shemaryahu Talmon. Leiden: Brill, 1986.
- Talshir, Zipora. “The Three Deaths of Josiah and the Strata of Biblical Historiography (2Kings XXIII 29-30, 2 Chronicles XXXV 20-25, 1 Esdras I 23-31).” *VT* 46 (1996): 213-36.
- Tate, Marvin E. *Psalms 51-100*. Dallas: Word Books, 1990.

- Taylor, J. Glen. *Yahweh and the Sun: Biblical and Archaeological Evidence for Sun Worship in Ancient Israel*. JSOT Sup. 111. Sheffield: JSOT Press, 1993.
- _____. “Was Yahweh Worshipped as the Sun?” *BAR* 20/3 (1994): 52-61.
- _____. “A Response to Steve A. Wiggins, ‘Yahweh: The God of the Sun?’” *JSOT* 71 (1996): 107-19.
- Thareani-Sussely, Yifat. “The ‘Archaeology of the Days of Manasseh’ Reconsidered in the Light of Evidence from the Beersheba Valley.” *PEQ* 139 (2007): 69-77.
- Theißen, G. *Studien zur Soziologie des Urchristentums*. Tübingen: J. C. B. Mohr (Paul Siebeck), 1979.
- _____. *Erleben und Verhalten der ersten Christen: Eine Psychologie des Urchristentums*, Gütersloh: Gütersloher Verlaghaus, 2007.
- Thiel, Winfried. *Die deuteronomistische Redaktion von Jeremia 1-25*. Düsseldorf: Neukirchener Verlag, 1973.
- _____. *Die deuteronomistische Redaktion von Jeremia 26-45*. Düsseldorf: Neukirchener Verlag, 1981.
- Thomas, D. W. “Jerusalem in the Lachish Ostraca.” *PEQ* 78 (1946): 86-91.
- _____. “KELEBH ‘Dog’: Its Origin and Some Usages of it in the Old Testament.” *VT* 10 (1960): 410-27.
- Tigay, Jeffrey H. *The JPS Torah Commentary Deuteronomy*. Philadelphia: The Jewish Publication Society, 1996.
- Todd, E. W. “The Reforms of Hezekiah and Josiah.” *SJTh* 9 (1965): 288-93.
- 時田光彦「王権への規制：申命記 17:14-20」『西南女子短期大学研究紀要』第 24 号、1977 年、1-5 頁。
- Torcyner, N. Harry. *Lachish I (Tell Ed Duweir): The Lachish Letters*. Oxford: Oxford Press, 1938.
- Trevaskis, Leigh M. “The Purpose of Leviticus 24 within its Literary Context.” *VT* 59 (2009): 295-312.
- Trible, Phillis. “Exegesis for Storytellers and Other Strangers.” *JBL* (1995): 3-19.
- Tsevat, Matitahu. “The Hebrew Slave According to Deuteronomy 15:12-18: His Lot and the Value of his Work, with Special Attention to the Meaning of *msnh*.” *JBL* 113 (1994): 587-95.

月本昭男「古代イスラエル唯一神教の成立とその特質」竹内整一・月本昭男編『宗教と寛容—異宗教・異文化間の対話に向けて—』大明堂、1993年、147-71頁。

同 『詩篇の思想と信仰Ⅰ：第1篇から第25篇まで』新教出版、2003年。

同 『詩篇の思想と信仰Ⅱ：第26篇から第50篇まで』新教出版、2006年。

同 「古代イスラエル—神教をめぐって」『旧約学研究』第3号、2006年、58-79頁。

同 「詩篇の思想と信仰72（詩篇72篇）」『福音と世界』2009年2月号、62-67頁。

同 『古代メソポタミアの神話と儀礼』岩波書店、2010年。

同 「詩篇の思想と信仰80（詩篇79篇）」『福音と世界』2010年6月号、68-73頁。

同 「詩篇の思想と信仰81（詩篇80篇）」『福音と世界』2010年7月号、68-73頁。

同 「詩篇の思想と信仰82（詩篇81篇）」『福音と世界』2010年8月号、68-73頁。

同 『詩篇の思想と信仰Ⅲ：第51篇から第75篇まで』新教出版、2011年。

同 『詩篇の思想と信仰Ⅳ：第76篇から第100篇まで』新教出版、2013年。

同 『詩篇の思想と信仰Ⅵ：第126篇から第150篇まで』新教出版、2018年。」

Turner, John. C. *Rediscovering the Social Group: Self-Categorization Theory*. Oxford: Blackwell, 1987.

Ueling, Chr. “Gab es eine joshijianische Kultreform? Plädoyer für ein begründetes Minimum.”

Pages 57-89 in *Jeremia und die “deuteronomistische Bewegung.”* Edited by W. Gross.

Weinheim: Beltz Athenäum, 1995.

_____. “Anthropomorphic Cult Statuary in Iron Age Palestine and the Search of Yahweh’s Cult Images.” Pages 97-155 in *The Image and the Book*. Edited by K. Van der Toorn. Louvain: Peeters, 1997.

_____. “Was There a Cult Reform under King Josiah? The Case for a Well-Founded Minimum.”

Pages 279-316 in *Good Kings and Bad Kings*. Edited by Lester L. Grabbe. London: T &

T Clark, 2005.

Ussishkin, David. “The Necropolis from the Time of the Kingdom of Judah at Silwan, Jerusalem.”

BA 33 (1970): 34-46.

_____. “The Destruction of Lachish by Sennacherib and the Dating of the Royal Judean Storage Jars.” *TA* 4 (1977): 28-60.

_____. “Excavations at Tel Lachish – 1973-1977, Preliminary Report.” *TA* 5 (1978): 1-97.

_____. “The Lachish Reliefs and the City of Lachish.” *IEJ* 30 (1980): 174-95.

- _____. *The Conquest of Lachish by Sennacherib*. Tel Aviv: Tel Aviv University; The Institute of Archaeology, 1982.
- _____. "Excavations at Tel Lachish 1978-1983: Second Preliminary Report." *TA* 10 (1983): 97-175.
- _____. "The Date of Judaeen Shrine at Arad." *IEJ* 38 (1988): 142-57.
- _____. "The Assyrian Attack of Lachish: The Evidence from the Southwest Corner of the Site." *TA* 17 (1990): 53-86.
- _____. "Lachish." *The New Encyclopedia of Archaeological Excavations in the Holy Land*. Vol. 3: (1993): 897-911.
- _____. "The Water System of Jerusalem during Hezekiah's Reign." Pages 287-307 in *Meilenstein, Festgabe für Herbert Donner zum 16. Februar 1995*. Edited by M. Weippert, and S. Tim. Wiesbaden: Harassowitz, 1995.
- _____. "Excavations and Restoration Work at Tel Lachish: 1985-1994, Third Preliminary Report." *TA* 23 (1996): 3-60.
- _____. "Symbols of Conquest: Sennacherib's Reliefs of Lachish – Impaled Prisoners and Booty." Pages 207-17 in *Culture through Objects: Ancient Near Eastern Studies in Honor of P. R. S. Moorey*. Edited by T. F. Potts et al. Oxford: Griffith Institute, 2003.
- _____. *The Renewed Archaeological Excavations at Lachish (1973-1994)*. 5 vols. Tel Aviv: Tel Aviv University; Institute of Archaeology, 2004.
- _____. "Sennacherib's Campaign to Philistia and Judah: Ekron, Lachish and Jerusalem." Pages 339-57 in *Essays on Ancient Near Eastern Context: A Tribute to Nadav Na'aman*. Edited by Y. Amit et al. Winona Lake: Eisenbrauns, 2006.
- Van der Toorn, Karel. "The Nature of Biblical Teraphim in the Light of Cuneiform Evidence." *CBQ* 52 (1990): 203-22.
- _____. "Currents in the Study of Israelite Religion." *Currents in Research: Biblical Studies* 6 (1998): 9-30.
- Van der Toorn, Karel, B. Becking, and P. W. Horst van der, eds., *Dictionary of Deities and Demons in the Bible*. 2nd extensively revised. Grand Rapids: Eerdmans, 1999.
- Van Kaulen, P. S. F. "The Meaning of the Phrase *wn'spt 'l-qbrtyk bslwm* in 2 Kings XXII 20." *VT* 46 (1996): 256-60.

- Van Seters, John. *The Life of Moses: The Yahwist as Historian in Exodus-Numbers*. Louisville: Westminster John Knox Press, 1994.
- _____. “Cultic Laws in Covenant Code (Exodus 20, 22-23, 33) and their Relationship to Deuteronomy and the Holiness Code.” Pages 319-45 in *Studies in the Book of Exodus*. Edited by M. Vervenne. Leuven: Peeters, 1996.
- _____. “On Reading the Story of the Man of God from Judah in 1Kings 13.” Pages 225-34 in *The Labour of Reading: Desire, Alienation, and Biblical Interpretation*. Edited by F. C. Black et al. Atlanta: Scholars Press, 1999.
- _____. “The Deuteronomistic History: Can It Avoid Death by Redaction?” Pages 213-22 in *The Future of the “Deuteronomistic History.”* Edited by Thomas Römer. Leuven: Leuven University Press, 2000.
- _____. *A Law Book for the Diaspora: Revision in the Study of the Covenant Code*. New York: Oxford University Press, 2003.
- Van Winkle, D. W. “1 Kings XIII: True and False Prophecy.” VT 39 (1989): 31-43.
- _____. “1 Kings XII25-XIII34: Jeroboam’s Cultic Innovations and the Man of God from Judah.” VT 46 (1996): 101-14.
- Vanderhooft, David Steven. *The Neo-Babylonian Empire and Babylon in the Latter Prophets*. Atlanta: Scholars Press, 1999.
- Vanoni, Gottfried. “Beobachtung zur deuteronomistischen Terminologie in 2 Kön. 23,25-25,30.” Pages 357-62 in *Das Deuteronomium. Entstehung, Gestalt und Botschaft*. Edited by Norbert Lohfink. Leuven : Leuven University Press, 1985.
- Vaux, Roland de. *La période des Juges*. Paris : J. Gabalda, 1971.
- (R. ドウ・ヴォー著 西村俊昭訳『イスラエル古代史』正・続 日本基督教団出版局、1977、1989 年。)
- Veijola, Timo. “Zefanja und Joschija.” Pages 118-28 in *Der Tag wird kommen: Ein interkontextuelles Gespräch über das Buch des Propheten Zephanja*. SBS 170. Edited by W. Deitrich, and M. Schwantes. Stuttgart:Verlag Katholisches Bibelwerk,1996.
- _____. *Das 5. Buch Mose. Deuteronomium Kapitel 1,1-16. 17.* Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 2004.

- Venema, Geert J. *Reading Scripture in the Old Testament: Deuteronomy 9-10; 31 – 2Kings 22-23 – Jeremiah 36 – Nehemiah 8*. Leiden: Brill, 2004.
- Volz, Paul. *Der Prophet Jeremia*. Hildesheim: Georg Olms, 1983.
- Vorländer, Hermann. “Der Monotheismus Israels als Antwort auf die Krise des Exils.” Pages 84-113 in *Der Einzige Gott: Die Geburt des biblischen Monotheismus*. Edited by B. Lang. München: Kösel, 1981.
- Wallace, Howard N. “The Oracle against the Israelite Dynasties in 1 and 2Kings.” *Bib.* 67 (1986):
- Walsh, Jerome T. “The Contexts of 1 Kings XIII.” *VT* 39 (1989): 355-70.
- _____. *1Kings*. Collegeville: The Liturgical Press, 1996.
- Warburton, D. A. “The Importance of the Archaeology of the Seventh Century.” Pages 317-35 in *Good Kings and Bad Kings*. Edited by Lester L. Grabbe. London: T & T Clark, 2005.
- Washburn, David L. “Perspective and Purpose: Understanding the Josiah Story.” *TJ* 12 (1991): 59-78.
- Watanabe, Kazuko. “Die literarische Überlieferung eines babylonisch-assyrischen Fluchthemas mit Anrufung des Mondgottes Sin.” *ASJ* 6 (1984): 99-119.
- _____. “Die Siegelung der ,‘Vassallenverträge Asarhaddons’ durch den Gott Aššur.” *BaM* 16 (1985): 377-392.
- 渡辺和子 『『エサルハドン宗主権条約』における神アッシュルの三つの印』宗教史研究所編 『聖書とオリエント世界』 山本書店、1985 年、253-75 頁。
- 同 『『エサルハドン宗主権条約』 再考』『宗教研究』 273、1987 年、113-33 頁。
- Watanabe, Kazuko. *Die adê-Vereidigung anlässlich der Thronfolgeregelung Asarhaddons*. Berlin: Gebrüder Mann, 1987.
- _____. “Die Anordnung der Kolumnen der VTE-Tafeln.” *ASJ* 10 (1988): 265-66.
- _____. “Mit Gottessiegeln versehene hethitische ‘Staatsverträge.’” *ASJ* 11 (1989): 261-76.
- 渡辺和子 「古代メソポタミアにおける誓いの表現」『宗教研究』 291、1991 年、114-16 頁。
- 同 「古代オリエントの誓約と神の印章」脇本平也・柳川啓一編『現代宗教学 4 権威の構築と破壊』東京大学出版会、1992 年、85-114 頁。
- 同 「8 アッシリアとフリ人の勢力—前二千年紀前半の北メソポタミア」
- 「9 国際関係の時代—前二千年紀後半のオリエント世界」
- 「10 大帝国の興亡—前二千年紀前半のアッシリアと周辺世界」

- 大貫良夫・前川和也・渡辺和子・屋形禎亮『世界の歴史 1 人類の起源と古代オリエント』中央公論社、1998 年、254-370 頁。
- 同 「アッシリアの自己同一性と異文化理解」『岩波講座 世界歴史 2 オリエント世界』岩波書店、1998 年、271-300 頁。
- 同 「『ヨブ記』—永遠の問いと答え—」太田良子・原島正編『私が出会った一冊の本』新曜社、2008 年、73-87 頁。
- 同 「『メソポタミア宗教史』への展望」市川裕・松村一男・渡辺和子編『宗教史とは何か 下巻』、リトン、2009 年、83-122 頁。
- 同 「『エサルハドン誓約文書』にみる法的・宗教的・政治的な意味合い」*The Journal for the Study of Humans and Culture* 17 (Institute for Humanities and Social Science, Dong-eui University, Pusan, Korea). 2010, 167-99. (論文：日本語・雑誌名：ハングル)
- 同 「アッシリア王センナケリブの宗教改革（前八世紀末—前七世紀初期）」歴史学研究会編『古代のオリエントと地中海世界』（世界史史料 1）岩波書店、2012 年、51-52 頁。
- 同 「『エサルハドン王位継承誓約文書』のタイナト版による新知見と再検討—条件節における接続法の用法を中心に—」『オリエント』第 56 号、2013 年、55-70 頁。
- Watanabe, Kazuko. “Esarhaddon’s Succession Oath Documents Reconsidered in Light of the Tayinat Version.” *Orient* 49 (2014): 145-70.
- 渡辺和子「『エサルハドン王位継承誓約文書』にみる生と死」東洋英和女学院大学死生学研究所編『死生学年報 2015 死後世界と死生観』リトン、2015 年、105-44 頁。
- Watanabe, Kazuko. “Innovations in Esarhaddon’s Succession Oath Documents Considered from the Viewpoint of the Documents’ Structure.” *SAAB* 21 (2016): 173-215.
- 渡辺和子『エサルハドン王位継承誓約文書の研究』リトン、2016 年。
- 同 「メソポタミアにおける『祈祷呪術』と誓約—『エサルハドン王位継承誓約文書』を手がかりに—」江川純一・久保田浩編『「呪術」の呪縛』下巻、リトン、2016 年。
- 同 『エサルハドン王位継承誓約文書』リトン、2017 年。
- Watanabe, Kazuko. “Aššurbanipal and His Brothers: Considered from the References in Esarhaddon’s Succession Oath Documents.” *Orient, Supplement I* (2019): 237-257.
- Watts, J. W. “Public Reading and Pentateuchal Law.” *VT* 45 (1995): 540-57.

Way, Kenneth C. "Animals in the Prophetic World: Literary Reflections on Numbers 22 and 1 Kings 13." *JSOT* 34.1 (2009): 47-62.

Wayatt, Nicolas. "Royal Religion in Ancient Judah." Pages 61-81 in *Religious Diversity in Ancient Israel and Judah*. Edited by Francesca Stavrakopoulou, and John Barton. London: T & T Clark, 2010.

Weber, Marianne. *Max Weber: Ein Lebensbild*. Heidelberg: Schneider, 1950.

Weber, Max. *Max Weber Gesamtausgabe Abteilung I: Schriften und Reden.*, vol. 18. *Die protestantische Ethik und der Geist des Kapitalismus / Die protestantischen Sekten und der Geist des Kapitalismus, Schriften 1904-1920*. Edited by Wolfgang Schluchter. Tübingen: J. C. B. Mohr (Paul Siebeck), 2016.

(マックス・ヴェーバー著 大塚久雄訳『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』岩波文庫、1989年；マックス・ウェーバー著 梶山力・安藤英治編『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の《精神》』未来社、1994年；マックス・ヴェーバー著 大塚久雄・生松敬三訳『宗教社会学論選』みすず書房、1972年)

_____. *Ancient Judaism*. Translated by H. H. Gerth and D. Martindale. New York: The Free Press; London: Collier Macmillan Publishers, 1952.

_____. *The Protestant Ethic and the Spirit of Capitalism*. Translated by T. Parsons. New York: Scribner's Sons, 1976.

_____. *The Agrarian Sociology of Ancient Civilizations*. Translated by R. I. Frank. London: NLB, 1976.

_____. *Max Weber Gesamtausgabe Abteilung I: Schriften und Reden*, vol. 22-1, *Wirtschaft und Gesellschaft: die gesellschaftlichen Ordnungen und Mächte. Nachlaß. Gemeinschaften*. Edited by W. J. Mommsen, and M. Meyer. Tübingen: J. C. B. Mohr, 2001.

(マックス・ウェーバー著 世良晃志郎訳『支配の諸類型』創文社、1970年)

_____. *Max Weber Gesamtausgabe Abteilung I: Schriften und Reden*, vol. 22-4, *Wirtschaft und Gesellschaft: die gesellschaftlichen Ordnungen und Mächte. Nachlaß. Herrschaft*. Edited by E. Hanke. Tübingen: J. C. B. Mohr, 2005.

(マックス・ウェーバー著 世良晃志郎訳『支配の社会学1』創文社、1960年)

(マックス・ウェーバー著 世良晃志郎訳『支配の社会学2』創文社、1962年)

- _____. *Max Weber Gesamtausgabe Abteilung I: Schriften und Reden., vol. 21. Die Wirtschaftsethik der Weltreligionen. Das antike Judentum, Schriften und Reden 1911-1920.* Edited by Eckart Otto. Tübingen: J. C. B. Mohr (Paul Siebeck), 2005.
(マックス・ヴェーバー著 内田芳明訳『古代ユダヤ教』上・中・下巻、岩波文庫、1996年)
- _____. *Max Weber Gesamtausgabe Abteilung I: Schriften und Reden, vol. 6, Zur Sozial- und Wirtschaftsgeschichte des Altertums: Schriften und Reden 1893-1908.* Edited by J. Deininger. Tübingen: J. C. B. Mohr [Paul Siebeck], 2006.
(マックス・ウェーバー著 渡辺金一・弓削達訳『古代社会経済史：古代農業事情』東洋経済新報社、1984年)
- Weidner, Ernst F. “Assurbânîpal in Assur.” *Archiv für Orientforschung* 13 (1939-1940): 204-18.
- Weinberg, Joel. “Gedaliah, the Son of Ahikam in Mizpah: His Status and Role, Supporters and Opponents.” *ZAW* 119 (2007): 356-68.
- Weinfeld, Moshe. “Cult Centralization in the Light of a Neo-Babylonian Analogy.” *JNES* 23 (1964): 202-12.
- _____. “Traces of Assyrian Treaty Formulae in Deuteronomy.” *Bib.* 46 (1965): 417-27.
- _____. “The Worship of Molech and of the Queen of Heaven and its Background.” *UF* 4 (1972): 133-54.
- _____. *Deuteronomy and the Deuteronomistic School.* Oxford: Clarendon Press, 1972.
- _____. “berit.” Pages 781-808 in *Theologisches Wörterbuch zum Alten Testament.* vol. I. Edited by G. Johannes Botterweck and Helmer Ringgren. Stuttgart: Kohlhammer, 1973.
- _____. “berit.” Pages 253-79 in *Theological Dictionary of the Old Testament.* vol. II. Edited by G. Johannes Botterweck and Helmer Ringgren. Grand Rapids: Eerdmans, 1975, 1977.
- _____. “Burning Babies in Ancient Israel: A Rejoinder of Morton Smith’s Article in *JAOS* 95 (1975). pp. 477-79,” *UF* 10 (1978): 411-13.
- _____. “‘Justice and Righteousness’ in Ancient Israel against the Background of ‘Social Reforms’ in the Ancient Near East.” Pages 491-519 in *Mesopotamien und seine Nachbarn: Politische und kulturelle Wechselbeziehungen im Alten Vorderasien vom 4. bis 1. Jahrtausend v. Chr.* Edited by H-G. Nissen and J. Renger. Berlin: Dietrich Reimer, 1982.

- _____. "The Emergence of the Deuteronomistic Movement: The Historical Antecedents." Pages 76-98 in *Das Deuteronomium. Entstehung, Gestalt und Botschaft*. Edited by Norbert Lohfink. Leuven: Leuven University Press, 1985.
- _____. *Deuteronomy 1-11: A New Translation with Introduction and Commentary*. New York: Doubleday, 1991.
- _____. "Covenant Making in Anatolia and Mesopotamia." *JANES* 22 (1993): 135-39.
- Weippert, Helga. "Die 'deuteronomistischen' Beurteilungen der Könige von Israel und Juda das problem der Redaktion der Königsbücher." *Bib.* 53 (1972): 301-39.
- _____. "'Der Ort, den Jahwe erwählen wird, um dort seinen Namen wohnen zu lassen'. Die Geschichte einer alttestamentlicher Formel." *BZ. NF* 24 (1980): 76-94.
- _____. "Das 'deuteronomistischen' Geschichtswerk: Sein Ziel und Ende in der neueren Forschung." *TR* 50 (1988): 213-49.
- _____. "'Histories' and 'History': Promise and Fulfillment in the Deuteronomistic Historical Work." Pages 47-61 in *Reconsidering Israel and Judah: Recent Studies on the Deuteronomistic History*. Edited by G. N. Knoppers, J. G. McConville. Winona Lake: Eisenbrauns, 2000.
- Weiser, Artur. *Die Psalmen I: Psalm 1-60*. Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1959.
(A・ワイザー著 塩谷穰訳『ATD 旧約聖書注解 (13) 詩篇 中』ATD・NTD 刊行会、1985 年)
- _____. *Die Psalmen II: Psalm 61-150*. Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1959.
(A・ワイザー著 大友洋子訳『ATD・NTD 旧約聖書注解 (14) 詩篇 下』ATD・NTD 刊行会、1987 年)
- _____. *Das Buch Jeremia*. Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1976.
(A・ワイザー著 月本昭男訳『ATD・NTD 旧約聖書注解 (20) エレミヤ書』ATD・NTD 刊行会、1985 年)
- Weiss, Meir. "Wege der neuen Dichtungswissenschaft in ihrer Anwendung auf die Psalmenforschung." *Bib.* 42 (1961): 255-302. (rep. P. H. Neumann ed. *Zur neuen Psalmenforschung*, Darmstadt, (1976): 400-51).
- Welch, Adam C. "When Was the Worship of Israel Centralised at the Temple?" *ZAW* 43 (1925): 250-55.

- _____. "The Death of Josiah" ZAW 43 (1925): 255-60.
- Wellhausen, Julius. *Israelitische Jüdische Geschichte*. 7th ed. Berlin: Druck und Verlag von Georg Reimer, 1914.
- _____. *Prolegomena to the History of Ancient Israel w/ a Reprint of the Article Israel from the Encyclopedia Britannica*. New York: The Meridian Books, 1957.
- _____. *Die Composition des Hexateuchs und der Historischen Bücher des alten Testaments*. 4th ed. Berlin: de Gruyter, 1963.
- Wells, Bruce. "What Is Biblical Law? A Look at Pentateuchal Rules and Near Eastern Practices." *CBQ* 70 (2008): 223-43.
- _____. "The Hated Wife in Deuteronomic Law." *VT* 60 (2010): 131-46.
- Welten, P. *Die Königs-Stempel: Ein Beitrag zur Militärpolitik Judas unter Hiskia und Josia*. Wiesbaden: Harrassowitz, 1969.
- Wenning, R. "Mesad Hasavyahu: Ein Stützpunkt des Jojakim?" Pages 169-96 in *Vom Sinai zum Horeb: Stationen alttestamentlicher Glaubensgeschichte*. Edited by F-L. Hossfeld. Würzburg : Echter, 1989.
- _____. "Griechischer Einfluss auf Palästina in vorhellenistischer Zeit ?" Pages 29-60 in *Die Griechen und das antike Israel: Interdisziplinäre Studien zur Religions- und Kulturgeschichte des Heiligen Landes*. Edited by S. Alkier, and M. Witte. Fribourg: Academic Press; Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 2004.
- Wente, Edward Frank. *Letters from Ancient Egypt*. Atlanta: Scholar Press, 1990.
- Wesselschmidt, Q. F., ed. *Ancient Christian Commentary on Scripture (Old Testament VIII) Psalms 51-150*. Downers Grove: Inter Varsity Press, 2007.
- Westbrook, Raymond. "What is the Covenant Code?" Pages 15-36 in *Theory and Method in Biblical and Cuneiform Law: Revision, Interpolation, and Development*. JSOT Sup. 181. Edited by B. M. Levinson. Sheffield: Sheffield Academic Press, 1994.
- _____. "The Poor Man's Ewe Lamb (2S. 12,1-14)." Pages 31-35 in *Studies in Biblical and Cuneiform Law*. Edited by Raymond Westbrook. Paris: J. Gabalda, 1988.
- Westermann, Claus. *Praise and Lament in the Psalms*. Louisville: Westminster John Knox Press, 1981.

- Wette, Wilhelm Martin Leber de. *Dissertatio critico-exegetica, qua Deuteronomium a propriis Pentateuchi libris diversum, alius cuiusdam recentioris auctoris opus esse monstratur*. Diss. University of Jena, 1805.
- Whitney, J. T. “‘Bamoth’ in the Old Testament.” *TynBul* 30 (1979): 125-47.
- Wiggins, Steven A. “Yahweh: The God of the Sun?” *JSOT* 71 (1996): 89-106.
- Willgren, David. “Psalm 72:20: A Frozen Colophone?” *JBL* 135 (2016): 49-60.
- Williamson, Hugh Godfrey Maturin. *1 and 2 Chronicles*. Grand Rapids: Eerdmans, 1982.
- _____. “The Death of Josiah and the Continuing Development of the Deuteronomic History.” *VT* 32 (1982): 242-48.
- _____. “Reliving the Death of Josiah.” *VT* 37 (1987): 9-15.
- Willis, Timothy M. *The Elders of the City: A Study of the Elders-Laws in Deuteronomy*. Atlanta: Society of Biblical Literature, 2001.
- Wilson, Ian. “Central Sanctuary of Local Settlement? The Location of the Triennial Tithe Declaration (Dtn 26, 13-15).” *ZAW* 120 (2008): 323-40.
- Wilson, Ian D. *Kingship and Memory in Ancient Judah*. New York: Oxford University Press, 2017.
- Wilson, J. A., E. A. Speiser, H. G. Güterbock, I. Mendelsohn, D. H. H. Ingalls, and D. Bodde, *Authority and Law in the Ancient Orient*. Sup. JAOS 17. Baltimore: the American Oriental Society, 1954.
- Wilson, Robert R. “Israel’s Judicial System in the Preexilic Period.” *JQR* 74 (1983): 229-48.
- _____. *Sociological Approaches to the Old Testament*. Philadelphia: Fortress, 1984.
- _____. “Who Was the Deuteronomist? (Who Was not the Deuteronomist?): Reflections on Pan-Deuteronomism,” Pages 67-82 in *Those Elusive Deuteronomists: The Phenomenon of Pan-Deuteronomism*. JSOTSup. 268. Edited by L. S. Schearing, and S. L. McKenzie. Sheffield: Sheffield Academic Press, 1999.
- Wimmer, Stephan. *Palästinisches Hieratisch: Die Zahl- und Sonderzeichen in der althebräischen Schrift*. Wiesbaden: Harrassowitz, 2008.
- Witte, Markus, and Stefan Alkier, eds. *Die Griechen und der Vordere Orient: Beiträge zur Kultur- und Religionskontakt zwischen Griechenland und dem Vorderen Orient im 1. Jahrtausend v. Chr.* OBO 191. Schweiz: Universitätsverlag Freiburg; Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 2003.

- Wiseman, Donald John. "The Vassal-Treaties of Esarhaddon." *Iraq* 20 (1958): 1-99.
- Wolff, Hans Walter. "Das Kerygma des deuteronomistischen Geschichtswerks." *ZAW* 73 (1961): 171-86.
- Wright, David P. *Inventing God's Law: How the Covenant Code of the Bible Used and Revised the Laws of Hammurabi*. Oxford: Oxford University Press, 2009.
- Wright, G. Ernst. "The Levites in Deuteronomy." *VT* 4 (1954): 325-30.
- Würthwein, Ernst. "Die Erzählung vom Gottesmann aus Juda in Bethel: Zur Komposition von 1 Kön 13." Pages 181-89 in *Wort und Geschichte: Festschrift für K. Elliger zum 70. Geburtstag*. Edited by H. Gese, and H. -P. Ruger. Neukirchen-Vluyn: Neukirchener, 1973.
- _____. "Die josianische Reform und das Deuteronomium." *ZTK* 73 (1976): 395-423.
- _____. *Die Bücher der Könige. 1. Kön. 1-16*. Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1977.
(エルンスト・ウエルトワイン著 頓所正・山吉智久訳『列王記上：上 1 章～下 1 章』ATD・NTD 刊行会、2013 年)
- _____. *Die Bücher der Könige 1. Kön. 17-2. Kön. 25*, Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1984.
- _____. *Studien zum deuteronomistischen Geschichtswerk*. BZAW 227. Berlin: de Gruyter, 1994.
- Yadin, Yigael. "A Note on the Stratigraphy of Arad." *IEJ* 15 (1965): 180.
- _____. "Beer-Sheba: The High Place Destroyed by King Josiah." *BASOR* 222 (1976): 5-17.
- _____. "The Historical Significance of Inscription 88 from Arad: A Suggestion." *IEJ* 26 (1976): 9-14.
- _____, ed. *Jerusalem Revealed: Archaeology in the Holy City, 1968-1974*. Yale University Press; The Israel Exploration Society, 1976.
- _____. "The Archaeological Sources for the Period of the Monarchy, 15. Arad." Pages 219-22 in *The Age of Monarchies. Vol. 4/2 Culture and Society. 1st series*. Edited by A. Malamat, and I. Eph'al. Jerusalem: Massada Press, 1979.
- _____. "The Lachish Letters – Originals or Copies and Drafts?" Pages 179-86 in *Recent Archaeology in the Land of Israel*, ed. H. Shanks. Washington, D. C.: Biblical Archaeology Society, 1984.

- 山我哲雄・鈴木佳秀訳『民数記・申命記』岩波書店、2001年。
- 同 『聖書時代史旧約篇』 岩波書店、2003年。
- 同 『海の奇蹟：モーセ五書論集』 聖公会出版、2012年。
- 同 『一神教の起源：旧約聖書の「神」はどこから来たのか』 筑摩書房、2013年。
- Zatelli, Ida. “Astrology and the Worship of the Stars in the Bible.” *ZAW* 103 (1991): 86-98.
- Zehnder, Markus. “Building on Stone? Deuteronomy and Esarhaddon’s Loyalty Oaths (Part 1): Some Preliminary Observations.” *BBR* 19 (2009): 341-74.
- _____. “Building on Stone? Deuteronomy and Esarhaddon’s Loyalty Oaths (Part 2): Some Additional Observations.” *BBR* 19 (2009): 511-35.
- Zevit, Ziony. *The Religions of Ancient Israel: A Synthesis of Parallactic Approaches*. London; New York: Continuum, 2001.
- _____. “Deuteronomistic Historiography in 1Kings 12 - 2Kings 17 and the Reinvestiture of the Israelian Cult.” *JSOT* 32 (1985): 57-73.
- Zimhoni, Oma. “The Iron Age Pottery of Tel ’Eton and its Relation to the Lachish, Tell Beit Mirsim and Arad Assemblages.” *TA* 12 (1985): 63-90.
- Zukerman, Alexander, and David Ben-Shlomo. “Mortaria as Foreign Element in the Material Culture of the Southern Levant during the 8th-7th Centuries BCE.” *PEQ* 143 (2011): 87-105.